

元、世界最速のトレーナー

クラウド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

簡単に言うと、超能力者がたくさんいる世界（十年前に存在が知られた）で超能力者の中でも一番足が速かった人が、今度はトレーナーになる話。

### ※注意※

作者は競馬をやっておりません（じゃあ、なんで書いたんだ）。その為、にわかを晒しまくると思いますが、温かい目で見てくださ

### 追記

ウマ娘始めました。

一話完結型です。

一話〜三話は一つの話で、後は全部一話で独立しています。

pixiv版

<https://www.pixiv.net/novel/series/8354438>

タグに入りきらなかった登場ウマ娘

ナリタブライアン

ゴールドシチー

マンハッタンカフェ

セイウンスカイ

マルゼンスキー  
キタサンブラック

## 目次

“元”世界最速のトレーナー	1
ランニング	6
汝、輝く流星を見よ	13
先頭の景色のその先へ	21
青いバラと蒼い流星	32
Even now that my leg is broken, the meteor is still flying	44
トレーナー：彼方翔	55
腹ペコと流星	61
一番を目指す娘と一番だった奴	75
番外編 チームを設立していたら	87
無敵の帝王と世界最速の男	104
頑張り屋と走り屋	128
サイボーグと流星	145
番外編 掲示板【二人目の】ウマ娘のおじさん二号こと彼方レジエ ンドを語るスレ【レジェンド】	165
番外編 実家へのご挨拶 前編	180
番外編 実家へのご挨拶 後編	196
シャドーロールと青い流星	211
百年に一人の美少女と神話に残った韋駄天	228
漆黒の摩天楼と蒼い流星	244
番外編 蒼い流星と理事長秘書	259
青い空と蒼い星	269
スーパーカーとスーパースター	281

	お祭り娘と時の有名人	294
番外編	彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座	前編
		305
番外編	彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座	中前編
		315
番外編	彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座	中後編
		324
番外編	彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座	後編
		334

## “元” 世界最速のトレーナー

「ふうー……スウー……」

まだ日も登ってないような時間帯。

ある部屋で長身の男が筋トレを行っていた。

その体は細身だが、鍛えられ引き締められた筋肉が浮かび上がっていた。

部屋の明かりによって彼自身の姿と部屋の様子も分かる。

まだ壮年と言うべき彼は黒髪をオールバックにし、タンクトップに短パンという動きやすい服装をしている。

部屋は様々なトレーニング機器が置かれており、彼はそのうちの一つを使用していた。

現在行っているのは足で重りを押すという筋トレ。

その重りの量は普通の人なら逃げだしそうなくらいだ。

だが、男は額に汗を浮かべながらも難なくこなしていく。

「ふう……良し」

トレーニングを終え、立ち上がった彼は壁に掛けてあった時計を確認し、部屋から出ていく。

廊下を歩く彼の肉体には、夥しいほどの傷跡が存在している。

通り過ぎる人が見たならば、普通に生活していると見ることのできないような状態に驚愕に目を見開くだろう。

ある部屋に入り、トレーニング着を脱ぎ、上下お揃いのジャージを纏い、また別の部屋に向かう。

「……牛乳とバナナでいいか……」

別の部屋に入った彼は、部屋の角に設置された冷蔵庫から牛乳パックを取り出し、棚からバナナを取り出す。

朝食にしては些か物足りないと思われるそうだが、時間がおしいと言わんばかりに牛乳パックの口から直接牛乳を飲み、バナナを四本皮ごと食べる。

牛乳はまだしも、バナナの食べ方がおかしいと言われそうな食事風景。

「ゲフツ……皮ごと食うもんじゃねえな……」

完食した彼はそう呟き、近くの壁の傍に置いていたバックを背負って、玄関へと向かう。

腕時計を巻き、ランニングシューズを履き、軽くつま先をトントンとして調子を整えた彼はドアノブに手をかけて開ける。

「さあて！ 今日もやりますか！」

彼の名は おちかたしよ “彼方翔”。

元 “世界最速” と呼ばれた男だ。

現在時刻はまだ早朝。

まだ寝る人もいれば、朝早くから仕事があると外に出て、職場に向かっている者もいる。

ある場所へ向かって全力疾走する男——彼方翔もそうだ。

「……あと二十分……逃げ……」

翔は腕時計を確認しながらかなりの速度で歩道を駆けていく。

時折、自転車に乗った人を追い越し、車と並走するという今から十年ほど前の人が見れば目が飛び出しそうな光景だ。

だが、現在は変わってしまった。

理由は伏せる。

だが、今までの常識とは変わってしまったのが今なのだ。受け入れられなければ置いていかれる。

置いていかれれば、弾かれる。

世間はそれを否と判断し、変わった環境に順応していった。

翔が走って辿り着いたところは、大きな塀に囲まれた場所だった。塀の向こうには立派な建物が見える。

塀の一部に大きな正門があり、そこに誰かが立っていた。

「彼方翔さん、おはようございませす」

「たづなさん、朝早くからご苦労様です」

たづなと呼ばれた緑色のエレベーターガールのような服を着た女性は翔が近づくと、軽く挨拶をしてくる。

翔も労うような挨拶を返す。

「新年度が始まりますね。翔さんは新しい子を担当される予定ですか？」

「まあ、場合によりますね。見どころのある子がいればいい。俺についてきてくれるならなおのこといい。まっ、それはこれから決めますよ」

軽く会話をし、翔はトレーナー棟と呼ばれる建物に入っていく。

トレーナー棟の今は誰もいない職員室に入った翔は自身の席に着く。

そして……

「ふう……今日も一番乗り……」

と、息を吐きながら呟いた。

だが、その言葉通りとはいかないようだ。

「いや、俺の方が一番乗りだ」

「なに!? 俺が、負けた……だと……!」

「BL〇ACHみたいに言うなよ」

翔が入ってきた扉から、缶コーヒーを手に持ち誰かが入ってきた。

壮年の見た目をした翔より少しだけ若い男性。

会話の様子からして、親しい仲のようだ。

「んで、伝説の七冠バのトレーナー様は、これからどうするんですかね？」

「スカウトのことか？ まあなるようになれだな」



「相変わらず、そういうところがお前って感じがするな」

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ」

そんな会話をしているうちに、時間も経過して、職員室の人も集まってきた。

陽も登り、職員室内を蛍光灯の明かりだけではなく太陽によって照らされてくる頃、翔が正門で会ったたづなを引き連れて少女が入ってくる。

少女は全員が見える位置に着くと、扇子を開くと共に口を開いた。

「傾聴！ おはよう諸君！」

「」「おはようございます、理事長」「」

理事長と呼ばれた少女はこの場所——“トレセン学園”の理事長である。

明らかによくて中学生、普通なら小学生だと間違われそうな身長でも彼女は理事長なのだ。

深く考えてはいけない。

「これから夢を持った娘が多く入学する！ 今年度もまた君たちの力で彼女たちを導いてやってくれ！」

「」「はい」「」

理事長の言葉に、職員室にいた全員が返事をする。

もちろん翔もだ。

その反応に「うんうん」と頷いた理事長はまた全員に聞こえるような声を響かせる。

「期待！ 頑張ってくれたまえ！」

こうして、理事長は職員室から退室していった。

残された者達は、それぞれ思い思いの行動をとり始める。

それは翔も同じようで、体を伸ばし、脱力した後、荷物を整理し、「んじゃ、行きますか」

「おう、行ってら〜」

同僚に見送られながら職員室を後にした翔は、気合を入れるように頬を叩いた。

「シャッ！ 気合入った！」

そうして、彼は向かっていった。

何処へ？

決まっている。

走るためだ。

この物語は、 “異能力者” と呼ばれる超人たちの中で、

最も足が速く、その余りの速さに、 “世界最速” と呼ばれた男 “彼方翔” が、

速さを競う競技で一番を目指す少女達と関わっていく、

そんな物語だ。

## ランニング

走る。

走る。

走る。

走る。

走る。

壊れかけの建物が立ち並ぶ街中をただひた走る。

何のために？

決まってる。

誰かを助けるためだ。

そのためにはこの足が押し折れようと構わない。

誰かの笑顔を守るために。

そのためには、

『いたぞ！ あそこだ！』

あいつらを躲かくさなければならぬ。

大きく息を吸い込み、叫ぶ。

——どけええええええええええええええええ!!

……………。

ハア……。

「懐かしい夢、それも嫌な方の夢を見たなあ……」

そうして俺はベンチから起きる。

今の時間帯は……昼休みだっけか？

いや、それより少し過ぎてるかもしれない。

ていうか、広場にあった時計を見ると十分ほど過ぎてた。

「サボっちまったな……」

そう俺は独り言ちる。

今日はトレセン学園入学式。

一応、式は午前中にあったためこっちは大丈夫だ。

選抜レースも後日にある。

だけど、いつもの業務をサボってしまったことが、今は気になって  
しまう。

おそらく、皆は授業に行っているのだろう。

ほんと、この学園には優秀な娘が多い……。

「少しぐらい緩くてもいいんじゃないかねえか……っていうのはみんなへの

侮辱になっちまうな……」

また独り言ちる俺は、眠気とアホなこと言った自分を覚ますために頬を叩く。

鈍ってるな……。

あの時と比べて、えらく腑抜けている自分に腹が立つ。

そう思った俺は体を伸ばし、脱力する。

「ん……ハア……良し……」

仕事は最速で終わらせれば間に合うだろう。

ルドルフも生徒会の方で忙しいはずだ。

残されたのは……

「気分転換にランニングでもするか」

走る事だった。

「シュー……ハア……」

現在、俺は、独特な呼吸音を響かせながら練習用のコース外周を走っている。

どれが最適な呼吸の仕方なのかは自分でやっていくうちに我流のものができ、それを続けていくことで自分専用のものを作った。

「やっぱり……何も……ハア……考えずに……ハア……走るのは、良いな……！」

途切れ途切れになりながらも言葉を紡ぐ。

誰かに話しかけているというわけではないが、自身を奮い立たせるためにやっているのだ。

何故なら……

「これで、十五周、目……！」

ただでさえ広いコースの外周を十五周もしているのだから。

無我夢中に走ることで頭にある余計なことを忘れて、フラットな状態に戻しているのだ。

あとは、トレーナーやる前から続けている日課だからかな？

「よし……！ あと十五周……！」

一応言っておくが、ノンストップでやっているわけではない。きちんと五周ごとに休憩を入れて、水分補給もしっかりとする。自分だけの体ではないのだから、体を壊すなどもつてのほかだ。

「ふう……ふう……ハア……」

荒くなっていた息を整える。

背負っていたバッグから水筒を取り出し、中に入っていた水を飲み、十分の休憩をとってからまた走り出した。

こうやってると、ルドルフと並走してる時を思い出すなあ……。

あの時はホントにちっこくて、まさしく「ルナ」って感じだったのに、今じゃ天下の皇帝様か。

時の流れは早いねえ……。

「ええ……あの人がバクくない？」

「さつきからヤバイ笑顔で走ってるんだけど……」

「中を走るだけでもきついのに外周走ってるとか……」

「つてか、あの人シンボリルドルフさんのトレーナーじゃない？」

「言われてみれば……」

なんか聞こえるが無視だ。

今は何もかも忘れて走りまわろう。

あと十三周……！

「それ……！」

「グエツ!？」

走っている途中、誰かに跳びつかれ、首元に腕が回り首が締めりカエルの鳴き声のような悲鳴を上げてしまう。

酸欠寸前だった体にはそれが止めとなり、転んでしまった。

しばらくもがいていると、腕が離され、呼吸ができるようになる。

「なにもんじやい！」と怒鳴ろうとして顔だけ振り返れば、

「へっへっへ、捕まえたぜトレーナー！」

「お前は、ゴルシィ……！」

案の定、うちのトレセンじゃ知らない人はいないであろう問題児として有名なウマ娘、ゴルシこと「ゴールドシップ」が変な笑いを上げ

ながらそこにいた。

忘れてたぜ、こいつの存在をよお……！

こいつは事あるごとに俺に絡んでくる。

やれ、見かけたからドロップキックしただの、やれ、暇そうな顔をしてたからズタ袋に入れて気が付いたら無人島だの、やれ、コーヒーにラー油を入れるだの、ズタ袋に入れられたと思ったらマグロ漁船で新年明けただの（ルドルフがすごい怒ってた）、やれ、UFO見に行こうぜ！ ってズタ袋に入れられてきたのはわけわかんない場所だの、本っ当に碌なことが起こらない。

授業もまともを受けてるのか怪しいし、こいつ本当になんなんだ？

ウマ娘としての足の速さは確かにすさまじい。

うちのルドルフと競り合ったぐらいだ。

容姿もいい。

はつきり言っつて、ルドルフと会っつてなければこいつに話しかけてたと思っつているほど。

だけど、普段の行いで全部帳消しになるけどな。

「さあ！ アタシと契約してよ！」

「やだね！ 誰がお前とするか！ こっちはただでさえルドルフを担当してるのに、お前を担当したらこっちの胃に穴が開くわ！」

「ええ〜〜！ 契約しようよ契約〜」

「可愛く言っつてもだめです！ トウツ！」

ゴルシの力が緩んだ隙を突いて抜け出し、すたこらさっさとその場から逃げ出す。

「待て〜！」という声とセグウェイの稼働音が聞こえるが、俺は振り返らない。

「待てと言われて、待つバカはいないんだ！ 冗談は良子ちゃんだけ！」

外周を走っていた時以上の速度を出し、ゴルシを振り切った。

「ここまでくれば……」

額の汗をぬぐいながら、一息つく。

ハア……。

「今日も逃げきってやったぜ……！」

ゴルシと絡むのは正直に言うのと嫌いじゃない。

あの破天荒具合がいい感じで、ルドルフとのトレーニングとかで堅くなった頭を緩めてくれるからな。

あと、単純に追いかけるのが楽しいからというのもある。

もしかしたら俺は追いかけるのが好きな大逃げウマ男なのかもしれない。

「俺はウマ娘じゃねえんだけどな……」

そう独り言ちてから、ルドルフと使用している部室へ向かった。

もうそろそろ生徒会の仕事も終わっている頃だろう。

鼻歌を歌いながら部室のある場所へと向かい、数分経ってからその扉の前に着いた。

が、

「え、何この不穏な空気……」

部室から放たれるおどろおどろしい空気に思わず後退ってしまう。

この現象には見覚えというか感じたことがある。

ルドルフがキレている時だ。

腕時計を確認する。

約束の時間を数分過ぎていた。

「やべー……確認してなかったあ……」

こういううっかり癖は治さなければと思っっているのだが、後悔しても後の祭り。

雷の威力が上がる前に意を決して、扉を開けた。

「お帰り、トレーナー」



少し空いた扉から伸びた腕によつて、中に引きずり込まれた。

## 汝、輝く流星を見よ

俺の名前は、彼方翔。

走るのが好きな元最速の異能力者だ。

別に幼馴染と遊園地に遊びに行ったら、怪しい黒ずくめの男たちの取引現場を見てしまい、これまた怪しい薬を飲まされて体が縮んだわけではない。

ただ異能力者としての現役時代に、無茶のし過ぎで最速を名乗る上で大事な足がぶつ壊れちまったから、普通に引退したただけだ。

ま、引退したら引退したで、特にやることもなかった俺は、テレビにたまたま映っていた「競バ」を見たことがきっかけで、今の仕事「トレーナー」になったのである。

そもそも、俺が走ることを好きな理由は、幼馴染のウマ娘が走るのが速かったからそれに憧れて自分も早くなろうと考えた……んだと思う。

顔は覚えてねえけど、今の俺を形作ってくれたあいつには感謝してもしきれねえよ。

あいつ、元気にしてるかな……

それはともかく、トレーナーとしての最初の頃は何も知らないひよっこ同然で、先輩である東条さんにいろいろなことを教わったんだっけ……？

まあ、そんなことは今考える事ではねえな。

現実逃避は止めて、目の前のことに集中しろ。

「やあ、トレーナー君。今までどこに行ってたんだい？」

背中に伝わる感触と重力の方向からして、俺は現在、地面に倒れているのが分かる。

数秒前のことを振り返れば、ゴルシから逃げた俺は、部室に手をかけたと思った瞬間誰かに引きずり込まれて押し倒されたのだということ进行出す。

誰に？

それはもちろん……

「す、すまねえルドルフ……ちよつとゴルシと追いかけて……」  
俺の担当ウマ娘であるシンボリルドルフだ。  
無敗の三冠。

勝利よりもたった三度の敗北の方を語りたくなるウマ娘。

そして、〃皇帝〃。

ハハツ、俺の〃世界最速〃よりもカツコいいじゃねえか。

なんて言ってる場合じゃない。

注意深くルドルフの様子を見ると、いつもと比べて少し不穏な空気を纏っているように感じる。

いや、少しなんてもんじゃない。

その内側には、爆発寸前のダイナマイト状態の感情が押し込められているのだろう。

マズい。

非常にマズい。

異能力者時代の仲間達からは鈍感だと言われていたが、このトレーナーになってからは察しの良くなった俺はすぐに気づく。

これは〃掛かっている〃と。

実際、ゴルシの名を出した瞬間、俺の腕を押さえ付けている手に力が入ったのを感じる。

この新年度が始まって仕事に追われていたのだろうか、相当ストレスがたまっていたのだろう。

そんな時に暢気にランニングとか、こうなっても仕方がねえな。

って、そんなことを考えている場合じゃねえ！

「……ゴールドシップと追いかけて、か。……随分と楽しそうなことをしてたんだね」

マズいマズいマズいマズい……！

なんか声色が〃ルナ〃っぽくなってる……！

こういうときは大抵不安定な時だ。

少しでも受け答えをミスると、何が起こるのか分からない。

まさかこのまま〃うまぴょい〃……絶対ダメだ!!

「と、取り敢えず……押さえつけるのをやめて欲しいかななんて

「……」

「……」

「ハイ！ すいません！ このままでいいですー！」

こえり……光のない瞳って本当にあつたんだ……

それにプラスで向けられた無言のプレッシャー。

それにビビる俺の姿は、プルプル震えるチワワのよう。

最速と呼ばれた男の姿か……これが？

冗談じゃねえ……とは言えねえ……

「トレーナーさん、私は別に怒っているわけではないんだよ？ ただ、愛バを放っておいて別の女の匂いを漂わせているのが気になったんだ」

ウソダ！ ジエツタイウソダ！（ケンジヤキ並感）

そういうときは大抵怒ってるんですよ！

ていうかもうほとんど「ルナ」だし！

って、ん？ 別の女の匂い……まさかゴルシ!?

テメエー！ ゴルシー！ まさかここまで考えていたのかー！

『あたしと契約しないからだぜく。ざまあみろく』

ゆ、許せねえ……！

俺は激怒した。

必ずかの邪知暴虐なゴルシに拳骨を落とさなければならぬと決意した。

俺には政治がわからぬ。

俺は、ただの七冠バのトレーナーである。

筋トレをし、愛バと遊んで暮して来た。

けれども邪悪に対しては、人一倍に敏か——『バァン！』——ヒイツ  
!?

「トレーナーさん。無視しないでよ。目の前にいる私だけを見てよ」  
「……」

押さえつけられている俺の顔面のすぐ横に手が置かれていた。

さっきの音からして、叩きつけたのだろう。

ハハハハハハハハッ!?

やっべえー!?

もう終わりだ！（レスリング）

もう抵抗は出来ない。

一応、片腕が自由になったとはいえ、腹にはルドルフが跨っていることで肝心の足が動かせない。

もう片方の腕は未だ押さえつけられたまんまだ。

無理やりにも脱出しようと思えばできないことはない。

でも、そうなった時、ルドルフはどうなってしまおうのか……

ルドルフはアスリートだ。

それも行ける伝説と称されるほどの。

並みいる猛者をはねのけて、栄光の冠を七つも被った。

そんな彼女を、俺の事情だけで駄目にしてしまうのは、世間的にもそうだが、まず俺自身がやりたくない。

だったら取れる手段は……

「すまんルナ。お前をほったらかしにしておいて、ゴルシと追いかけてっことをしていたなんて……」

「……」

謝罪だ。

それを聞いたルドルフ、いや、ルナは黙ったまんまだ。

一応聞いてくれるのだろう。

ジツと見つめてくる瞳が続きを促してくる。

「この新年度一日目。お前はチョー忙しかつたはずだ。三年以上も前の担当をしているからこそ分かる。だけど、そんなお前の忙しさも知らないで俺はサボっていた……」

ルナからのアクションはない。

それが余計に恐怖心を煽ってくるが、俺の口は淀みなく動いていく。

「果てには、お前以外のウマ娘とイチヤイチャ……イチヤイチャ？  
していたからこそお前は怒っているのだろう。だけどな……」

もはや自分で何言っているのか訳分からなくなってきたが、これだけは言えると息を大きく吸って宣言する。

「俺の愛バはお前だけだ」

そう、ルナの目をまっすぐ見つめながら言った。

その言葉を聞いたルナは、倒れ込むように俺の胸元に顔をうずめると……

かみ殺したような笑い声を上げる。

ん？

「くつくつく……本当にトレーナー君は面白いなあ。これだからこそ、いじり甲斐がある」

俺に抱き着くようにしていたルナは、体を起こすと頬に手を当ててそう言った。

「ちよ、おま」

「どうしたんだいトレーナー君？ まるでキスのようにパクパクと口を開けて。この愛バにスキッス！ と言ってくれるのかい？ ……ふむ、これはいけるな」

笑っているルナ。

いや……ルドルフはいつも通りのくだらないダジャレを考えていた。

……って、

「冗談かよ！ あぶねえな！ 恐怖心で心臓止まるかと思ったぞ！」

「そうになったら、私が心臓マッサージをして、人工呼吸もしてあげよ。それこそキスのようにね。……くくつ、ダメだ、これは素晴らしいぞ。今度エアグルーヴに言ってみよう」

「やめなさい！ あの子の調子が悪くなっちゃうでしょうが！」

冗談だったと分かり、空気が一気に弛緩する。

それにしても、目の色とか本気だったんだが……

と、とにかく、俺は用事を終わらせよう。

~~~~~

目の前で今後の予定を話すトレーナー君。

不器用ながらも、頑張って作って来てくれたのであろう書類の束は、所々よれていた。

おそらく、夜遅くまで頑張ったのだろうことが分かる。

私のトレーナー「彼方翔」は、元世界最速だったらしい。

なにも、ウマ娘とは別の人間が行う陸上競技で一番速かったわけはない。

戦場に身を置く「異能力者」という超人の集団の中で、一番足が速かっただけと彼は語る。

『俺に、トレーナーの才能なんてこれっぽちもないのさ。俺にあるのは、「足の折れた元世界最速」っていう不名誉な肩書だけ。だから一番を掴めているのはお前が速いからだよ。走れなくなつた俺にできるのは、お前がこの先も輝けるように調整することしか出来ないのさ』

違う。

違うんだトレーナー君。

あなたがいてくれたからこそ、私は輝けたんだ。

そう言ってもあなたは謙遜するのだろう。

あなたは、そういう人だから。

そんなあなただからこそ、私はあなたのことを好きになる。

だから、ゴールドシップがあなたとじゃれていたというのを聞いた時には、気が気でなかった。

奪われるくらいならいっそのこと……なんて考えてしまったことを思い返すと、穴があつたら入りたい気分になる。

私は世間一般的に言うと「気性難」というものに含まれるらしい。

その自覚はある。

彼に対しての出来事では、どうにもそう言った気性が悪さをしてよく迷惑をかけたよ。

……本当に、あの頃を思い出すと恥ずかしくなる。

でも、これも大切な彼との思い出だ。

なくしたいとは思わない。

いつか、彼との思い出を語る時にはいいものになるだろうし。でも、彼との思い出の中にも他と比べて格別のものがある。

それは、彼に初めて「ルナ」と呼ばれた時だ。

今と比べて随分と小さかった私は、その時、えもいわれぬ感情が体の奥底から湧き上がってきたことに困惑していた。

しかし、今になってわかる。

その感情は「愛」だと。

そもそも、一般的な人族と比べてウマ娘というのは愛が重い種族と  
言われている。

その愛ゆえに死傷者が出るほどといえは分かるだろうか。

本能である誰よりも速く走りたいという願望を叶えようとしてくれて、更に思春期を共に過ごしてくれるトレーナーには殊更重い感情を向けるだろう。

私もその一人だ。

だが、私には「皇帝」と「生徒会長」という肩書があるからこそ、その愛情を押し殺して皆の表に立たなければならぬ。

でも、私がそれらを捨て去り、ここを卒業することになったら私はどうするのだろうか……

私は卒業しても、トレーナー君はこのトレーナーのままだ。

トレーナー君と離れ離れになる。

それだけは嫌だ。

無理やりにも……それはいけない。

彼を愛しているからこそ、無理やりはダメだ。

彼にはその気がないのかもしれないが、いずれは私のことを見ても  
らいたい。

そのためにも……

「逃がさないよ、トレーナーさん」

「ん？　なんか言ったかルドルフ？」

「何でもないよトレーナー君」

そう言ってソファに座るトレーナー君に肩が触れ合うまで近づく。  
その行動に少し驚いた顔をしながらも、特に何も言うことはない



いった様子で話を続けていく。

彼の鈍感さが救いだ。

一先ず、今は、このひと時を楽しもうか。

## 先頭の景色のその先へ

限界を超えたその先の景色。

それは一体どんな景色なんだろう。

私はそれを見たいがために全力で駆ける。

実況の声も、

歓声も、

後ろから追いかけてくる誰かすらも振り切って、ただひたすらに走り抜ける。

そして、駆け抜けた先には……

それはもう蒼く輝く流星が、少しだけ明らんだ空に向かって流れていた。

~~~~~

「さてと、今日も走るか」

早朝のトレセン学園の練習場。

まだ、東の空が少しだけ明らんだような時間帯に、俺——彼方翔はいた。

動きやすいようにかつ未だ朝早い時間帯の冷気によって体調を崩さないようにと長袖のジャージを上下揃えて着ている。

現役時代だったなら、もうちよつと薄着でもよかつただけどなあ……。

流石にあの時みたいな肉体はしてないし、あの時のような速度も出せない。

はつきり言つて、欲求不満なのだ。

今までできていたことが突然できなくなると、ひっじょうにもどかしい気分になるのは誰にでもあるはず。

今の俺はそんな状態なのである。

唐突だが、諸君、私は走るのが好きだ。

諸君、私は走るのが好きだ。

諸君、私は走るが大好きだ。

自分の足で走るが好きだ。

乗用車で走るのが好きだ。

軍用車で走るのが好きだ。

スポーツカーで走るのが好きだ。

鬼ごっこが好きだ。

近所の子供との競走が好きだ。

レースが好きだ。

仲間とともに走るのが好きだ。

一人で走るのも好きだ。

平原で、

街道で、

荒野で、

草原で、

凍土で、

砂漠で、

海上で、

山岳で、

泥中で、

湿原で、

この地上で行えるありとあらゆる疾走行為が大好きだ。

全力で駆け、崖から飛び出す瞬間が好きだ。

空中高く飛び上がり落下する際の風が唸る音を聞いた時など心が

おどる。

森の中を疾走しているときに枝や幹を足場にし、地面に一度も足をつかないチャレンジをするのが好きだ。

ビュンビュンと風を切り、自然の中を疾走していた時など胸がすくような気持ちだった。

平地を全力で疾走するのが好きだ。

誰にも邪魔されず、神経を使うこともなく、ただ自分が自由であることを考えることもせず駆け抜けるときなど感動すら覚える。

雨の中ぬかるんだ地面を気にすることなく、逆風と豪雨の中、前を向き続けて走るときなどはもうたまらない。

ゴーグルを着けていればなお最高だ。

それが誰かに追われている時など絶頂すら覚える。

限界を迎え、息を切らしながらも疾走するのが好きだ。

連続出勤を咎められ、走ることができなくなった日はとてもとても悲しいものだ。

それでも、指示を無視して走るのが好きだ。

世界最速という自負があるのに、自身よりも遅いものに捕まるのは屈辱の極みだ。

諸君 私は疾走を流星の様な疾走を望んでいる。

諸君 私に付き従う友人諸君。

君達は一体何を望んでいる？

更なる疾走を望むか？

情け容赦のないあたおかな疾走を望むか？

全てを吹き飛ばし飲み込む嵐の様な疾走を望むか？

『疾走！・ 疾走！・ 疾走！』

よろしい ならば疾走だ。

我々は満身の力をこめて今まさに駆けだそうとする右足だ。

だがこの暗い闇の底で十年もの間堪え続けてきた我々にただの疾走ではもはや足りない!!

大疾走を!!

一心不乱の大疾走を!!

「……何をしているんですかトレーナーさん……」

「ん？ ようスズカ！ 今日も朝早いな！」

頭の中で、走ることに関することを並べていると、俺の担当ウマ娘である「サイレンススズカ」が上下お揃いのジャージを着て近くに立っていた。

どうやら、走りを考えることに没頭しすぎてしまったみたいだ。

無意識にだが右腕が上がっていた。

スズカから見れば、朝日に向かって無言で右腕を上げている変人に見えないのだろうか。

スズカとの間に流れる微妙な雰囲気を払しょくするために、咳払いをして本題に入った。

「さてと、こんな時間に来たっていうことは走るんだろ？」

「はい。今日も勝たせてもらいます」

「上等……！ 今日こそ勝たせてもらおうぞ」

そう言って、俺はこのトレセン学園の練習場のスタート位置に着く。

隣には、スズカが並んで構える。

「そんじゃ、今日も2400メートルだ。調子が悪くなったら減速して止まれ。絶対には止まるなよ」

「分かっています」

「ヨシ。コインが落ちたらスタートだ。行くぞ？」

「……」

無言で構えるスズカを見て大丈夫そうだと思った俺は、懐からコインを取り出し指に乗せトスする。

~~~~~

全力で走る私——サイレンススズカのすぐ後ろを、トレーナーさんは涼しい顔をしながらも、その瞳はギラギラとした闘争心の輝きを放

ちながら追いつがっていた。

ウマ娘である私と並走は出来なくても大きく引き離されることなく、G1レースに出走するウマ娘達のように私を追いかけるトレーナーさんの姿は、何も知らない人から見れば目が飛び出そうになるほどのおかしい光景だ。

だって、人間であるトレーナーさんが私に追い付けているのがおかしいからだ。

そもそも、普通の人間とウマ娘には圧倒的な身体能力の差がある。

『人間がウマ娘に勝てるわけがない』

そう言われるほどにまで力の差があるのだ。

でも、トレーナーさんはそれに当てはまらない。

この世界には魔法があつて、トレーナーさんはその魔法が使える魔法使いなんだって。

10年ぐらい前だったなら、そんなことを言おうと誰一人として信じてはもらえないだろう。

だけど、世間は……いや、『世界』はその10年間で変わった。

私はその時のことを良く知らない。

流石に10年も前のことなら当時の私は小学生だったわけで、その時は今と変わらずただ走ることでだけしか頭になかった。

でも、それを実感したのは、トレーナーさん達がいたという戦場とは程遠いこのトレセン学園でトレーナーさんにスカウトされた時のことだった。

このトレセン学園に来てからは他の子よりも逸脱した才能を見せつけた私は、あるベテラントレーナーの人にスカウトされた。

その人が言うには、どんなレースであろうと先頭を走れるということ。

だから、私はその人のスカウトを受けた。

だけど、それからの日々は、はつきり言って鬱屈とした日々だった。スカウトしてくれたトレーナーさんの言う通りに、序盤は足を溜めて走ろうとすると、今まで見えていた気持ちいい景色が全く見えな

い。

相手はベテランというべき人なのに、その人が積み重ねてきた走り方なのに……。

もしかして、私がダメなの……？

悩んで……悩んで……疑う気持ちを忘れるように私は走り続けた。

そんな日が続いていた時に、転機は訪れました。

「なあ、お嬢ちゃん。確か……サイレンススズカ、だっけ？ そんな変な走り方して大丈夫か？」

「……え？」

また、いつものようにトレーナーさんの言う通りの走り方で練習していた時に誰かに話しかけられる。

思わず振り返ると、そこには若い男性が立っていました。

ジャージを着こみ、大きいバックパックを背負って、その足は絶えず足踏みを続けている。

トレセン学園内にいるということは、ここの関係者であるということとは察せられたが、装いがトレーナーにしては少し浮いているように感じられた。

「もしかして……トレーナーの方ですか？」

「おう。トレーナー歴5年の新米もいいところだな」

「そうですか……。そんな方が私に何か用ですか？」

少しだけ警戒心を上げながら質問を返すと、トレーナーの方は頭をかきながら「そういや、話しかけるとときには自己紹介からだっけ……」と呟くと改めて口をひらく。

「まず先に俺の自己紹介からだな。俺の名前は彼方翔。元世界最速の男で、現在はトレセン学園に所属するただの足が速いトレーナーだよ。よろしく」

ドヤア……という擬音が付きそうなキメ顔でそういうトレーナー——彼方さんは、握手を求めるときのように手を伸ばす。

それに対し、少しだけ躊躇いながらも手を伸ばして握手を返した後、彼方さんが私の目をまっすぐに見つめてなぜか納得したかのよう

に頷く。

「うんうん、やっぱり……………スズカ君。君って最近調子が悪いよね？　なんて言うか、無理して走っているような感じに見えるんだよねえ…………」

「……………そう、ですね…………」

「でしょ？　君は最初から最後まで全力で走りたいのに、君の担当トレーナーの人は我慢させてる。多分、差しか先行辺りの走り方をさせようとしてるんじゃないかな」

「！」

「お、あつてた？」

彼方さんの口から発せられた言葉に私は驚く。

確かにトレーナーさんは、私にそういった走り方をさせると言っていた。

私が出せる力なら、そういう作戦の方が効率の良い勝ち方ができると分かっている。

でも、私が今まで見えていたあの景色が見えなくなったのも、不調になったのも、その作戦を始めてからだ。

「……………なんで分かるんですか……………？」

「ん？　ん……………」

私の絞り出すような言葉に対し、考え込むように顎に手を当てて俯いた彼方さんは、10秒後に顔を上げてバカとしか言いようがないことを言った。

「勘……………かな……………」

「……………勘……………ですか……………」

素っ頓狂な答えに思わず反芻してしまう私を置いて、彼方さんは話を続ける。

「そ、勘。君が全力で走りたいっていうのは、選抜レースが始まる前に、一度見てさ。夜の時間に全力で走る君を見て『ああ、あの子は走るのが好きなんだなあ…………』なんて年寄りっぽいこと考えてさ、選抜レースに出るのなら、スカウトしてみようかなあ……………なんて考えてたんだけど、まあ先輩に取られちゃって……………しゃーない別の子を探そうとか考えてたわけよ」



「夜……全力……」

話の中に出てきた、『夜の時間に全力で走る君』。

これには心当たりがある。

選抜レースの前日に、少しだけ眠れなくて気を紛らわせるために走ったのだけれど、まさか見られていたなんて……。

「で、ここからが本題。君がやりたいのは周りにいる人をぶつちぎつての大逃げ。全力で最初から最後まで走りたい。バ群にのまれない自由な走り。邪魔する者など誰もいない先頭での疾走。ここに間違いは？」

「……いえ……ありません……」

彼方さんが出した答えに肯定する。

すると、彼方さんは頭を抱えて一言呟いた。

「……見事なまでのスピード狂だな……昔の俺かよ」

「スピ……昔の彼方さんって、そこまでだったんですか？」

「まあそうだな。あゝ、謹慎処分されていたのにそれ破ってまで走るのが好きだつていえば分かるか？」

呟いた内容が気になって聞いてみると、何気にぶっ飛んだ話が返される。

「謹慎破ってまで走るなんて……」

「私はそこまではない……と思う。」

「取り敢えず、一回俺と競走してみようか」

「……はい？」

「……なんだその鳩が豆鉄砲を食ったような顔は。これでも全盛期の10%にも満たないとはいえ、ウマ娘に引けを取らない走りは出来るんだぞ？」

「い、いえ……そうではなく……」

突然言われたことに困惑してしまう私。

だって仕方ないじゃない。

いきなり競走してみようだなんて言われたら。

結局、その後はコイントスをスタートの合図とした二人だけの模擬レースは、彼方さんが最後の直線で私を追い抜いての1バ身差で勝

利。

起こったことの訳の分からなさに、思わず私は彼方さんに掴みかかってしまった。

「なんで……なんで負けてしまうんですか……」

「……そりゃ、君が楽しめてないからさ」

「……楽しむってどうすれば……」

私の問いに返ってきた答えは、分かりやすいシンプルなものだった。

「……『自分のやりたいようにやる』。これが一番いいんじゃないかな」

「自分のやりたいようにやる……」

「何事も楽しめなけりや意味がない。無理なもんは逃げてもいい。ちようど君の脚質的にな」

「……」

変なジョークを言ってくる彼方さんだったが、私にはそんなことなど気にならないぐらいの解放感に包まれていた。

『何事も楽しめなければ意味がない』

『無理なものは逃げてもいい』

その言葉が頭で響く度に、肩が軽くなっていく。

心の中で湧き上がるナニカに体が震える。

そんな私の様子を察したのか、彼方さんは、ある言葉を告げる。

「んじや、もう一度走ってみるか。今度は君の好きなように」

「い、良いんですか……?」

「良いも何も、下手の横好きじゃないんだからさ、いったんやってみようよ。走るのには最高だぜ? 何もかも忘れられる」

そう言う彼方さんは、すごく楽しそうだった。

まるで、あの日の私のように。

その後は、休憩を挟んで、彼方さんと競走。

結果は、私が大差で勝利した。

走っていた時見えた光景。

誰もいない景色。

その先には今まで見えなかった蒼い光があった。

それに向かつて走っていると、いつの間にかゴールを過ぎていた。息を整えていると、背後で倒れる音がした。

振り返ると、彼方さんが、大きく息を荒げながら、大の字になって寝転んでいる。

「ハア……ハア……ゲホゲホッ！ は、速いとは思ってたけど……ハア……ここまでは……」

「だ、大丈夫ですか……？」

「だ……ハア……大丈夫……ハア……だあ……ふう……どうだい、スズカ君？ 全力で、走るのは、ハア、気持ちいい、だろ？」

「はい……すごく、気持ちいいです」

彼方さんの問いに私は素直に返す。

最初にあつた警戒心など、もう忘れていた。

「それでいいんだよ。で、君はこれからどうする？ 逃げで行くなら

担当の人に話してこないと……」

「……私、先頭を走りたいです」

「……そうか……じゃあ、行ってこい」

「あの、それで……その……」

「ん？ どうした？」

息も整ってきた彼方さんに意を決して告げる。

「……あなたも、一緒に来て頂けないでしょうか。私、話をするのがあまり得意な方ではないので……。い、いけませんか……？」

「……なくんだ、そんなことか。その程度だったらお安い御用さ」

その後は、私の意志を快く受け入れてくれたトレーナーさんの案で、彼方さんの担当へ移籍することになったのでした。

~~~~~

「ハア……ハア……だあっ！ また負けた！」

「フフフツ……また、私の勝ちですね」

あの時と同じく大の字に倒れる彼方さん——トレーナーさんは子供のように悔しがっていた。

その様子を見るとどこか微笑ましい気持ちになる。

私達にとつては普通な光景でも、他の人には奇異に映るらしい。でも、変えたいとは思っていない。

これは私とトレーナーさんだけの大切なことなのだから。

どれだけ周りに奇妙に見られても、これは止めるつもりはない。

だって走ることで、トレーナーさんのことが好きなのだから。

トレーナーさんのことを好きになったのは、いつだったかは正確には覚えていない。

ただ、いつの間にか好きになっていた。

それでもいい。

だって好きなんだから。

「トレーナーさん、いつもありがとうございます」

「ん？ あくお安い御用だ。……さてと、俺はそろそろ仕事があるから戻ろうかね……」

思わず口にしていた言葉に返事をしたトレーナーさんは校舎の方へと向かっていく。

その背に向けて聞こえないような声で、

「好きです」

と、告げた。

今は表立って告白は出来ないけれども、いつかはしたいと思ってる。

トレーナーさん。

いつまでも逃げきれないとは思わないで下さいね？

## 青いバラと蒼い流星

彼女のことを初めて知ったのは、少し離れた駅前まで買い物に出た時だった。

「あく……今度の選抜レースどうしよつかなあ……」

買ったものをエコバックに入れて、うなだれながら歩く俺こと彼方翔は、トレーナーとして相当な新米である。

その時の俺はまだトレーナーとしては無名であり、担当ウマ娘の一人もいない状態で、隠さずに言うならトレセン学園の金食い虫、もしくは穀潰しとも言うべき状態だった。

なにも、ウマ娘達に嫌われているというわけではない。

むしろ、人間でありながらウマ娘と競い合うことができる超人だったり、ただでさえ距離が長くてキツイレース場の外周を何周も走る変人だったり、時々役に立つ豆知識を教えてくれるおじさんだったり、休みの日には笑いながら町中を駆けずり回る変人だったり、ゴルシに良く絡まれたり巻き込まれたりする変人とかいう風に好意的（おそろく）に思われているだろう。

……ほとんど変人ばかりだな……。

ともかく、今みたいに担当が一人としていない状況では、俺を雇ってくれた理事長やサポートしてくれるたづなさん、レースのノウハウを教えてくれた先輩達に申し訳が立たねえ。

だけど、決意したからといって、直ぐに状況がよくなるわけではない。

ウマ娘達をスカウトする選抜レースには毎回行ってるし、見込みのありそうな娘は何人かいたんだけどなあ……。

それこそ、今の生徒会長や生徒会メンバーに寮長達。

他にも何人か目星はつけてたんだけど、先に声を掛けていた人のところに行ってるから、俺は今まで担当を持ったことなんて一度もない。

結局、俺はトレセン学園の役立たず状態ってわけだ。

理事長の温情でまだトレーナーとしての地位は残ってるんだけど、

毎年の人事評価の際に理事長から何とも言えないような表情をされ、後輩と同期からは少しだけ憐れんだ視線を向けられ、先輩達からは呆れられるという、軽く首を吊りたいような状態だ。

今年こそ担当の娘をとらないと、理事長達への申し訳なきによる罪悪感で死にそうになる。

ほんと、これのどこが世界最速と呼ばれた奴の姿かってんだ。

いやいや、最速云々関係なかったわ。

そんな感じにうだうだ考えながら、トレセン学園に帰っている途中、

「ん？ あの娘……」

あるウマ娘を発見した。

その娘は今まで見てきた娘の中でも、大きめのウマ耳を持っていて、体躯は小柄であり肌は色白だ。

そして、肩辺りまで伸びた黒髪を持ち、装飾として青い薔薇がつけられた帽子をかぶっていた。

そんなウマ娘の少女は、俺が所属するトレセン学園のジャージを着ている。

パツと見、練習中だと思われるウマ娘は何やら気合を入れるように腕を掲げるとそのまま走っていった。

とうか、なんて言ってるのか聞こえたわ。

「ライスねえ……お米か……今日は丼ものにするか……」

おそらくあの娘の名前から、今日の夕飯を決める。

その間にも、少女は駆けていく。

そんな少女の後ろ姿を見て、俺はポツリと呟いた。

「綺麗なフォームだなあ……」

そんなことを言いつつ、あの娘も選抜レースに出るのだろうか、だったら声を掛けてみようかなあ……なんて考えながら俺は帰路に就いた。

だが……

「……」

「……」

何分か歩いた先の赤信号に捕まった。

近くにはさつききのライスつていう娘が立っている。

赤信号はさつき変わったばかりなのか、中々変わる気配を感じさせない。

まあ、こんなこともあるかと気を取り直して、青信号に合わせて歩き出す。

数分後……。

「……」

「……………はう」

また赤信号に捕まった。

近くにはもちろんあの娘がいる。

さらに数分後……

「……」

「あううう……!! …… ……」

通算二桁目になる赤信号に捕まった。

あつれえく？ 俺ってこんなに運が悪かったっけ？

この後も赤信号に捕まり続け、ようやくトレセン学園に着いた時には、日も沈んで星が見えるようになっていた。

「やっべえ……仕事やってたっけ……今から爆速で終わらせれば間に合うか？」

トレセン学園の正門前で終わらせてない仕事に頭を抱えていると、

「あのっ……す、すみません……!」

「へ?」

ライスつていう娘になぜか謝られた。

これが、少女「ライスシャワー」との初邂逅だった。

~~~~~

「今思えば、ライスとの出会い方ってなんか特殊だよな」

「? どうしたのお兄さま?」

ライスシャワーとの出会いから、数か月。

トレセン学園に備えられた巨大なコースで、軽く準備運動をしながら、ふと思ったことを呟く。

それが聞こえたのか、俺の担当ウマ娘であるライスシャワーことライスはこっちに振り向いた。

「ん、ライスとの出会い方がそこの漫画でしか見ないようなかんじだったなあ……って思ってた。別に嫌ってわけではないんだけどさ、ライスみたいな可愛い娘と出会えたのは俺にとつての幸運だし、ライスとの毎日なんて楽しいことばかりだし、可愛いし、穀潰し状態だった俺のスカウトを受けてくれたこともそうだし、可愛いし、お兄様って慕ってくれるし、可愛いし……あれ? どうしたライス?」

「は、はわわ……! はっ! う、ううん……。なんでもないよ……?」

なんか、顔が真っ赤になって尻尾もぶんぶんいってるけど、まあいいか。

「ふくん……じゃ、今から走るけど準備は良いか? 今回も俺が逃げるから、ライスは先行で行こう。やれるか?」

一通り準備運動を終わらせた俺は軽く跳躍を繰り返して、ライスに聞く。

今からやろうとしているのは、俺が仮想敵で「逃げ」を作戦とするウマ娘として、ライスが本番で使う作戦「先行」を試すという特訓だ。

いつもだったら、同期の担当ウマ娘にライスと走ってもらうんだが、今日は、全員が個人でトレーニングしたいからとか予定が合わないとかで、ここにいるのは俺とライスだけだ。

そういう日には、今からやろうとしているみたいに俺とライスの一対一で競走するのが日課なのである。

普通のトレーナーならこんな頭おかしいトレーニングをしないけ



ど、俺は普通とは言い難い。

俺も昔は全力で走って、遠くに荷物を届けるっていう仕事をしてたんだけど、今は、その時みたいなの走りは出来ない。

理由としては、今から十年以上前にただでさえ限界な体を酷使して無茶し過ぎたからか、足がぶつ壊れて最速で走ることはできなくなっ  
てしまった。

具体的には、全盛期の100%にも満たない速度しか出せない。

それでも、ウマ娘と並走できるぐらいには走れると自負している。

実際、ライスと何度も並走しているけど、たまには勝つことだって  
できる。

もう、世界最速の名は名乗れないが、まだ俺は走れるんだ。

だったら、この足を使って誰かのためになるっていうんだったら本  
望だ。

「うん……今日も、ライスが勝つよ?」

「言ってる。今日は勝たせてもらうよ」

生意気にも俺に勝ってみせると宣言するライスに、今度こそ勝つと  
宣言する。

……ここ最近負けっぱなしだからな……成長してくれるのは嬉し  
いんだけど、お兄さまとしてはちよつと寂しいな……。

「んじゃ、行くぞっ!」

「うん……!」

コイントスの合図で俺達は同時に駆け出した。

~~~~~

お兄さま。

お兄さま。

大好きなお兄さま。

ライスみたいなダメな子の傍に居てくれたお兄さま。

ライスを青いバラに変えてくれたお兄さま。  
感謝してもきれない。

初めて会ったときは、私のせいで不幸になってしまった一人だった。

でも、それが変わったのは選抜レースが怖くて出られなくなった時だっけ？

「ぐすつ……い！　なんで……なんでライスは、こんなにダメな子なの……？」

頑張ろうと決めた選抜レース。

それでも怖くて、結局は出ることができなかった。

誰かを不幸にしてしまう。

青いバラにはなれない。

そう思ってしまうと、レース場に向かっていた足は後ろに向かってしまう。

そんな時に声を掛けてくれた人がいた。

「大丈夫か君？　確か……ライスシャワーだったっけ？」

「ふえつ……い！　あ、あなたは……この前の……？」

その人は、この前ライスが不幸にしてしまったからごめんなさいっていった人だ。

あの時はジャージを着ていたけど、今は綺麗に整えられたスーツを着てる。

「ぐすつ……うう。あの、ごめんなさい……それ以上、こっちに来ないで……？」

「？　なんでだ？」

ライスが来ないでって言うと、不思議そうに理由を聞いてくる。

「だって……ライスの傍に居たら、また不幸にしちゃう。また迷惑かけちゃうよ……ライスがダメな子のせいで……」

ライスが理由を話し始めると、真剣な顔をして聞いてくれる。

そんな真剣な顔しなくても……。

「ライスも、ダメじゃないライスになりたかったけど……頑張ろうって、レースに出ようと思ったけど、結局……い！」

思わず泣いちゃった。

ダメじゃないライスになりたかったんだけど、やっぱりライスは一生なれないんだ……！

「うう……ぐすつ。やっぱり……やっぱり、ライスなんか……！」

ライスは悲しくて弱音を吐いちゃう。

でも、そんなダメなライスに向かって、その人は言ってくれた。

「ライス！ 君をスカウトさせてくれ！」

「えっ……？ スカウト、って……あなたが、ライスのトレーナーさんに……？」

いきなりでびつくりしたライスは、思わず聞き返す。

「ああ、君がよければ俺は君のトレーナーになりたい。ダメかな？」

「う、うん……で、でも、ライス、本当にダメな子だよ……？ いっぱい迷惑かけるし、まともにレースに出られないのに……。それでも、いいの……？」

不幸にさせたくない。

でも、どこか期待している自分がいる。

そう思ったライスは、その人に言った。

その人は大きく頷いて、

「それでもいいんだ。君だからこそなんだ」

「……っ！」

そう力強く宣言した。

その後は、ライスもトレーナーさんの申し出を受け入れて、ライスはトレーナーさん——彼方翔さんの担当ウマ娘になったんだ。

トレーナーさんはすごい人で、ライスたちウマ娘と一緒に走れるぐらい足が速かった。

「これでも、全盛期に比べりゃ衰えまくってる方だよ」って、苦笑いしながら言ってたトレーナーさんにはちよつと引いちゃったけど……。

それからは、一緒にトレーニングして、一緒にご飯食べて、一緒に絵本を読んだりして過ごしたっけ……？

そんな日が続いていたある日。

「ライス！ デビュー戦が決まったぞ！」

「デ、デビュー戦……！ じゃあライス、とうとうレースに……」

トレーナーさんが伝えてきたのは、ライスのデビュー戦についてだった。

それを聞いたライスは、最初すごく怖かった。

でも、トレーナーさんが励ましてくれたり、お母さまの教えてくれた頑張る気持ち湧いてくるおまじないをして、デビュー戦を頑張る決意をしたんだ。

だけど、本番の日になると、途端に怖くなって部屋に引きこもっちゃった。

でも、そんな時には……

「えーつと。こんこんこん、ライスちゃん！」

「っ!? う、ウララちゃん……どうしてここが……!?」

「あのね、ライスちゃんが呼んでたから、トレーナーさん連れてきたよ〜！」

「ライス、俺だ。話をしよう」

「と、トレーナーさん……」

最初に扉の向こうから話しかけてきたのは、親友のウララちゃん。

その次には、トレーナーさんの声が聞こえてきた。

安心感を覚えるのと同時に怯えてしまう。

大切なデビュー戦から逃げちゃったんだもん。

怒られても仕方がないんだって。

しばらくして、トレーナーさんが扉を開けて入ってくる。

「ライス……」

「はう……トレーナーさん……」

険しい顔をしたトレーナーさんに思わず怒られちゃうのかなって思ってしまうと、言葉もあまり出てこなくなる。

近づいてきたトレーナーさんは怯える私に目線をあわせて聞いてきた。

「ライス……今日のレースは出られないか？」

「……………っ！ ご、ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい……」

！ ライス……ライスとは……うう、ごめんなさい……！」  
トレーナーさんの質問に、ライスはトレーナーさんに向かって謝ることしかできない。

そんなダメな私に向かってトレーナーさんは、こう言った。

「いい。謝らなくていいんだ」

謝らなくていい。

あまりにも優しすぎる言葉。

ライスにはかけてもらう資格なんてない言葉。

だから、思わず聞いてしまう。

「……どうして？ どうしてトレーナーさんは、そんなに優しいの？

ライス……ライスは、こんなにダメな子なのに」

「ライスはダメなんかじゃないさ。この俺が保証する」

卑下するライスを励ましてくれるトレーナーさん。

それでも、ライスはレースに出るのが怖かった。

ライスが出ると、また誰かが不幸になる。

憧れの青いバラみたいに、誰かを幸せにすることは絶対にできないんだ。

何度も、何度も頑張ったけどダメな子から変われないんだ。

そう思うと怖くなる、って。

言葉に出すと、涙がぽろぽろと出て来る。

ライスは変わりたい。

でも、期待されるのが怖い。

これで、トレーナーさんは諦めてくれるはず……。

でも、トレーナーさんは違った。

「そうか……ライスは、それだけ変わりたいんだな……」

「え………？」

「怖いってのは、変わろうとはしているんだ。でも、その先に起こる、幸せに出来ない、青いバラになれないことが怖くて、今こんな風になってるんだ」

「そ、それは……でも……」

「ライスが諦めない限り、俺もライスのことを諦めない」

「っ……い・トレーナー、さん……。諦めないで、いてくれるの？ ライスは変われるって……信じて、くれるの……？」

「こんなにも励まされても、まだ気弱なライスに向かってトレーナーさんは……。」

「ああー！ レース場で待っているぞ、ライス！」

「あ……!!」

力強く励ましてくれて、先にレース場に向かうために部屋から出ていった。

その後のライスは、震える体をトレーナーさんの言葉で奮い立たせて、部屋から出てレース場へ向かった。

レース場へつながる通路でも、トレーナーさんは励ましてくれて、その後のデビュー戦は一着になれたんだ。

その時に観客の人からかけられた言葉。

それがすごくうれしくて、ライスは励ましてくれたトレーナーさんにある事を言ったんだ。

「よくやったなライス！ 変わったじゃないか！」

「ありがとうトレーナーさん……あ、あのね、いっこ、わがまま言ってもいい……？」

「わがまま？ まあ、程度によるが……」

「うん。あの、あのね……？」

「トレーナーさんのこと……『お兄さま』って呼びたいの」

「へ？」

いきなりのことに、呆けた声を出すトレーナーさん……ううん、お兄さま。

普通そうだよね。

血のつながった兄妹でもないのに、いきなりお兄さまなんて。

でも、お兄さまはライスっていう青いバラを咲かせてくれたお兄さまなんだから。

「だめ、かな……？」

「……いきなりのごと過ぎてちよつと混乱してるけど、ライスがそう呼びたいのならバッチコーイってなもんだ」

「いいの!?! じゃ、じゃあ……! これからも……よろしくお願いしますっ」

ちよつと悩んだお兄さまは、ライスのわがまを聞いてくれた。

嬉しくなったライスは、思わずその名前を呼んだ。

「——お兄さま!」

「……おう!」

~~~~~

「ゼヒュー……ゼヒュー……うえっほっ、えほっえほっ……き、今日は

……俺の……勝ちだな……」

「うくん……負けちゃったあ……」

そして、今に戻る。

勝負は逃げきったお兄さまのクビ差勝ち。

全力で走ったんだけど、それでもライス以上に全力で逃げたお兄さまには最後まで逃げ切られちゃった。

それでも最後の方には、お兄さまの隣に並ぼうとしたライスを見て急加速してただけど……。

だから、今みたいに大きく息を乱しているんだって、ちよつぱり大人げないお兄さまに向かって膨れてみる。

「ああ……! ごめんライス! 最後のは大人げなかったよな!」

「……別にいいもん。お兄さまが負けず嫌いなのは前から知ってるし、全力で走らないと練習にならないもんね」

「ごめん! ホントにごめん! 今度一緒にラーメン食べに行こう! な!」

「……(ぶくうく)」

やっぱり、こういうところがお兄さまなんだって。

必死に頭を下げて謝ってくるお兄さまを見てそう思うライス。  
物で釣ろうとしてくるのもお兄さまらしいというか……。

でも、ライスは怒ってるわけじゃない。

お兄さまをからかって楽しんでるだけなんだ。

好きな人にはいたずらがしたくなっちゃうってテレビ番組で言っ  
てたし、お兄さまのことはそれ抜きにしても大好き。

だって、ダメダメなライスの傍に居てくれて、ライスを青いバラに  
変えてくれたんだもん。

好きになっちゃうのも仕方ないよね？

「ホントゴメン！ 今度の休み、一つだけ何でも聞いてあげるから！」

「……ほんと？」

「ほんとほんと！ トレーナー嘘つかない！」

「……それじゃあ今度……一緒に出かけしよう……？」

「合点承知の助だ！」

お兄さまが何でも言うことを聞いてくれるっていうから、今度の休  
みに一緒にお出かけすることにした。

今は、このままでいい。

でも、いつかはちゃんと伝えたい。

お兄さまが好きだったこと。

その日が来るまで……

がんばるぞ、おー！



Even now that my legs  
is broken, the meteor is  
still flying

チケットみたいにいるさいアイツは、元々、私達ウマ娘なんかより何十倍も速かった。

一番速いウマ娘より、

スポーツカーより、

ジェット機より、

ロケットより、

ずっと、ずっと速かった。

それこそ大宇宙おおそらを翔ける流星のように何もかも置き去りにするほどの速さで世界を翔けたアイツは、今はアタシのトレーナーだ。

アタシなんかよりも見込みのある奴なんて、このトレセン学園にはそれこそ星の数ほどいるっていうのに……。

なんでアイツは、アタシなんかと契約したんだろ……。

~~~~~

「くうっ……ふう……いい天気だなあ……」

俺こと彼方翔は大きく伸びをしてそう呟く。

本日は快晴。

絶好の疾走日和なり。

バ場、ヨシ！（現場猫）

体の調子、ヨシ！（現場ry）

準備、ヨシ！（現場ry）

だけど今日は……

「ああ〜……あつたけえ……」

走る予定はない。

何故ならば、ここ最近、ずっと担当ウマ娘とトレーニングを繰り返してきたから、無理をしてたまったであろう疲れを取るために今日と明日は休みにしているのだ。

俺の担当ウマ娘は結構ストイックな子で、こうして休みを入れないと、無茶をして体調を崩しかねない。

だからこそ、こうして定期的に休みを入れているのだ。

今いるのは、担当を持った者達に使用の許可が出される部屋にあるトレーナー用の机だ。

それにしても……ホントに日差しがいい感じに温かすぎて、瞼が落ちてくる。

ここ最近、仕事が多すぎて眠れない日が続いてるんだよなあ……。

一応、最低限の睡眠はとっているが、はつきり言って、今まさに日差しの影響だけで眠りたくなるようなほどに疲れている状態だ。

「走りたいけどなあ……今日はタイシンに休みつて言つたし……俺だけで走るのもなあ……」

机にうつ伏せになりながらそう呟く。

本当は、今も外に出て、全力でレース場を駆けずり回りたいのだが、今朝がた、担当ウマ娘に休みと言つたばかりなのだ。

休みを言い渡した本人が約束を破るのはどうかなんて思ったけど、かといつて特にやることもないから、こうして机にうつ伏せになっっているしかない。

ほんと、やることがないのだ。

食材は、昨日買いだめした。

服も追加を買う必要はない。(基本的に着るのはジャージだから丈夫だし、万が一破れたとしても、ネットショッピングでポチれば届くから問題ない)

仕事もあつたものは昨日のうちに終わらせていて、今日の分はないらしいとたづなさんが言っていた。(最近、徹夜が多いからと減らし

てくれたらしい)

掃除もさつきやったから必要はない。(やることなさ過ぎて、いつもきれいにしている場所を何度も掃除した)

……………。

「やることねえ……………」

やることがない……………。

いつもなら、タイシンが授業中でいない間を潰すためにトレセン学園のレース場、その外周を何度も走ったりするのだが、今日は一日オフ。

トレーニングは禁止。

仕事もない。

暇なことこの上ない。

つてか、俺っていつからワーカーホリックになったんだよ。

疲れてるのは自覚してるけどさあ……………なんかこの疲れてる感じで走るのがいいんだよなあ……………。

現役時代も、ほぼ荒野で構成され、なおかつ高低差の激しい世界“反転世界”に点在する地方の拠点に荷物を届ける仕事をしてたんだけど、その時の仕事の量も危険度も今のトレーナー業と比べれば頭おかしいんじゃないかと言われるぐらいヤバかった仕事に嬉々として勤しんでいたんだけどなあ……………。

やっぱ衰えてんのかなあ……………。

「はあ……………誰か仕事をくれえ……………」

気の抜けた声と共にうつ伏せになった上半身が机の上へと、落としたスライムのように広がっていく。

幸い、書類などは引き出しの中に収納しているため、腕が当たって落ちるといったことはない。

むしろ、落としてそれを拾うっていう作業があれば、今の状態が少しまぎれるんじゃないかと思っっている。

思考がそろそろおかしくなってきたところで、部室の扉をノックする音が聞こえた。

それに返事をする間もなく、扉は開けられる。

もしや、たづなさんが仕事を持ってきてくれたのか!?

「……アンタ、何してんのさ……」

「なあんだタイシンかあ……。授業終わったのかあ?」

「ん……」

入ってきたのはたづなさんではなく、担当ウマ娘である「ナリタタイシン」だった。

俺の質問にそっけなく返したタイシンは、部室に置いてあるパイプ椅子を開いて腰かける。

そして、トレーナー用の机とは別にある机に肘をつき、持ってきていたであろう辞書ほどではないがそれなりに分厚い本を開いて読み始めた。

しばらく、互いに無言の時間が流れる。

だが、静かなのが苦手な俺は、タイシンに問いかけた。

「なあ、タイシン。暇なんだが……」

「……知らない。外で走ってくれば?」

「いやあ……それがよお……今日は休みって言ったじゃんかあ……一度決めたものをそう簡単に撤回するのはどうかなあって思ってたさあ……」

「……その気の抜けた声やめてくれない。なんかむかつく」

「ひつどいなあ……俺だって好きでこうしているわけじゃないんだしさあ……文句を言うんだったら、あの燦燦と輝く太陽さんに言ってくれよなあ……」

「あつそ。じゃ、しばらく話しかけないでくれる? これ読みたいからさ」

相も変わらずそっけない態度のタイシン。

こちらに視線を向けることなく分厚い本を読んでいる。

「………つて、ん?」

「なあタイシン。それなんだ? やたら分厚いし、いつものお前だったらスマホをいじってるはずなのに……」

「……ハヤヒデから借りた本。面白そうだから最近読んでる」

「へえ……ハヤヒデ君かあ……確かに、彼女ならそういう本が好き



いくらなんでも、静かすぎる……。

いつものトレーナーだったら、無駄に高い身体能力を駆使して、やる必要のないトレーニングをアタシ以上に率先してやるっていうのに……。

もしかして……アタシを驚かすために高度な眠ったふりをしているんじゃないか……？

勘ぐってしまったアタシは、つい声を掛けてしまう。

「……もう寝た？」

「スウ……フウ……走れ……俺……この足が……ぽつきりと折れようとも……」

「……………」

返ってきたのは、間抜けな寝言だった。

思わず呆れてしまう。

たぶん、よく思い出話として語っていた現役時代のことを夢に見ているんだろう。

アタシ達が遊びの延長線上で競っているのに対し、トレーナーは戦いで構成された世界で生き抜いていた。

『足がぽつきりと折れようとも』

アタシ達ウマ娘にとって、足は命と同価値だ。

走りたいという願いがかなえられなくなる。

それは死と同じ。

足が折れてもなお走りたいなんて願うやつ、このトレセン学園や故障して引退していったやつにはごまんという。

でも、激痛で走ることなんてかなわない。

だけど、トレーナーはそれを体現した。

足が折れるどころじゃない。

全身が傷だらけになって、傷口から血を流してもなお、トレーナーは走り続けた。

それこそ、燃え尽きながら宇宙を翔ける流星のように。

トレーナーみたいな異能力者達は、今は素性を隠さずに過ごしている。

保育士や先生になった奴。

医者など人を助ける仕事に就いた奴。

シエフや芸人とかの人を喜ばせることを決めた奴。

パイロットになって世界を股にかける奴。

そして、トレーナーになった奴。

いろんな力を持った奴が、誰かのために頑張っている。

それこそ、今、アタシの目の前で眠るコイツも。

私なんかより、それこそあの「皇帝」なんかよりも才能のあったトレーナーは、本人が言うには「限界の更にその先」を迎えて、全力で走ることへの道を閉ざされた。

トレーナーはアタシみたいな小さくて弱っちいウマ娘なんかより、もつと才能のあるウマ娘を担当にすればよかったのに……。

眠っているトレーナーの髪を梳いてみる。

さらさらとした短髪が手の平に触れるたびに少しだけくすぐったい感触が伝わってきた。

トレーナーの方も少しくすぐったいのか、「うくん……」と呻いて、手を振り払おうと弱く頭を振る。

少しだけかわいいと思ってしまったことを振り払うように頭を振ったアタシは、ふと、トレーナーと初めて出会った時のことを思い出す。

~~~~~

「はあっ……はあ……」

選抜レースで結果が振るわなかったことへの苛立ちと共に、夜中のレース場を駆け抜ける。

もう、足は震えていて、これ以上やるのは危険だと伝えてくる思考を殴り飛ばし、また走ろうと駆けだそうとした。

その時に誰かが声を掛けてくる。

「おい、その君！ 流石にやり過ぎだ！ もう消灯時間だぞ！」  
「は……う？ なに、アンタ……」

声の方へ振り向くとそこには、青いジャージを着た男が立っていた。

パツと見、三十代くらいの男は坂を駆け降りて、こつちを見つめてくる。

「ああ、消灯時間もそうだが、一番は君の状態だ。それ以上やると、体が壊れるぞ！」

初対面にも関わらず、こつちの心配をしてくるほどに人のできたそいつは、本当にこつちの心配をしているのが視線だけで分かる。

コイツはチケツトみたいにいるさくて、ハヤヒデみたいにちゃんと見ている、と。

「……うるさい。関係ないでしょ」

「でも——！」

「っ、……あああああもう!! うるっさいんだよ、どいつもこいつも!!」

心配してくれているのにそっけなく返すアタシは、食い下がるソイツに怒鳴ってしまう。

選抜レースが終わった後にも、アタシの為だとかなんとか言っつて、アタシの生きる意味も同然のレースを止めさせようとした。

どうせコイツもそうだと、アタシはソイツにあたつたんだ。

『無茶するな』『それ以上は危ない』、で次は!? どうせあんたも言うんでしょ、『お前には向いてない』っつて——！

心配してくれてるのに、お構いなしに怒鳴る。

堰を切ったように言葉が次から次へとあふれ出していく。

『体が小さすぎる』！ 『手足が細すぎる』！ 『お前はレースに出るべきウマ娘じゃない』！ 全部全部、聞き飽きたっつの……!!」

「っ！ 違う！ 明らかなおバーバークだから言ってるんだよ！」

アタシの剣幕に圧されたのか、そいつは少しだけ後退った。

でも、それだけで今度は言い返してくる。

「いいか！ 俺は周りが何と言っただだろが知ったこつちやない！」



君みたいな才能のある子が潰れそうになっているのを見過ごせな  
いただの新米トレーナーだよ！」

「は、はあ……？」

あまりの圧に、昂っていた頭が一気に冷めていく。

こつちが怯んでいる間にも、そいつは逆切れ気味にまくし立てて  
いった。

「はつきり言って、選抜レースだけでは完全には分からないことの方  
が多い！ これは当たり前だ！ 一発で何もかも分かるほど俺達は  
出来ていない！ しかし、俺達は目先のことだけで判断してしまいが  
ちだ！ 実際、先輩たちは選抜レースの結果や君の体つきを見てそう  
判断したのだろう！ だけど、君には才能があると俺は思った！ こ  
れでも、世界中にいる誰よりも走ることに関わってきたという自負が  
ある！ だからこそ——」

その後に告げられた言葉に私は驚愕する。

~~~~~

『——君をスカウトさせてくれ』……だっけ……？』

懐かしい思い出を回想している間も眠ったままだったトレーナー  
は、しきりに口元を動かしながら、寝言を呟いている。

『君をスカウトさせてくれ』

見込みのないアタシを拾って押し上げてくれたトレーナーの決意  
の言葉。

そんなトレーナーの言葉で、アタシは変わった。

無茶なトレーニングを諫められ、その後にかけられたアドバイスの  
数々。

『……位置取り争いに混ざる必要なんてねえ。相手のペースにの  
まれると、君は小柄だから走りそのものが悪くなる』

『序盤はしっかり足を溜めろ。それこそ、ゲームの大ボスを倒すとき

みてえに『ここだっ!』ってタイミングで開放するのがベストだ』  
『こんなんの良いのかつて? ばつきやろう! タイシンが一番でき  
たであろう走り方を見て教えたんだ! 走るのは楽しく、されど苛  
烈に”が俺のモットーだ! 楽しめなきや何やつても楽しくなれな  
い。だからこそ、楽しむため、そして勝つために俺が寝ずに考えた作  
戦だ! 頑張つて来いよ!』  
生き生きと話すトレーナーの姿はそれこそ、水を得た魚のようだっ  
た。

……魚は魚でも、水族館にいるような観賞用の魚じゃなくて、泳ぎ  
続けるマグロだったんだけど……。

「むにゃ……まだだあ……今度こそはあ……俺が勝つぞお……」

「……何言つてんだか」

寝言を呟くトレーナー。

まだ、昔の夢を見ているのか……。

それこそ、一番走れたつていうときのことでも見ているのかな……?  
?

それとも……今のトレーナーとしての……アタシと並走している  
ときのことでも見てんのかな……?

「……だったら、嬉しいな……っ!?」

思わず口からこぼれてしまった言葉を自覚して、顔が風邪をひいた  
時みたいに赤くなる。

うっそでしょ……。

アタシ、コイツと一緒に走れてるのが嬉しいだつて?

……。

はあ……。

認めるよ。

アタシはコイツと一緒にいるのが嬉しい。

これから先も、トレーナーと先を目指したい。

それこそ、トレーナーと担当ウマ娘っていう関係だけじゃないもの  
に……。

だから……

「……タアイシイン……」

！

「これからもお……よろしくなあ……」

……うん、よろしく。

「ふあああ……眠くなってきた……」

暢気に眠るトレーナーを見ていると、こっちも日差しの温かさで眠くなってくる。

どこか、寝られる場所はないかと辺りを見回す。

すると、ソファとその上に脱ぎ捨てられたジャージがあった。

たぶん、トレーナーが昨日のトレーニングで来たやつなのだろう。

「……………」

キョロキョロと周囲を何度も確認して誰もいないことが分かったアタシは、ソファの上に寝転がりトレーナーのジャージを布団代わりにして、昼寝をすることにした。

日差しも丁度良く当たり、眠気が一気に襲い掛かってくる。

(せめて……いい夢が見られますように……)

それから、三十秒と経たずに意識が落ちた。

~~~~~

このあと、先に起きたトレーナーに起こされたタイシンは、人のジャージ(トレーナー匂いがすごい)を抱いて眠っていたことを指摘され、トレーナーにわりと強めの蹴りを入れたらしい。

更にその次の日、周囲のウマ娘達から何やら尊敬のまなざしを向けられ、ウイニングチケットは感動して泣き、ビワハヤヒデは頭を抱え、何故そんな目を向けられるかの理由に気付いたタイシンは、またもトレーナーに蹴りを入れたらしい。

## トレーナー：彼方翔

☆3 【蒼い流星】 彼方翔

誕生日：7月20日

身長：約180cm

体重：筋肉質（現役時代より少しやせている）

スリーサイズ：興味なし

年齢：30代

髪：黒の短髪

全身：所々に痕があり、特にふくらはぎと太腿全体を覆うように無数の裂傷の痕がある

### 概要

異能力者として、世界を駆けた「元」世界最速」の男。

幼少期は周囲の子供達、それこそウマ娘よりも走る欲が強かった少年。

理由としては、子供の時に友達であった「――」の走りに魅せられて、走ることが大好きになったとのこと。

数多くいる異能力者の中でも、最も走ることや加速することへの能力を強く発現した人物で、その最高速度は音速を軽く超えるという。

更には、肉体も非常に強靱であったため、何度走っても簡単には壊れない健脚の持ち主でもあった。

それらの適性を基に、彼は「反転世界」に点在する地方の拠点へ物資を届ける「キャリアー」に所属していた。

現役時代の活躍は多岐にわたり、彼によって命を救われた者は千を超えらるだろう。

物資を届ける「キャリアー」としての仕事だけではなく、怪異（簡単に言えば魔物）と戦う戦闘員としての才能もあった。

音速を超える速さによって加速した蹴撃は、容易く怪異の装甲を砕き、仲間が危機に陥った時には、その速さで救助していたそうだ。

そんな時に仲間たちの間でつけられた二つ名は、

「蒼い流星」

これは、彼が能力を使用した際、「蒼い」光を纏うためだと言われており、他にも、高低差の激しい「反転世界」の戦闘の際に、高高度から空中を足場にして跳びだす勢いと落下の加速により下にいた怪異を蹴り碎き、小規模のクレーターを作り出したことから、「流星」の名が ついた。

それらをあわせた結果、「蒼い流星」という二つ名になったという。この時は、彼自身まだ若く、走りたいという欲も体力も有り余っていたこともあって、割と「ヒヤッハー！」してたらしい。

具体的に言うと、

- ・速く走りたいがために、仲間達を置いてけぼりにしてしまった。
- ・走りたい欲が強すぎて、他の人に回る仕事もこなしてしまうほどに働いた。

- ・連続出勤のし過ぎで、上層部から個別の窓口にて依頼を受けるようにと言われた。

- ・連続出勤のし過ぎで、謹慎処分をくらった。（問題を起こしたわけではなく、働き過ぎで言われた）

- ・謹慎を破って、他の人なら一週間ばかりそうな仕事を二日で終わらせた。

- ・トレーニング用に設置されていたランニングマシン（魔改造済み）を三日で壊した。

- ・休みの日を利用して、たった一人でリアルSBRを達成した。等々……。

伝説を作り上げたらしい。

そんな偉業異の裏で、彼自身は意外と真っ当であった。

子供達には優しく、仲間達を笑わせ、同僚達には陽気に絡みに行く好青年。

上司の胃を痛めつけることがあっても、それすら些細なものだった。

彼が、文字通り先頭を走ってくれたことで、彼の後を大勢の人たちがついて行く。

組織としても、彼ほどの人物はいないだろうと判断するほどに。だが、流れ星がいつかは墜ちるように、彼の栄光も長く続きはしなかった。

今から約十年前。

世界の各地で起こった異能力者によるテロ。

その時にも、彼は人を助けるために走っていた。

結果は、彼の担当した場所は建物などへの被害は大きいものの、人命はほぼ無事だったという。

その際、異能犯罪者達を撃退しながら救助に当たっていたため、彼の足は限界まで酷使され、遂には足が破裂し骨が見えるような状態にまで損傷した。

だが、彼はそんな状態でも人を助けることを止めなかった。

「もういい！ 十分だ！」

「休んでくれよ！ あんたの代わりにはなれないかもしれないけれどよお！ 俺達にも手伝わせてくれよお！」

そう泣きながら言われてもなお、彼は走ることを止めなかった。

その時、彼が率いていたメンバーと、敵の戦力を確認した彼は、保護した人命の護衛を頼んで、たった一人で戦場を駆け回らした。

結果は、両足の全損。

治療系の異能力者が、完治させようとしても不可能だった。

もう、前のように走れない。

走れなくなった彼には、残酷だがもう価値はないのだ。

そのまま引退するのは当然の流れだろう。

彼自身、引退については考えていた。

特に後悔もなく、あっさりと引退した彼のお見送りでは、一つの港が埋まったとのことだ。

それだけ、彼は偉大だったのである。

現在、そんな彼はトレーナー業に精を出している。

なんでも、あっさりと引退したとはいえ今まで生きがいったことがなくなってしまうた彼は、ふとテレビを見た際に、同僚のウマ娘達が話していた「競バ」を見たのだ。

これが転機となり、彼はトレーナーへの道を歩み出したのである。トレーナーとしての腕は、やはり走ることに深く関わってきたことにより、ベテランのトレーナーに劣らないほどのもの。

ウマ娘と並走したり、共にトレーニングを行える程には規格外かつ常識外れのトレーナーとなった。

しかし、選り好みがいじましいのか、担当を持つのが遅い。

類まれな才能を持ったウマ娘でないと、彼は担当を持たない。

選ばれば大成することは間違いないのだが、それは時の運だろ  
う。

そして、各担当ウマ娘へと繋がっていく……

### 【ステータス】

#### 「現役時代」

#### 「バ場」

芝：A

ダート：A

#### 「距離」

短距離：A

マイル：A

中距離：A

長距離：A

超長距離：A

#### 「脚質」

逃げ：A

先行：A

差し：A

追込：A

トレーナー時代

#### 「バ場」

芝：B

ダート：A

「距離」

短距離：A

マイル：A

中距離：B

長距離：B

「脚質」

逃げ：A

先行：A

差し：A

追込：A

「固有スキル」

「現役時代」

【蒼い流星】「へっ…！ 見せてやるよ！ 世界最速の速さをな！」

最後の直線に入った瞬間、残ったスタミナを全部使い、全身全霊で踏み込んですぐく加速する。

「発動条件」

スタミナが残っている状態で最終直線に入る。

※スタミナが残っていれば、最終直線に入った瞬間発動するぶっ壊れ。

「トレーナー時代」

【“元”世界最速のスピード】「これが今できる最大限だ！」

最後の直線に入った瞬間、残ったスタミナを全部使い、全身全霊で加速する。

「発動条件」

スタミナが残っている状態で最終直線に入る。



「固有二つ名」

【世界最速の男】

ホープフルステークスを勝利し、クラシック三冠を取り、有馬記念を連覇しつつ、20戦以上レースに出走して無敗。そして、ファン数が320,000人以上になる。

## 腹ペコと流星

私のトレーナーはすごく足が速い。  
そして、すごく優しく良い人だ。

この中央トレセン学園に来てからは、まだ新しい場所というものになれておらず、よく迷子になっていた私を今のトレーナーが何度も助けてくれた。

他にも、色々なものをくれた。

新しいシューズや、たくさんのご飯。

……む、考えてきたらお腹が空いてきてしまった。

とにかく、トレーナーは良い人だ。

それは出会ったときから今までずっと続いている。

~~~~~

中央トレセン学園。

地方と比べて、選りすぐりの猛者たちが集うこの学園では、研鑽のためのトレーニングや共にカフェテリアで食事をとるなど、常日頃から活気にあふれている。

そんな、エリートしか入ることができない場所に俺はトレーナーとして所属している。

普通、こんな場所にいるのならそれ相応の実力を持っているはずだ。

だが、俺がここに所属したのは、今から約5年前。

トレーナーを目指したのは更にそこから約3年前だ。

トレーナーになった時間や経歴だけを見れば、新人を卒業してそこそこの実力を持った者だと思われるだろう。

だけど、俺が今まで担当したことのあるウマ娘は、今担当している“オグリキャップ”という娘のたった一人しかない。

明らかに実力不足なのだ。

一応、俺がトレーナーになる前の異能力者として仕事についていた時の俺の能力に関係する走ることへのノウハウを生かした指導は出ている……はず。

まあ、オグリは才能に溢れているからなあ……俺じゃなくても大成してただろう。

「つて、そんなこと考えてる暇はねえか。早くいかないと……」

余計なことを考えてしまったことで遅くなっていた足を速める。

現在の時間帯は、十時ちようど。

ついでに言えば、トレーナーもウマ娘も休みの日である。

今、俺が来ている服は、いつもの上下お揃いのジャージとは違って、それなりに意識した私服となっている。

黒い長袖のシャツに、その上から半袖のジャケットを着る。

ズボンは動きやすさを意識したスラックスを穿いている。

靴も、あんまりきつちりしているのも嫌なもんだから、これまた動きやすいように白と黒のスニーカーを履く。

パツと見、ダサコーデかと思われそうだが、身長が高く、顔も整っている（同僚談）俺が着れば、モデルかと思間違うほどの壮年の男がそこにいるのだ。

いつもは学園の行事などのことがない限り着飾ることをしない俺がここまで洒落た服を着るのは、ある用事があるからだ。

やがて着いた先には、葦毛のウマ娘が寮の前に立っている。

ぼーつとして立っている葦毛の彼女は俺の方に気付くと、にっこりと微笑んで手を振ってくる。

そんな彼女に向かって駆けよった俺に彼女——オグリキャップは声を掛けてきた。

「おはようトレーナー。今日もカッコいいな」

「よっオグリ。待たせたか？ ……つて、そんな言葉誰から聞いたんだ？」

「む、これはその日初めて会った時に言う言葉じゃないのか？ クリークやタマから聞いたんだが……」

「……別に、問題はねえよ。それより、今日は何軒回るんだ？」

「ああ、今日は三軒ほど回ってから、この間トレーナーが貰ったという水族館のチケットを使って水族館を楽しんだ後、七軒ほど回ろう」

「相変わらずの健啖家具合だな……。ま、良いけどさ。そんじや行くか」

「ああ……！」

俺の言葉に嬉しそうに顔を緩ませたオグリは歩き出した俺の後をついてくる。

そう、今日は担当ウマ娘であるオグリと休みを利用してのお出かけの日なのだ。

事の経緯は話の中でもあったように、今から数日前に貰った水族館の入場券である。

なんでも、担当ウマ娘との親睦を深めるために遊園地や水族館といったテーマパークへの入場券が、俺達が所属しているトレセン学園を運営するURRから担当を持ったトレーナー達に配布されるものらしい。(先輩から聞いた)

それを貰った俺は、オグリと弁当を食っているときに話をして、「今度の休みに行かないか？」ということになったのだ。

んで、今日がそのお出かけの日である。

オグリとはトレセン学園の外で飯を食いに行くことが多く、その際、さつき話したみたいに何軒も店を回るのだ。

オグリの健啖家具合はすさまじく、バイキング形式の店や大食いチャレンジ系の店は結構出禁になっている。

……へっ、たまに別の店に行く途中、出禁になった店の前を通ると、悪魔でも見たかのような視線を向けられて困っちゃうな。

……別に泣いているわけじゃない。

自分の財布がすごい勢いで軽くなっているのを感じているときに、憐れんだような視線を向けられて悲しくなったわけじゃない。

ないっつらない。

ないのだ……！

「なあ、トレーナー……」

「どうしたオグリ？ もうお腹が空いたのか？」

「確かに、今日の為と言っていつもより朝食を少なくしたから少しだけお腹が空いてるが……いや、そういうことではなく………ど、どう、かな？」

「？」

目的の店に向かっていると、オグリが声を掛けてきて俺は振り返る。

腹が空いてきたのかと聞いてみるが違うと言われ、オグリが腕を広げて右足を軸にし、くるりと一回転する。

何がしたいのかよく分からない俺が首を傾げていると、オグリが頬を膨らませて言ってきた。

「むう……、今日の私はどうかなのを聞きたいんだ」

「……ああ！ コーデの感想とかそういうのを聞きたかったのか！」

オグリの答えに少し考えてからようやく気付く。

オグリは少しだけウマ耳を垂れさせてしよんぼりとするが、俺が答えに辿り着いたのを見てウマ耳をピンつと立てる。

おそらく期待しているのであろうオグリに、俺は感想を言った。

「オグリはいつもきれいだからな、直ぐには気付かなかったよ。今日はクリーク君達に手伝ってもらったのか？」

「！ ああそうだ！ タマからはこのリボン。クリークからは上着を選んでもらったんだ。……どうかな？ 似合ってる、かな？」

「！」  
ズキーン！

最初の方は元気よく、最後の方はいつもと比べてしおらしいオグリに心臓を撃ち抜かれてしまった俺は、数秒間その場で固まってしまふ。

え、なにこれ天使？

心なしか、翼が生えて、頭の上には輪っかが浮いているように見えるんだけど……。

ハッ！

危ない危ない……。

可愛さのあまり幻覚を見てしまったようだ。

それよりも、感想を言わなければ……。

オグリは不安そうにこちらを見ている。

おそらく、可愛いと言ってもらえるか心配なんだろう。

だけど……

「あく……、その、俺の語彙力じゃ上手く表せないかもしれないんだけどよお……その……なんだ……」

「ど、どうなんだ……?」

「……か、可愛いと思う、ぞ?」

「!、そ、そうか……あ、ありがとう……」

めっちゃ可愛い。

いつも可愛いということには変わりなかったが、今日は一段と可愛く見える。

それを、俺の貧弱な語彙力のまま伝えると、オグリは嬉しそうに目を細めた。

そして、嬉しさのあまり俺の腕を掴み引つ張っていく。

「さあトレーナー! 早く行こう!」

「わ、分かったから、先に行こうとするなよオグリ! 道分かってるのか!」

「む、そう言えばそうだな。すまないトレーナー。何時ものように案内してくれるか?」

「分かってるよ……お嬢様、今日もエスコートさせてもらいます」

「!、ああ、頼んだよ!」

周りの住民の方達から、微笑ましいものを見たという視線を向けられながらも、俺とオグリは目的の店に向かっていく。

さあ、先ずは「ジャンボ人参丼」だ!

~~~~~

温かい。

前を先導してくれるトレーナーの手を握り、感じたのはそんな一言だった。

ただ温かいというわけではなく、トレーナーの手作のお弁当を食べた時のような、優しいポカポカとした温かさが体の奥で広がる。

手を握っているだけなのに……。

トレーナーは優しくいい人だ。

今もこうして、道に迷ってしまう私の手を繋いで目的のお店まで案内してくれる。

握ってくれる手は硬くてごつごつとしており、鍛えられているのが分かった。

鍛えられているのは、いつもトレーナーと過ごしているから分かる。

でも、ただ鍛えているだけじゃないのは長く過ごしてきた私だから分かった。

異能力者。

トレーナーがトレーナーになる前していた、危険な仕事を行う力を持った人たちのことだ。

たった一人で、なおかつ一週間と経たずに家を作る人や、すごい力持ちの人。

そんな話を楽しそうに語るトレーナーは、そんな人たちの中で一番足が速くて大勢の人に慕われていた人だったらしい。

『らしい』なのは、トレーナーがその時のことをよく話してくれるのだが、あまりに壮大すぎて実感がわからないのだ。

トレーナーもすごいことをしていたのだが、やっぱりよく分からなかった。

ふと、トレーナーと会った時のことを思い出す。

~~~~~

「ううん……」

その時の私は、中央トレセン学園に来たばかりで場所を覚えられず、よく迷子になっていた。

故郷とは違う景色に何度も同じ場所を行ったり来たりしてしまう。

そんな時に声を掛けてくれたのが、

「その君。さつきから同じ場所を行ったり来たりしているけど、どうしたんだ？」

「……あなたは……」

「えっと、先ずは自己紹介だな。俺の名前は彼方翔<sup>おちかたしょう</sup>。こここのトレーナーだ」

今のトレーナーこと彼方翔さんだ。

翔さんは、他のトレーナー達と違って動きやすそうな青いジャージを着ている。

一先ず、声を掛けてくれた翔さんに先ほどから何度も同じ景色しか見えないことを伝えると、翔さんは頭を抱えながら教えてくれた。

「あく……オグリキャップ君、だよね？ たぶん、迷子になってるよ？」

っていうか、俺はさつきから君が同じ場所を何度もいったり来たりしているのを見たんだが……」

「迷子……ふむ、そうかもしれない」

「で、君はどこに向かおうとしているんだ？ 俺が案内してもいいんだが……」

「それは渡りに船だ。寮に戻りたいんだが、お願いしてもいいかな？」

「お安い御用だ。最近書類仕事ばかりでねえ……暇だったんだよ」

「む、そうなのか？ 翔さんなら引く手数多だと思っただが……」

寮へ向かう道中、翔さんとはいろんなことを話した。

私はここへ来た理由とか、走る理由。

翔さんは、未だ担当がないこととか、そんな状況だから育ててくれた先輩達に申し訳が立たないこととか、トレーナーとしての悩みを口にしていた。

そんなことを話していると 翔さんの案内を受けて、あっさりと寮



に辿り着く。

やっぱり、分からないことは詳しい人に聞いた方がいいな。

それから数日後。

「……何やってるんだい……」

「翔さんか。すまない、また道に迷ったようだ」

また道に迷った私は偶然居合わせてくれた翔さんに案内される。

その時は、タマとの練習だったのだが、翔さんのおかげで遅れずに済んだ。

何故か、たくさんの人が集まっていたのだが……。

走った結果はタマと同着同タイム。

走り終わった後に感じた、胸がドキドキし続ける感覚。

心臓が強い方だと言われていた私は、直ぐ収まらない鼓動に少し戸惑っていた。

「……………」

「よっ、お疲れさん。いい走りだったぞ」

「あ……翔さん、見ていてくれたのか」

しばらく考えていると、翔さんが声をかけてくる。

何度か助けてくれた翔さんなら、この感覚も分かるのだろうかと聞いてみた。

「……なんだか、不思議な気分なんだ。私は心臓が強い方らしくて、レースの後でも、直ぐ鼓動が落ち着いていたんだが……」

「ほうほう……」

「いまは……ずっと、鼓動が速い。さっきのレースを思い出すと、どうしてもドキドキするんだ」

「なるほどなるほど……」

「すごく不思議で……心地いい感覚だ。これは……興奮、だろうか……?」

「ふうむ……」

しばらく腕を組みながら唸るような声を出して考え込んでいた翔さんは、顔を上げると私に言う。

「俺の経験則になっちまうけど……それは、タマモ君が君に匹敵する

ほどのいいライバルとして競ってくれたからなんじゃないのか？」

「ライバル……。そうか。これが、中央の——」

心にすんと落ちた言葉と、体の奥底が熱を持ったかのような感覚に、私はトメさんの作ってくれたおにぎりを食べたかのような温かさを感じたのだった。

それから、翔さんにはお世話になった。

自然の多い場所を練習場所にしたいと言ったらすぐに学園裏の森に連れていってくれたり、靴紐が切れてしまっただけで倒れそうになったときは血相を変えて心配してくれた。

中でも一番だった出来事は、選抜レースを五日後に控えた日だった。

いつものようにレース場を走っていると、息を切らした翔さんがシューズの箱と共に駆け寄ってくる。

どうしたんだろうと思った私は、翔さんにどうしたのかと聞いてみた。

それに対し翔さんは、笑顔を浮かべながら、箱を私に差し出しながら話し出す。

「ほら、オグリ君。君がシューズをよく壊してしまうと言っていたから、ちよつと気になって丈夫なのを買ってきたんだ」

「シューズを、私に？ ……なぜだ？ 私はまだキミの担当ウマ娘でもないのに」

それは翔さんが買ってきたという、私の力でも壊れないようなシューズだそうだ。

でも、まだ担当ウマ娘でもない私にこれをくれるのかと気になって翔さんに聞いてみると、照れくさそうに頬をかきながら理由を口にする。

「実は……君がシューズをよく壊してしまうと言っていたから、俺一人でどのシューズがいいか考えていた時に、偶然居合わせたタマモ君が手伝ってくれてその時言ってたんだ。『選抜レースは全力で競う場所。このままだとフェアじゃない』しっかりと全力を見せて、早くデビューしてもらわないと。もう一回走りたいう、ウチの願望も

あるからな』ってね」

「なるほど、タマが……。そうか、そういうものなのか」

「……まあ、俺のわがままが理由で、これを買ってきてしまったんだ。いらぬならこちらで処分するよ」

「いや、大丈夫だ。気遣いありがとう。今日から履き慣らして、本番に備えるよ」

「！ ありがとう！ じゃ、頑張れ！」

「フフツ、ああ！」

翔さんがくれた新しいシューズを履いてレース場を走ってみる。

今までとは違って足がすごく軽くなったのを感じた私は、思わず笑みを浮かべながらレース場を駆け抜けた。

一周走って、翔さんのところに戻ってきた私は息を整えて感謝を告げる。

「はあっ、はあ……。……改めて、お礼を言わせてくれ。ありがとう。

これは……。最高のシューズだ。大切に……。……！」

「うんうん。やっぱ楽しそうに走っているのを見るのはいいねえ……。久しぶりに俺も走ってみようかなって」

「……。久しぶり？ 翔さんは過去に何かの競技で走っていたのか？」

「うん……。まあそうなるかな。ちょっと特殊だけど、事情があつて引退したんだ。……。あれからもう十年かあ……。時が過ぎるのは早いねえ……。……」

「……。その時のことを話してくれないか？ 少し気になってしまつて」

「お、じゃあ、少し走った後に話してみるか。走る時はゆっくりじゃなくてもいいぞ。俺は結構早いからな」

「……。そうか。なら遠慮しないで行くが、本当にいいのか？」

「安心しろ。才能の塊である君を相手にする一方、俺の体は衰えまくっているが経験は乗りに乗っている。まだ若い君に遅れは取らないと思つていいぞ」

「フフツ、それは楽しみだ……。……！」

翔さんの提案で始まった模擬レースは、私が三バ身差をつけて勝

利。

ウマ娘ではない翔さんがまだシューズに慣れていない状態で走ったとはいえ、食らいついてきたことには少し驚いた。

それから話してくれた昔話の数々には、年甲斐もなくはしゃいでしまった。

少し、恥ずかしい……。

そんなことがあった日から、五日後。

ついに選抜レースが始まった。

結果だけ言えば、逃げ切ったクリークに次いでの一着だった。

「2着、か。新しいシューズで、全力で走って……。それでも、2着……」

普通なら悔しがるような結果だが、私は違う。

頭にあつたのは悔しさではない。

「……すごいな。デビューすれば、タマやクリークのようなライバル達と、これからも走れるのか……！ うん、すごいことだ……。楽しみだ、とても……！」

あの時のような「興奮」だけだった。

強いライバル達とこれからも走れる。

あの興奮を味わえる……！

そんなことを考えていると、周りをたくさんのトレーナー達に囲まれた。

「オグリキャップ！ お疲れ様、素晴らしい走りだったぞ……！」

「ええ、とても力強かったわ！ ぜひあなたをスカウトさせてほしいのだけど——」

「あ……そうか、デビューの為には、先ずスカウトか。そうだった……」

集まってきた人たちは、トレーナーのようで私を熱心にスカウトしてくる。

でも、私は担当して欲しい人がすでに決まっている。

「いや、だが……すまない。ちよつと、通してくれ」

集まっていた人波を掻き分けて、先ほどから見えていたある人物に

近づいていく。

人波が集まっても、その高い身長は見失わない。

人波の中に紛れていた人物——彼方翔さんに近づいて声を掛けた。

「……レース。見ていてくれたか？」

「やあ、オグリ君。いい走りだったよ。惜しくも2着だったけど、あの走りを見てまたゾクゾクしたよ。」

「っ……ありがとう。うん、やっぱり……そうだ」

翔さんが褒めてくれると、体の奥底が温かくなる。

その温かさを感じて、私は確信した。

「暇があつたらまた並走してくれるかな？」

「今度と言わず、明日からでもしよう」

「……へえ、それはどういう意味かな？」

「これ以上は言わなくても分かるだろう？」

息を大きく吸い、周りにも聞こえるように告げる。

「……私のトレーナーになってくれないか？」

「——君がそう言うのなら、喜んで」

こうして、私と彼方さん——トレーナーは契約を結んだ。

~~~~~

「……あれから、かなりの時間が経ったな……」

「ん？ 何の話だオグリ？」

「トレーナーと出会った時から、担当契約を結んだ時までのことを思い出していたんだ。あの頃のトレーナーは、ちよっぴり飾っていたかな。今みたいな話し方ではなかったなあ、と思ったよ」

「……まあ、あの頃は互いに過ごした時間なんて数えるほどしかなかったからさ。ちよっと形式ばった感じをしたのは自覚してるよ。嫌だったか……？」

「……ううん。トレーナーはいつでもカッコいいからな。あの時のこ

とも、思い返せば、今のトレーナーとのギャップを感じれて楽しめるから。嫌ではない」

「……またそれか。『カッコいい』ねえ……こんな男のどこがいいんだか……」

思い出から戻ってくると、今は電車の中でトレーナーの肩に頭を預けている状態だ。

腕はトレーナーの腕に絡めて、逃がさないようにしている。

こうすれば、恋人のように見えるとかママやクリーク達から教わったんだが……トレーナーは意識してくれているのだろうか……？

こうしていると、タマ達と競っているときの興奮とはまた違う温かさが、体の奥底から込み上げてくる。

「……トレーナーは温かいな……」

「寝るのか？ ご飯が食べられなくなるぞ？」

「……それは嫌だ」

「なら起きていよう。それにしても……オグリがご飯の予定があるのに眠たくなるとか。夜更かししすぎたのか？ それともあれか？ 楽しみ過ぎて眠れなかったとか？」

「……多分そうだろう。少し楽しみすぎて眠れなかったかもしれない」

「じゃあ、少しだけ眠っていいぞ。着いたら起こすから」

「ありがとう……トレーナー……」

トレーナーに言われ、腕を抱きしめる力を強めて、トレーナーの温かさを強く感じれるようにしながら瞼を閉じる。

トレーナーは優しい。

こうして私を気遣ってくれるトレーナーのことが私は好きだ。

トレーナーにも、私を好きになってもらいたい。

だけど、この好きだという感情を今は気付いてくれなくてもいい。

互いに忙しいから。

でも、いつか伝えられる時が来たら……

ギュッと抱きしめて、温かさを感じさせてほしい。

トレーナー。

大好きだよ。

## 一番をを目指す娘と一番だった奴

アタシは「一番」になりたい。

誰よりも速く、誰よりも強いウマ娘に。

そう願って、この中央トレセン学園にやってきた。

でも、そう簡単にはいかなかった。

それで少し荒れていた時に、トレーナーが声を掛けてくれたのよね。

トレーナーは一番足が速くて、一番すごくて、一番かっこよかった人。

そんなトレーナーと、今は二人三脚で頑張っている。

今はそれでも、昔はそうじゃなかった。

結構、ひどいことも言っちゃったわけ？

でも、トレーナーはアタシのことを諦めようとはしなかった。

ホントに感謝してる。

~~~~~

### 中央トレセン学園。

エリートが集まるこの場所では、日々、活気のある声が木霊する。

現在、俺はそんなトレセン学園に所属するウマ娘達の寮の前で、右腕に着けた黒い腕時計を確認しつつ、とある少女と待ち合わせしていた。

ちなみにだが、本日は快晴である。

それはもう、雲一つ見当たらない、理科の教科書に具体例として載っているようなほどの快晴だった。

出かけるには、これ以上はないという日だが、些か、遮るものがあつ



てもいいんじゃないかと思ってしまう。

それにしても……

「遅いなあ……スカーレット……」

待ち合わせしている少女の名を呟きながら、ふとそんなことを思ってしまう。

かれこれ、四十分近くは待っているはずなんだが、一向に件の少女が現れないことに溜息を吐く。

まあ、しかし、女性の準備は長くなるって同僚も言ってたから仕方ないだろう。

尤も、俺が速く来すぎてしまったのもそういう原因の一つなのかもしれない。

何故なら、本来予定している時間の三十分前にはこの場所に来てしまったからだ。

『女との待ち合わせなら、せめて十分前には着いておけ』そう言われたもんだから、仕方なくというわけではなく、まあ、そういうもんかって気持ちで少し早めに来たのである。

……早すぎたかな？

さつきから、しきりに腕時計を確認しながらキョロキョロとしている俺を、通りすがりのウマ娘達がジロジロと見ていく。

……注目を集めすぎたかな？

しかし……

「……いくらなんでも三十分前に来るとかガキじゃあるめえし……スカーレットもこんな男は嫌だろうなあ……」

うなだれながら独り言ちる。

俺自身、今回のお出かけをちよつと期待していたのかもしれない。ウマ娘達は基本的に容姿端麗の子が多い。

俺の担当ウマ娘であるスカーレット——ダイワスカーレットもその例にもれず、その容姿は非常に整っている。

別に走らなくても、モデルの道で食っていけそうなほどにだ。ま、スカーレットはそんなことは絶対にやらないんだろうな。

走って一番になりたいっていう気持ちは共感できる。

俺だって、ガキの時に見たアイツの走りに魅せられて、走ることを決めたからな。

つつても、俺は一番を目指したというよりかは、ただ走りたいがために走り続けて、気がついたら誰も追いつけないほどに速くなっちまったんだけど……。

それはともかく、待ち合わせの時間に速く来すぎてしまったのは痛恨のミスだった。

おそらく、化粧……はしてないだろう。

スカートレットが化粧品を使っている形跡は見当たらなかったし、そうなる……スカートレットは素であれなのか……。

あれだけ立派なもの身長を持っていて、まだ中学生……。

……ウマ娘ってすげえなあ……。

と、そんなことを考えていると、誰かが走り寄ってくる。

「ト、トレーナー！ 遅れてごめん！ 待たせちゃった？」

「ん？ ああ、スカートレットか。安心しろ。それほど待ってない。具体的には荷物の発注が遅れて数時間待たされた時よりは待ってない」「……ツツコんだ方がいいのかしら？ と、ごめんね。ホントに待たせちゃって」

「大丈夫だって。『女を待たせるのは罪だけど、男が待つのは甲斐性だ』って、知り合いが言っていたからな」

近づいてきたのは、俺の担当ウマ娘である『ダイワスカートレット』だった。

長い髪をツインテールにし、蒼いシユシユで留めている。

服は、綺麗に着こなされており、清潔感が漂う。

頭には銀色に輝くティアラをつけており、格好も合わせてまさしくお嬢様というべき格好だ。

そんなスカートレットは、走ってきたせいで、少しだけ額に汗をかいてしまっている。

彼女の汗を、懐から取り出したハンカチで拭いながら、元同僚の個人的名言をスカートレットにかけた。

あいつ……元気にしてるかな？

突然新しい世界に目覚めたとか言って、ふりふりの衣装を着て、シユワちゃんレベルの筋肉モリモリマッチョウーマンになったのは驚いたけれども、誰かのために頑張れる奴だ。

今も、世界のどこかで誰かを助けているんだろなあ……。

ちなみに、元同僚は男だった。

そう、男『だった』のだ。

現在は新しい世界に目覚めて、おとめ「漢女」になってるんだけどな

……。

それはともかく、汗を拭きとった俺は照れたようにそっぽ向くスカレットに今日の予定を確認する。

確か今日は……。

「なあスカレット。今日は俺の服を買いに行くんだよな？」

「……ええそうよ。だってあなただったらいつもジャージだけじゃない。そんなんじゃない、一番になるこのアタシに相応しくないもの」

「うっ、し、仕方ねえだろ……。お洒落しようにも動きにくいものがほとんどで、消去法的にジャージを選ぶのが多いからさ……」

「だからアタシが選んであげるのよ。感謝してよね？」

「……はい。ありがとうございます。ダイワスカレット様……」

「よろしい！ それじゃあ早速行きましょうか！」

そう言つて、スカレットは俺の手を握り歩き出す。

俺のごつごつとした掌とは違う、柔らかい感触が掌全体にまわりつくつと、なんだか申し訳ない気持ちと役得とも言うべき歓喜が心の中で喧嘩をし始める。

つて、違うだろ。

彼女は教え子、俺は指導者。

間違つてもそんな目で見てはいけない。

だから、心を菩薩に……。

フア~~~~~

「……どうしたのよトレーナー。そんな何もかも悟ったような顔して……」

「安心しろスカレット。これは精神統一だ。俺のダメな部分とス

カーレットの優しい部分を噛み締めるためにこうしているんだ」

「はあ……うっ。ま、いいわよ。それよりも、シヨツピングモールへ向かいますよ。そこなら、あなたにもきつと似合う服が見つかるはずだから！」

スカーレットが訝しげな表情を浮かべるがそれはすぐに霧散して、満面の笑みに変わる。

ああ……眩しすぎる……浄化される……。

スカーレットの優しさに浄化されながらも、俺達はシヨツピングモールへと向かった。

~~~~~

変な顔をしたトレーナーと一緒にシヨツピングモールへと向かうアタシは一番を目指すダイワスカーレット。

いつもなら、トレーナーと一緒にトレーニングをしているんだけど、今日はお休み。

お出かけのためにと着飾ったアタシとは正反対に、トレーナーの服装は運動性を重視したもので、飾り気のないものとなっている。

いくらなんでも、少しかっこ悪いと思ってしまうような服装。

今日は、そんなトレーナーの服を買いに行くための一日なのだ。

トレーナーをアタシの好きなようにできる。

そう考えると無意識に口角が上がってしまう。

俗に言う独占欲というものが心の奥底から湧いてきてしまった。

アタシは自分で言うのもなんだけど、気性難と言われる部類に入ると思う。

でもトレーナーは、そんなじゃじゃウマであるアタシを抑えられるぐらいには優秀だと思っている。

だけど、本人は自身を新米だと言って憚らないのだ。

アタシはこんなに思っているのに……。

他にも、世界で一番速かったっていう事実があるのに、自慢しよう  
ともしない。

せめて思い出話としてとしか過去のことを語らないのだ。

トレーナーは謙虚だ。

アタシに対しては一生懸命頑張ってくれるくせに、自分のこととな  
ると途端に無頓着になる。

食事だって、時間がないなら抜いてくるか、栄養食品と栄養ドリ  
ンクだけで済まそうとしていた。

今着ている服装だってそうだ。

飾り気のない、運動するためだけの服。

自分をかっこよく見せたいっていうのは、トレーナーとしてはかな  
り重要そうなのに……。

ふと、トレーナーと出会った時のことを思い出す。

~~~~~

「はあっ、はあっ、はあっ……！ ダメ、こんなのじゃ……！ もっと、  
もっとスタミナつけなきゃ……！ もう2度と、あんな思いはっ……  
！」

選抜レースがあった日の夜。

ライバルであるウオツカとの最後の競り合いで負けてしまい、2着  
になってしまったアタシは夜中に抜け出してたった一人で練習して  
いた。

一番になれなかった。

それが私の中で重くのしかかってくる。

それを振り払うかのように練習に取り組んでいた時、

「大丈夫か君？」

「ひゃっ!? だ、誰!? って、……トレーナー、さん？ 確か、選抜レ  
ースに来てた……」

「おう、こんな見た目だが、トレーナーだ。……まあ、今まで担当の一人もいない穀潰し状態のトレーナーなんだけどな……」

「そ、そうですか……」

トレーナーに出会ったんだ。

トレーナーはスーツを着ている人がほとんどだった選抜レースに、ただ一人ジャージで来ていたから印象に残ったと思う。

微妙な空気が漂う中、私は咳ばらいを入れて言葉を口にする。

「おほんっ……申し訳ありません。自主トレーニング中なので、お引取り頂けますか？ 今は……不甲斐ない自分を叩き直すのに、忙しいので」

今思い返すと、ひどいこと言ってたなあ……なんて思ってしまった、トレーナーに申し訳なくなってしまう。

だけど、それほどまでにアタシは“1番”に固執していたのだ。

「……2着が悔しいからか？」

「ええ、そうです。だから——」

『——お引取り下さい』そう続けようとしたけど、トレーナーの声で遮られる。

「うんうん、良い感じの性格してるね君」

「……はい？」

トレーナーが言ったのは、アタシの予想を裏切る言葉だった。

思わず間拔けな声が出てしまう。

その間にもトレーナーは言葉を続けていく。

「あの時、他のトレーナーの前で見せていた優等生然とした姿も、実際は猫をかぶっていた。多分、優等生として1番になりたいってところだろう。1番がいい。それは誰しも一度は思うことだ。俺自身は1番になりたいなんて思ったことはあんまりないけど、確かに1番になりたいって気持ちは少し分かるさ」

「……っ！ あなたにアタシの何が分かるんですか！」

「ああ、分からないよ。君がどれほど1番になりたいのか、その理由についても。同じ言葉を交わせる俺達でも互いに一から百までなんて分かるはずもない。でもなあ……」

思わず言い返しそうになったアタシをトレーナーが諫めて、答えを言う。

『分からない』。

あまりにも無責任な言葉だ。

だけど、言葉を切ったトレーナーは一刻の間俯いたと思ったら、バツと顔を上げて言葉を続けた。

「俺だって誰にも負けたくないっていう気持ちはあるさ」

「っ!？」

上げられた顔にあった瞳には、ギラギラとした闘争心が渦巻いていた。

そのすさまじさに思わず後退ってしまう。

「俺は昔、世界最速って呼ばれるほど足の速かった男なんだよ。でも、今から十年くらい前に足に大怪我を負ってしまったのさ。結果だけ言うなら走れるようにはなった。だけど、今まで走っていた時に見えた最高の景色は見れなくなっちゃったんだ」

「……」

トレーナーの話が無言で聞くアタシ。

何故か分からないが、聞いていなければならぬと思ってしまったからだ。

これを聞く根拠も理由もないはずなのに、アタシの足はその場に縫い付けられたかのように動かなかった。

「知っている中で一番腕のいい医者に言われたよ。『残念だが、もう君はあの時のように走ることはできない。精々、普通のウマ娘と並走することしかできないぐらいの速さだ。すまない。我々の治療が速ければ』ってね。慰めにもならねえよ。ウマ娘と並走することができる速さ？ 確かに、普通の人達から見れば驚異的な速さだ。でもな、俺が見ていたのはそんなもんじゃなかった」

トレーナーは空を見上げる。

私もつられて見上げると、雲一つない空には満天の星が輝いていて、思わずため息を吐いてしまう。

「この星が煌めく宇宙を翔るような、燃え尽きながらもどこかへ向か

う流星のような、誰にも阻まれることなく広い世界を駆け抜ける走り。そんなバカみたいなことを掲げて走ってたんだ。『誰もいないその先の景色』。そんな自分一人しかない世界が俺は好きだった」

「……どんな景色だったんですか……そこは」

先ほどまでの怒りも忘れて、アタシはトレーナーに聞いていた。

「さあ？　どんな景色だったかなんてもう覚えていねえさ。何しろ、夢のような感覚だったからな。楽しかったのは覚えている。でも、細部までは思い出せない。そんな感覚。まさしく夢見心地ってやつか」

「……それでも、目指すんですか？」

「おう。俺は走ることに楽しみを見出す変態だからな」

「フフツ……なんですかそれ。自分で自分のことを変態って言うなんて……バカみたい」

「お、笑ってくれたな。やっぱりいいね。誰かが笑っているのは」

思わず笑ってしまう。

焦りなんてなくなっていた。

「なあ、スカーレット君。君は走ることを楽しめているかな？　『こうならなくっちゃ！』っていう気持ちで走るといつかは潰れてしまう。だから、俺は楽しむために走り続ける。だけど、今は誰かを上に押し上げるのが楽しみになっている。君はどうだい？」

「そうですね。……アタシはちよつと焦り過ぎていたのかな。だけど、あなたの話を聞いて少し肩の荷が下りました。ありがとうございます」

「いいよいいよ。ただのお節介だからさ。こんぐらい大したことはないって。あ、それとこのタイミングで言うのもなんだが……」

トレーナーさんに感謝を告げると、トレーナーさんは何かを言いたそうに考え込む。

しばらくして、決心がついたのか口を開いた。

「君を、スカウトさせてもらえないか？」

「……どうですか？　アタシは2着になったウマ娘ですよ？」

「確かに、ウオツカ君も魅力的なんだが、どっちかって言うとな君の方が面白そうだと判断したからだ。……別に変な意味ではない。そもそ



もトレーナーとは担当した子を一番に押し上げるのが仕事だ。元から1着の子よりも、それ以外の子を一番にする。これほど楽しそうなおことはないさ！」

まるで、子供のようにワクワクとした顔のトレーナー。

そんなトレーナーの様子に、またクスリツと笑ってしまふ。

「そうですね。一番を取られたら、また奪い返せばいい。すごく単純なことだったんですね」

「だろ？ で、受けてくれるのかな？」

トレーナーは期待の籠った眼差しで見つめてくる。

そんなトレーナーに対し、アタシは――

「分かりました。そのスカウト、受けさせてもらいます」

「決まりだな！ どうする？ 今からでも契約書類を提出しに行くかい？」

「ええ、あのウオツカに早くトレーナーができたことを自慢したいですから」

こうして、アタシとトレーナーは契約を結んだ。

~~~~~

そして、今に戻る。

現在は、ショッピングモール内の服屋で、トレーナーの服を見繕っている最中だ。

「ねえねえ、トレーナー。これいいんじゃない？」

「うーん、動きやすさがちよつと……」

「それくらい我慢しなさい。あ、こつちの方がいいかもしれないわね」  
「それもちよつと……」

「ああもう！ そんな調子じゃいつまで経っても決まらないわよ！

はい、これ！ 今すぐ着替えてくる！」

「分かりましたあ……」

何着か候補を上げてトレーナーに渡し、試着室へと誘導する。  
それを受け取ったトレーナーはしぶしぶと言った様子で試着室に入っていた。

それにしても……

「はあ……トレーナーの服を……私が選んじやった……」

トレーナーには聞こえないような声で呟く。

どんな風になるんだろう。

アタシが選んだ服をトレーナーが着る。

絶対カッコ良くなるわよね！

契約してから知ったトレーナーは、優しくて時々破天荒な人だった。

私みたいなじゃじゃウマを投げ出さずにくれたし、トレーニングの時はアタシのことを第一に考えてくれる。

一番を取り返すためにウオツカとの模擬レースで行った無茶な作戦も、トレーナーとの特訓のおかげで成功させることができた。

でも、トレーナーが異能力者だということを知って、初めて併走した時はそれはもうびっくりしたわよ。

隣を見れば、トレーナーが鬼気迫る顔で追い抜こうとしてくる。

果てにはアタシに1バ身差で勝ってしまうほどに、トレーナーは速かった。

あれで全盛期の10%に満たないってどういうことなの……？

でも、そのおかげで、本番のような練習ができた。

もし、トレーナーに勝つことができたら、その時は嬉しそうに褒めてくる。

それがアタシは嬉しかったんだ。

ごつごつした手で、頭を撫でてくれる。

ママの手とは違う感触に最初は驚いたけど、今では心が安らぐことの一つ。

他にも、他にも、他にも……。

トレーナーにはたくさんのことを教えてもらったわ。

だから、今やってるみたいにお返しをする。

だけど、ただお返しをしているだけじゃない。

これから先、トレーナーはアタシ以外を担当することになる。

その前に、トレーナーをアタシ色に染め上げるんだ。

そうすれば、これからも一緒に居られるよねトレーナー？

トレーナー、アタシは1番への執着が強いんだよ？

今も、そしてこれからも、あなたの1番を手放すつもりはないから、覚悟してね？

「スカーレット……一応着てみたんだけど……本当にこれでいいのかあ……？」

「うん！ いい感じね！ じゃあ、次はこれを着てみて！」

## 番外編 チームを設立していたら

突然だが、俺の名前は彼方翔。

元世界最速の異能力者で、現在はトレセン学園にて生徒であるウマ娘を指導する立場のトレーナーという職に就いている、ただの三十代の一般壮年だ。

今俺がいるのは、チームを持ったトレーナーとウマ娘に割り当てられる部室。

俺は、そこに設置された大型テレビの前で担当ウマ娘達に確認を取っていた。

「お前たちく準備は良いか」

今日は、担当ウマ娘達から俺の現役時代はどんなことをしていたのかというのを見たいと言われて、元同僚達から俺の記録映像を送ってもらったのだ。

流す映像は、俺の仕事風景。

そして、異能力者の中でも逸脱した能力を持っている者達が位置付けられる階級、〃特級〃の称号を持つ者達 対 俺の元上司であり、最強の異能力者でもある人物、〃総司令〃こと「柊木真<sup>ひいりぎまこと</sup>」さんの模擬戦の映像だ。

……つてか、あいつらよくこんなレアものを送ってこれたな。

もしかしたら、総司令の強さが分かるっていうことで、上から処罰をくらうかもしれないのに……。

まあ、一緒に送られてきた手紙の内容から、件の柊木さんも協力しているらしいんだけどな。

「ああ、こちらの準備はいいぞトレーナー君」

最初に返してきたのは、俺の最初の担当ウマ娘 〃シンボリルドルフ〃だ。

俺達が所属する中央トレセン学園の現生徒会長である彼女は、俺以外のメンバーの意見を代弁してくれる。

「トレーナーさんの現役時代ですか……実際に見れるのは嬉しいで

す」

「お、お兄さまが一番速かった時の映像が流れるんだよね……？　ラ、ライス楽しみだなあ……！」

続いて、ルドルフと同じく高等部の「サイレンススズカ」と、「ライシヤワー」が言葉を発する。

スズカは冷静に分析をしようとして、ライスは緊張しているようだった。

スズカ、君のマイペースさがうれしいよ。

ライス、そんなに緊張しなくていいからな？　今から流れるのは、俺の試合映像だけだからな？

「……別に、興味はないし……！」

「トレーナーが走る姿か……。いつも見ている速さ以上の速さで駆けるトレーナー……。うん、それは、すごそうだな……。む、お腹が空いてきてしまった……！」

さらに続いて言葉を発したのは、身長は小さいがれっきとした高等部の「ナリタタイシン」と、この中央トレセン学園に転入してきた「オグリキャップ」だ。

食事に關しては対極に位置する二人の反応は、正反対だった。

……だがしかあし！　俺は見逃さなかった！　タイシンのウマ耳が小刻みに揺れていることに！

そしてオグリ、後でちゃんとしたご飯作ってあげるから、今はこれ（お手製おにぎり）で我慢なさい。

そして最後に……

「……………」

「あ、あの……スカーレットちゃん。そんなに緊張しなくてもいいんだよ……？」

「そ、そうですねライス先輩……！」

この部屋にいるメンバーの中で、唯一の中等部である「ダイワスカレット」はライス以上にがちがちに緊張して固まっていた。

まあ、仕方ねえか。

この部屋にいる面子はみんなすごい奴等ばかりだな。

あと、スカーレットだけがこの中で唯一の中等部だから、ビビってるんだろう。

……今度の休みに、お出かけでもするか。

取り敢えず、全員の確認ができたことなので早速映像を流そうと思う。

ご丁寧にCDにしてきたあいつらのことを頭に浮かべて苦笑いしながら、読み込み口に挿入する。

画面に現れたメニューのカーソルを、リモコンで操作して『ALL PLAY』を選択する。

……なんか、無駄に凝ってんな。

「んじや、先ずは俺の仕事風景からだな」

「仕事……ですか……？」

「おう、俺達異能力者にはそれぞれ適正に合わせた仕事が割り振られるんだ」

スズカが不思議に思ったのか、聞いてくる。

ちようど画面も真つ暗だった状態から変わり、砂嵐の中を映し出す。

……って、なんで製作者の名前が背景の所々にあるんだよ！

ゲームとか映画とかアニメじゃねえんだよ！

無駄に手の込んだことしやがって……あいつ等は暇人か！

「……ゲームみたい……トレーナー、これ作ったのアンタの友人だよね。……なんでこんなに遊び心満載なの？」

「言わないでくれタイシン……」

「お、おう……」

タイシンが俺の気になっているところを突いてくる。

そんなことを思っていると、砂嵐だけだった画面に変化が訪れる。

黒づくめの男が砂塵を突き破って飛び出してきたからだ。

『イヤッホオウツ!!』

「あ！ お兄さまの声だ！」

「確かに……トレーナー君の声だな」

テレビのスピーカーから聞こえてきた声だけで、誰かを当てるライ

スとルドルフにちよつと引きながらも、画面を見ると確かに俺が映っていた。

分厚く黒一色で染められた作業服を着こみ、靴は脛全体を覆いながらも決して邪魔はしない蛇腹構造の黒いブーツ。

背中には同じく黒いバックパックを背負い、顔には砂塵が目や気管に入らないように黒いゴーグルとマスクをしている。

この砂塵の吹き荒れる世界では、軽装で行こうとすると痛い目を見るのは高校時代に散々見たからな。

「それにしても……速い……!」

「ああ、一步踏み込んだら、次の瞬間には向こうの岩場に移動しているな」

スズカが戦慄し、オグリが率直に感想を言う。

画面の中では、俺が捉えきれない速度で駆けているのが映っている。

巨大な岩を一つ飛びで乗り越え、砂地に足を取られることなく車よりも速い速度で駆け抜けていく。

「ここは……どこなのトレーナー？ アフリカとかの砂漠地帯じゃないのは分かるけど、もしかして、これがあの……」

「そう、『反転世界』だ」

緊張の解けたスカーレットが砂が舞っていることに対して推測してきたので、それに肯定と答えを返す。

反転世界。

超常の能力を持った異能力者が主に活動している別世界だ。

「皆は反転世界のことをどれだけ理解しているんだ？」

「ええつと……確か……お化けとかが住んでる世界だよ、お兄さま？」

「正確に言うとは違うが、まあ、合ってるぞライス」

「えへへ……」

俺の問いかけに一番に返してくれたライスの頭を撫でる。

なんか周りから、視線が集中しているんだが……。

その間にも映像は続いていくが、俺が尋常じゃない速度で駆け抜け

る以外は特筆すべき点はない。

だから、解説を入れようと思う。

「反転世界。俺達異能力者が主に活動する、今俺達がいる世界とは違う世界だ。別に世界の裏側にあるわけではないし、夜の零時に、ある力に対する適性のない者が棺桶の中に閉じ込められるような世界でもないぞ」

「……ペルソナ3じゃん」

タイシンがなんか言っているけど、無視して話を進める。

「この世界を説明するには、少しだけおとぎ話のことについても触れていくぞ。いいか？」

全員が頷いたので、話始める。

「そもそも反転世界はこの世界と融合していたんだ。だから、神話での怪物や妖精や妖怪等の記録が残っているんだ。過去の地球のことだな。この時は神秘的な生物が多く様々な恵みを貰っていたが、同時に凶暴な魔物達の被害もあったんだ。その時の世界を色で例えるならば、*“紫色”*。んで、今のこの世界を*“青”*。反転世界を*“赤”*とする。後は頭のいい君達なら分かるはずだ」

「！　世界が分かれた」ということだね？」

「正解だルドルフ。ご褒美に撫でてあげよう」

「んっ、もう、子供じゃないんだぞトレーナー君」

正解したルドルフの頭を撫でて、次の説明に移る。

……なんか、ルドルフ以外の視線が強くなったんだが……。

「おほんっ！　世界が分かれたことにより、人間とウマ娘の世界、一応科学者達が言うには*“表層世界”*と、空想上の生物の世界 *“反転世界”*に分かれたのである」

「……じゃあ、トレーナー達が仕事する必要ないじゃん。世界が分かれたんならそいつらもいなくなっただんでしょ？　アタシ達がそんな奴らを見なくなったんだから。……でも、そんな簡単にはいかないんだよね？」

「鋭いなタイシン。ご褒美に頭を撫でてあげよう」

「……………」



頭を撫でる俺の腕を振り払おうとせず、なすがままにされるタイシン。

尻尾がぶんぶんいつてます。

「タイシンが言った通りに、世界は分かたれて、空想の存在と俺達は別々の世界に分けられた。普通ならこれで“めでたしめでたし”つてところだが、現実はその簡単にはいかない」

一呼吸入れて、話を続ける。

「世界は完全に分かたれたわけではない。今も少しだけ繋がっているんだ。そして、たまに反転世界にいる生物、“怪異”は世界を超えて襲ってくる」

「……それが、トレーナーが戦っていた理由なのか」

「そして、怪奇現象が起こる理由でもあるのよね、トレーナー？」

「そうだ。オグリとスカーレット。撫でてやろう」

「……………」

「ふわあ……………」

二人の頭を撫でて、画面に向き直る。

ちように走っていた俺が立ち止まり、近くの物陰に身を潜めたシーンだ。

物陰の向こうでは、車のように大きい狼のような生物が群れを成して闊歩している。

『うわあ………… ヤマイヌ”かよ…………』

「あれで山犬って言うんですか…………」

「違うぞスズカ。基本的に怪異には、妖怪や神などの名がつけられる。あれは下級の怪異だからそこらにいた山犬の名前で知られているんだ」

「…………ゴッドイーターみたいなものか」

そんなことを言いながらも、画面の俺は行動を起こす。

物陰から出てクラウチングスタートの構えを取った俺は、次の瞬間

『オラアツ!!』

『ギャブツ!?!』

たった一步で「ヤマイヌ」に急接近し、その無防備にさらされた腹を蹴り上げていた。

くぐもった叫び声をあげて、「ヤマイヌ」のリーダー格と思しき一匹の「ヤマイヌ」が空に舞い上がる。

「「「「「」」」」」

「アイツ等はそれなりに良い」「コア」を落とすから狩っておいて損はねえんだ。あ、コアって言うのはだな、怪異の心臓とか頭とかにある魂の核みたいなものなんだよ。それを砕いて使用することで、魔力回復薬とかエナジーマガジンの燃料になるから、怪異は見つけたら即「サーチ&デストロイ見敵必殺」が主流だな」

無言になってしまった全員を置いて、俺は豆知識を披露する。

その間にも、画面の中の俺は混乱する「ヤマイヌ」達を蹴り殺していく。

三十秒と経たずに全滅した「ヤマイヌ」達の死体は、砂で作った城のようにサラサラと風にさらわれていき、最終的には一部の爪などを残して消滅した。

「……素材が残った……ゴツドイーターみたい……」

「確かにな。俺がまだ異能力者だった時に、ゴツドイーターが発売されて上層部の人達が混乱したからな。『なんでここまで似ているんだ?! まさか、誰かが情報を漏らしたのか?!』ってな」

「そ、そんなこともあったんですか……」

無言の状態から戻ってきたタイシンが神殺しのゲームの名を呼び、同じく戻ってきたスズカはちよつと引いていた。

残った素材を、バックパックに詰めた画面の俺は、再度走り出す。カメラの移す範囲から俺が消えたところで、「数分後」のテロップと共に俺が画面にフェードインした。

俺の前方にあつたであろうカメラが移動して、俺の後方に回り、そこからカメラが上昇すると、ある場所が映し出される。

そこは……

「これは……」

「綺麗……」

「大きい建物ばかり……」

「……ふくん」

「むう……迷子になってしまいそうだ」

「なにこれ……」

あまりに美しい光景だった。

全体が白で構成された近未来な都市。

周りの砂だけでしか構成されていない荒野と比べて、明らかに人の手が入っているのが分かる場所だった。

点を貫く摩天楼がそびえたつそこは……

「……ここが、そうなんだね。トレーナー君？」

「そうだ。ここが、俺達異能力者の所属する組織『神祇省』だ」

俺が所属していた異能関連に対応する組織。

『神祇省』だ。

~~~~~

あの後、何か所か説明を入れつつ、遂に総司令との模擬戦に移るこ  
ととなった。

皆の反応はそれぞれで、それでも、俺の活躍に期待してくれている  
のが分かる。

「トレーナー君の活躍する場面か……どうなるんだろうね」

「トレーナーさんの速さ……存分に見させてもらいます」

「お兄さまが頑張ってたら、ライスも頑張れそう、かな……？」

「……ゲームみたいな動きをするってのは聞いてるから、ちよつとは  
興味がある」

「トレーナーの全力か……どれほどのものだろうか……」

「……………」

期待が重いなあ……。

あんまり俺の正面戦闘能力はないっていうのに……。

あんまりがっかりさせないように、勝負の結果をオブラートに包んで告げる。

「あく……先に言っておくけど、俺達負けるから」

「」「」「えっ」「」「」

ダメだった。

オブラートに包むどころか、ド直球に言ってしまった。

ま、いいか。

結果は変わらないし。

「今から見る映像の中で俺が戦っている相手は、世界的に見ても強すぎる人なんだよ。それこそ、俺達特級が集まっても濡れた障子紙に指を突き立てるが如く簡単に破られる」

「で、でも、お兄さまは一番速いんだよね?」

「そ、そうですねよトレーナーさん! あの時にクーガーさんが言っていたのは? だったんですか! 『大は小を兼ねるのか速さは質量に勝てないのか、いやいやそんなことはない速さを一点に集中させて突破すればどんな分厚い塊であろうと碎け散る』と!」

「スズカ……それがね……本当に分厚すぎるものは、速さを一点に集中させても碎け散らなかつたんだよ」

ライスは普通に取乱し、スズカは変なことを言う。

この間貸した「スクライド」全部見たのかな?

「二人とも落ち着け。トレーナー君が言うのだ。そこに嘘はないだろう。負けてしまうこともあるから、それを受け止めていかなければ」

「う、はい……ルドルフさん……」

「すみませんでしたトレーナーさん……」

「あくいいいいよ。これからの映像を見てくれるだけでいいから」

取り乱していた二人をルドルフが落ち着かせてくれた。

今度、予定を空けておかないと……。

画面が切り替わり、大勢の人が立っている映像と、黒いローブを纏い黒い布で目隠しをしている男性一人の映像が画面の半分半分に分かれて流れる。

編集凝ってんなあ……。

『——それでは、神祇省総司令官「柗木真」と、神祇省に所属する特級異能力者の皆様で模擬戦を行います。アナウンスは柗木真の妹、柗木結ゆいが行います』

「……一人だけで立ってんのが、総司令ってやつ？ ……強キャラ感半端ないじゃん」

「そうだタイシン。あの人だけ次元が違うからな。よおしく見ておけよ」

タイシンと言葉を交わしつつ、画面に集中する。

十年ぶりに見る戦闘の映像だからな。

俺自身、こうやって客観視してみるの初めてかもしれないからな。

勉強がてら、使えるところは全部使うか。

『それではカウントダウンを始めます。10、9、8、7、6——』  
カウントダウンが始まった。

緊張感が高まる。

画面の中でも、大勢の人達が映っている側では変化がみられる。

ある者は拳を、ある者は刀を、ある者は鎚を、ある者は独特の構えをとる。

『5』

画面越しだっというのに、気迫が伝わってくる。

しかし、ただの気迫ではない。

『4』

子供の喧嘩ではない。

『3』

ウマ娘達がレースに挑む際の気迫でもない。

『2』

それはまさしく——

『1』

超常の戦いが始まる前であった。

『0』

戦いが始まった。

先手は、総司令だ。

何やら右手に持っていた杖を無造作に俺達の側に突きつけると、画面が炎で真っ赤に染まった。

「「「え」「」」」

「……」

映像を見ているルドルフと俺以外の全員が呆けたような声を出す。ルドルフは俺と長く過ごしてきたから、耐性がついたのであろう。だが、それ以外は別だ。

当たり前だろう。

俺は強くなつた視力で柗木さんが杖を向けたのが分かったが、ルドルフ達からしてみればカウントがゼロになつた瞬間、さつきまで大勢が立っていた場所が一瞬で炎に包まれたようにしか見えないのだろう。

普通なら、炎が画面を覆つた瞬間、勝敗が決したように思うのだろう。

しかし、

『シイツ!!』

『おっとー!』

いつの間にか杖を向けていた柗木さんの傍に俺がいて、顔面を狙つたボレーキックを放っていた。

その攻撃を空いていた手をかざして障壁を作り上げた柗木さんは、そのまま無動作イモーションで熱線を放つ。

画面の俺は蹴りを受け止めた障壁を足場にし、熱線を回避すると地面に降り立ち、また一瞬で距離を詰める。

『ソラアツ!』

『つとと……ほいっ』

『ぐあつ!』

今度は顎を狙つたハイキックを選択した俺だったが、またも障壁に防がれる。

だが、ただ防ぐのではなく、障壁が足をくるむようにして動かせなくした後、柗木さんが熱線を圧縮して爆発させてくる。

それをもろに食らった俺は、数十メートル吹き飛ばされて、動けなくなった。

柘木さんは、別の障壁を展開していたから爆発が届いておらず、杖の向いてる先も変わらず、掠り傷の一つもない状態だ。

うくん……今のはハイキックじゃなくて、ボディブローが有効だったな。

後は、他の人達が来るまで時間を稼ぎつつ待機していかないといけないなかった。

出しゃばった結果が、返り討ちにされて気絶。

「やっぱり、この時の俺って若いな。動作の所々に粗がある」

「お、お兄さま?! ふ、吹き飛ばされて、動かなくなってる?!」

「落ち着いてくださいライスさん！ こういう時は、人工呼吸をするのが一番だと！」

「スズカ。君も落ち着いた方がいいぞ。それと人工呼吸は私にさせてくれ」

「ちよ、ずるいですよオグリ先輩！」

「……うっさ」

「ふむ、トレーナー君の話によれば、同時に魔法を発動するのは至難の業だと聞いていたのだが……これが上に立つ者の実力か……」

場に混乱が訪れる。

ライス、一先ず人の肩を掴んでグワングワンさせるのを止めなさい。気持ち悪くなってくるから。

スズカ、それは気を失って呼吸をしていなかった時にするものだ。

オグリ、なんか便乗しようとしなないの。

スカーレット、君もだ。

タイシンとルドルフは……いつも通りだな。

そんな混沌とした場を置き去りにするように、画面の展開は動いていく。

『シィヤアッ!!』

『セイツー!』

雷を体から迸らせながら刀を抜き放った壮年の男性と、蒸気を噴き上げる戦鎧を振りかぶる女性が柊木さんの左右から挟撃を仕掛ける。生ける雷のような男性と、どんな城壁であろうとも一撃で打ち崩しそうな女性の一撃が柊木さんに直撃する。

が、

『彼方君は速かったけど、威力不足だった。逆に、君たちは威力はあっても速さが足りない』

『ぬうん……』

『むう……』

「え!? あんなすごいような攻撃を受け止めたの!？」

スカールレットが驚いて声を上げる。

画面では、二人の攻撃が総司令の展開した複数の障壁に容易く止められてしまっているのだ。

それでも、俺が一枚も破れなかった障壁を何枚も粉々にしているのはさすがとしか言いようがない。

更に、柊木さんに両腕を使わせている。

これで、炎の中で耐えていた人達が動けるはずだ。

攻撃の効がないと瞬時に判断した二人は、すぐさま飛び退いて武器を構える。

そんな二人を見据える柊木さんは、ゆらりと杖を向ける。

また、先ほどと同じように炎で辺りを埋め尽くすのだろう  
だが、

『おや?』

飛んできた蚊を叩き落とすかのように、半ば反射のような動きで顔の横に腕を持ってきた柊木さんは何かを掴み取った。

それは銃弾だった。

あのまま弾丸が飛翔していたのなら、柊木さんのこめかみに直撃しその命を絶っていたのだろう。

だが、そうはならなかった。

柊木さんの人間離れした知覚能力によってつかみ取られたからだ。

……っていうか、高速回転する弾丸を掴み取るとか……掌火傷して



もおかしくないのに……。

そんなことを思っている間に、どこからともなく弾丸の雨霰が降り注いできて、柗木さんを滅多打ちにする。

着弾した瞬間に爆発しているから、おそらく、兵器科の特級が撃つてるんだろな。

俺が気絶していた間にこんなことが起こっていたのかよ……。

『フハハハハハ!! 食らえよ柗木!! お前の障壁を破壊するために開発した、特製の徹甲弾だ!! 存分に味わえ!!』

『うくん……、しばらく兵器科の予算を減らそうかな?』

なんか、一部の人が聞けば発狂しそうなことを呟きながら、障壁が次々と破壊されていくのを確認した柗木さんは杖で弾くことに切り替える。

それでも全部は捌ききれないから、何枚も重ねた障壁を縦横無尽に動かして防いでいった。

「……うっわ、あれ全部捌いてるよ。あの人ホントに人間?」

「多分……」

「トレーナーでも断言できないのか……」

タイシンが引きながら呟いた言葉に曖昧な答えを返す俺。

それが聞こえていたのか、オグリが戦慄する。

その後も、様々な特徴を持った特級の人達が柗木さんに攻撃を加えていく。

しかし、誰一人として傷をつけることはできなかった。

消耗して、もう立っているのもやつとだという人も出始める中、戦況が動いた。

『おらああああああ!!』

「あー、トレーナーさんが蒼い光を纏って……」

画面では先ほどまで気絶していた俺が回復して能力を発動しながら、柗木さんに向かっていく。

その際スズカが言ったように、蒼い光を纏いながら駆けているのだ。

まず一発目は勢いを利用したドロップキック。

障壁の展開が間に合わない判断した柊木さんは回避を選択する。

だが……

『つつううううう、おらあああああ!!』

『! はあっ!!』

すぐ傍に着地して、狙いを回避した柊木さんに変えた俺は勢いを殺しつつ、蒼い光を強めながら今度こそ障壁に邪魔されることなく一撃を加えることに成功する。

一撃を加えたと言っても、完璧に防御されてるし、身体強化も間に合っているだろうからほぼノーダメージだけど。

だが、一発入れられた瞬間から俺は更に加速する。

『はあああああああああ!!』

『くうっ!』

蹴りを直撃させた場所にさつき降り注いだ銃弾の雨霰のように蹴りを加えていく。

何度も何度も何度も何度も。

それこそ、杭打機のように。

時折反撃をしてくるが、加速している俺には簡単に回避できるものだった。

そんな俺を反撃の狼煙として、他の皆も柊木さんに攻撃を続けていく。

まさか……勝てるんじゃないかという空気が、画面の向こうでもこちら側でも漂い始めるが、事はそう上手くいかない。

柊木さんが防戦一方となって、障壁の維持も危なくなってきたその時だった。

『模擬戦開始から五分が経過しました。 “スーパーノヴァ” の使用許可が下ります』

『『『『『『!!?』』』』』』』』

それは悪夢の宣言だった。

その言葉が模擬戦会場に響き渡った瞬間、

柊木さんを除いた全員が何かによって地面に押さえつけられ動けなくなった。

「来たか……」

「トレーナー君……今から起こるのが、例の……」

「ああ……スーパージョウダ」

俺の呟きに反応したルドルフが確信を持って聞いてくる。

それに対し、重々しく頷いた俺は画面から目を離さずに見据え続けた。

画面では、攻撃が止んだことで自由を取り戻した柊木さんが服に着いた土埃を払いながら、その場にいた全員に告げる。

『今日も惜しかったね。特に彼方君。あの蹴りは結構効いたよ。それにあの速さも今まで以上だった。だけど……時間切れだね』

そう言う柊木さんの立つ場所のはるか上空には、地上に居ても見えるほどに巨大な青い火球が煌々と燃え盛っていた。

『それでは、本日のグランドファイナーレ!!』

手を掲げる柊木さんはそう宣言し、

『スーパージョウダ!!』

腕を振り下ろした。

瞬間、火球が圧縮され落下してくる。

それを前にして、何もなかったわけではない俺達は、必死に謎の力から抜け出そうとするがピクリとも動かせずとその火球が落ちてくるのを待つしかなかった。

火球が地面に接触した、刹那――

画面全体が蒼い炎によって包まれたところで、画面が途切れる。

嫌な緊張感が俺達を襲うが、しばらくすると気の抜けるような溜息が聞こえてきて空気が弛緩した。

「……終わったんですか?」

「ああ、終わったよ。分かっただろ。あれが最強の存在、俺達の総司令だつて」

「うん……すごかった。お兄さまが負けちゃったのは悔しいんだけど……」

「そこは仕方ないってあきらめてくれ。俺等も全力でやったけど、柊木さんは俺達の何十枚も上手なんだつて」

「トレーナー、かつこよかったぞ！ 最後の蒼い光を纏った時にすごく速くなっていたな！ あれは何だ！」

「あれが、俺の能力だよ。名前は仲間がつけてくれたやつで『蒼い流星』って言うんだ」

「蒼い流星……か……確かに、流れ星みたいに綺麗だったわね」

「そう言ってもらえると嬉しいかな？ タイシンはどうだった？」

「……別に、ちよつとカツコ良かったと思うけど」

「私もだトレーナー君。最後のところは惜しかったと思うが、それでもカツコいい姿だったよ」

互いに感想を言い合って、今日の映像観賞は終わった。

## 無敵の帝王と世界最速の男

203：名無しのウマ娘ファン

いや〜この間のレースすごかったな〜

204：名無しのウマ娘ファン

かなりの大差で勝利した1着の子はすごかったですねえ……

205：名無しのウマ娘ファン

確か……トウカイテイオーだったっけ？

206：名無しのウマ娘ファン

ああ、あの……

207：名無しのウマ娘ファン

選抜レースの日にシンボリルドルフさんの武勇伝語りまくったあの子か……

208：名無しのウマ娘ファン

あの頃は、まだ未熟って感じがしたけど、この間のレースではすごい気迫を見せていたよな？

209：名無しのウマ娘ファン

いったい何があったんだらうね？

210：名無しのウマ娘ファン

あ〜それ知ってる

211：名無しのウマ娘ファン

何!?! 知ってるのか>>210!?!

212 : 名無しのウマ娘ファン  
はよ話してくれ!

213 : 名無しのウマ娘ファン  
気になるぞ!

214 : 名無しのウマ娘ファン  
ってか、>>210何者?

215 : 中央トレ  
多分あの子のトレーナーになった人かな  
結構優しいというか……人ができているというか……  
まあ、すごい人だっと思ってくれ  
詳しい説明は後でする

>>214  
中央トレセン学園に所属するトレーナー  
トウカイテイオーのトレーナーと同期  
時々、一緒に飯を食いに行くぐらいには仲がいい

216 : 名無しのウマ娘ファン  
>>215  
ファア!?

217 : 名無しのウマ娘ファン  
中央トレセン学園とか、エリートやんけえ!

218 : 名無しのウマ娘ファン  
しかも、件のトウカイテイオーのトレーナーと同期とか裏山

219：名無しのウマ娘ファン  
で、そんな彼女のトレーナーがどういった変化を与えたんだ？

220：名無しのウマ娘ファン

>>219

冷静だなおい

221：名無しのウマ娘ファン

確かに、そこじゃあねえよな

俺達が聞きたいのはそのトレーナーが何をしたかだよな

222：名無しのウマ娘ファン

はよ！ はよ！

223：中央トレ

んじや、言うぞ？

224：名無しのウマ娘ファン

もったいぶらずにはよ言え

225：名無しのウマ娘ファン

待たされるこっちの身にもなれよ！

226：名無しのウマ娘ファン

動けこのポンコツが！ 動けってんだよ！

227：名無しのウマ娘ファン

動けえええええ!!

228：中央トレ

分かったよ

トウカイテイオーのトレーナーは今から十年ほど前まで異能力者  
だったらしい

229：名無しのウマ娘ファン

>>228

え

230：名無しのウマ娘ファン

異能力者だど!?

231：名無しのウマ娘ファン

マジ?

その人の冗談とかじゃなくて?

232：名無しのウマ娘ファン

うっそやろ!?

233：名無しのウマ娘ファン

異能力者って何すか?

234：名無しのウマ娘ファン

知らないのか>>233!?

235：名無しのウマ娘ファン

誰かー! 解説をー!

236：名無しのウマ娘ファン

よし来た!

異能力者ってのはだな、今から約十年前に起こったとあるテロに  
よって世界中に知られることとなった、簡単に言えば超人たちのこと  
だ



一人一人が常人とは比べ物にならないほどの力を持ち、太古から存在する「怪異」と呼ばれる怪物たちと戦っていたのである

だがしかし、その力を悪用する者達も現れるため、世界各地に点在する異能力者達の組織は、異能力を悪用する者「異能犯罪者」に対する警察のような役割も持っているのだ

最近では、その力を使っているのをテレビで見ること多いはずだ

237：名無しのウマ娘ファン

ナイスだ>>236！

238：名無しのウマ娘ファン

これは有能

239：名無しのウマ娘ファン

>>236

お前には解説の称号を授ける

240：解説

わくわく！

241：名無しのウマ娘ファン

なんかすいません

最近上京してきたもんで

テレビも、基本的にはニュースとかしか

242：名無しのウマ娘ファン

>>241

ええんやで

243：名無しのウマ娘ファン

やさしいせかい

244 : 名無しのウマ娘ファン  
やさしいせいかつ

245 : 名無しのウマ娘ファン  
ってか、中央トレの話にあった、十年前まで異能力者だったって言うのは、トウカイテイオーのトレーナーって引退したってことなのか？

246 : 名無しのウマ娘ファン  
確かに……

異能力者って、待遇は良かったって聞いてるんだけど、何でやめたんだろ？

247 : 中央トレ  
それも本人から聞いている

トウカイテイオーのトレーナーは、十年前のテロが起こった際、実際に救助活動を行っていたらしい

その時に無茶のし過ぎで、足が破裂  
腕のいい医者がそろっていても、その足を完治させることができず、そのまま引退したらしい

248 : 名無しのウマ娘ファン

>>>247

「足が破裂」

うへえ……

249 : 名無しのウマ娘ファン  
エッグウ……

250 : 解説

「無茶のし過ぎで足が破裂……  
ウマ娘でも、骨折とか筋肉や筋が切れるぐらいなのに……」

251：名無しのウマ娘ファン  
作り話じゃないんだよな？

そんな水風船が割れるとかみたいな破裂じゃないんだよな？

252：中央トレ  
いや、本当の話だ

そのトレーナーは、異能力者としての能力が走ることに特化していたらしく、今も時々、トレセン学園に所属するウマ娘達と並走している

その時に、半ズボンを着ているから足が見えるんだけど……  
足全体に傷跡がびっしりと残っていたよ  
それはもう、痛々しいと思えるぐらいにはな

253：名無しのウマ娘ファン  
うわぁ……

254：名無しのウマ娘ファン  
そんなことになるまで人を助けたとか、そのトレーナー男前過ぎない？

255：名無しのウマ娘ファン  
>>252

「トレセン学園に所属するウマ娘達と並走している」  
なにこれ？

引退してるんだよな？  
なんで、走れてるところかウマ娘と並走することができてるんだ？

256：名無しのウマ娘ファン

そこは治してくれた医者腕がよかつたんでしょ（適当）

257：名無しのウマ娘ファン

>>252

って、ん？

走ることに特化している異能力者？

258：名無しのウマ娘ファン

心当たりでもあるのか>>257？

259：名無しのウマ娘ファン

>>257

話してみてください

俺達は黙って聞いているから

260：名無しのウマ娘ファン

>>259

ああ、ちよつと整理しておくから下空けておいてくれ

261：名無しのウマ娘ファン

ありがとう

このスレを見てから十年前に起こったテロについて、調べてたんだけど

その時に一番活躍した人ってことで記事に写真が乗ってたんだよ

「彼方翔」さん

「世界最速の男」って謳い文句で乗ってたんだけど違うかな？

その時の怪我が原因で引退したってことも書いているし、療養していた国から日本に帰るときには彼方さんに助けられた人たちが集まったせいで、その港が埋まったっていうくらいだっただってことも書いてあった

そこから彼方さんの行方を探っていると、今から五年ぐらい前に中

中央トレセン学園にトレーナーとして所属したって記事も見つけたんだけど……

262：中央トレ

>>261

ああ、確かにあいつはそう呼ばれてたって言ってたな

263：名無しのウマ娘ファン

同期公認!?

264：名無しのウマ娘ファン  
人が集まって港が埋まった!?

265：名無しのウマ娘ファン

世界最速の男!?

266：名無しのウマ娘ファン

クーガーの兄貴かな？

267：名無しのウマ娘ファン

思い出した!?

五年前のあれか！

268：名無しのウマ娘ファン

すみません

今度も分からないです

269：名無しのウマ娘ファン

解説出番だぞ！

270：解説

仕方ねえな！ 俺にも分からないことがあるからそこところは勘弁な！

話に出てきた彼方翔（おちかた しょう）さんは、世界的にも有名な人だ！

何故なら、あの十年前の事件で「最も多くの人命を守った」ということで国に表彰されたことのある人物だからである！

そして、助けられた人たちが曰く、「目にも止まらない速度で動き、避難所まで連れて行ってくれた」という、移動速度を言及する発言もあり、なおかつ、同じ異能力者達の中でも一番足が速いということでも名だということも後押しして、彼は「世界最速の男」という称号ももらったのだ！

表彰の様子は全世界で生中継され、その時の彼方さんは車いすで表彰を受けていた！

まさしく、「現代に生きる英雄」！

そんな彼は、五年前に突然トレーナーとしての道を歩み始めたことでも、世間を沸かせた！

中央トレの言うことが本当なら、俺達は伝説の新たな活躍を見ていることになるんだぞ！

ってか、なんで知らなかったんだよ！

271：名無しのウマ娘ファン

いや…………その…………

272：名無しのウマ娘ファン

…………えーつと…………

273：名無しのウマ娘ファン

…………

274：名無しのウマ娘ファン

ううーん…………

275：名無しのウマ娘ファン

思い出せました

ニユースでなんか言っていたし、おばあちゃんたちが騒いでいたから覚えています

276：解説

おい、お前達

おそらく上京してきたニキが覚えているのに対し、お前達の体たらくは何だ？

277：名無しのウマ娘ファン

すみませんでした

趣味のこと以外考えていませんでした

278：名無しのウマ娘ファン

同じく

279：名無しのウマ娘ファン

同じく

280：名無しのウマ娘ファン

同上

281：名無しのウマ娘ファン

以下同文

282：名無しのウマ娘ファン

はあ〜……

~~~~~

「アイツ……まあ、良いけどさ」

ソファに腰掛けながら、この掲示板に書き込んだであろう同僚の顔を思い浮かべながら溜息を吐く。

俺の名前は彼方翔。

元異能力者であり、世界最速の男と呼ばれていた者だ。

そんな俺は、スマホを手に持ちとある掲示板を開いていた。

掲示板の中では、いつも通り愉快的な会話が繰り広げられていたが、俺についての話題に話が向かったことで、俺の過去話がいろいろと暴露されてしまったのである。

別に気にしているわけじゃない。

ただ、面倒なことが起きそうだな、と他人事みたいに考えているだけだ。

というより、俺がなぜ、掲示板を開いているかの理由については、単純に俺の担当ウマ娘のことを誰かが話してくれているのか興味があつたからだ。

結果は、途中で俺の話題に切り替わってしまったが、それでも関心は向いていたのが分かった。

そここのところは、担当トレーナーである俺にとって喜ばしいことだ。

「ねえトレーナー。顔がにやけてるよ？」

「おつとすまねえな、〃テイオー〃。何でもないさ。ところで、体の調子はどうか？ どこか変な感じがするのなら言ってくれ」

話しかけてきたのは、俺の膝に座る少女。

掲示板の中でも話題になっていた、俺の担当ウマ娘である〃トウカイテイオー〃だ。

そんなトウカイテイオーは俺の膝に座り、テーブルを挟んだ向こうにある家庭用ゲーム機のコントローラーを手に持って、こちらに振り



向いていた。

画面には、俺のおすすめしたゲームのポーズ画面になっている。取り敢えず、それらを見殺した俺は、テイオーに体の調子を聞いてみた。

テイオーは顔を横に振ってこたえる。

「ううん、大丈夫。トレーナーが昨日の夜にマッサージしてくれたからどこも悪くはないよ？ それよりも、この間のレースどうだったかな！ ボク、頑張ってたよね！」

「おう、流石は無敵のテイオー様だ。特に悪いところはないぞ。強いて言うなら、レース中に気を取られてペースが落ちたつてのは褒められるところではないがな」

「どうやら、テイオーが言うには不調はないようだ。」

だが、テイオーが分かっているだけで、もしかしたら重大な事故につながるかもしれないと注意深く観察する。

そんな眼差しを向けられているテイオーは、この間のレースのことについて聞いてきた。

期待したような褒めてもらいたいような眼差しでこちらを見てくるテイオーに、最初は褒めて、その後少しだけ厳しい評価を下す。

「うっ、そ、そのぐらいいいでしょ！ トレーナー目線で話さないですよ！ ボクはトレーナーみたいになんかでもかんでもできるわけじゃないんだからね！」

「ほらほら、人の上で暴れないの。ソファが倒れるでしょうに。あつ、こら止めなさい！ 人の腹筋をペチペチしないの！」

俺の評価を受けたテイオーは不機嫌そうに頬を膨らませて、俺の腹を服越しとはいえペチペチと叩き出した。

「ふん！ トレーナーはいつも優秀だよね！ ご飯も作れるし！ 勉強もできるし！ ボクと一緒に走ることだってできるし！ 優しいし！」

「……褒めてんのかそれ？」

「褒めてない！ 優秀なトレーナーとへっぽこなボク！ ヒニクつてやつだよ！ このバカトレーナー！」

「なっ！ バカとはなんだ！ バカとは！ スピード狂と言われていたとはいえ、学力は高かったんだぞ！」

テイオーにバカと言われた瞬間、さすがの俺でも怒りだす。

「こんにやろう……！ 人に言ってはならぬことを言いおつて……！」

ちなみにだが、俺の学力はかなり高い方だ。

一位ではないが、十人中、二から三位を取るぐらい。

ちなみにだが、テイオーはそれなりに優秀だ。

まあ、俺に勉強を教わりに来たりすることがあるけど……。

「むむむうく……！」

「ぬぎぎい……！」

互いに額をあわせたまま、がんを飛ばし合う俺とテイオー。

今俺達がしている体勢を簡単に言えば、俺がソファにもたれ込んでいて、テイオーが向き合うようにして俺の足に跨っている感じだ。

パツと見、恋人同士がいちゃついているように見えるだろう。

だが違う。

俺はトレーナーであり、所謂指導者というべき立場だ。

そしてテイオーは、俺の教え子であり、未来のある若者。

そう、これはただのじゃれ合いなのだ。

あと、大抵こうなった時は……

「こうなったら……！ ゲームで勝負だ！」

「望むところー！」

ゲームでの解決になる。

テイオーを持ち上げ、俺の隣に座らせた後は、テーブルの上に置いてあったもう一つのコントローラーを持ち、ゲーム機本体と接続する。

その間にも、テイオーは画面を切り替えて、ホーム画面から多人数のゲームモードにしていく。

「準備は良いトレーナー？」

「おう、けちよんけちよんにしてやる！」

そしてゲームはスタートした。

勝ってやる……！

この「スマブラ」でな！

~~~~~

隣に座るトレーナーと、一緒に休みを過ごして、肩が触れ合うほどの近さで一緒に競い合っている。

こんなにも幸せなことはないとボク——トウカイテイオーは思う。

トレーナーとの並走で感じた幸せの方が勝るけど、今感じている幸せも嬉しいことだ。

トレーナーはすごい人だったことは、もう、言われなくても分かっている。

カイチョーみたいにいろんな人達に慕われていて、カイチョーみたいにすごく速い。

トレーナーのアルバムを見せてもらったなら一冊だけでもたくさんの人が写っていて、ボクとのトレーニングでは簡単に並走して見せた。

他にもいろんなことを知るほど、トレーナーがボクとは違う世界に生きていたんだっていうことが分かってしまう。

そんな時は、いつも寂しくなった。

理由は分からない。

でも、なんでか寂しくなったんだ。

最初の頃は、ボクをスカウトしてきた他のトレーナーと一緒にだと思っていた。

だって、ボクの走りを見て素直に褒めてくれたんだもん。

他の人もそうだったし、その時のボクはトレーナーのことをその他大勢の一人だとは思っていなかったんだ。

それが変わったのは、カイチョーとの一対一でレースをした後だっけ？

~~~~~

「はあっ、はあっ……いー はあ……っ」

カイチヨーとのレースで負けちゃった後、学園の近くにある公園で走っていたボクは、胸の内側がずっとイガイガした感覚を持っていた。それを晴らしたいから無茶苦茶に走り続けていたんだけど、結局、イガイガした感じは消えなかったんだ。

イガイガした感じの他にも、走り過ぎた所為で胸も苦しいし、足も痛い。

天才のボクは無茶をしているのがすぐに分かったんだ。

でも、イガイガした感じはそんなものよりも強く主張してくる。

「おい君、こんな時間まで何してるんだ？」

そんな時に声を掛けてきたのが、トレーナーだった。

トレーナーのことは他のトレーナーと違って、直ぐに見分けがつく。

だって、他のトレーナー達はスーツを着てたのに、トレーナーだけジャージなんだもん。

スーツが嫌いなのかな？ って思ったりした。

でもそれだけで、それ以外の感想はわかかなかった。

「あ、キミ……。んー、今おしやべりしたい気分じゃないんだ。じゃあね。……っ!？」

「ちよ!？」

いつもなら、フアンサービスっていう風におしやべりをしてたんだけど、胸のイガイガが取れないボクはまたすぐに駆けだそうとした。

だけど、足から力が抜けて倒れ込んでしまった。

でも、トレーナーが地面に当たる前に支えてくれる。

支えてくれた腕は、男の人らしくゴツゴツしてた。

「君！ 流石に無茶のし過ぎだ！ それ以上やると体が壊れるぞ！」  
「ふんっ……こんなのたいしたことないよ。ボクはランニングに戻るから、あっち行って！」

「アホか！ 何が大したことないだよ！ 足が震えてんぞ！」  
心配して声を掛けてくるトレーナーを冷たく突き放す。

でも、ボクの足はトレーナーの言う通りに震えていて、もう無理だっていうことを知らせてくる。

だけど、トレーナーの心配も胸のイガイガが気持ち悪くさせてきて、つい怒鳴っちゃったんだ。

「——うるさいなあ、偉そーに！ どいてよ!! まだボクのトレーナーでもなんでもなくせにっ!!」

ここまで言ったら、流石のトレーナーも引くんだらうってミジクだったボクはそう思ってた。

でも……

「退くわけないだろっ!! いい加減にしろっ!!」  
「ひう……」

トレーナーは僕よりも強く怒鳴り返してきた。

思わず怯えちゃったボクは、泣きながらトレーナーを見上げることしかできなかつたんだ。

それからしばらくトレーナーに背中をさすられながら泣いていたボクは、落ち着いてくるとトレーナーに胸がイガイガしていることを話してみた。

それを黙って聞いてくれたトレーナーは、しばらく考え込んだと思うと、口を開いて答えを言ってくる。

「本当なら、君に答えを提示するのは早すぎると思ったんだが……直球で行こう。君は……トウカイテイオーは未だ人としても高みを目指す者としてもひよっこだ」

「……………」

それを黙って聞いているボクは、少しだけ胸のイガイガが強くなった気がした。

思わず、トレーナーの顔を見ないために俯いちゃう。

「この間のレースの前にあった練習というか、君が俺をテストと称して見極めると言つて、様々な練習をしていた時にシンボリルドルフ君が来ただろう？ 君が走るタイムよりも早く走り抜けたことに何かしらの感想を待たないかということも聞かれただろう？ あの時に言われたんだよ。『君は、先ほどのテイオーの様子をどう思った？』つてな」

「……カイチヨーが……？」

「そうだ。そんな問いかけに対し、俺は、『もつたいない』つて言ったんだよ」

「もつたいない……」

トレーナーがカイチヨーと話していたことへの羨ましさより、その話していた内容の方が気になった。

「もつたいない」

なんでか分からないけど、胸のイガイガが強くなった気がする。

気持ち悪い感覚に胸を抑えるボクを見つめながら、トレーナーは話を続けていく。

「君は高みを目指すのに、あのシンボリルドルフを絶対に敵わない存在として無意識に認めてしまっている。『あの人はすごい！ ボク程度敵わなくて当然なんだ！ 勝てなくたって仕方ないよね！』……そう無意識に思ってしまうと、体にはリミッターがつく。競争の世界ではこれは致命的だ。相手が絶対的に強いからという理由で競走の舞台に上がろうとしない。はつきり言つて、バカのことだ」

「……………」

厳しい言い方に、体がこわばってくる。

「そこが君の欠点だ。競争の世界でどんな相手だろうとそれこそあのシンボリルドルフにすら勝ちたいと思える飢えにも似た感情を持ってない。一番になりたいという野心があつても、相手が絶対であるならば悔しさすら抱かない。悔しさが抱けないなら、成長すらない。だからこそ、俺は『もつたいない』と彼女に返したんだ。テイオー。君はそう言つたところが足りないんだよ」

「そんなこと言われても……」

トレーナーのカクシンをついた言葉に目線を逸らして、答えることしかできない。

そんなボクの様子を見て、トレーナーは溜息を吐いたかと思うと、口を開いた。

「少し、昔話をしようか。バカみてえに走ることが好きな俺のことを」「キミの……？」

「ああ、俺は昔、異能力者っていう、スゲェ力を持った奴だったんだよ」トレーナーの口から紡がれるたくさんのブユウデンは、落ち込んでいたボクを励ますために話しているんだとこの時のミジユクなボクでも分かった。

トレーナーがトレーナーになる前は、今よりもずっと、それこそボク達ウマ娘よりも速かった。

そんなに足が速いトレーナーは、もちろん走るのが好きな人でもあった。

走ることだけじゃなく誰かを助けるのも好きなトレーナーは、世界のいろんなところを回っているんな人と関わり合い、仲間や友人、慕ってくれる人を増やしていく。

そんな日が続いていた時、大きいテロがあって、トレーナーはその時にケガをして引退しちゃったんだ。

走ることが好きだったトレーナーは、全力で走ることができなくなってしまった。

それからは、なにをしても生きる実感がわからない。

だけど……

「そんな時に、君達ウマ娘が走っている光景を見て、俺は今の仕事——トレーナーになることを決意したんだ」

「……でも、どうしてトレーナーになりたいと思ったの？ キミが走れるわけじゃないのに……」

トレーナーになった経緯を語るトレーナーに、疑問をぶつける。

走りたいと思ってたトレーナーはもう走れなくなったのに……

そんなことを思うボクに、トレーナーはニツと笑うと告げた。

「誰かに教えるっていう道を知ったんだ。『自分が一番』じゃなくても

誰かを自分の手で一番速いやつにする。それなら走れなくてもいいんだと思っただよ」

「……すごいなあキミは……ボクよりもすごいや……」

「ま、今まで担当の一人も持ったことはないんだけどな。優秀な子は先輩達が持つていくし、理想の高い俺はいつまでも穀潰し状態だ。ああーどこかに優秀な子はいないかなー」

「……クスツ、なにそれ」

素直に感心するボクに心の底から嬉しそうに笑うトレーナー。

胸のイガイガもいつの間にか消えていて、代わりに胸の奥から暖かいものがわいてきた。

そんなボクに対し、トレーナーは今思い出したみたいに「あっ！」と言うと、

「ところでテイオー。今聞くのもなんだが、こんだけ自己プロデュースしてきた俺をどう思ってる？」

「……何を言いたいのか、キミは？」

「言わせんなよ。俺を君のトレーナーにしてくれってことだよ」

「……なあんだ、そんなことか。でもいいの？ ボクはキミの言う通り、ミジユクなウマ娘だよ？」

トレーナーはこんな空気の中でも、普段通りの話し方でサラッとスカウトしてくる。

そんなトレーナーにボクは自虐を込めた言葉でトレーナーに返した。

「けどトレーナーは「そんなことか」と言っただけで気がした様子もなくボクの目を見て言ってくる。」

「それくらいどんとこいってなもんだ。未熟なウマ娘を伸ばしてやるのが、ットレーナー”っていう立場だろ？ そんなこと百も承知だ」

「……そうだったね。なら、これからよろしくね。トレーナー」

その日から、ボクはトレーナーの担当ウマ娘になったんだ。

~~~~~



「あく！　そこでアイテム使うのは反則でしょ！　あ！　スマツシユボールが！　ずるいよトレーナー！」

「フハハハハハ！　スマブラは愉快なパーティーゲームなんだよ！　卑怯もラツキヨもあるものか！　そして食らえ！　最後の切り札!!」

「ああー!?　ボクのピカチュウがーッ!?」

「ゲームセット！　ガツチャ！　楽しいデュエルだったぜ！」

そして、今に戻ってくる。

トレーナーとゲームをしているときに、トレーナーと出会った時のことに気を取られていると、いつの間にかピンチになっていたボクのピカチュウが、トレーナーのソニックに撃墜されて試合が終了したところになる。

トレーナーは威勢のいい掛け声と共に指先をこちらに向けてきて楽しそうに笑っていた。

「もう！　年下に勝たせてやるっていう考えはないのトレーナー！」  
「生憎のところ、俺はいつでも全力なんでね！　それはゲームであっても同じことだ！　それに、今回はアイテムによって撃墜されたのがほとんど。よって、アイテム有りにしたティオーの負けなのである！」

「だってだって！　アイテムなしのガチンコにしたら、絶対トレーナーが勝つじゃん！　しかも、そう言うときは大抵、テリーとかカズヤばかり選んでボクのピカチュウをボコボコにしてくるでしょ！」  
「勝てるキャラを選んで何が悪い！　それに、テリーは着地が弱く、カズヤは超接近戦主体！　そこを突けばいいじゃないか！」

「それを的確に潰してくるのがトレーナーじゃん！　テリーは浮かせてくれない！　カズヤは普通に強い！　どうやったら勝てるんだよお！」

「フハハハハハ！」

高笑いを上げるトレーナーの前で、頭を抱えるボク。

いつもこうだ。

どんなゲームで相手をしようとしても、トレーナーは僕をボコボコにしてくれる。

いくらなんでも大人げないと思ったからハンデをつけてもらうんだけど、それで勝っても意味がない。

だから頑張ってるんだけど、結局は勝てないまま。

ホントに悔しいけど、それ以上にトレーナーと一緒にいられることが嬉しいんだ。

ふと、頭に浮かんだことをトレーナーに聞いてみる。

「ねえトレーナー。なんでボクを担当にしたいと思ったの？」

「どうした急に？ 誰かになんか言われたのか？」

「ううん……ただ気になっただけだよ。トレーナーは最初の頃ボクをミジクって言うってて、それを押し上げるのがトレーナーの仕事ってことも言ってたけど、ボクよりもすごい子なんてたくさんいたんじゃないのかなあって思ってた」

「なんだ、そんなことか」

ボクの疑問に、何でもないかのように答えるトレーナーはそれこそ今日の夕ご飯を決める時のように告げた。

「俺はテイオーが気になったから、そんなテイオーのトレーナーになっただよ」

「……どういふこと？」

そう聞くとトレーナーは照れ臭そうに、

「まあ……言うなれば、〝一目惚れ〟ってやつかな？」

「……へ？」

「そのまんまだよ。テイオーの走りやいろんな表情を見ているうちに『この子は絶対に渡さない！』って思ってたさ。……テイオー？」

ほんのちよつとだけ期待してて予想外過ぎた言葉を言われて、ボクは思わず呆けた声を出す。

え？

一目惚れ？

誰が？

トレーナーが？

ボクに？

「きゆう……」

「ちょ!? テイオー!?」

顔から火が出そうな程熱くなっちゃったボクはそのままトレーナーの膝の上に倒れ込んでしまう。

トレーナーの焦った声が聞こえるけどそんなことより、トレーナーの言ったことの方が心の中で響き続けた。

一目惚れ……ってことは、トレーナーから告白されちゃった……だよね？

ボクはトレーナーが好きで、トレーナーはボクが好き……。

これが両思い……。

「……う、うわあああああ!!」

「今度は悶えだした!? どうしたテイオー!? 様子がおかしいぞ!」

ようやく頭が追い付いたボクは、トレーナーの膝の上でゴロンゴロンと転がりだす。

恥ずかしさと嬉しさが交互に襲い掛かってきて、顔と体が熱くて、もうしつちやかめつちやかになつてきた。

突然暴れ出したボクをトレーナーは焦りながら落ち着かせようとする。

「大丈夫か!」

ボクを覗き込んでくるトレーナーはボクだけを心配してくれている。

そこには混じりつ気のない心配だけがあった。

ボクを置いて他の人に助けを呼べばいいのに……。

これだから、ボクはこのトレーナーを好きになっちゃったんだ。

ふとした時に、甘い言葉をささやいてくる。

そして、どんな時でもボクだけを見てくれた。

こんなトレーナーだから、ボクはトレーナーのことをどうしようもなく好きになっちゃう。

ねえトレーナー。

ボクの気持ち、気づいてくれるのかな？

……そんなわけないよね。

トレーナーはボクのことを女の子としてじゃなくて、ウマ娘として好きなのはボクでも分かってるよ。

でも、いつまでもそんな気持ちでいられなんて思わないでよ。

ボクは、無敵のテイオー様だからね？

トレーナーとの間にある壁を全部乗り越えて、絶対にトレーナーの隣に寄り添ってやるんだ。

そのためには絶対にトレーナーの傍から離れないよ。

この三年間もトレセン学園を卒業しても。

ずっとずっと離れない。

だからこそ、

トレーナーの“絶対”はボクだ。

## 頑張り屋と走り屋

拝啓、親父とお袋。

元異能力者であり蒼い流星とか言われていた現一般中央トレセン学園所属のトレーナーであり、あなた方の不肖の息子である彼方翔です。

現在こちらでは、夏から秋への変わり目であり、猛暑が続いていた今までと比べて過ごしやすいような日々が続いておりますが、そちらはいかがお過ごしでしょうか？

俺は元気です。

あの時——二十年ほど前から、夜中に一人で出かけることをしてしまい良く心配させてしまいましたね。

それでも、誰かのためにと行動した俺の気持ちは間違っていないかったと思っております。

異能力者としての仕事は充実していて、多くの仲間、友人に恵まれていました。

この時間がずっと続けばなあ……なんて思いながら様々な依頼をこなしていく日々。

……その結果が、俺の足が破裂するという大怪我の報告。

突然告げられたことに、何も知らなかった……いえ、俺が教えなかった所為でひどく混乱したことでしよう。

今でも反省しています。

ですが、あなた方を巻き込みたくなかったという考えや、仕事で忙しかったということを経由にしたり、結局のところは俺のわがままです。

親父。

あなたがこれを俺の前で読んでいたら手紙を破らんばかりに怒髪天を衝き、「心配させたことに怒ってるんじゃない！ 何でも抱え込みすぎるな！ 親には迷惑をかけろ！ 子供ってのはそういうもの

だ！」と説教をするのでしよう。

それも何時間も。

お袋。

あなたは何も言わずに、俺を抱きしめて「よく頑張ったね」と褒めてくれるのでしよう。

俺が泣き出したとしたら、泣きやむまで頭を撫でてくれるのでしよう。

正直言つて今すぐ実家に帰ってから、あなた方に謝罪をしたいところですが、生憎のところ、俺には仕事があります。

トレーナーと言う夢のある若者を導く仕事です。

これに関してもあなた方に相談することなく決めてしまったことに負い目を感じています。

散々迷惑をかけ、心配をかけさせておいて、今度は誰かの将来を預かる仕事に就くことに関してもこの手紙にて謝罪させていただきま

す。

ごめんなさい。

今度の年末の際に、休暇を取って実家に向かい土下座をしようと思っ

思っています。

長くなってしまった前置きはさておき、本題に入ろうと思います。

俺は新しくトレーナーという職業に就いたのは前述しました。トレーナーという仕事の具体的な業務としては、「トレセン学園の体育教職員としてウマ娘のトレーニングやリハビリの指導、出走するレースの選定と手続きに従事する」というものです。

様々な資格が必要でしたが、そこはあなた方が産んでくれた優秀な頭脳。

時間はかかりましたが、今から五年前には必要な資格をすべて取り終え、新人トレーナーとしてのスタートを切った俺ですが、五年経って担当したことがあるのは、現在担当している子たった一人だけ。

収入に関しましては、トレーナーとしての業務の他にもやるべきことがあったため食い扶持には困ってはいませんが、周りにどう思われているか考えると少しだけ死にそうでした。



何故ならば、最近はトレーニングばかりしていたので、流石にこのままトレーニングを続けるのはなあ……と思ったから、今日と明日は休みにしているのだ。

んで、せっかくの休みなんだから一日ダラダラするのもあれだから、一緒に出掛けようと誘ったところ、担当ウマ娘の子は電話の向こう側で慌てながらも了承してくれたのである。

そうして始まった、休日を利用した外出。

一先ず商店街辺りに移動しようと川沿いの道を進んでいた矢先に、担当の子がドジをして躓き、転びそうになっていたので咄嗟に手を掴んだところ、一緒に巻き込まれるようにして転んでしまったのである。

その際、担当の子が土手側に立っていたため、俺は土手に向かって引つ張られる形となり、そのまま土手を転がり落ちてしまったのだ。

結果は、全身に草が引つ付いた状態でのヤムチャポーズ。

お出かけ開始早々に、アンラツキーなことが起こるドジっぷりだった。

「ト、トレーナーさあん……だ、大丈夫ですかあ……！」

「だ、大丈夫だ、ド、ドトウ……」

土手にヤムチャポーズで倒れている俺を心配して駆け降りてくる少女が一人。

彼女こそ、俺の担当ウマ娘であり、俺が土手に転がり落ちるほどのドジをした子であるウマ娘——「メイショウドトウ」だ。

そんな彼女は、結構な勢いで坂を駆け下りてくる。

おいおい……そんなに速く駆け下りて来たら……。

「へ？ わわわっ……!? ト、トレーナーさあん……！ た、助けてください……！」

案の定、川沿いの土手ということもあって、湿気を帯びていた草によつて足を滑らせたドトウは、俺と同じように坂を転がり落ちてくる。

俺以上に転がり落ちる勢いが大きいドトウの場合、このままだと、川にドボン！となってしまうだろう。



なら……。

「仕方ねえな！ ドトウ！ 俺に任せろ！」

「ふえっ!? わ、分かりましたあ！」

川に落ちる前に受け止める。

ヤムチャ状態から跳ね起きた俺は、ゴロゴロと転がり落ちてくるドトウの方を向いて構えた。

腰を落とし、地面に拳をつける。

言うなれば、相撲取りの構えをした状態で待ち構えているのだ。

そして、十秒と経たずに俺のところまで到達したドトウを力強く受け止めた。

「ふんー！」

「わひゃっ!?!」

ドスン！という音とともにドトウを受け止めることに成功した俺はドトウの様子を見る。

一見して、怪我は無さそうだが、転がり落ちた所為で全身に泥や草がついてしまっていた。

一応、トレセン学園までは近いのだが、汚れた状態で戻るのちよつとだけ周りの目が気になるな。

「つと、大丈夫かドトウ！ 怪我はないよな！」

「は、はいい……だ、大丈夫ですう……」

そんなことはさておき、腕の中にいるドトウは転がり落ちる際の回転が速すぎたようで、グルグルと目を回していた。

それでも、特に怪我はないようで一安心した俺は、ドトウの平衡感覚が戻るまでの間に土手を上り、一先ず様子を見ることにする。

数分して、「もう、大丈夫ですう……」と言ったドトウを地面に下ろし、髪に着いた草をある程度取ってあげた。

「ト、トレーナーさあん……す、すみませえん……」

「大丈夫だって。ドトウに怪我が無くてよかったよ。あ、こんなに汚れちゃって……」

「す、すみませえん……！ せつかくのお出かけでしたのい……こんなことになっちゃってえ……や、やっぱいい……私ってば、ダメで

ドジでグズな——ひゃんっ!？」

俺に何度も頭を下げてくるドトウは、つい、いつものようにネガティブになりかける。

だから、少し荒っぽい頭を撫でてから、フォローしてみた。

「大丈夫、大丈夫。確かににお出かけをして早々に全身泥で汚れちゃったけど、まだ取り返しは出来るさ!　むしろ、こんな初っ端で学園も近い場所でドジが起こったんなら、このあとは起こらないかもしれないんだぜドトウ!　俺の知り合いが言ってたんだよ、『この世は、マイナスとプラスで出来ている。良いことが起こればその反動として悪いことが起きる。その逆も然りだ』ってな。だから、めげずに行こう!」

「ト、トレーナーさん……!　はい……!　私、頑張ります……!」

俺の励ましが効いたのか、エイエイオー!と言わんばかりに腕を掲げたドトウは、学園に向かって歩き出す。

元気を取り戻したのはいいことなんだが、そんなに気合を入れすぎると……

ズルッ!

「ひよあぁ~~~~っ!？」

「言わんこつちやない!」

何故か道に落ちていたバナナの皮によって、足を滑らせたドトウはまた土手を転がり落ちていく。

ホントに大丈夫か……?」

~~~~~

「ず、すみませえん……ド、ドレーナーぎあん……っ!」

「あゝ、大丈夫だって」

「そ、それでもお……トレーナーさんの服が濡れちゃってえ……上着も貸してもらってえ……ぐすっ……」

「大丈夫だつてば。それより、ドトウの方は大丈夫か？」

私がドジをして迷惑をかけても、大丈夫の一言で返してくれる優しいトレーナーさん。

そんなトレーナーさんは、今私を背負ってくれている。

さつき、トレーナーさんから励まされて意気揚々と歩き出そうとした瞬間、偶然にも落ちていたバナナの皮を踏んでしまいまたしても土手に転げ落ちてしまいました。

それもただ土手に転げ落ちてしまうだけじゃなく、さつきはトレーナーさんが止めてくれたおかげで落ちなかつた川に落ちてしまったのです。

だから、私の全身はずぶ濡れ。

トレーナーさんが一緒に買ってくれたお気に入りの服も、泥で汚れて川に落ちて、見るも無残な姿となつてしまいました。

濡れた所為なのか、夏が過ぎ秋になってきた今の気温と風によって、凍えてしまい風邪をひきそうになってしまう。

でも、トレーナーさんが私の為に上着を貸してくれまして、更に、背負ってくれています。

トレーナーさんによって温められた上着と体は、冷えそうになっていた私にとつて、部屋に設置されていた暖房よりも温かく包み込んでくれました。

トレーナーさんは他の人と比べて体温が高い方として、冬場のカイロのように私を温めてくれる。

本当に暖かい……。

なんだか……眠く……。

ポカポカとした温かさに思わず欠伸が出てしまう。

「ふわあ……あ、す、すみません……！ トレーナーさんが温かくて、つい眠くなつてしまいました……！ め、迷惑ですよね……？」

「大丈夫つてば。しばらく寝ててもいいよ。特に気になるわけでもないし」

「そ、そうですか……で、では、お言葉に甘えまして……スウ……」

トレーナーさんに謝罪して迷惑かどうか聞いてみると、また大丈夫

と言ってくれました。

本当に、トレーナーさんは優しい……。

瞼を閉じて深呼吸をした私は、そんなに時間をかけずに眠りに落ちました。

~~~~~

「避けてえー!」

「へあつ!」

トレーナーさんと初めて会った時のことは、今でも覚えています。当時、尊敬するウマ娘であるオペラオーさんの机がガタガタしてゐるって聞いた私は、頑張つて直そうとしました。

でも、直そうとした際に力み過ぎちゃつて、机の脚を折ってしまったのです。

その時に慌てちゃつた私の手から脚が飛んでしまいました。

脚が飛んで行った先には、通りすがりのトレーナーさんが。

叫ぶことで危険を知らせることができましたが、叫んでなかったら初対面の方に危うくぶつけてしまうところでした。

また、誰かに迷惑をかけてしまったことに顔を青褪めさせた私は、何度も何度も謝りました。

「大丈夫だつて。わざとやつたわけじゃないんだろ? なら大丈夫さ」

「で、でもお……!」

「大丈夫だつて、それより……机の脚をどうするんだ?」

「——は、あ、脚! 机の、脚……! そうでした、わわわ、私、私私なんてことを……っ!」

「お、おい!」

トレーナーさんの制止する声を無視して、私は教室へと戻り、何とか直せないか試行錯誤しました。

でも……接着剤でくっつけようとすればベタベタになってしまい、紐で縛ろうとしても結局は縛れず、最終的にはもう修復不可能なほどにまで壊れてしまいました。

その後には、机の持ち主であるオペラオーさんが来て、なぜか撮影会が始まって……オペラオーさんが立ち去る際にこんなことを言ってくれたんです。

「種目別競技大会で戦おう」と。

私なんかより何十倍……いえ、何百倍もすごいオペラオーさんと、ダメでドジでグズな私が競おうだなんて……。

思わず立ったまま気絶してしまいました。

「だ、大丈夫か？　なんかオペラオー？　君に決闘みたいなもの申し込まれてただけど……」

「ええ、はい、大丈夫……えっ、おっ、オペオペ、オペラオーさんがわわわわ私を指名!?　私と激闘!?　ええーっ!!」

何故かずっと傍に居たトレーナーさんに告げられた言葉でやっと正気を取り戻した私は、その事の重大さに思いつき取り乱したのです。

その後は、取り乱している理由を聞いてきたトレーナーさんに訳を話し、今日のところはそれで解散となりました。

でも、私のドジっぷりはそれだけでは終わりませんでした。

翌日のオペラオーさんとの並走では、いきなり遅刻をしてしまい、ようやくレース場に着いたと思ったら履いてきたのがスリッパで……。

シューズを探しに戻ったら、いつもとは違う場所に置いてしまったからなかなか見つからず……。

ようやく見つけたと思ったら蹄鉄が取れてしまい、代わりのシューズを買いに行つて、ようやく準備ができた頃にはもう夜になってしまいました。

わ、私のバカア……!!

なんで肝心な時にいつも失敗ばかりい……!!

内心自己嫌悪で死んでしまいそうだった私とは違って、それでもオ

ペラオーさんは気高く笑い、失望することなく夜中であつても併走をしてくれました。

走っている時に見えたオペラオーさんの表情は、すごく楽しそうでした……。

並走している途中、こけてしまった私は今までの不手際を何とか挽回しようとしてきていた差し入れを渡しました。

でも、飲み物を渡せば、ホットコーヒーではなくホット醤油をだつたり、アロマを振りかけたタオルかと思えば、本当は激臭を纏った危険物になった代物で……。

更に、その激臭タオルの所為でオペラオーさんは卒倒してしまいました。

何をしてもだめ。

頑張ろうとしたら相手に迷惑をかけてしまう。

そんな自分が本当に嫌でした。

だから、そんな自分から変わろうとしてたくさん練習をしました。

「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ……！ 次はいい走りをするんだ……。もつと、オペラオーさんの役に立つんだ……。本番、いいレースにするんだ……。それで、私もいつか……！ ……………っ！ もう一本……！」

オペラオーさんを卒倒させてしまった後、レースを見てくださったトレーナーさんから逃げるように、私はトレセン学園の近くにある河原で走り込みをしていました。

ダメな私を変えるために、尊敬するオペラオーさんの為に……！

そして……いつも走るここなら、誰にも迷惑をかけることなく変われると思つて……。

「たあああああーっ！」

「い、いた………って、大丈——」

誰かの声が聞こえたのですが、それを無視して走りました。

その所為で罰が当たったのでしょうか、

「ひよああ〜っつ!？」

暗くてよく見えていなかった溝にはまってしまいました。

その後は、溝にはまって身動きが取れなくなってしまった私を、通りすがりの声を掛けてくれた親切な人——トレーナーさんが引き上げてくれました。

「危ないどころを……ありがとうごさいばじだ……ぐすつ……」

「どういたしまして。……大丈夫か？ 結構辛そうだけど……」

「はい……。慣れっこ、ですから……。はあ……」

自分のダメさ加減に思わずため息が出てしまう。

「……………。……………私は……なんで、こう……………」

思わず弱音を吐いてしまいそうだった私に、助けてくれたトレーナーさんは、頭をかきつつ、私の目をまっすぐ見て話し始めました。「君は頑張ってるよ。それもすごいって思うレベルだね」

「……………へ？」

トレーナーさんの口から飛び出した言葉に、私は思わず呆けた声を出す。

「そのまんまだよ。君はすごいさ。だって、頑張ろうとしているんだろ？ それも大分きついついていうのに今まさに続けていた。嫌なことがあっても逃げるのは表面上で、自分を変えようとするところからは逃げない。これだけでもすごいことさ」

「そ、そうですかあ……？」

トレーナーさんの言葉に思わず疑うような視線を向けてしまう。

でも、トレーナーさんはそんな私の視線に気づきながらも話を続けていきます。

「困難から逃げようとするのは生物としては当たり前だ。でも、向かおうとするのは簡単にできる事じゃない。誰だっぴやなことや、苦しい、辛いことから逃げたいもんだ。だけど、逃げていたら成長は出来ない。でも、どんなにくじけようとも、決して腐らず、前を向き続ける人はいる」

「……………」

トレーナーさんの力強い宣言に、息を呑む私。

私とは違うすごい人。

まるで……オペラオーさんみたい……。……。

「君だつてその一人だトトウ君。君は、尊敬している人を気絶させてしまうという嫌なことがあつても、へこたれず、自分を変えようと今も頑張っている。違うかい？」

「で、でも……私は、どんなに頑張つても変われないんですよ……」  
問いかけてくるトレーナーさんの顔を直視できずに、逸らしてしまつた私は、さつきと変わらない弱音を吐いてしまう。

でも……

「頑張っているじゃないか！ 自分を変えようとして！」

「ひゃ、ひゃい!？」

近づいてきたトレーナーさんが私の肩を掴み顔を寄せてくる。

ち、近いですう……! か、顔が、良すぎて、か、輝いて見えますう

……!

「あ、す、すまん！ 思わず熱くなっちゃつて……。……コホン、君は精一杯頑張っているよ。ここは変わらない。でも、変わった実感がないからそう思っているだけさ。誰だつて変わったことを実感できないと自分が嫌になるよ。それは俺にだつてある」

「……え？ あ、あなたにも、ですか……?」

トレーナーさんも私のように悩んだことがあると言うので、逸らしていた視線がトレーナーさんの方へ向く。

トレーナーさんは少し照れ臭そうに頬をかきながら、口を開いた。

「俺つてさ……トレセン学園に来て五年は経つんだけど、今まで担当ウマ娘の一人もとつたことが無いんだ」

「そ、そうなんですか……?」

「そ、トレーナーとしての知識はいつちよ前にあるっていうのに、一緒に高みを目指した子は一人もいない。当たり前といつちや当たり前のことか。何も実績がない新人よりも、ベテランを取つた方がいいつて言うのが常識だから、いつも売れ残りの総菜みたいにぽつんとレース場の端っこでボヤツとしているのが俺だよ……自分で言つて悲しくなってくるな……」

なんだか世知辛いことを話すトレーナーさんは、悲しいことでもあつたみたいにな、空を仰いでいました。



少しだけ、隣みの視線を向けてしまう。

でも、トレーナーさんはそんな視線を知らないと言わんばかりにまた語りだした。

「でも、俺はまだあきらめてねえんだ。何故なら、『この仕事をやりたいと思っっているから、どんなことがあってもあきらめたくはない』。そんな気持ちがあるから、俺は今でもこの仕事を辞めたいとは思っていない。君とは少し違うかもしれないが、俺はどんなことがあっても今の穀潰し状態からの脱却及び担当になった子との高みを目指す挑戦は諦めたいとは思えないのさ」

「……す、すごい……」

まるで太陽のようなトレーナーさんの言葉に感嘆とした声を上げることでできない私。

そんなトレーナーさんは、ニカツという擬音が付きそうな笑みを浮かべて、こう言いました。

「君は俺以上に頑張れる子だ。それはかなり頑張ってきた俺がそう思ったから、決してお世辞じゃないということを理解してくれ。それじゃ、君は練習を続けるんだろ？」

「は、はい……」

「なら、邪魔な俺は帰りますかねえ……」

トレーナーさんの問いかけに困惑しながらも、私は返事をする。

それを聞いたトレーナーさんは踵を返して帰ろうとしました。

手をひらひらと降りながら土手を上がろうとするトレーナーさんを見つめる私は、胸の中に何か熱いものを感じました。

なんでか分からないけど、何かを言わなければいけない気がする。その衝動と共に、私は去ろうとしたトレーナーさんに声をかけました。

「あ、あの……！ わ、私のトレーナーさんになってください……!!」  
「……え？」

これがトレーナーさんと私の担当契約を決めた始まりのことでした。

~~~~~

「ふわあ……ひよあつ?! ト、トレーナーさあん……だ、大丈夫ですかあ……!?!」

「大、丈夫だ……ド、トウ……」

目を覚ました私の視界に入ってきたのは、ずぶ濡れのトレーナーさんでした。

他にも、砂とか泥で汚れてしまった状態で、私の服のように見るも無残な姿をしています。

大丈夫って言っても説得力がありませんよお……!

「い、いったい、な、何があつたんですか……!?!」

「なあに……ちよつとばかし、躓いて、その先が、水たまりだったただけだ……」

「ほ、本当に大丈夫なんですか……!?! 足がふらふらしているんですけど……!?!」

明らかに、水たまりに落ちただけでは済まないような姿のトレーナーさんの背中から降りた私はトレーナーさんの状態を見ます。

秋に入って少し肌寒くなった時期ですから、ずぶ濡れのトレーナーさんはひどく体力を消耗しているはずです。

実際、足が震えていて、私を背負う際に支えていた腕は少し青くなっていました。

こんな時には……!

「えい……!?!」

「へ?」

抱きしめればいいって何かの本に書いていました……!

幸いなことに、私の体温はトレーナーさんによって温められていたことでポカポカとしています。

なら、寒くて凍えているトレーナーさんを温めることは出来るはず……!

「トレーナーさん……！ 死なないで下さい……！」

「ちよ!? ドトウ!? 本当に大丈夫だから!? ほら見て！ 周りの人  
見てるよ!?!」

「……え? ……………!!? わわわ、私、私私なんてことを……！」  
トレーナーさんの声掛けで正気に戻った私は、言われた通りに周り  
を見回します。

すると、道行く人達がこちらをじっと見ていました。

しかも眠っていたからどこにいるのか分からなかったのですが、こ  
こは町の中。

しばらく呆然としていた私はついに思い至ります。

私、いろんな人が見ている場所でトレーナーさんに抱き着くなんて  
ことをしちゃってた……!?!

「ひいやあああ……!?!」

「ちよ!? ドトウ待つて!? 勝手に動くと——」

「へぷっ!?!」

「言わんこつちやない!」

トレーナーさんの制止も聞かずに駆け出してしまった私は、またバ  
ナナの皮で足を滑らせてしまい、顔面から倒れてしまいました。

~~~~~

「ず、ずびばせん……！ ドレーナーざあん……！ うつ、ぐしゅ……  
!」

「はいはい、大丈夫だつて。ボロボロだった俺も反省しなきゃいけな  
いからな」

結局、また背負われることになった私は、トレーナーさんのおかげ  
でトレセン学園に戻ってくることができました。

でも、どっちもボロボロ。

お出かけができるような状態ではなくなっていました。

「ほんどうに……ずびばせんでじだ……!」

「大丈夫だつて。ほら鼻水このハンカチで拭いて」

「ありがとうございます……!」

鼻をかんで一息ついた私は、トレーナーさんに向き直ります。

「本当に、すみませんでしたトレーナーさん。今日はせつかくのお休みだというのに、こんなことになってしまつて……!」

「大丈夫だよドトウ。こんくらいで音を上げてちや、君の担当をやってないからね。取り敢えず、俺のハンカチ返してくれるかな?」

「は、はい……!」

トレーナーさんに言われてハンカチを返そうとしますが、この時ふと思いました。

またトレーナーさんに手を煩わせている……このままじゃ、いつまで経つても変わらない……!

思わず差し出したかけたハンカチを引き戻してしまいます。

「ドトウ……?」

「す、すみません……! でも、いつまでもトレーナーさんの手を煩わせてばかりじゃ、変わらないんです……! な、なので、このハンカチは私が洗つてきてもいいですか……?」

私の突然の行動に不思議そうに見ていたトレーナーさんですが、私の言葉を聞いて納得したように頷き、

「おう! 任せた!」

「……! は、はい……!」

私にハンカチを任せてくれました。

少しの喜びと共に、私は寮へと向かいました。

「そ、それでは……!」

「あ、ちよつと待つてくれドトウ」

早速、洗濯するために持ち帰ろうとした私をトレーナーさんが引き止めます。

や、やっぱり……返してくれて言うのでしょうか……?

「また明日、出かけような!」

「……! わ、分かりましたあ……! で、でもいいのでしょうか……!」

？ また迷惑をかけてしまうことになるかもしれませんし……」

でも、トレーナーさんはハンカチのことではなく、今日できなかったお出かけについて聞いてきました。

だけど、また迷惑をかけてしまうかもしれないと、弱気になった私を励ますようにトレーナーさんは、

「大丈夫だ！ その時は気合で何とかする！ あと、準備とかいろいろとしておくよ！」

そう言ってくれたトレーナーさんは、汚れた服を着替えにトレーナー寮へ戻っていきました。

『大丈夫』

その言葉が、私の中で響きます。

トレーナーさんは、どんな時でもそう言ってくれました。

私が迷惑をかけてしまった時も、私の所為で辛い目に合わせてしまった時も。

どんなことがあっても、トレーナーさんは『大丈夫』といって私を支え、励ましてくれます。

そんな言葉は、いつしか、私を支えてくれる言葉になりました。

そんなことがあっても『大丈夫』。

だから頑張ろう、と。

トレーナーさんには本当に感謝しています。

こんなダメな私を支えてくれるなんて……。

だからこそ、

「トレーナーさん……好きです」

遠くなっていく背中にもう声を掛けました。

今はこのままでもいい。

けど、いつかは……。

ねえ、トレーナーさん。

あなたのことを好きになってもいいですか？

## サイボーグと流星

やあテレビの前の皆！（唐突）

毎度おなじみ元世界最速の翔お兄さんだよ！

今僕はどこにいるでしよ〜か？

……………

正解はですねえ〜…………

とあるお宅の前をいま〜す！

いえーい！

「ふんぬう!!」

「マスター、どうかされましたか？」

なんか変な方向に思考が飛びそうになっていたので、頬を思いつきり引つ叩いて正気に戻す。

よし、落ち着いた。

それなら、本題に入ろう。

「なあ、ブルボン」

「はい」

俺は傍に立つ担当ウマ娘である “ミホノブルボン” に問いかける。

「ここって…………君の実家だよな？」

「そうですね？」

できれば嘘であって欲しかったことを、ブルボンは否定せず真っ直ぐに肯定した。

まるで「当たり前でしょ。何言ってるんだコイツ？」と言わんばかりの調子で。

思わず崩れ落ちてしまう。

「なんで、なんで生徒の実家に挨拶することになったんだよおおおとおおおお!!」

「落ち着いてくださいマスター」

「君は落ち着き過ぎだブルボンンンンンンンンン!!?」

「なんでだ……」

「なんで、生徒の実家に御挨拶をすることに……!」

「思い出せ……!　ここ最近に何があつたのかを……!」

~~~~~

「あゝ……疲れだ……」

「お疲れ様ですマスター」

「確か、今から三日前の出来事だ。」

「年末も近いからと仕事の量が今までと比べて多くなっている、そんな時期だったはず……」

「その時は、ブルボンも傍に居て、一緒に書類の整理を手伝ってくれていたはずだ。」

「そんな時に、俺はふと、こんなことを呟いたのであった。」

「もうすぐ年末か……親父とお袋に謝りに行かねえとなく……」

「……質問。マスターはご両親に謝罪するほどの失態を犯したのですか?」

「俺の呟きにブルボンが反応して問いかけてくる。」

「——そういや……ブルボンには言ったことなかったんだっけ?」

「そんなことを思い出した俺はブルボンに理由を言う。」

「ほら、俺って前は異能力者だったじゃん?　その異能力者として働いていたら大怪我しちゃって、やむを得ず引退したんだよ」

「……過去のデータログからそのような話をしたということ記録しています」

「んで、その後実家にも帰らずに、そのままトレーナーになったんだ」

「……マスター、重要な所が抜けています。それは結果であつて理由ではありません」

やっぱり、ブルボンは賢い。

俺が話題を煙に巻こうとしたら、すかさず核心をついてくる。

正直言つてあまり話したくないんだよなあ……

ま、それはブルボンにとつては関係ないことか。

「悪かったよ。だから無言で睨まないでくれるか？」

「睨んでなどいません。マスター、早く続きを話してください」

ブルボンに続きを促されて話を続ける。

「大怪我して引退した後、異能のこととか色々黙ってたからさ、親父達に申し訳ない気持ちでいっぱい、電話で話したことはあつたんだけど、実家には一度も帰んなくて、親父達と面面向かって話したのなんて今から十年近く前の一度つきりなんだよ」

そう、親父達に顔をあわせられないというか、謝らなきゃいけない理由の大半が異能力者だったころの無茶の数々。

それを親に黙って十数年間続けていたことなんだ。

はつきり言つて、怒られても仕方ないだろう。

それに……文字通りに死にかけることもあつたからな。

だけど、俺は怒られることが嫌なんじゃないんだ。

今更、どの面下げて親父達に会いに行けばいいのか分からねえのが俺の足を止めている理由なんだよ。

でも、それだけではなく……

「大怪我して心配させたのもそうだけど、今度は二人に黙ってトレーナーになっちまった」

そう、勝手にトレーナーになっちまったことだ。

ただでさえ、異能力者時代に死にかけの状態で人助けを続け、生死の境を彷徨つたことを心配させてるのに、今度は誰かの夢と一緒に背負うトレーナーって言う職業に「勝手」になっちまった。

「そこからは担当がいらないとはいえ、仕事も増え、家に帰つてる暇があるんだったら、仕事をしてなきゃいけない。一応、今までにも年末とかには謝りに行こうかなとか思ってたんだけど、俺が以前に、サブトレーナーとして所属していたチームって超名門だったからさ、実家に帰つてる暇はなかったんだよ」



これに関しては嘘が混じっている。  
行こうと思えばいつでも行けたんだよ。

でも、うじうじしてばっかの俺には親に合わせる顔が無かったんだ。

俺の言い訳とも言うべき理由を聞いたブルボンは納得したように頷き口を開く。

「なるほど……結論を言えば、マスターが『へタレ』な所為で、ご両親に合わせる顔が無いというわけですね」

「ぐはあっ!？」

その端正な顔を構成する口から発せられた言葉は、俺の心を抉るように鋭かった。

あまりの衝撃に、胸を抑えながら机に突っ伏してしまう。

「大丈夫ですかマスター？」

「ぐっ、だ、大丈夫だ……!」

何が起こってるのか分からないと言った表情のブルボン。

最初の頃に比べればずっといふんと情緒豊かになったとはいえ、こういうところはよく分かっていないようだ。

「まあ、へタレなのは否定できねえよ。実際この年になってまで親と顔を合わせるのが怖えと思ってるからな」

「ならば、早急にご両親と会われてはどうですか？」

「そうなんだけどさあ……」

ブルボンの勧めになおも洩る俺。

そんな俺にブルボンが言った。

「マスター。そう言うのであれば、私の予定に少しだけ付き合ってくださいませんか？」

「へ?」

「実は私も実家に帰省しなければなりませんので、その時にマスターもよろしければ同行を願いたいのです」

これが、ブルボンの実家に向かう原因となった発言だ。

~~~~~

いやいやいや……年末に生徒の実家に挨拶する？

これってあれですか？ ご両親へのご挨拶とか言うあれですよね？

できれば嘘であって欲しかったなあ……

おっと、何故だか胃が痛くなってきたぞ。

「な、なあブルボン？ 俺、お腹痛くなってきたから、先に行つといてくんない？」

ようやく思考が戻ってきた頃には、俺の口から情けない言い訳の言葉が出ていた。

いや、いくらなんでもそれはないだろ。

そんなことを思っていると、ブルボンが俺の腕を掴んで口を開く。

「大丈夫ですマスター。我が家にもトイレは存在します。トレセン学園のような最新式ではないとはいえ、使用には問題ありません」

「い、いやあ……流石に、挨拶の初手にトイレを借りるのは失礼なんじゃないかなあつて思うんだけど……」

「安心してください。私から両親に説明しますので」

そうですねチクショウ！

内心悪態を吐きながらも、覚悟を決めて問いかけた。

「ア、アハハ……逃がしてくれたりは？」

「逃がしません」

「ですよー……」

そうして俺は、ブルボンに引きずられながらブルボンの実家に御挨拶をしたのであった。

~~~~~

ブルボンと出会ったのは、トレセン学園近くにある商店街でのことだった。

その時の俺は担当を持っておらず、まあ……なんだ？ 穀潰しい……としか言いようがない状態だったんだ。

いや、選抜レースに寝坊したとかそんなことはしてねえからな？

ただ単純に、俺には運が巡ってこなかったんだよ。

それでも、近づくことすらできずに他の人に持ってかれていったのは痛かった。

まるで、俺にはその資格すらないのを突き突きつけるが如く、その壁は高い。

確かに俺は自分が走るということだけで言えばだれにも負けなかった。

でも、そんな奴から指導を受けて必ず速くなるという保証はない。

それに、ここは中央だ。

地方とはレベルが違う。

ネームバリューだけで決めたくはないのは誰だって同じだ。

トレーナーを決めることの重みといたら相当なもんだらう。

まさしく人生を賭けるのに等しいのだから。

そんなもんだから俺には担当の一人もついたことは無い。

「ふへえ……今年も収穫はないのかなあ……無いんだらうなあ……」

そう言いながらトレセン近くの商店街をぶらぶらしていた時だった。

「エラー発生。目標の座標にて、該当物件無し。端末のGPS機能にも、エラー発生。バッドステータス『万事休す』であると判断」

初めてブルボンに出会ったのは。

出会った時に感じたのは、機械っぽいなあ……という感想だった。なんか話し方が現役時代のサポートAIみたいな話し方をしていたからかな。

そして、感じたのはそれだけじゃなかった。

その時の俺は不思議なことにブルボンに目を奪われていたんだ。

この感覚は今まで一度もなかった。  
それこそ、今のトウインクルシリーズで名を馳せる数々のウマ娘達  
と出会ってきた、のにだ。

シンボリルドルフ。

マルゼンスキー。

ナリタブライアン。

ミスターシービー。

その他多数のウマ娘達。

そんな彼女達と顔を合わせてきたのに、この感覚はただの一回とし  
て無かったんだ。

後になって思う。

これは運命だったんだってな。

それからはホントにいろんなことがあつて俺とブルボンは担当の  
関係に落ち着いた。

で、今はブルボンの実家に挨拶、と。

どうしてこうなったんだろうな……。

~~~~~

私——ミホノブルボンは他のウマ娘達と比べて感情が希薄だと自  
負しています。

ですが、そんな私でも感情を強く出せる相手があります。

それが私のトレーナー——マスターです。

マスターと初めて出会ったのは、新しくできたトレーニング用品店  
へ向かっている途中、機械を使用しようものなら壊してしまう、機械  
音痴を軽く通り過ぎててもはや才能と言ってもいい私の所為により、商  
店街で迷っていた時でした。

「……その君、大丈夫か？」

その時に声を掛けてくれたのが、今のマスター——彼方翔さんで

す。

彼方さんは私のようなウマ娘でも、名前だけならば知っているようなトレセン学園の有名人でした。

曰く、俗に二次元の世界でしか見ないような超能力を駆使して戦う超人「異能力者」という人だった。

曰く、そんな異能力者達の中でも一番足が速かった。

曰く、十年前のテロの際に多くの人命を守った英雄。

曰く、トレセン学園にスピード合格した天才。

曰く、その足は治療不可能と言われたケガから奇跡の復活を遂げ、現役時代ほどの速さではないが未だ衰え知らずの健脚。

曰く、ウマ娘と並走どころか、トウインクルシリーズで活躍するウマ娘であつても生半可な仕上がりだと振り切られるほどの快速。

曰く、曰く、曰く、曰く、……。

そんな空想としか思えないほどの実績を持つ彼方さん。

彼と初めて出会った時の私は、「ある目標」以外については無関心だったため特に当たり障りのない会話をして別れました。

それもそのはず。

その時の彼方さんと私は赤の他人。

トレーナーと担当ウマ娘という関係でもなければ、よく話すような友人でもない。

そして、既に私にはトレーナーがいました。

ならば、関係が深くなるということもないだろう、そう思っていました。

しかし、そんな考えは想定していなかった出来事によって覆ります。

彼方さんと再会したのは選抜レース後の自主トレーニングの時でした。

私の夢——クラシック三冠達成のために行っていた夜間のトレーニングの最中、あまりの無茶に倒れてしまった時のことです。

「おいーなにやっつてんだ君ー！」

どこか聞き覚えのある声が出たかと思えば、誰かが私の体を支えて

くれたのです。

うつすらと目を開ければ、そこには道を教えてくれたトレーナー——彼方さんが私を心配するかのように見え込んでいる。

背中には回された腕の感覚があり、それらから私は支えられていると判断しました。

そんなことを考えている間にも、彼方さんは背負っていたバックから未開封の飲料水を取り出して、私に少しずつ飲ませていく。

それからしばらくして、自力で立ち上がれるほどまでに回復した私は彼方さんに告げました。

「行動可能な水準まで疲労が回復。すぐにでもトレーニング再開可能。ありがとうございます。あなたの処置がなければトレーニングに遅れが生じてしまう可能性があります」

「いや、人として当たり前前のごときをただただよ……って、おい！ どこ行くんだ！」

助けてくれたことに感謝を告げ、さして間を置かずトレーニングに戻ろうとした私を彼方さんが呼び止める。

「無茶は厳禁だ！ それに、倒れるってのは『もう限界』だっていうのを知らせる合図だ！ それ以上やったら体が壊れるぞ！」

「……心配は無用です。この程度のことなら幼少期のころから繰り返していますので」

彼方さんの心配にいつものように返す私。

そんな私を見つめる彼方さんはしばらく私の目をまっすぐ見たかと思うと、しばらくして、あきらめたのか頭痛をこらえるかのように頭を抱えました。

「……俺の聞き間違いじゃなければ、君は3000mっていう長距離を走ることを想定してトレーニングをやっていた。おそらく、『菊花賞』当たりの距離を想定してるんだろう。だけど、君の適正は一見した限りじゃ『スプリンター』だと思ってるんだが……」

「そうです。私は目標レースに『菊花賞』を組み込んでいます。そして、スプリンターに適性があることも」

「……短距離しか走れないのか？」

「スタミナの問題でしたら、努力によって解決できると想定しています」

こちらを心配するような視線のまま、彼方さんはこちらに質問を投げかけてくる。

その質問をまるで聞く気がないかのように返していく私を見て、彼方さんは一度大きくため息をついたかと思うと、こう言いました。

「……なら、聞かせてくれよ。なんで、君がそこまで長距離にこだわるのかを……」

短距離しか走れない私が長距離を走る理由。

それは昔から変わりません。

「……私は『クラシック三冠』達成を目標にしています」

そして私は語っていく。

始まりは幼少期。

三冠ウマ娘が走るレースを見たことで、その願いを抱きました。

今思い返せば、子供ながらに半ば無謀な願いだったと思います。

様々なウマ娘たちが挑み、たつた一人しかその座に就くことができない。

そんな高い壁に私は『憧れ』を抱きました。

『お、お父さん、私……私、その……三冠ウマ娘になりたいです』

幼少期より意思が希薄であった私が、生まれて初めて『憧れ』を抱いたのです。

当時、付き添ってくれていた無骨な父が驚いたような顔をしたかと思えば、喜んだような顔となり私の頭をなでながら次のことを言ってくれました。

『……！……そうか。そうか、そうか。ブルボンは、三冠ウマ娘になりたいか』

そうして、私の願いである『クラシック三冠』は定まったのです。

「これが私が長距離にこだわる理由です」

「……………」

私の願いを聞き終えた彼方さんは、難しいことを考えるかのように顔をしかめたかと思うと、質問を投げかけてきます。

「長距離を走る理由は分かった。そこまで長距離……というか、三冠にかける願いも分かった……だけど、聞いてないことがある」「なんですか?」

「適性を無理に引き延ばそうと倒れるほど過度なトレーニング。このことを君のトレーナーは了承しているのか? ということだ」

「……いいえ」

「だろうな……」

納得しながらもまた問題が出てきたことに頭を抱える彼方さん。

私の自主トレーニングは、トレーナー……マスターに許可をもらっておりません。

もちろん、長距離のトレーニングも。

このことが知られてしまえば、担当契約も切られてしまうでしょう。

これまでの数々のルール違反を考えれば当たり前のことだ。

マスターは私を短距離路線で進めようとしている。

確かに、私は短距離に関して言えば相当な適性を持っているでしょう。

ですが、私はクラシック三冠の願いをあきらめきれません。

だからこそ、こうしてマスターに許可を取らずに自主トレーニングをしているのです。

そんな考えが私とマスターにあるということを彼方さんに話すと、彼は問いかけてくる。

「……君は三冠をあきらめらるる気はないし、これからもトレーニングは続けるんだろ?」

「ええ、それが私の願いですから」

私は、確固たる意志を持って返す。

そんな私に彼方さんは提案をしました。

「じゃあさ、このことは内緒にするから俺がトレーニングに口出し……アドバイスを送ってもいいか?」

私の自主トレーニングを黙っている代わりに、私にトレーニングのアドバイスを送る。



確かに、自分だけではわからないことを知れるのは、私にとって非常に好都合であり、三冠達成のために有意義なものになるでしょう。しかし、

「……なぜですか？ 私はあなたの担当ウマ娘ではありません。そこまでするのには何か理由があるのでしょうか？」

私と彼は、担当契約を結んでおらず、その関係は一言で表すならば『赤の他人』というものだろう。

なぜそこまで肩入れしてくるのか当時の私には理解できませんでした。

そんな私に、彼方さんは告げます。

「なあくに、ちよつとばかし諦めの悪い子の手助けをしてやるだけだよ。それも、梃子でも動かないそれはそれは問題児と呼ぶほかない子にね？」

「……わかりました。三冠達成のためにはあなたの申し出を受けるのが最善だと想定。申し出を受けます。これからよろしくお願いします。『サブマスター』」

「よろしい。んじや、今日は休むこと。明日からは結構ビシバシ行くからな？」

「覚悟のうちです」

そうして始まった彼方さんとの秘密の特訓。

その効果は顕著に表れ、次第に長い距離を走れるようになってきました。

ですが……

「君が、ミホノブルボンに勝手に長距離の練習をつけていたトレーナーか」

「あくらら……」

その秘密も長くは続きませんでした。

マスターにばれてしまったからです。

「マスター、夜間の自主トレーニングは自己判断で開始したもので。つまりこの方は、関係ありません」

私の事情に巻き込んではいけないと、つたないながら弁護をしま

す。

「毎夜居合わせていて、関係がないわけあるか。おおかた、彼女に同情してトレーニングを見ていたんだろう」

「同情してたわけじゃないんですがねえ……」

しかし、そんな発言すら聞いてはくれませんでした。

「三冠の話は私も何度も話を聞いた。だが、リスクがあることはさせられない。トレーナーの君なら理解できるはずだ」

リスクがあるからさせられない。

それは理解のできることです。

ですが、理解ができるからと言って納得ができるわけではありません。ん。

「しかし、私の学園の入学目的は三冠達成のみ。目標変更は受け付けることが出来ません」

私が折れる気などないということを理解したマスターは深いため息をついたかと思うと、こう言いました。

「……そこまで言うのなら、もう一度だけ適性を見よう。『菊花賞』の3000m、今すぐ走ってみなさい」

「ちょ!? いくらなんでも急すぎませんか!? まだブルボン君の体は完全には出来上がっていません! あと半年、いや、せめて3か月!」

「なに、目標を掲げるといっているのであれば少しだけでも可能性を見せてもらわなければならないのでね」

「それでも——!」

「了解しました」

「ブルボン君!」

マスターの言葉に彼方さんが取り止めさせようとはしますが、私はその言葉を受けました。

結果は、2000mを超えたあたりから失速し、ゴールにつく頃には歩くのもやっとの状態でした。

彼方さんに支えられ、息も絶え絶えの私にマスターは告げます。

「もう諦めてくれ。出来ないことをしようとするな。君に、長い距離は向いていないんだ」

いつそすがすがしいほどに残酷で現実的な、そして、私の夢を叩き落そうとする言葉。

そんなマスターに、彼方さんは言った。

「……もうちょい待ってやれないんですかね先輩？ 確かに彼女は短距離に向いている。そして、三冠を目指すには向いていない。その一番の原因はスタミナのなさ。最初、彼女が三冠を目指しているって聞いた時の俺も『んな無茶な』と思いましたよ」

「……今の君の眼はそんなことを言っていないようだが？」

そうマスターが言う彼方さんの目には、ぎらぎらとした闘争心の色が灯っていました。

「あつたり前つすよ。誰だって夢は諦めたくない。それこそ、輝く太陽みたいに綺麗で高いところにある夢に向かっていくんでしょ。でも、夢を見続けていたらいつの間にか足場がなくなつて真つ逆さまだ。それに対し、先輩は現実的に彼女を走り続けられるウマ娘にしようとしてる。そんなことは穀潰しの俺でも理解はできますよ」

そう言葉を続ける彼方さんは、ふと自身の足を擦っていました。

まるで、その夢の果てに失ったものを思い起こすかのように。

「……けどっすね」

そう言葉を切ると、私のことをやさしく見つめてきたのです。

その視線の暖かさは、まるで父のようでした。

彼方さんは、その視線を動かしてマスターに向けるとまた先ほどのようなぎらぎらとした視線に戻ります。

そして、言葉を継げたのです。

「夢つてのは叶えるためにあるんですよ」

「……！」

その言葉に思わず息をのみました。

「無理？ 無茶？ 無謀？ そんなのはやってみないとわかんないんですよ。今この場で挑戦して失敗したから諦める？ まだ本番までにはかなりの時間があるんです。練習はだめでも本番に結果を出せばいいんじゃないですか。それに……」

「彼女は『やれる』とっています」  
「っ！」

彼方さんの言葉は私の心に大きく響いてきます。

今まで、それこそクラスメイトに言われている『サイボーグ』というあだ名のように機械的だった私にその言葉は甘い毒のようでした。

「……君の言葉にも理解ができる箇所はあった。けど、『納得』ができるわけではない。それに君は部外者だ。君の意見はあくまで参考程度にしかならない。第一なのは彼女の意思だ。ブルボン。君はどうかね？」

「私は……」

彼方さんの言葉に呆然としていた私にマスターは問いかけてきます。  
「君はどうしたいのか、と。」

しかし、

「……三冠達成だけは、変更不可能です。……申し訳ありません。

……お願いします、マスター」

私の硬い意思を理解したのか、マスターは一度大きくため息をつく  
とこう言いました。

「……そこまで意志が固いのなら、好きにきなさい。その代わりに、私との契約は今日限りで終了だ」

「……………。……承知しました」

「……君がそんなに愚かだったとは。失望したよ、ブルボン」

そうして、マスターはその場を後にしました。

「……………」

「……大丈夫か？」

そう聞いてくる彼方さんは、少し申し訳なさそうだった。

「……マスターの喪失により、『戸惑い』が発生中。事実として私は夜間トレーニングを重ねてもなお、まともに3000mを走りきる事が出来ませんでした。……三冠達成は譲れません。しかし私の選択は本当に正しいのでしょうか……」

「間違ってるわけないでしょ」

「！」

思わず弱音を吐いてしまう私に彼方さんは間違ってるなと告げました。

「あの人みたいな人が何人いようと、俺は肯定してやるさ。君の夢を」

「……………！」

「だって、諦めたくないんだろ？ なら成し遂げて見せようぜ。クラシック三冠。今度は俺も一緒にやるから」

「一緒に……………」

「そう。夢をかなえようとしている若者にはさ、絶対に諦めて欲しくないんだよ」

そう言ってくる彼方さんに、私は懐かしい感覚を覚えました。

それは私のお父さん。

私がトレセン学園に来る前に指導を受けていた人と同じ感覚でした。

「……………ミホノブルボン君？」

「——ラップタイム走法を私にカスタマイズしたのはあなたであり、1600mの記録の伸びは、あなたの手腕によるもの」

沈黙していた私を心配して、声をかけてきた彼方さんに私は告げていきます。

「私は今確かに、あなたとならあるいはと感じています」

「！ ってことは——」

「ええ、つまり、これからどうぞよろしくお願いします。……………マスター」

こうして、私は彼方さん……………マスターと担当契約を結んだのでした。

~~~~~

「あの〜彼方さん？ そんなに固くならなくてもいいんですよ？」

「い、いえ！ 生徒のご両親方の前となれば、姿勢を崩すのはどうかと思ひまして！」

「大丈夫ですよ。そんなに気を張らず、実家だと思つてくださいね。はい、お茶です」

「ありがとうございます……あちち……」

マスターはすごい人です。

無理だと言われた、三冠を達成させたのですから。

そして、マスターはお父さんとはまた違った優しさで私と共にあつてくれました。

そのうちに芽生えてきたこの感情……。

これを私は『恋』だと認識します。

でも、マスターは私の気持ちに気づいてはくれません。

だから、こうして私の実家に連れてくるという手段をとつたのです。

こうすれば、否が応でも私のことを意識しなければなりませんから。

そして、いつかは……

「ところで……彼方さんは、ブルボンのことをどう思つてらっしゃるのでしょうか？」

「!? ブホツ!? ゲホツ、ゴホツ!」

「お、お母さん!」

お母さんがマスターに聞いたことが衝撃的過ぎて、思わず思考を打ち切つて声を上げます。

「あら？ 大丈夫ですか彼方さん？」

相も変わらず、穏やかな声色でマスターの状態を気にかけるお母さん。

マスターもいきなりのことにむせながらも、だんだんと落ち着いてきました。

しかし……

「え、ええ、大丈夫です。そ、それよりもさっきの言葉はどういう意味

なのでしょうか……?」

「それはもちろん“好き”なのか? ということですよ。あ、likeのほうではなくloveのほうですよ?」

「ブハアツ!」

「お父さん!」

今度はお父さんから援護が入ってきます。

またもお茶を吹き出すマスター。

もうマスターは満身創痍でした。

「あ、やべっ、鼻にお茶がつ……!」

「マ、マスター!」

「おっとつと……。安静になさってください彼方さん。こちらに空き部屋があるので」

そう言つて、お父さんがマスターをどこかへ……そこは私の部屋です!?

止める間もなく、マスターとお父さんは私の部屋に消えていきました。

呆然としていると、お母さんが私の横にやってきて笑顔でこんなことを聞いてきます。

「で、彼方さんとはどこまで行つたのかしら?」

「ど、どこまでとは……」

「それはもうデートとかしたの? とか、キスはしたの? とか。あ、もしかしてまだ付き合つてすらいないのかしら?」

「つき……!」

帰つて来て早々に何を聞いてくるんですか!?

「あら? まだなのかしら? テレビに映つてるときはすっごい仲良くしてたのに……ほら、これとか」

「ななな……!」

お母さんの手には、私とマスターが遊園地にて手を繋ぎあっている写真がのせられた雑誌が握られていました。

なんで撮られてるんですか!?

「あなたね……彼方さんとあなたの関係なんてバレバレなのよ。この

記事みたいだね」

「うつ……、で、ですが、マスターは私にそんな素振りなどしてくれませんか……」

「だからこそ、この冬休みを利用してくつつけるように頑張るのよ。私たちも手伝ってあげるから。それとも何？ あの人がとられてもいいの？」

「！、それは……」

お母さんの言葉に思わず黙ってしまう。

確かに、マスターを慕っている子は学園にも多いと聞いています。それに、異能力者だったころの知り合いにもそういう人がいるということも……

もし、そんな人たちにマスターがとられるのは……

「い、嫌です……！ マスターがとられるのは……！」

「なら、今日からでもいいから頑張るのよ。私たちも全力でサポートするわね。あ、孫は遅くてもいいわよ」

「孫っ!？」

「ほらほら、顔を赤くしてる場合じゃないでしょ。早く彼方さんの所へ行つてらっしゃい」

顔がゆでられてように熱いままお母さんに背中を押されて、マスターが連れていかれた私の部屋の前に行きます。

もう心臓は早鐘を打つように鳴っていて、先ほどまでの計画なんてこれっぽっちも残っていませんでした。

そんな時に、部屋からお父さんが出てきて、すれ違いざまに言ってきました。

「応援してるぞ」

「！、」

その言葉に意を決して、扉を開けて中に入りました。

先ほど、計画なんてこれっぽっちも残っていないと言いましたが、一つだけ残っていることがあります。

「好きです」

そう、伝えることでした。



今のマスターは、うなされてこの言葉を聞き取れていないで  
しょうが、いつかは告げて見せます。  
それが、私の新しい願いですから。

番外編 掲示板 【二人目の】ウマ娘のおじさん二号  
こと彼方レジェンドを語るスレ【レジェンド】

1：名無しのトレーナー

とりあえず立てた

竹レジェンドに次ぐ競馬界のレジェンド、彼方レジェンドのシャイゲームズがリリースしたアプリ「ウマ娘プリティーダービー」実装(？)について語るスレだ  
だれか話題をくれ

2：名無しのトレーナー

ぬわあああん！

石が足りないもおおおおん！

3：名無しのトレーナー

3%とか絶対嘘やろ!?

そんなんだつたら100連回せば三枚は出るはずだろ!?

4：名無しのトレーナー

ゆうてシャイゲやし

こんなもんと言えはこんなもんだろう

5：名無しのトレーナー

シラオキさまに祈るのです！

6：名無しのトレーナー

ごめんなフク……

俺、シラオキ教やめるわ……

7：名無しのトレーナー

>>>6サアン！ オンドウルルラギツタンディスプレイスカ!?

8：名無しのトレーナー

ゲゲゲー！

9：名無しのトレーナー

あはははは！

石が、石が消えていく！

10：名無しのトレーナー

阿鼻叫喚過ぎるだろ

11：名無しのトレーナー

軽い気持ちで覗いてみたら何この地獄

12：名無しのトレーナー

いつものことだろ

13：名無しのトレーナー

キタちゃんとはまではいかないまでも、それでもぶっ壊れ性能なのが  
悪い

14：名無しのトレーナー

生半可な性能してたらファンの人にたたかれちゃうからね  
それにしても性能がおかしいけどな！

15：名無しのトレーナー

え？

そこまでおかしいのか？

16：名無しのトレーナー  
知らないのか>>15!?

17：名無しのトレーナー  
まじで？

リリースされてから結構な時間が経ってるのにまだわからない人とかいるのか……

18：名無しのトレーナー  
いや、新人さんかもしれないし……

19：名無しのトレーナー  
歓迎しよう！ 盛大にな！

20：名無しのトレーナー  
んで、こういうところがぶっ壊れなんだっけ？

21：名無しのトレーナー  
どこのサイトでは確か……

・汎用（絞るとしたら逃げ）金スキル「ゼロヨンダッシュ」が習得可能

・トレーニングの際にヒントレベルを上げてくれる

・失敗率軽減とやる気upイベを持ったため育成が安定しやすい

・トレーニング効果アツプを早い段階で手に入れられる（無凸でも5%）

・友情トレーニング／アオハル爆発の際のステータス上昇に補正がかかる

って載ってたんだが……

22：名無しのトレーナー

詳しく知れば知るほどわけわからん性能してるな

23：名無しのトレーナー

>>友情トレーニング／アオハル爆発の際のステータス上昇に補正がかかる

→これが壊れてる原因の大半だと思う

24：名無しのトレーナー

ほんそれ

25：名無しのトレーナー

30%プラスだっけ？

26：名無しのトレーナー

友情トレーニングなら40のトレーニングが52に

アオハル爆発なら50%の補正がかかるからな

27：名無しのトレーナー

いやあ……彼方レジエンドのおかげでSとまではいかないけどA+までなら適当にやっても安定して仕上げられるようになったからなあ……

ほんまにレジエンド様様ですわ

28：名無しのトレーナー

アオハルに関しては運任せだけど、ハマったら脳汁が出そうになるからね

29：名無しのトレーナー

3連続アオハル爆発が同じスタミナトレーニングに起きて、一瞬でスタミナの問題が解決したライスが天皇賞春をぶっちぎってやりましたよ

30：名無しのトレーナー

>>29

ほんとそれ

しかもスキル発動じゃなくて素のステータスで突破できるから他のスキルにポイントを回せるから余計に欲しいんだよな

31：名無しのトレーナー

でも……

32：名無しのトレーナー

うん……

33：名無しのトレーナー

そうだね……

34：名無しのトレーナー

出ないんだもんなあ……

35：名無しのトレーナー

あの人だけ出る確率1%以下でしょ

俺なんて天井するまで1枚も出なかったからな？

36：名無しのトレーナー

何を言う

完凸まで回せば実質タダだぞ

37：名無しのトレーナー

そんなことできるのは富豪だけなんだよなあ……

38：名無しのトレーナー

そして極めつけが……

39：名無しのトレーナー

>>・トレーニングの際にヒントレベルを上げてくれる  
これなんだよなあ……

40：名無しのトレーナー

これに「切れ者」とか付こうものならウハウハよ

41：名無しのトレーナー

スキル獲得欄ではヒントレベルMAXが当たり前になるからな

42：名無しのトレーナー

金スキルが取り放題

43：名無しのトレーナー

ただし鋼の意思  
てめえはダメだ

44：名無しのトレーナー

鋼の意思はいりません！

45：名無しのトレーナー

鋼の意思「よよよ……」

46：名無しのトレーナー

習得できる金スキルのゼロヨンダツシユの発動条件が「レース序盤  
に前方に他のウマ娘がいない状態で発動」だもんな……

47：名無しのトレーナー

たづなさんのコンセントレーションと組み合わせると逃げウマ娘

がいきなり差を広げていくんだけどなあ……

ゴルシには合わないのがなんとも

48：名無しのトレーナー

ほぼ逃げ専用スキルだし仕方ないよね

49：名無しのトレーナー

それが気にならないレベルのサポート効果なんだよなあ……

50：名無しのトレーナー

本家を踏襲してるからなのかここまで強いのか

51：名無しのトレーナー

本家はこんなもんじゃなかったんだけど……

52：名無しのトレーナー

伝説作りすぎなんだよレジェンド二人は

53：名無しのトレーナー

そういや、彼方レジェンドって最近馬主になったんだっけ？

54：名無しのトレーナー

そういやそうだったな

55：名無しのトレーナー

ツイッターにも上げてたよ

56：名無しのトレーナー

ああ、あれか

コメントに短く「俺の愛馬が！」って書いてたやつか



57：名無しのトレーナー  
どんな名前だったか……

58：名無しのトレーナー  
「ライトニング」だよ

59：名無しのトレーナー  
FF13の主人公？

60：名無しのトレーナー  
違う

単純に雷速で駆けてくれてっていう願いを込めて名付けたんだそう  
だ

61：名無しのトレーナー  
それだったらフラッシュとかがあつたんじゃない？

62：名無しのトレーナー  
これ以上はスレチになりそうだから別のところで聞いてきたほうがいいんじゃない？

63：名無しのトレーナー  
それもそうだな  
んじゃ、行ってくる

64：名無しのトレーナー  
行つてらゝ

65：名無しのトレーナー  
それにしても……

シャイゲは何で今レジエンドの復刻を出してきたんだろうな？

66：名無しのトレーナー

そろそろ年末も近いし、なんか新イベントが始まるんじゃない？

67：名無しのトレーナー

もしかして……レジェンドが実装とか!?

68：名無しのトレーナー

あるわけねえだろ

69：名無しのトレーナー

そんなことしたら「ヒト息子ダンディーダービー」になっちゃう  
じゃねえか

70：名無しのトレーナー

つてか、そんなことがあつてもレジェンドの育成に使えねえじゃん

!

71：名無しのトレーナー

ここにいる誰もレジェンドが走ることに違和感を持ってない件に  
ついて

72：名無しのトレーナー

え？

73：名無しのトレーナー

え？

74：名無しのトレーナー

え？

75：名無しのトレーナー  
え？

76：名無しのトレーナー  
え？

77：名無しのトレーナー  
え？

78：名無しのトレーナー  
いや、あの人なら走れるだろ

79：名無しのトレーナー  
ってか、この間もモンゴルの草原駆けまわっていたってツイッター  
に上げてたし

80：名無しのトレーナー  
もつと言えば、競走馬とかとも並走できるだろ

81：名無しのトレーナー  
アプリでもスズカと並走してたし

82：名無しのトレーナー  
勝てるのカイチョーとか激マブくらいだろ

83：名無しのトレーナー  
あの人シングレのタマちゃんみたいに目から光を放てるでしょ

84：名無しのトレーナー  
そうか？  
そうかも……

85：名無しのトレーナー

ハイやめやめ

これ以上は不毛な争いになりそうだからここらへんでストップをかけるぞ

86：名無しのトレーナー

そういやこのスレってウマ娘でのレジエンドについてだったな

87：名無しのトレーナー

そうだな

んじや、推定トキノミノルであるたづなさんと彼方レジエンドの二人がくつついたらどうなるかな？

88：名無しのトレーナー

あ、おいバカ

89：名無しのトレーナー

あの人には幸せになってほしい！

90：名無しのトレーナー

美人な嫁とイチャコラしてるあの人が見たい！

91：名無しのトレーナー

でも、チームを組んで修羅場になっているあの人も見てみたい！

92：名無しのトレーナー

純愛をしているあの人も見たい！

93：名無しのトレーナー

カイチヨーにちよつと重めな愛をぶつけられておどおどしている

あの人の姿を想像するだけで……鼻血がつ！

94：名無しのトレーナー

スズカと最速を目指すコンビも見てみたいいいいいい！

95：名無しのトレーナー

ライスを肩車しているレジエンドの姿……たまりません！

96：名無しのトレーナー

タイシンに熱くぶつかっていくあの人の熱気で溶けてしまいたい！

97：名無しのトレーナー

オグリの健啖家具合に財布が軽くなったことを悲しみながらも喜んでくれている姿を見て、「ま、いいか」って優しげな視線でオグリを見るレジエンドを遠くから眺めたい！

98：名無しのトレーナー

ダスカの一番になるといふ願いと一緒にかなえるために頑張る元一位のトレーナーというシチュエーションだけでご飯は十杯でも行けます！

99：名無しのトレーナー

テイオーを肩車しているレジエンドは至高の宝です！

100：名無しのトレーナー

ドトウのドジに巻き込まれながらも「大丈夫、大丈夫」って慰めるあの人の姿……！

101：名無しのトレーナー

ブルボンにいつの間にか実家への挨拶を済まされていることに呆

然とする姿は愉悦が沸きます！

102：名無しのトレーナー  
は？

103：名無しのトレーナー  
は？

104：名無しのトレーナー  
は？

105：名無しのトレーナー  
は？

106：名無しのトレーナー  
は？

107：名無しのトレーナー  
は？

108：名無しのトレーナー  
は？

109：名無しのトレーナー  
〔 〕 へ死にたいようだな

110：名無しのトレーナー  
あの人の幸福を願うのが私たちでしようが！

111：名無しのトレーナー  
そこの異端者をつるし上げろ！

112：名無しのトレーナー  
誰か釘を持って！

113：名無しのトレーナー  
つ釘

114：名無しのトレーナー  
つハンマー

115：名無しのトレーナー  
よろしい  
ならば処刑だ

116：名無しのトレーナー  
なんだこいつら!?

117：名無しのトレーナー  
彼方レジエンドの幸福を祈り隊だよ

118：名無しのトレーナー  
掲示板でレジエンドの嫁にまつわる話題を出すと決まって現れるんだ

119：名無しのトレーナー  
ウマ娘×彼方レジエンドのイラストに生を実感する連中でもある

120：名無しのトレーナー  
いや、女優とかじゃないのかよそこは

121：名無しのトレーナー

それがねえ……

122：名無しのトレーナー

今のレジエンドの状態を見ると女優には目も向けてないと思うんだ

123：名無しのトレーナー

競馬とウマ娘一筋だもんな今のレジエンド……

124：名無しのトレーナー

完全なダメ親父にしか見えないけどちゃんと働いてるらしいし、資金もあるし、あまり大きい賭けはしてないからなんも言えないんだよなあ……

125：名無しのトレーナー

ウマ娘もそうだけど彼方レジエンドの影響だよな

今の競馬事情

126：名無しのトレーナー

ホント、頭が上がりませんわ

シャイゲと竹騎手と彼方レジエンドには



番外編 実家へのご挨拶 前編

今年ももうすぐ終わり。

場所によつては雪が降り、街中を通り過ぎる風も冷たくなってくるころ。

そんな時にはアツアツの鍋がぴったりだ。

体の内側から温めてくれる食べ物を食べることで明日への活力になる。

そんな俺の前には色とりどりの食材が盛られ、もうもうと湯気が立つうまそうな鍋があった。

見てくるだけでのどが鳴る夕食を前にして俺は……

目の前の現実から逃げたくなっていた。

「……………」

「おや？ どうしたんだいトレーナー君？ そんな苦虫を噛み潰したような顔をして……………」

「おなががすいたんですかトレーナーさん？ それならもう少し待つてくださいね。お肉にまだ火が通ってませんから」

「だ、大丈夫だよお兄さま。ライス、今日はそんなに食べないから……………」

「いや、その……………」

「別に…………来たかったわけじゃ……………」

「安心してくれトレーナー。私もそんなに食べないぞ」

「大丈夫よトレーナー。アタシが一番にお肉をとってあげるわね」

「ええつと……………」

「ええ〜!? トレーナーにお肉をとってあげるのはボクだよ!」  
「うう……トレーナーさんから一番遠い場所お……」

「抽選の結果とはいえ、このようになるとは……予想外でした」

「あの……」

「なんでいるの?」

「「「「「「「……?」」」」」」」

「いや、不思議そうな顔しないで! ここ俺ん家なんだけど!? それも実家!」

俺——彼方翔は今から約十年前に帰ったっきりの実家にて、自身の担当チーム「シリウス」に所属する教え子たちに囲まれていた。

~~~~~

ここは地方の片田舎。

周りを見渡せば田園風景が広が……ってはいないがそれなりの数の民家が見えるという具合のよくある田舎だ。

ここに来るには、都会から片道二時間バスに乗り、そこから一日に数本しか通らない定期バスに乗らなければたどり着けない。

テレビで映るようなザ・秘境という場所とまではいかないが、どこか浮世離れた雰囲気漂わせる風情ある村だ。

近くには小学校と中学校があり、この村の子供たちも通っている。

近くといっても片道五キロほどあって、元気な子以外は先ほど言った定期バスに乗って学校へ向かうのがこの村の常識だ。

間違っても、ウマ娘ではないのに学校まで走って向かおうとするよ  
うなバカはいないはずだ。

そんなことするのは後にも先にも俺ぐらいだろう。

他にも、この村には小さい商店があり、村の住人たちが生活物資を  
手に入れる唯一の場所だ。

俺も子供のころはよく親父たちにお小遣いをもらって駄菓子を買  
いに行つてたんだよなあ……。

そんな「第一村人発見!」と、とあるテレビ番組で紹介されそうな  
村の片隅に一人の男がいる。

「……………来てしまった……………」

俺こと彼方翔だ。

そんな俺は、防寒のためにウインドブレーカーを着込みそれなりの  
荷物が入ったバックを肩にかけ、とある家の前でそう呟いた。

様々な思いがまぜこぜになったような声色で呟いた俺の表情は、苦  
虫をかみつぶしたかのように渋った表情をしているだろう。

そんな俺の目の前にある家とは、俺の実家である。

そう、「実家」だ。

「来てしまった……………か……………」

言葉にして繰り返すことで、実家に来てしまったことを実感する。

そんな俺の実家は少し古風な武家屋敷だ。

周りを土で作られた塀で囲われ、塀の一部に出入り口が作られてい  
る。

比較的高い塀によって向こう側にある家の全体像は見えないが少  
しだが屋根の一部分が見えた。

そこからうかがえるのが、やはり名家の名残と言えるような住居だ  
ということ。

そう、俺の実家はそここの身分がある家なのだ。

なんでも、戦国時代あたりにそれなりに名をはせたご先祖様が褒美  
としてもらった屋敷を、そのご先祖様直系の子孫である親父が今なお  
使用しているのである。

でも、部屋は武家屋敷というだけあって非常に広く、親父とお袋に

俺の三人家族じゃ部屋が余りっぱなしになっていたので、子供のころは友達を集めてごろごろしてたんだっけ。

「できれば来たくなかったなあ……」

そんな実家を前にして俺はしやがみ込んで考える。

今回の帰省について実は親父たちには知らせてない。

なぜかと言うと、俺がヘタレすぎるせいで今更どの面下げて帰っていいのかわかんなくなっちゃったからなんだよ。

もつと言えば、その親父たちと面面向かって話したのなんて今から10年前の一回きりだ。

気まずいなんてもんじゃない。

しかも、いろいろと隠してきたもんだからそれについても話さなきゃならないからその気まずさは過去最高レベルだろう。

「なんて言おう……元気にしてたか？ いや、それこそどの面下げてそんなことが言えるんだよ……」

頭を抱えてあれじゃないこれじゃないと考えてみるも最適なものは出てこなかった。

なんてうじうじ悩んでいたその時。

「……ん？ エンジンの音……？」

俺が通ってきた道の向こうから車両の音がする。

この音からしておそらく親父のトラックだろう。

畑仕事から帰ってきたのか？

そう思っていると、坂を上ってきたトラックの姿がだんだんと見えってきた。

やっぱり親父が乗っているトラックのようで、目を凝らすと運転席に乗る男の姿が見える。

とりあえず、手を振って俺の存在を主張してみた。

すると、そのトラックは俺から30mほど離れたところで急停車する。

しばらく俺とトラックの間に無音の時間が流れた。

しかし、そんな時間はガチャツというドアを開ける音がやけに響いたことで終わりを告げる。

開いたドアから出てきた男——親父は、しばらく棒立ちでこつちを見据えていたが、こちら認識するや否や全速力で走つてくきたからだ。

「へ？」

「歯あ食いしばれやバカ息子おおおおおおおおおおお  
お!!!」

「へぶらあ!?!」

いきなりのことに間抜けな声を上げた俺を置き去りにして、30mはあつた距離を御年60歳とは思えぬ速度で走り抜けた親父は、農作業により鍛え上げられた丸太のような腕で俺の頬を殴り飛ばした。

一瞬意識が飛びかけたが、そこは戦場に身を置いていた時期があつた俺だ。

親父の一撃によりふわっと浮いた体を空中で翻し、猫のように着地する。

そうして出来上がったのは、拳を振りぬいた状態のまま肩で息をする老人と、食らつた一撃のせいで鼻の粘膜が切れたのか鼻血を流す青年という、なんかバトル漫画でありそうなシチュエーションとなつていた。

「ハア……ハア……」

「いつつう……」

荒い息をしている親父は、かぶっている帽子が影になつてどんな表情をしているのかわからない。

でも、これだけは分かる。

「親父……怒ってるよな……」

「……………」

そう、絶対にキレているということだ。

あの時——超常の存在「異能」に関わつてしまい、自身もその解決のために超人になつたのは小学生から中学生ぐらいだったはずだ。

任務のために夜中に家を抜け出して翌日の昼頃まで帰らないなんてこともあつたし、高校生になつた時は寮生活のために家を離れて電話先で話すしか家族の時間はなかった。

親の心配を振り切って異能力者になり続けた。

その結果が、俺の足が破裂するという大怪我の報告。

心配させただろうな……。

悲しませただろうな……。

怒らせただろうな……。

それなのに、10年も顔を合わせてこなかった。

これだけでもキレていいはずなのに、それどころかウマ娘たちのトレーナーに相談もせずなっているんだ。

バカだよ俺は。

ほんとバカだ。

「親父……ごめ」

頭を下げた謝ろうとする。

勘当されたって仕方ないことをしてきたんだ。

家族の縁を切られたとしても受け入れるよ。

だから……

「謝ってんじやねえよ……」

「……………え？」

いつの間にか抱きしめられていた。

力強さを感じさせる腕でだ。

なんで……？

なんで抱きしめてるんだ、親父……？

「お前はほんとにどうしようもなくバカで走ることにしか興味を持たないような問題児ってみんなから言われてきたよな……」

「子供のころからウマ娘と走りたいうて言い続けて、小学校の時には学校まで走って行ってたよな……」

「勝手にどっかへ行っちゃまって心配してる俺たちの気も知らないで、またどこへともなく行っちゃまう」

「手紙に書いてたよな。なんで話さなかったか。俺たちを心配させないため？ バカ野郎。何にも知らないからこそ余計に心配したんだぞ。それに、親には迷惑をかけていくのが子供だ。……お前には迷惑をかけられっぱなしだったけど、それでもかわいいもんだったんだよ」

「怒ってる？ ああ、怒ってるさ。でもそれだけじゃねえ」

「お前が帰ってきてくれただけでもうれしいんだよこっちは」

「……………！」

親父の言葉に目頭が熱くなってしまった。

「瀕死の状態で病院に運ばれたって聞いたときは血の気が引いたさ」

「電話で何にも話してくれなかったときは悲しかったさ」

「心配させるだけさせておいて、今度はウマ娘のトレーナーになると聞いたときはびっくりしたさ」

「でもよお……………」

「俺はお前が帰ってきてくれただけでもうれしいんだよ」

「親父っ……………！」

親父の背に腕を回し、こっちからも抱きしめる。

涙があふれてきてしまった。

「おうおう、泣いとけ。そんな状態で姫奈に顔を合わせられるわけねえからな」

そんな俺を抱きしめながら親父は背中をさすってやさしく声をかけてくれる。

しばらく泣き続けて、落ち着いてきたところに再度顔を合わせて言葉を交わす。

「おかえりバカ息子」

「……………！ 親父っ！ ただいまっ！」

こうして、俺と親父は10年ぶりに再会したのであった。

~~~~~

「……いやいや、そうじゃない。確かに感動的だったけど違う。もつと現実的な問題を思い出せ」

「? どうしたのトレーナー? お肉足りなかったの?」

「ああ、大丈夫だよスカーレット。お肉は足りてるし、ご飯もうまいから」

「ふふん! でしょ? お義母さまと一緒にアタシが作ったのよ。おいしいのは当たり前じゃない!」

「……ねえ、スカーレットちゃん。ライスも一緒に作ったんだよ?

なんで自分一人の手柄にしようとしているのかな? それにお母さまの言葉の意味がちよつと違うよね? ライス、不思議だなあ……」

「あら? ライス先輩いたんですね。小さくて見えませんでした」

「むうう……!」

そして、とりあえずは現在に戻ってきた。

現在は、何故か俺の実家に来ていた担当ウマ娘達と一緒に鍋を食べているのだ。

目の前では中等部にしては成長がすごいスカーレットと、高等部にしては小さいライスが火花を散らしている。

確かに、スカーレットとライス、それにルドルフやドトウも一緒に作っていたはずなんだが……。

あと、スカーレット。

俺にもお母さまのニュアンスがちよつと違うのが分かったぞ。

ちよつと話さない。

「え!? そ、それを私に言わせるの……? こ、告白には早すぎるんじゃないかしら?」

「……スカーレットちゃん? ちよつと表に出てもらっていい?」

「トレーナー! はい、どうぞ!」

「……………」

スカーレット?

なんで頬を赤らめてるの?

告白じゃないから。

ライスやめなさい。



あなたそんな子じゃなかったでしょ。

ありがとうテイオー。

でも、俺のお皿には肉が山積みになってるんだが……。

あと、オグリ。

そんなに食べない発言は何だったのか。

結構な勢いで具材が消えて行ってるんだけど……。

「ほらほら、スカーレットにライス。喧嘩はいけないよ」

「……おいしい」

「おいしいです……！ こんな料理、今まで食べたことありません……！」

ありがとうルドルフ。

さすがはチームシリウスの年長であり、トレセン学園生徒会長だ。

ありがとうタイシンとスズカ。

お袋の料理をうまいって言ってくれて。

『美味』を獲得。グッドコンデイション『気分の高揚』を確認しました」

「お、美味しいですう……！ こんなお鍋を作れるなんてえ、トレーナーさんのお母様はすごいですねえ……」

ありがとうブルボンにドトウ。

そこまで褒めてくれるなんて、作ったの俺じゃないんだけどうれしいよ。

でもさあ……

「いや、みんな普通に過ごしてるけど、なんで俺ん家に来てんの？」

「「「「「「……？」「」「」「」」」」」」

「だから不思議そうな顔しないで！ そんな顔したいのは俺なんだけど!？」

謎が謎を呼ぶ実家で鍋パーティー。

事の始まりは今から数時間前までさかのぼるのであった。

~~~~~

「……おかえり、翔」

「ただいま……お袋」

親父と感動の再会を果たした俺は、そのあと、台所にて夕食の準備をしていたお袋と再会していた。

いきなり殴りかかってきた親父と違い、お袋は優しく頭をなでくれただけで、後はこっちの話を何回かしたぐらいだった。

「あんたがニユースに出たときは肝が冷えたよ。誰かを殴ったんじゃないかってね。でも、ニユースが知らせてきたのは、あんたが人助けをして名誉の負傷をしたってこと。他にも、いろんなことがあったっていうことも」

「……ごめん。あのことは本当なら隠してないといけなかったんだ。だからお袋たちにも言えなくて……」

「大丈夫さ。あんたが無茶をするなんて今に始まったことじゃないからね。それに、後悔はないんだろ？」

「……ああ。あの時のことは後悔していないよ」

「そうかい………なら、その後のことを話してくれよ。あんたがトレーナーになったこともね？」

「ははっ………分かってるよ」

と、まあ、こんな感じに会話をしていた時だったんだ。

ふと、玄関の戸を叩く音がして、郵便かなんかだと思って開けたんだった。

しかし、そこにいたのは……

「やあ、トレーナー君。お邪魔させてもらおうよ」

「……へ？ え？ ルドルフ？」

俺が一番最初に担当したウマ娘、シンボリルドルフがそこに立っていたんだ。

なぜか伊達メガネをかけているが……変装のつもりか……？

かと思えば、俺の側を通って実家に入っていく。

俺はいきなりのことに情報が追いついていなかった。

なんでルドルフがここに……？

しかもそれだけじゃなく……

「トレーナーさん。お邪魔しますね？」

「お、お兄さま！ こんにちはわ！」

「……ごめんください」

「トレーナー、お邪魔するぞ」

「ここがトレーナーの家か……いい家じゃない！」

「トレーナー！ お邪魔しまーす！」

「ト、トトトレーナーさん！ お邪魔しま、わひやつ!？」

「お邪魔します。マスター」

「へ、え、あ、どうぞどうぞ……」

ほかの担当ウマ娘たち、サイレンススズカ、ライスシャワー、ナリタタイシン、オグリキャップ、ダイワスカーレット、トウカイテイオー、メイショウドトウ、ミホノブルボンが次々に実家へと入っていく。

全員が入っていき、玄関にいるのは俺一人になってから数秒後、

「……………へえっ!？」

やっと理解が追いついた俺が玄関で変な声を上げたところで回想は終わる。

~~~~~

「いや、いやいやいや……マジで、なんで君たちここにいるの？」

もう一度現実に戻来ると、そこには各々がそれは美味しそうに鍋を食べている光景が目飛び込んでくる。

一瞬だけ「夢か？」と思いかけるが、足を入れているこたつの温か



ここにいるメンバーは誰もが規格外のウマ娘だと。

『皇帝』シンボリルドルフ

『異次元の逃亡者』サイレンススズカ

『黒い刺客』ライスシャワー

『BNW』ナリタタイシン

『地方から来た怪物』オグリキャップ

『ミスパーフェクト』ダイワスカーレット

『帝王』トウカイテイオー

『不屈の挑戦者』メイショウドトウ

『坂路の申し子』ミホノブルボン

そんな名前で呼ばれている超有名ウマ娘達が一堂に会しているのだ。

ファンなら失神ものだろう。

だというのに、お袋はこれっぽっちも驚いた様子がない。

むしろ、「あら、よく来たわねえ」なんて言っただけで快く迎え入れるぐらいだ。

どうということなんだお袋！

そう、もう一つの部屋（部屋同士を隔てる襖を開けているので実質一部屋だが）で、親父と別の鍋を食べているお袋に聞いてみる。

「どうということもなにも、彼女達からは連絡をもらっていたわよ？」

今度の冬休みにそちらへ向かいますって」

「……どうということだルドルフ？　俺そんな話聞いたことないんだけど？」

視線をお袋から一番事情を知ってそうなルドルフに向ける。

「ああ、トレーナー君、実はだね——」

「はいはい！　ボクが言ってもいいかな！」

「——ふふっ、任せるよテイオー」

「わーい！　ありがとうカイチョー！」

ルドルフが言おうとしたのを遮って、テイオーが代わりに言葉を継いだ。

「ふふくん！　説明しよう！　実はねえ——」

そう話し始めたテイオーの言葉を要約するところだ。

- ・もうすぐ年末なので、トレセン学園も冬休みに入りました。
- ・自分たちもそれぞれの実家に帰省しようかなくと、思っていた。
- ・そんな時に、トレーナーが実家に帰省すると言い出した。
- ・「トレーナーの実家ってどんなどころなんだろう？」「行ってみない？」

・思い立ったが吉日「よし行こう！」ということになった。

「——と、いうことなのだ！」

……………というこらしい。

いやいや…………。

「実家に来るのは百歩譲って大丈夫だでしょう。思い立ったが吉日っていうのも、俺にはよくあることだからな

だが！ 何故、お袋の電話番号を知っているんだ!？」

そうだ、そこがおかしい。

前述したが、俺は彼女達にお袋の電話番号など言ったことがない。

それなのに、お袋や彼女たちの言い分では、だいぶ前から知っている様子だった。

何時情報が漏れたんだ？

「えつとお……………す、すみません！ わ、私が皆さんにバラしてしまいましたあー！」

「君なのかドトウ!？」

「ト、トレーナーさんがたづなさんに呼ばれた時、電源を消さずに置いていたスマホを好奇心に負けて見てしまいましたあー！」

嘘だろドトウ!？」

「その後、何度かお母さまに電話をかけさせてもらっていたのですが、今から2か月ほど前に、ルドルフさんたちにばれてしまいましたえ……………」

「みんなから電話がかかってきたんだよ。ドトウちゃんじゃなかったらあんな色々とまずかったんだ。そこは怒るところじゃないよ」

「そ、そうなのか……。ごめん、ドトウ」

「い、いえ……。大丈夫ですからあ」

ドトウに頭を下げた謝罪する。

確かに、これが見知らぬ誰かだったらやばいことになってたかもしれないからな……。

しこりは残ったが、問題は解決した。

別に、彼女たちがいるから何か問題があるわけじゃないので気にしない方針で行こう。

「一応、事情は分かったけど、お前達はこの後どうするんだ？」

「この後とはどういうことですかマスター？」

「いや、泊まる場所とかどうすんのかなあって思っで。旅館にでも泊まるのか？」

ブルボンが俺の言葉に不思議そうに尋ねてくるが、俺としては気になっでいたことだ。

実家に挨拶をしに来たのは分かった。

でも、どこに泊まるのかは聞いていない。

ここは田舎だから、もし近くの旅館に泊まるのなら送っでいこうと思っでいた。

だが、次の言葉でその考えが甘かったのが思い知らされる。

「……ここに泊まる」

「……へ？」

「……ここに泊まるっで言っでんの」

タイシン……？

なんで顔赤くして俯いちやっでるの？

っでか、泊まるっで言っでた？

ここに？

「…………へ？」

「む、トレーナー。具材がなくなっでしまった」

「はいはい。追加を持っできますからねオグリちゃん」

「あ！ お義母さま！ 私も手伝います！」

「ラ、ライスも！」

「私も手伝いますよお母さま」

「わ、私も手伝いますうー！」

「ボクも手伝いまーす！」

「ありがとねスカーレットちゃんにライスちゃん。それにルドルフちゃんにドトウちゃんにテイオーちゃん」

オグリが鍋の具材が足りないというので、お袋が追加を持ってこようとする。

お袋は彼女達が来るということも知っていたので、食材を買い込んでいたようだった。

お袋の後をスカーレット、ライス、ルドルフ、ドトウ、テイオーがついていく。

残されたのは、俺とスズカとタイシンとオグリと機械音痴のブルボン。

そして隣の部屋の親父だけだ。

「あの……大丈夫ですか、トレーナーさん？」

スズカが俺の状態を聞いてくるが、そんなことなど耳に入ってこなかった。

ただ、皆がここに泊まるということだけが頭の中で反響してポカーンとするばかりである。

「……モテるっていうのも辛いもんだな」

そう呟いた親父の言葉がやけに耳に残った。



番外編 実家へのご挨拶 後編

呆然とした俺を置き去りに鍋を食べ進めていく担当達。  
鍋が空っぽになるまでにはさほど時間はかからなかった。

それからは各自がそれぞれ風呂に入り、全員が上がった時には寝るまでの間に結構な自由時間ができたので、ちよつとしたゲーム大会を開催しているのだ。

『全開で行くぜ！』

「うおっと！ 我ながら速えな！」

「ねえねえトレーナー！ 次はボクがやりたい！」

「……アタシも」

「分かってるって。この戦闘が終わったらな」

そういう俺の目の前にあるテレビの画面では、とある人物が高速で戦場を駆け回り、大勢の敵を蹴り飛ばしている光景が映っている。

俺が今やっているゲームは、俗に『無双ゲーム』と呼ばれる類のもので、大勢の敵をバツバツとなぎ倒していく爽快なゲームだ。

……難易度によっちゃ、戦う順番を決めなくちゃならないことがあるけどな。

それはさておき、今回プレイしているのはちよつと特殊なもので……

「まさか、トレーナー君の動きを再現したゲームを作り出してしまおうとは……」

そう、俺が異能力者として現役だった時の動きを、ゲームに落とし込みつつも最盛期とほぼ遜色ない動きで電子上に再現しているのだ。

更に、俺の知っている異能力者達も複数登場しているゲームなのである。

「ま、そこは俺もびっくりだ。こうやって画面越しとはいえ俺の戦っている姿を操作できるなんてな」

ルドルフの言葉に自身の考えを言いつつ、プレイヤーキャラを操作していく。

ちなみに、俺が今動かしているのは、スピードアタッカー『彼方翔』

だ。

そう、俺である。

そのスピードはすさまじく、移動するためのスティックを深く倒すことで走り出す『ダツシユ状態』になることができるのだが、そのスピードが全キャラ中最速で、そこから攻撃ボタンを押すことによつて繰り出すことのできる『ダツシユ攻撃』は、かなりの距離を移動することができ、大勢の敵を巻き込める強力な技だ。

「キャラクターの動きがすごい速いですね……。トレーナーさんは見えてるんですか……？」

「まあ、集中すれば結構見えるぞ。ジャストアクションもシビアだけど入力できないはない」

「……キャラクターの動きが気持ち悪すぎるんだけど。何あの動き……」

「足払いをかけて、対象を空中に浮かせ上段回し蹴りを複数回。攻撃の範囲外から接近してきた遠距離攻撃を即座に攻撃を中断することで回避。私に分かったのはここまででした」

スズカから速いという言葉が出たのだが、それもそのはず。

無双ゲームのお決まり……必殺技ゲージとは違うゲージを消費することによつて発動できる『魔力開放』を発動しているため、移動速度強化や攻撃力強化が起きているのだ。

ちなみにだが、『彼方翔』はあまりの速さのせいで、このゲーム中最高難易度に位置する操作難度を誇っている。

なので、慣れなければ相当難しいのだ

俺は知り合いからプレゼントとして貰つて、暇な時間にちよくちよくやっていたからもう慣れたもんである。

それでも、ジャストアクションは安定しないだけだな。

『鉄拳』の最速風神拳の受付フレームとまではいかないけど、『DMC』のジャスト次元斬レベルじゃなかったっけか？

簡単に説明すると、『鉄拳』の最速風神拳の受付フレームは“1”フレームで、『DMC』のジャスト次元斬は種類によつて異なるが、一番簡単なもので“6”フレーム……だったと思う。

フレームというのはゲームの絵の枚数のことを表していて、動画もそうだが、ゲームはたくさん絵の集合体である。

パラパラ漫画を絶えず動かしているため、動いているように見えるのだ。

そんなフレームは、一秒間につき60フレーム。

ということは、最速風神拳は60分の1秒という誤差しか許されなく、ジャスト次元斬は簡単なもので10分の1秒というシビアすぎる世界なのだ。

……まあ、世の中にはそんな技を安定して発動させる逸般人が存在するけどな。

他にも、攻撃ボタンを押すことで攻撃が発生し、連打をすると派生していくのだが、このゲームのシステム上、キャラ特有の特殊行動ができるのである。

俺の場合には、攻撃を繰り返してから特定のボタンを押すことによって攻撃を中断しながら回避することができたり、スティック入力した方向への回避を連続して三回まで使用できたり、敵の攻撃を当たるちように回避することで無敵付きのカウンターを叩き込めたりするのだ。

『っしー！俺の勝ちだ！』

「よし！クリア！」

「すっごーい！トレーナーがトレーナーでクリアしたー！」

そんなことを考えている間に、ゲームクリアになっていた。

画面では、『俺』がフィールドを縦横無尽に移動した後、カメラの前まで来てからVサインをこちらへ向けている様子が映っている。

ちなみに、このポーズは現役時代に時々やっていた決めポーズだ。

こんなところも再現されてるなんてな……

「ちよつとこだわりすぎじゃねえかこれ？」

「次はボクー！」

「はいはい。やりすぎないようにな」

「わーい！ありがとうトレーナー！」

一先ず一つのステージをクリアしたので、順番待ちをしていたティ

オーにコントローラーを渡す。

嬉しそうに受け取ったテイオーはキャラ選択で『俺』を選択し、プレイしていった。

画面の変化に一喜一憂する様は、やはり、年ごろの子供なんだと感じさせてくる。

そんなことを思っていると、胡坐をかいている俺の足に座っていたテイオーがこう言った。

「ねえトレーナー？」

「ん？ どうしたテイオー？」

「今のトレーナーだったら、このゲームみたいな動きってできるの？」  
まるで子供がテレビを見ていた時に、親の仕事に関係していることを聞くかのような調子でテイオーは聞いてくる。

「いんや？ やろうと思えばできるんだけど、もう何年もこんな体の動かし方はしてねえからな。今やったら一步目でこけると思うぞ？」

「そっか……残念だな……」

「ま、そういうのはゲームとかで楽しんでるのがいいんだよ」

そう言つて、テイオーの頭をなでながら話を切った。

そうすると今度は、ミカンをつまんでいたタイシンが聞いてくる。

「……やろうと思えばできるってどういうこと？ トレーナーって怪我したんだよね？」

「ん……ま、怪我はしたな。今までやってた仕事を引退するぐらいのを」

「……じゃあなんでできるって言つたのさ」

そうジト目で聞いてくるタイシンに、俺は肩を竦めながら言った。

「やろうと思えば走れるんだよ。だけど、俺の怪我の仕方はみんなとはちよつと違ってな。骨とか心肺機能は大丈夫なんだけど、筋肉が盛大にぶつ壊れちまつて……」

「……つまりどういうこと？」

「ああ……車に例えて説明すると、ボディもエンジンもホイールも大丈夫なんだけど、タイヤがだめになつて、つて感じかな？ だから走ろうものなら、古傷が開いて走れなくなるんだよ」

「……ダメじゃん」

「ま、そうだな……」

そう、俺は走ろうと思えば全盛期レベルの速度で走れるのだ。だがしかし、走れば今度こそ足が壊れるかもしれない爆弾を抱えている。

だから、俺は十年もの間、力をセーブし続けて走っているのだ。ま、足がぶつ壊れることを覚悟の上で走ったら、全盛期とまではいかないまでも10%は出せるんじゃないかとは思ってる。

といっても、そんな走りはよほどのことじゃない限りしねえけどな。

「つてか、そろそろ寝る時間だな。テイオー、それ明日にしなさい」

「ええ、ようやくコツをつかんできたのに」

「明日もここにいるんだろ？」

「うん！」

「じゃ、その時にすればいいさ」

「りよ、か、い！」

時計の針が9時を指していたので、テイオーにゲームを中断するよう呼び掛けた。

その際、ゲームができなくて不機嫌になったタイシンの頭をなでて機嫌を直し、皆をそれぞれの部屋に向かわせる。

といっても、俺は子供のころから使っていた自分の部屋を使い、ルドルフ達は大部屋を使うだけだな。

それをルドルフ達に言った時、何故か外野であるお袋から、「あら？ あんたもルドルフちゃん達と寝るんじゃないの？」

と言ってきて、しばらくの間フリーズしてしまうこともあった。

いや。

いやいやいやいや！

何言ってるんですかオカン？

俺、教師。

この厨パとしか言いようがないチームシリウスの担当トレーナーです。



ない。

どちらかと言うと、休息を目的とした慰安旅行のようなものだと思  
識している。

「で、でもお……それがどうしたのですかあ？」

そんなテイオーの問いかけにメイシヨウドトウが疑問符を浮かべ  
た。

「ふっふっふ……こういう時にやるべきことは一つ！」

不敵な笑みを浮かべながら、テイオーはこう告げる。

「恋バナだあ!!」

「「「「「?!」」」」」」

恋……バナ……?」

それはあれかテイオー？

複数の女子が集まって好きな異性のことについて話すアレか？

「ボク達みたいに『セーションを生きる女の子がすることは一つ！

目と目が合ったらポケモンバトル！ みたいに、女の子同士が集まっ

たら恋バナをするのがヒツゼン！ ユーコピー?』……って、マヤノ

が言ってた！」

「テ、テテテテイオーさん!? いきなり何を言ってるんですかあ!？」

「そ、そうだよテイオーちゃん!? いきなり何を言ってるの!？」

「「「「「……?」」」」」

「……………」

テイオーの告げた言葉に、ドトウとライスシャワーが大きく取り乱  
す。

サイレンススズカやオグリキャップ、スカーレットとミホノブルボ  
ンは首を傾げているが、タイシンだけは顔を真っ赤にして俯いてい  
た。

なるほど……………把握した。

テイオーの同室である「マヤノトップガン」がテイオーに恋バナ  
について話し、今回の件に繋がった。

そして、そういった話に耐性のないドトウとライスが大きく取り乱  
した、ということか。

敢えて言おう。

これはさすがの私も予測していなかった……！

そして、マヤノトップガン。

ありがとう……！

今度、私から何かを送るとしよう。

それはさておき、恋バナか……。

今までそういった話はしてこなかったな……。

さて、どうしたものか……。

と考えていると、ティオーが元気よく手を上げて話し出した。

「まずはボクからだね！ ボクが好きなのはトレーナーだよ！ 一応

言っておくけど、他のところのトレーナーじゃなくてボク達のトレー

ナーだからね？」

「「「「「?!」「」「」」」」」

いきなり落とされた爆弾に全員がバツと勢いよくティオーの方を

向く。

もちろん私もだ。

そんな中、先程ティオーに掴みかからんとしていたライスが問いを

投げかける。

「そ、その好きは？」

「? その好きってどういうこと？」

「えっと……Likeの方の好きだよね？」

「? ううん。Loveの方の好きだよ？」

空気が凍るような感じがした。

比喩的な表現だが、まさしくそんな感じがしたのである。

「ほ、本当？」

「本当だよ？」

「……マジ？」

「マジのマジの大マジだよ？ 何言ってるの？ スズカにタイシン

？」

首を傾げながら、再確認してきたスズカとタイシンに本心を告げる

ティオー。



欲を言えば、私も問い詰めたかったのだが、そこは年長者として自重した。

「どこが好きになったの？」

「うーんとねえ……いつの間にか……かなあ？」

「いつの間にか……？」

「うん……。最初の頃はカイチョーの方が好きだったんだよ？ あ、今も好きだよカイチョーのこと。最初の頃は、トレーナーも他の人と同じだと思ってたんだ。でもね、ボクがミジユクだつてことを教えられたりしたときはすごく胸がイガイガして、『なんなのさこの人！』つて思ってたんだけど、いろいろと教えてもらったり、トレーナーと一緒に走ったり、一緒にはちみーを飲みに行ったり、一緒に過ごしてるうちに、なんだか胸がドキドキしてきちやつて、でも、トレーナーが皆にかまつてるのを見ると胸がイガイガしてきちやつて、そのことをマヤノに相談したらこう言ってくれたんだ。『それはねえ……恋だよ！』つて。それを聞いた時、なんでかすごくしっくりきて、『あ、ボクはトレーナーのことが好きなんだなあ……』つて思うようになったんだあ……」

「「「「「「……」」」」」」

テイオーの言葉にシんツと静まり返る部屋。

いつもは快活なテイオーがしおらしく、まるで少女漫画に乗るようなまさしく『恋する乙女』のような表情をしてたからだ。

そのあまりのギャップに、誰も口出しができずにいた。

「トレーナーのことは大好きだよ。ケツコンしたいぐらいに。子供も欲しいと思ってるよ？」

「で、でもトレーナーさんは私達のことを……」

「ああ、異性とは見ないようにしているな」

私も言葉を発し、スズカの意見に同意する。

トレーナー君は私達のことを気遣ってそういった感情を抱かないようにしている。

生徒と教師である以前に、アスリートである私達の将来を思つてのことなのだが、テイオーが言うように好意を向けられてもあくまで担

当の関係を崩したりしない。

……少しだけ他のトレーナーより距離は近いのだが……。

唐突だが、トレセン学園は年中トレーナー不足なのである。

主な原因とえば、関係の深まりすぎた担当ウマ娘が卒業する際、自身のトレーナーを拉致するということが起きているからである。

それにより、距離感の間違いやすい新人トレーナーは減少の一途をたどっている。

もつと言えば、ウマ娘に対しトレーナーの数が少ないことでも有名だ。

私達が所属している中央トレセン学園の在籍生徒は約2000人。トレーナーの数は100人にも満たない。

必然的に担当を多くとるトレーナーが増え、それぞれの担当ウマ娘と関係が深まり、卒業の際、一人が拉致しようとして、更にそれを妨害しようとした他のウマ娘によって修羅場が多々発生し、それに巻き込まれたトレーナーが怪我をしたり、地元まで連行されるなどしてトレーナーの数が減っているのである。

それだけならば、チームを組んでいるトレーナー君は破格の存在と言ってもいいだろう。

だが、ここにいるのは有名どころではないウマ娘ばかりだ。

私、スズカ、ライス、オグリ、タイシン、スカーレット、テイオー、ドトウ、ブルボン。

選りすぐりの猛者が集う中央であっても、その名を大衆に知られるほどの実力者を育て上げたトレーナー君。

担当ウマ娘がたった一人でも、トレーナーがトレセン学園を去る可能性があるというのに、トレーナー君は私達9人のウマ娘を指導している。

だからこそ余計にトレーナー君は私たちに深く関わってこないようにしている……つもりなのだろう。

「それでも……テイオーは、トレーナー君と結ばれたいのかい？」

「うん！ だって、好きになっちゃったんだもん！ それなら、絶対にトレーナーを振り向かせてやるんだ！」

「そうか……なら、私も負けないよ。テイオー」

「望むところだよカイチヨ……！」

テイオーの覚悟を再確認し、火花を散らす私。

伸びると思っていたが、まさかここまで成長するとは……

これからは緊禪一番する必要があるな……

ルナが緊禪一番する必要があるな……フフツ。

「やっぱり……ルドルフ先輩もトレーナーのことが好きなんですね」

「そうだともスカーレット。なにせ、私を“皇帝”にしてくれたのだよ？ 皇帝になる夢を肯定してくれたんだ。惚れてしまうのも仕方ないだろう？」

「そうですね……私もです」

そう言つて次はスカーレットが話し始めた。

「トレーナーのことを好きになったのは、やっぱりテイオーと同じく『いつの間にか』かしら？ いつもだったら私達と並走して、すっごくギリギリした目をしながら追いかけてくるんですよ。仕事もほとんどは優秀と言える成果で終わらせているし、外から見れば完璧な男に見えたんですよ。……最初の頃は。でも長く付き合ってくると、それは他人の視点から見えた結果だけで、本当のトレーナーは私生活がちよつとだらしない感じで、部屋の掃除はしてるんですけど、それも私達が使つたりするから綺麗にしてるって感じで、服とか食事みたいに自分のこととなると途端に無頓着になったりするところがあつたから『何とかしないと！』って思い始めて、それから長く付き合っていくうちに『私が支えてあげないと！』って思つたんですよ」

「ほお……スカーレットはそんな感じに好きなのか？」

「そうですねオグリ先輩。トレーナーは私が支えてあげないといけないんですよ」

「……宣戦布告かスカーレット？」

「宣戦布告です。オグリ先輩♪」

「そうか……明日の朝食を楽しみにしてるよ」

スカーレットとオグリが火花を散らし始める中で、ブルボンが手を上げて話し始める。

「私はマスターのことを『お父さん』と似ているようで、別の存在と認識しています。好きになったと思った瞬間は『クラシック三冠』を成し遂げた瞬間でしょうか？」

「ブ、ブルボンさんはあの時だったの!？」

「そうですね。あなたと競り合ったあの『菊花賞』の時です」

そう戦慄した表情で問いを投げるライスには、予想外だともいえるような声色だった。

ブルボンは、クラシック三冠を成し遂げたことで、このチームの中でも上位の知名度を誇っている。

三冠だけでも私と並ぶほどの偉業なのだが、ブルボンはスプリンターであった自身の脚質をトレーニングで“無理矢理”上げることによって、『菊花賞』を走り抜けることができたのだ。

その際、ライスとの最終直線を競り合った瞬間は、連日ニューズで取り上げられたほどだったのである。

だが、それがライスにとって強いライバルを生み出してしまうことになったのは、完全な予想外であった……と言うところだろう。

菊花賞では負け、ライバルを生み出してしまおう。

ライスの不幸はまだ健在であったのだろうか……？

「私のクラシック三冠と言う半ば無謀な夢を最初に応援してくれた『お父さん』と、周りから無茶だと言われた夢を中央で最初に肯定し、そしてともに夢をかなえようと支えてくれたマスターのことを私は『愛している』と推測します」

「……うん、菊花賞では負けちゃったけど、恋のレースでは負けないよブルボンさん？」

「分かりましたライス。全力で相手になります」

新しく火花を散らし始めるライスとブルボン。

ふむ……。

我々がしていたのは恋バナのはずだが？

何故、ライバルを探し出すことになったのだろうか？

「私は、そうですねえ……。やっぱり、『私と走ってくれたから』ですかね？」

「……は、走ることが好きなスズカさんらしいですう」

「ふふつ、ありがとうドトウ。そういうドトウはどうなの？」

「ひえっ!? わ、私ですかあ?」

「む、無理なら聞かないわよ」

「あ、あわわ! ち、違うんですう……! 話せますう……!」

「……とりあえず落ち着いたら?」

「そ、そうですねえ……スウ……フウ……よ、よし……!」

スズカはシンプルに走ってくれるということに。

確かに、スズカのスタミナが切れるまでの間は私であってもなかなか厳しいところがあるな。

そんなスズカの横で走り続けられるトレーナー君は、スズカにとって恋の感情を持てるような存在だったのだろう。

続いては、ライスとは別方向で運が悪いドトウの番だ。

「わ、私がトレーナーさんを好きになったのは、『大丈夫』って言うてくれたからかなあ……?」

「どうしてその言葉で好きになったの?」

「わ、私は今までダメでドジでグズ、そんなウマ娘だと思ってました。でも、トレーナーさんを私のせいで巻き込んでしまったり、トレーニングの際に失敗しても、『大丈夫』『きつとできる』と言ってくれて自信が持てたんです……。そして、いつからかトレーナーさんのことを見ると胸がドキドキして、顔が熱くなったりしたんです。それをオペラオーさん達に話してみると、『それは恋だ!』と言われまして、『あつ……私、トレーナーさんのことが好きなんだ』と思うようになりまして……」

テイオーのように友人からの言葉で自覚したようだが、過程が違っており、テイオーが日常だとするなら、ドトウは支えてくれたことに恋をしたようだ。

ふむ、ドトウも強敵リストに入れておこう。

「私は、トレーナーの作ってくれたご飯を食べたときや、トレーナーと一緒にいると胸の奥がポカポカしたからタマ達に聞いたところ、『恋してるんとかやうか?』といわれて、気づけばトレーナーのことを好

きだと思い始めた」

「ちよ、さらつと言わないでよオグリ！」

「む？ 間違ったのか……」

「ラ、ライスはお兄さまがダメダメなライスを『青いバラ』にしてくれた時かな？」

「オグリはいつの間にか。ライスは憧れた存在にしてくれたから、と」

ふくむ……

ライバルがちよつと多すぎやしないか？

警戒を強めておくか……

「さあて、トリを飾るのは……タイシン！ 君だあ！」

「ちよ、掴まないでよテイオー……」

そう言つてテイオーは我関せずを貫こうとしていたタイシンに話題を振つて強制的に参加させた。

今までの反応からして、トレーナー君のことを好きだろうというのは容易に察せられるため、全員が興味津々だった。

「ねえタイシン！ 君はトレーナーのどういうところが好きになったのかな？」

「……別に、普通に好きになったよ」

そつぽを向きながら答えるタイシンだったが、それに関してはちよつと待つたをかけさせてもらいたい。

「さすがにそれは無理があるんじゃないかいタイシン？ 君が加入した日はトレーナー君が非常に喜んでいたんだよ。それを普通とはいがたいんじゃないか？」

「……ッ！ ああつ、もう！ わかったよ！ 初対面のトレーナーに告白同然の口説き文句を言われて気づいたら好きになってました!!」

キヤー！ と色めき立つ私達。

いつもツンツンしている雰囲気を纏つたタイシンが言うからこそ、これまで以上に共感してしまう。

「ムフフ……やっぱり素直じゃないねエタイシンは」

「……ッ！ 引っ付くな！ 暑苦しい！」

こうして、私達の恋バナは続いていくのであった。

- ・体力が30回復した。
- ・やる気は絶好調をキープしている。
- ・スピードが5上がった。
- ・スタミナが5上がった。
- ・パワーが5上がった。
- ・根性が5上がった。
- ・賢さが5上がった。
- ・スキル p t が30上がった。
- ・「夜ふかし気味」になってしまった。

## シャドーロールと青い流星

「うう〜……寒い……」

今日は12月31日、大晦日。

もう夜も更けてきて冷たい風が頬をなでるような冬空の下、俺——  
彼方翔は寒さに体を震わせていた。

流石に、この真冬の時期に上下ジャージはしていないが、それでも  
周りの人たちがしているような厚着はしていない。

だって、厚着すると動きにくくなってしまいうから、最速至上主義の  
俺は、基本的に薄着なのだ。

季節によって変わるのは、袖と裾の長さくらいである。

そんな中、新年まで残り一時間となく、世間は年越しムードで賑  
わっている。

12月のビッグイベントであるクリスマスは過ぎ去り、トレセン学  
園も1週間前には既に冬休みに入っていた。

そういう日に、俺はトレセン学園近くにある神社に来ている。

神社には、大晦日というのもあって多くの参拝客がおり、出店など  
に立ち寄って年越しそばや年越しうどんに舌鼓を打っている者もい  
た。

神社の中ではマチカネフクキタル君が何やらお祓いの言葉を唱え  
ており、それを聞いている者でいっぱいのものである。

目的としちや、やっぱり除夜の鐘を鳴らしに来たってのもあるんだ  
けど、一番の目的はそれじゃない。

「おい、トレーナー。何故ここに連れ出した？」

「ん？ いやあ、担当と親交を深めるのもトレーナーの仕事だからな。  
ブライアンって、こういうイベントにはあんまり行ってなかっただろ  
？」

担当ウマ娘である「ナリタブライアン」をこういうイベントに連  
れ出すことが一番の目的だ。

ブライアンは数いるウマ娘の中でも大分ストイックな方に属して  
おり、そして相当な戦闘<sup>バトルジャンキー</sup>狂でもある。



そんなブライアンを連れて息抜きついでに、こうして神社に連れ出しているのだ。

俺の後ろをついてくるブライアンにそう告げると、少し考えた後、不満のこもった表情でこちらを睨みつけてくる。

「……そうだ。子供の頃からこういうものには疎かった。だから、アంతアが言うように親交を深めるためにこう言った催しに来るのも理解ができる。だが、これに何の意味がある?」

「意味がある……?」

ここに来た意味というものを聞かれて、思わず首を傾げてしまう。そんな俺の様子を見て、ブライアンはため息をつきながら理由を告げた。

「……ここにあるのは記念品程度のお守りに、腹を満たすための饅頭と蕎麦しかない。アంతアの言う“親交を深める”と言うには不十分なものしかないんだ。なら、体を休めて明日のトレーニングに備えたほうがずっといい」

言葉をそのまま受け取るだけなら、ウマ娘——アスリート達にとっては当然というべきかもしれない判断だろう。

一番を競うために走り、学生の身分でありながらそこに命を懸けるほどの本能。

それが一際強いブライアンにとってはここに連れ出されたことに不満があるのだろう。

だけど、それじゃだめだ。

学生だからこそ、大人になつたら味わえない“経験”というものをしてほしいのだ。

学生時代はほぼ戦いに身を置いていて、世間一般で言うところの『青春』というものを味わえなかった俺みたくにはなつてほしくないからこそ、こうしてブライアンを連れ出したという考えが俺にはあった。

受け答えを間違えれば、即座に回れ右をして帰りそうなブライアンに俺はこう言う。

「ま、確かに……でもさ? こういうのに行っているんなことを

経験する方が “これから” の役に立つんじゃないか、と俺は思ってるんだけど……」

「これから……?」

「そ、ブライアンはまだ学生。今のうちは走ることに専念できるかもしれないけど、大人になったらそうもいかない。『社会』というものに嫌でも参加させられ、道理の通らないことだってたくさんあるかもしれない。そうになると、今までやっていたことが出来なくなるかもしれないし、制限されている自由がさらに狭まってしまう。だからこそ、今のうちに将来のことも考えつつ、こうしてできなくなるかもしれないことを今のうちにやっておくことで、大人になった時、後腐れなく生きていくことができるかもしれないんだ」

そう、 “これから” についての話題を出してみることであった。

最初の頃のブライアンならまだしも、それなりに長い付き合いとなった今ならばこの言葉も聞いてくれる……はずだ。

俺の話を聞いてくれたブライアンは、また考え込んだ後、ため息をついて話します。

「はあ……アンタの言い分は分かった。今日は大人しく楽しんでやるさ」

「！ よし！ まずはおみくじ引こうぜ！」

「アンタは子供か……」

納得してくれたブライアンの手を引いて、一直線におみくじを目指す。

今年もいい1年になりますように！

~~~~~

多くの人で賑わう神社の境内にて、私——ナリタブライアンは自身の担当トレーナー——彼方翔に手を引かれていた。

私の手を引いて一目散におみくじを目指すトレーナーの姿は、まる

で子供のようであり、今まであまり感じたことのなかった微笑ましきというものが湧いてくる。

周りは人込みに溢れており、出店からは活気のある声が聞こえ、この年納の記念として大量に稼ごうという魂胆が見え透っていた。

そんな時、そこらで恋人だと思しき二人組が手をつないでいるのが見えてしまう。

そのカップルは、互いにおみくじを引いて、その結果を見せ合っているようであった。

今までならそんなこと欠片とて気にしなかったが、今この瞬間だけは感じるものが違っていたのだ。

——「羨ましい」

そんな気持ち少しだけあふれ出し、すぐ気のせいだと首を振る。

だが、今度は視線がカップルから外れ、自分の手を引くトレーナーへと移ってしまった。

しかも今度は、心臓の鼓動が早鐘のように鳴り始め、人ごみの中にあるとはいえ、顔が無性に熱くなってしまう。

——「何故……今度はトレーナーに……？」

疑問が湧いてきたと同時に、あることが脳裏に過ぎる。

それはトレーナーを、何故、トレーナーと呼ぶようになったかについてのことだった。

~~~~~

『俺、異能力者を引退します』

そもそもトレーナーを初めて見たのは、とあるニュースを見ていた時のことであった。

知的な姉貴を真似しようと、子供ながらに意味の分からない単語が次々と出てくるニュースを食い入るように見て、半分も理解できずに目を回していた。

『臨時ニュースが入りました。先程、某国某所にて、異能力者である「彼方翔」氏が引退を発表しました』

そんな時に、ある男が画面に登場したのである。

それなりに高そうなスーツを着込み、車椅子に乗って、マイクを手に引退を宣言する男。

それが、トレーナーがトレーナーになる前に所属していた『神祇省』と呼ばれる、世界を守るために戦うという目的を掲げた軍隊を辞めるということを経営に発表した瞬間であった。

『ねーちゃん、この人誰？』

『確か……外国でテロが起きた時、民間人の救助に当たっていたっていうすごい人……だったかな？』

『そうなんだ……』

もちろん、そのことを知らなかった私は、姉に聞いてみたのだが、それでもあまり詳しいことは知れず、その時は「ただの有名人」という認識で終わった。

そして、それから月日が経ち、私は成長していった。

だが、ある時から「渴き」というものを覚えるようになる。

姉が怪我をしたのだ。

今まで、何度も自身より速い姉と競ってきたというのに、その一種の目標である姉が走れなくなったことで、私の心は満たされなくなった。

どんなに走っても、どんな相手と競っても、結局は、私の強さに心が折れて「熱」を消してしまった。

怪我から復帰した姉が通うトレセン学園でもそれは変わらない。

「渴き」が満たされることはなかった。

そんな時、

「君が、ナリタブライアン、だよな？」

「……なんだ。世界最速の男が何の用だ？」

トレーナー——彼方翔が私の前に現れたのだ。

彼のことは、噂だけで聞いていた。

そして、その名前にも聞き覚えもあった。

子供の頃、姉と見ていたテレビに映っていた有名人。大勢の民間人をその足で駆けつけることによつて救つてきた男。そして、

——「世界最速」という称号を持つ男。

当時の私は、噂を聞き付けたときから彼と競つてみたいと思つていた。

衰えたとはいえ、その速さに陰りはない。

もしかしたら、この「渴き」を満たしてくれるかもしれない。

そう思つて勝負を仕掛けようと学園中を探しても、都合が合わなかったり、逃げられてしまつたりなどしたせいで、話をする事すら出来なかつたのだ。

そんな彼が自ら話しかけてきたのだ。

私は、すぐさま勝負をしたいという気持ちに駆られる。

口を開こうとした瞬間、割り込むように彼がこういった。

「君、誰かと競争したいんだよね？　なら、俺と競つてみる？」

彼自身から、私に走ることを提案してきたのである。

「ああ、やらせてくれ」

すぐさま返事をした私は、逸る気持ちを抑えながらターフに向かつた。

体が奮える。

「渴き」が歯を？きだして私に訴えかけてくるが、それを黙らせて準備を整えていった。

スタート位置についた彼は、背を反らしつつ、レースの内容を提案する。

「よし。なら年末の大一番『有マ記念』の2500メートルで競おう」  
「……それがアンタの出せる全力の距離か？」

「有マ記念」の2500m。

数ある重賞の中でも、中長距離に位置しているそのレースは、猛者が集う一種の頂点だ。

しかし、有マ記念は中距離と長距離の中間に位置する距離で、勝つための速さと走り切るスタミナも要求される。

速さが足りてもスタミナがなければ失速し、スタミナが足りても速さがなければ単純に負ける。

しかも、彼は数年前に予後不良とまで言われた怪我を負っているのだ。

他人から見れば怪訝に思ってしまうのも仕方ない。

そんな私の様子を見て、彼はストレッチをしながらこう言った。

「大丈夫。こう見えても春の天皇賞くらいだったら走り切れると思うよ」

『春の天皇賞』

3200mという長距離を走るこのレースを走り切れる者は少ない。

そんな距離を走り切れると言ったのだ。

ただでさえウマ娘であっても走り切れない者がいるというのに、彼は走り切れるといったのだ。

そこに虚言など含まれておらず、真面目に言っているのだと察せられる。

あまりにも高い壁に、『渇き』が私を苛んでいく。

「そうか……なら、全力で行かせてもらおう」

「……負ける気はないからな」

ターフに並び立つ私と彼。

スタートの合図は、そこらにいたウマ娘に頼んだ。

「そ、それでは……いい、位置についてえ……よ、よーい——」  
「……………」

いつもなら、そのどんくさい合図に腹が立っていたかもしれないが、そんなことが気にもならないほどレースに集中できてしまう。

その時、ふと並び立つ彼の姿を横目で見たときあまりの異質さに目を見開いてしまう。

私はいつものように足を引いて構えるが、彼は違った。

俗に言う『クラウチングスタート』の構えを取り、目を瞑って合図

を待つ。

一般に、クラウチングスタートはヒトが行う競技での『短距離』に使われるもののはずだが……

「ド——きやっー」

高まった集中によって引き延ばされた時間の中、情報を整理していくが、それ以上に興奮が勝ってしまい、合図と同時に飛び出した。

真っ先にハナを切ったのは彼だった。

「な——」

私が基本的に行っている作戦としては、ほぼ必ずといってもいいほど相手が前にいる「先行」や「差し」を得意としている。

終盤まで足をため、一気に相手を追い抜く。

だから、相手が前を走っているということは日常茶飯事。

それも序盤なら当たり前のことだ。

だが、彼は前を走っているとかいう生易しいものではなかった。

砂埃を上げるほどの勢いのあるスタートダッシュだけで2バ身ほど引き離され、そこからは少しづつ引き離されていく。

第1コーナーを抜けたときには5バ身も引き離されていた。

逃げは逃げでも「大逃げ」もしくは、「破滅逃げ」といわれるほどの走り方。

ただそれだけなら途中でスタミナが切れ、ズルズルと垂れていくだけだろう。

——しかし、目の前にいる男はあの「世界最速」だぞ？

そう本能が告げてきたことで、私は早めのスパートをかけた。

今まで私は、様々な競争を経験し、そして相手の「灯」が消える度に走るのをやめてきたとはいえ、自身の「渴き」を満たすために、全力を相手にぶつけるためにトレーニングを怠ったことはなかった。

だからこそ、ここでスパートをかけても大丈夫だろうと思っていた。

だが、今までの予想を裏切って相手の「灯」が消えてきたのと同じ

く、相手は予想の上を行った。

「いい感じだね！ ならこつちも——！」

「……っ！ はあああああ!!」

こちらがスパートをかけてきたのを振り向きもせず察知して、今までバカみたいな速度で走っていたのに、彼はそこからさらにスパートをかけて一段、また一段と速くなっていく。

あれだけの速度で走っておきながらスパートをかけられる余力を残していたという事実にも動揺しそうになるも、これが“世界最速”だと改めて認識し、こちらも気合で加速する。

最終コーナーに差し掛かった時には、今まで感じたことがないような充足感があつたんだ。

圧倒的強者と競えている。

また、誰かの背を追いかけられている。

そんな感情があふれていたんだ。

でも、

「……っ!?!」

「なっ!?!」

先を走っていた彼の体勢が崩れたことで終わりを告げてしまった。加速している世界で分かったことは、短パンを穿いているせいで見える彼の足が赤く鬱血しており、内部出血を起こしているだろうということだった。

これでは走れないだろう。

無理もない。

走れないどころか、歩けるかどうかすら怪しかった怪我から復帰したんだ。

その後遺症は残っていたはずだろう。

それが今になって再発した。

当たり前だ。

ただでさえ長い距離である有マ記念の2500mを最初から最後までバカげた速度で疾走し続けていた。

ウマ娘でさえ、怪我をしていなかったとしても、途中で故障しそう



な速度を出していたんだ。

また、“灯”が消えてしまう。

私を満たしてくれるものが消えてしまう。

そう思っていた。

そう思っていたんだ。

だが、

「まだだあああああああああああああああああああああ!!!」

「!?!」

彼が叫び声のような掛け声を上げたかと思うと、また砂塵を上げながら再加速する。

その速さでまた突き放されていく。

その速さはスタートダッシュの時なんてもんじやない。

その速さはスパートをかけた時なんてものでもない。

文字通り全身全霊の力を込めて駆け抜けたのだろう。

5バ身まで迫っていた差は最終的にさらに2バ身引き離されて、7バ身差で負けた。

(負けた……か……)

今までは走り切る前に相手が諦めてしまい、“灯”が消えた瞬間から私も走るのをやめてしまっていた。

私という圧倒的に強い存在との戦いで、心が折れてしまっていた。

——でも、彼は最後まであきらめてくれなかった。

諦めるどころか私に勝った。

私に背中を追わせてくれた。

私の心が少しでも満たされるような感じがしたんだ。

この胸の高鳴り……久しく忘れていた感覚。

それを思い出してくれたのは、彼——彼方翔だ。

彼の方に振り向くと、足をかばうような体勢でこちらに歩み寄って来る。

「ははっ……っ！ おっとっと、大丈夫かい？」

「……それはアンタの方だ。足を引きずってるじゃないか」

「久しぶりに、全力を出したからね。……実は、第三コーナーあたりから限界だったんだ。足からプチっていう音がしてね。でも、君に負けたくなくて、ちよつと大人げなく全力で行かせてもらったよ。……たははっ、やっちゃまったよ。理事長に怒られちゃうなあこれ……」

そう笑って見せる彼からは、先程のような気迫がなく感じられた。意外とオンオフは分けるタイプなのだろう。

「それで、君の心は満たされたのかな？」

「……何故知っている？」

心が満たされる。

十中八九「渴き」のことだ。

基本的に姉以外には話したことはなかったので、疑問に思っただけ返してみる。

まあ、犯人は大体わかっているが……

「君が転入する前から、君のお姉さんとはちよくちよく話をしていてね。それで君のことを相談させてもらっていたんだよ」

「姉貴が……」

予想通り、姉のビワハヤヒデから相談を受けていたらしい。

やはり、こういったことが起きるからには姉貴が動いていたのだろ

う。

「んで、どうかな？ 君の心は満たされたかな？」

頭で姉のことを考えていると、彼がこちらを見据えてくる。

その問いに、私はこう返した。

「満たされてはいない。『渇き』は満たされたそばから飢えていく。だから、これだけでは満たされていけない」

そう、『渇き』は満たされたそばから飢えていく。

そして、前よりもその『渇き』が大きくなっていくから、いつしか満たされなくなっていくんだ。

今までずっとそうだった。

だけど、今日の前には『渇き』を満たしてくれる存在がいる。

彼は私に勝った。

それも圧倒的な力をもちながら、諦めない意思を持っている。

なら、今度こそ、それに追いついて見せるさ。

私の闘志の宿った視線を見て察したのだろう。

彼は肩を竦めた後、こう言った。

「だよね……君の渴望はそう簡単に満たされるものじゃなさそうだし、これからも走り続けるんだろう。なら、定期的に相手をしてあげる方針でいいかい？」

そう言ってくるが、今回の怪我は病院で診てもらわない限り、治りはしないだろう。

だからこそ、こう提案したのである。

「だめだ。それだけでは満たされない。アンタが回復するのに時間がかかる。その間、私は『渇き』っ放しだ。それに、アンタはまだ担当ウマ娘を持っていないだろう？」

「……そ、そうだけど？」

「なら、いい提案があるんだ」

「あ、なんか嫌な予感が……」

後退りし始めた彼の腕をつかみ、逃げられないようにしてから私は告げた。

「私のトレーナーになれ」

「……ちなみに拒否権は？」

「ない」

「デスヨネー……」

こうして、私と彼——トレーナーと契約を結んだのであった。

「何をしてるんですかトレーナーさん？」

「げっ!? ミノ……たづな!?」

「呼び捨てはこの際置いておきますが、後でどうなるか覚悟しておいてくださいね？ それよりも、その足はどうしたんですか？ って………ああ、なるほど、そうですか……」

「い、嫌な予感が……」

「ナリタブライアンさん、彼をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「？ 別にいいが」

「ありがとうございます。それと契約おめでとうございます。トウインクルシリーズに向けて頑張ってくださいね？ では行きますよ彼方さん」

「ちよ!? 足痛いんですけど!?」

「あなたが無茶したからです。これは理事長と一緒にお説教ですね」

「!? か、勘弁してくれミノル！ 足が限界なんだ！」

「ならもうちよつと力をセーブすればよかったですよ？ それをしなかったあなたが悪いんですよ」

「いやいやいやいや！ 本気出さなかったら負けてるって！ あの子結構強いからー！」

「私ならできましたけど？」

「片足生涯無敗が言うのは説得力がありますねえ！ あ、やめて！

どうせ正座させるんですよ!? 小学校の時みたい!? 小学校の時みたいに!?!」

「うるさいですよ」

「ガッ!？」

その後現れたたづなさんによってトレーナーは連れていかれたが、後日、正式に契約を結んだのであった。

~~~~~

『それでは皆様！ あけまして！』

『』『』『おめでとうございます!!』『』『』

「お、年明けたな」

「そうだな……あけましておめでとうトレーナー」

「あけましておめでとうブライアン」

現在は、トレーナーのスマホに映っていたとある年越し番組の年始めの挨拶を見ている。

もう前までの年は過ぎ去り、これから新しい年がやって来る。

体が震える。

「……？ 寒いのか？」

「いや、また一つ年を越えたということは、更に相手が強くなってくるからな。武者震いというやつだ」

「それならいいけど……」

今まで歯牙にもかけなかった相手がさらに強くなって立ち塞がってくることも意味していることに、高揚感からか体を震わせたということを手トレーナーに伝える。

「……一応、これ着とけ」

しばらく黙っていたトレーナーだったが、着ていたコートを脱いで私にかけてくる。

「いいのか？」

「大丈夫。俺は多少無茶してもいいけど、ブライアンは体を大事にしなきゃいけないんだぞ？ それに、俺はこの時のために「ホッ○イロ」を大量に貼ってきたからな」

「……フフツ、なんだそれは」

モッズコートを私にかけて、厚手のトレーナー姿になる。

トレーナーがトレーナー姿になる……会長様のやる気が上がりそうだな。

それはさておき、トレーナーのコートを羽織り、カイロで暖められた内側は確かに温かい。

特に指先が温かいということは、気づいていないだけでかじかんでいたのだろう。

それらを見越してトレーナーは私にコートをかけたのか……

やはり、トレーナーは私のことをよく見えている。

『全力の出し方とか、精神的なものは俺に何でも言ってくれ。そういうことに限っては俺の領分だ。……勉強はハヤヒデ君にお願いね。俺、最近の授業はよくわからん。特に社会情勢とか』

『ブライアン、飯食いに行こ——逃げるなあ！ 逃げるな卑怯者お！ 今度こそサラダバーは全部制覇してもらおうぞお！ 逃げるなあ！』

『ブライアン！ 弁当を作ってきたんだ！ 自信作だぜ！ 肉もあるし、野菜もある！ さあ、たんとお食べ！』

『ブライアンは焼き鳥って何派なんだ？ 俺？ 俺はねぎまかな？』

野菜もとれるし、何よりうまい！ ……なんだその得体のしれないものを見るような視線は？』

『助けてくれブライアン！ ゴルシに追いかけてらるる！ 匿ってく

——おのれゴルシイ！ 貴様とは契約しないと何度言わせたら分かるんだあ！ あ、スーパークリーク君だ！ 今だあ！』

トレーナーと契約してからは、今までの「渴き」が満たされていく感覚が多くあった。

そして、「渴き」が満たされていくときの感覚とは別の『胸の高鳴り』も。

この感情はどういうものか理解している。

これは「恋」であり「愛」だ。

今まで、感じたことなどなかった感情。

トレーナーと一緒にいるときだけこの胸の高鳴りは起きている。

だが、トレーナーが他のやつと一緒にいると、「渇き」とは別の感覚が起きてしまった。

ここまでそろっているのなら、流石の私でもわかっている。

私はトレーナーに『恋愛感情』を抱いていると。

だが、トレーナーは存外鈍感なのかこちらの気持ちなど気づきやしない。

それに、私はもう高等部。

トレーナーとトウインクルシリーズを駆け抜けるのもあと少しだ。

最初の頃は、ここまで大きな存在になるとは思っていなかったがな……。

ウマ娘というのは、愛が重い種族らしいのだが、私も、思っている以上に独占欲が強い方らしい。

だからこそ、

「トレーナー」

「ん？ どうしたブライアン？」

私は「渇き」を満たすためにアンタと契約して、そしてアンタは「渇き」を満たすためだけの存在ではなくなった。

そうしたのは私じゃない。

アンタだ。

なら、責任は取ってもらおうぞ？

だが、まあ……

「……なんでもない」

「そっか。んじゃ、とつとと帰って、きつちり休むぞ」

今はこの気持ちを伝えなくてもいい。

しかるべき場所というものもあるからな。

そうだな……。

今年の有マ記念がいいだろう。

うん、それがいい。

だから、その時に好きだと伝えよう。

大勢が見る前で告げるんだ。

逃げるなよトレーナー？



## 百年に一人の美少女と神話に残った韋駄天

『ウマ娘』。

彼女たちは、走るために生まれてきた。

ときに数奇で、ときに輝かしい歴史を持つ別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る――。

それが、彼女たちの運命。

この世界に生きるウマ娘の未来のレース結果は、まだ誰にもわからない。

彼女たちは走り続ける。

瞳の先にあるゴールだけを目指して――。

「なくって、詩っぽく言ってみただけど、それ以外のこともあるんだよなあ……」

どうも皆さんこんばんは。

彼方翔という名前の一般トレーナーです。

突然ですが、俺は今非常に困っています。

それは……。

「ん〜♪」

俺の隣に座る美少女がずっとくっついていてのことです。

しかも俺の腕に抱き着いてきます。

やわらかい感触が伝わってきます。

いや本当に何この状況!?

なんでこうなった!?

「あー……シチー? 離してくんない?」

「ん? 離すわけないじゃん。女の子を外で待たせた罰だし」

そう言いながら更に強く腕を抱き締めてくる。

いやマジで柔らかいんですけど!? いい匂いするし!

顔面偏差値高すぎる美少女に抱き着かれてるとか、実際役得ですし!

無理に振り払うとか考えられませんが、周りの目がですねえ!?

「えつとですね……」

「なに？　ちゃんとやってくれないとわからないんだけど？」

「……ナンデモアリマセン」

「うん、よろしい！」

満足げに笑うシチーこと。『ゴールドシチー』。

……これ絶対わざとやってるよね。

今日一緒に出かけることになったきっかけは、昨日に遡る。

~~~~~

トレーナーという仕事特有の激務に耐えながら、ミノ……たづなさんから渡された仕事をさばいていくことを続けていた。

そんな時、トレーナー室のソファで暇そうにスマホをいじっていたシチーが突然こんなことを言い出したのだ。

「ねえ、明日暇だよね？」

「藪から棒にどうしたシチー？」

「いや、アタシは明日仕事も入ってないってマネージャーが言ってたし、トレーニングもないでしょ？　だったら暇かなと思って」

確かに彼女の言う通り、明日は休みになっている。

とはいえ、仕事がないわけではない。

例えば、レースに出走予定のウマ娘達の確認作業に、トレーニングの見直しがある。

もちろん、シチーにも出走予定のレースはあるのだが、少し調整すれば大丈夫だろうということでオフになったらいい。

そしてなぜか俺の仕事場であるトレーナー室に来たわけだが……。

まさか暇かどうかの確認とは思わなかった。

「まあ予定はないけど」

「じゃあさ、アタシと一緒に出かけようよ」

「は？？」

思わず変な声が出た。

シチーといえば、モデル業をしていることもあって忙しいはずなのだが……。

それをわざわざオフにしてまで誘う理由がわからなかった。でも、せっかくのお誘いだし断るのも悪い気がする……。

それに彼女と二人で出かけることなんて今まで一度もなかったの  
で興味もあつた。

だから、つい了承してしまった。

「ふーん、そっか。なら決定ね♪」

すると彼女は嬉しそうな顔で笑つた。

普段あまり笑顔を見せない彼女が見せる貴重な表情なのでドキツ  
とした。

「それでどこ行くんだ？」

「うーん……そうだなあ……」

しばらく考えていたシチーだったが、何か思いついたようにポンツ  
と手を叩いた。

「決めた！ 遊園地行こー！」

「……はい？」

~~~~~

こうして俺はシチーの決定に流されるまま、東京郊外の某所にある  
大型レジャーランドに来ていた。

……のだが、なんと遅刻してしまったため、入場ゲートの前で待つ  
羽目になってしまった。

いやだつてしょうがない!? 仕事終わって急いで来たのに待  
ち合わせ時間過ぎてるとか!

ああ……やべえよ……予定の時間から、二時間も遅れちまったよ  
……。

あ、でもシチーは寝坊癖があるから、まだ大丈夫! ……なはず。

「あのー……お兄さん？」

「はい？」

不意に声をかけられて振り返る。

そこには中学生ぐらいの少女がいた。

帽子を深くかぶっていて、綺麗なプラチナブロンドが特徴的な少女だ。

「あなたもこの遊園地に遊びに来てるんですか？」

「あー……いや、ちよつと人を待ってて……」

「あー……なるほどです」

そう言つて気まずそうに目をそらす。

あー……これはあれだわ。

俺と同じパターンだわ。

「……なんかごめんなさい」

「いや謝る必要ないですよ？ お互い様ですし」

「ええ……ありがとうございます」

なんだか妙な雰囲気になりました。

つていうか、日本なのにプラチナブロンドの子とか珍しいな？

シチーと同じ感じのウマ娘なのか？

「そーいや、待ってる人つて誰なんですか？ 良ければ一緒に探しま

すが……」

「え？ いいんですか？」

「はい。このままここでボーっとしてても仕方ないし」

「それじゃお願いしますー」

元氣よく頭を下げる彼女についていくことにした。

しかし、情報がないんじゃ探しようがないな……

とりあえずは、その探し人の特徴を聞いてみることにした。

「あの、その人つてどんな感じの人なんですか？」

「うーん……髪の色は黒っぽいですね。あと身長は180cmぐらいで、ちよつと戦闘狂……？ というよりは、疾走狂って感じの人です」

「……それだけ聞くと、かなり危ない人に聞こえるんだけど？」

「いえ、優しい人なんですよ?」

それは余計に怪しい。

「まあ、見た目は怖いかもしれないですね。でも、本当はすごく優しく頼りになる人で、私の憧れなんです」

「へえ……ちなみに他の特徴的なところは何かね? 服装とか性格とかでもいいんで」

「服は……普通のジーンズに黒のシャツを着てることが多いと思います。仕事着には青いジャージを着てたかな? あと、性格に関しては……とにかく走ることが大好きで、レースを見るのが大好きな人だと思います。だから私もそんな走りをしたくてトレセン学園に入ったんですから」

へえー……。

服は普通のジーンズに黒のシャツ。

仕事着には青いジャージ。

んで、とにかく走ることが大好きで、レースを見るのも大好き。

んで、彼女はそんな人みたいに走りたくてトレセン学園に入ったと……。

あつれれ〜? 丘ピーポー?

心当たりがバリバリするな〜?

「ちなみにその人はウマ娘だったり?」

「いいえ? でも、ウマ娘みたいにすつごく速く走ることができるとですよ」

おおっと、とどめの追加情報が入ったぞ〜?

青いジャージ……ウマ娘みたいに速く走れる……。

ハイ、確定しました。

正真正銘、俺ですね。

なあ〜はっはっは!

はあ……。

「どうしたんですか? 遠い目をして……」

「……穴があつたら入りたい気分だよ。んで、いつまで他人のふりしてんだ? “シチー”?」

「……気づくのが遅いんだよバカトレーナー」

シチーは不機嫌そうな顔でこちらを見つめてきた。

いやだってしようがない!!

完璧すぎる変装だったじゃん!

むしろどうやって気づいた俺を褒めてほしいぐらいですわ!

ええ! ヒントが大量にあつたからですけどね!

「つたく……アタシの完璧な変装を一発で見破れないとか、どんだけ鈍感なわけ?」

「いや、だってお前が今着てるその服は見たことなかったし、そもそも今日は休日だしな。それに俺は仕事中心ならともかく、プライベートだと結構抜けてるらしいし」

「あーはいはい。そういえばそうだったわ。それで、なんでこんなところにいるのか説明してくれる? まさか寝坊したわけじゃないよね?」

「……その通り過ぎて返す言葉がございません」

「まったくもう……。まあいつか。とりあえず入場ゲートに入ろっか。話はそれから!」

そう言つてシチーは手を差し出してきた。

……なんだこの手は?

「え? 何やってんのアンタ? 早く手繋いでよ」

「What……?」

「なんでネイティブに……。……はぐれたりしたら面倒じゃん」

「あーなるほど。確かにそうだな」

そう言つて彼女の手を握ろうとしたのだが、少し躊躇してしまつた。

なんとというか、その……。恥ずかしい。

「なに? 嫌なの?」

「そういうわけではないんだけど……」

「はあ……。別にいいけどさ。それと、遅刻したペナルティもつけさせてもらうからね?」

「はいはい、わかったよ」

こうして、俺たちは遊園地の中へと入っていった。

ちなみに、入場の際にお金を払うシステムらしく、入場料として2000円ほど取られたの言うまでもないだろう。

そして、二人分の入場料を払ったのは俺だということも言うまでもないだろう。

いや、ね？

貯金は大量にあるし、今日も万が一に備えて五万は持つてきてるし大丈夫なんだけど……。

これがペナルティかあ……。

「あれ程度がペナルティとか、そんなわけないでしょ？」

「……ナチュラルに思考を読むな。んで？ 本命のペナルティはなんぞござんしょ」

「ふふん、それはねえ……。まずは絶叫系を全部制覇すること！」

「はっはっは、無理ゲーキタコレ」

「安心して。これでもちやんと難易度の低いやつを選んてるから」

「それを聞いて安心できると思うか？」

「思う」

「俺に人権は？」

「無いに決まってるでしょ」

「デスヨネー……」

結局、俺は拒否権もなく全ての絶叫マシンに寄せられることになった。

ちなみに、シチーは乗っている最中ずっと大笑いしていた。

俺が乗り物酔いをして吐き気と戦う姿を見ながら……。

ちくしょうめ！

最近あんな感じの体験しなかったからか、余計に体調が悪くなっちゃまったっていうのに！

その後、シチーが乗りたがっていたコーヒーカーップに乗って、ようやく罰ゲームは終了した。

ちなみに、彼女は大満足そうな顔をしている。

「うーん……いい汗かいた！ トレーニングだけじゃなくて、こんな

感じのもいいかもね。トレーナー。今度から休みが入ったら連れて行ってよ」

「勘弁してくれ……」

「えー、絶対楽しいって!」

「俺には楽しめなさそうだから却下だ」

「ちえーっ」

ぶーつと頬を膨らませているシチーの姿を見ると、思わず笑みがこぼれてしまった。

やっぱり彼女は笑ってた方がいいな。

「……ん? 何にやけてんのきトレーナー?」

「なんでもない。ほら、次行くぞ?」

「はいはい」

その後は、お化け屋敷やジェットコースターなど色々なアトラクションを楽しんだ。

~~~~~

アタシ——ゴールドシチーの隣に立つトレーナーの顔を見てみると、いつもより表情が柔らかく見えた。

それだけ楽しんでくれてるんだろうなって思って、ちよつと嬉しかったり。

それにしても、さつきはアタシのことを女として見てくれないのかと思ってイラついちゃったけど、よく考えたらそんなことなかったみたい。

だって、アタシと一緒にいる時の彼は結構優しい顔になってるもの。

……うん、決めた。

今日は思いっきり甘えてやる! そう心に決めてからの行動はとも早かった気がする。



まずは手を繋いで、次は腕を組んで、その次は抱きついて……みた  
いな感じでどんどん積極的に行動していった。途中からなんか楽し  
くなっちゃったし。

その結果、彼が結構あたふたしながら照れてるところを見れたの  
で、これはこれでアリかなと思ったりした。

そんな、私にとって大切なトレーナー——彼方翔との出会いは運命  
的だったと思っている。

だって、あの時トレーナーが追ってきてくれなかったら、私はここ  
にいなかったかもしれないだもん。

~~~~~

他の才能のあるウマ娘と違って、私の走る才能は凡人レベル。

だから、選抜レースの時には目を付けられることなんてなかった。  
あるとしたら、自分のルックスだけ。

それだけだった。

選抜レースで負けて、むしろくしゃして仲のいいトーセンジョーダ  
ンに並走を付き合ってもらったんだけど、結局は晴れなくて、マネー  
ジャーに止められた。

それで、マネージャーとちよつと口喧嘩をしかけたけど、ジョーダ  
ンが機転を利かせてくれて、その日は何とかなったんだ。

でも、次の日にある意味での転機が訪れる。

「いや〜!! やっぱ素晴らしい走りだね、シチーちゃん!」

「は……? 誰、アンタ」

「見ての通り、トレーナーだよ! 君をスカウトしに来たんだ!」

「え、スカウト? ……マジ!」

いきなり現れた男に困惑しつつも、心の中では喜びを感じていた。

まさか、自分がスカウトされる側になるなんて思わなかったから  
……。

「っ、しゃあああ……！ よし、よしっ、よしよしよしっ……！ 正直  
ビミョーな結果しか出せなかったし、また次回かなーって思ってたけ  
ど……来たじゃん、スカウト！ っしゃあ！」

その時はうれしすぎて、校舎裏で一人喜んでいたんだ。

スカウトをしてくれたこともあるんだけど、一番はやっぱり……

「……ちゃんと、いたんだ。『アタシ』のことを、ちゃんと見てくれる  
人」

初めて、自分を見つけてくれた人がいたこと。

それが何よりも嬉しくて、ずっと噛み締めていた。

「こっからだ。こっから、アタシはこの脚で……ホントのアタシで、  
走ってくんだ……！ G1制覇だってなんだって、やってやる！ そ  
んで今度こそ、ホントの自分の力でちゃんと名前を刻むんだ……！  
……って、浮かれてる場合じゃねーな。選抜レース5着はねーわ、マ  
ジで。トレーニング戻ろっ……」

浮かれそうになっていた心を律して、トレーニングに戻ろうとした  
時だった。

「って、うわっ!？」

「フアッ!？」

建物の陰からこちらを見ている見知らぬ男に気が付いたんだ。

見知らぬ……ってわけではなかったけど、それでもほぼ初対面。

そして、噂だけは知っている男。

それが目の前にいる男——彼方翔だった。

アタシが一人で喜んでるのを見られたことに恥ずくなったり、ア  
タシのを見ていた理由を聞いたりしていたら、いつの間にか仲良  
くなっていた。

なんというか、ウマが合ったっていうのかな？ この人となら一緒  
にいても苦にならないだろうなって思ったんだよね。

それくらい、彼とは馬が合うと感じた。

でも、私には既に担当トレーナーがいるし、そのことも知っている  
ようで、トレーナーはガチで凹んでいた。

まあ、気楽に話せる友達ぐらいにはなれるんだろうなあ……とは

思っていたよ。

その時までには……。

「——じゃあ、なにか。アタシはトレーニングするなってか!？」

「いやいや、そうじゃないって。ただ筋肉をつけて今のプロポーションを崩したり、体に傷のつくようなことはしないって話。それよりフォームをもっともつと磨こう! やっぱキレイに走ってこそでしよ、君は。あ、ウイニングライブの練習もしないとな!」

「ッ……!」

彼の口から出てきた言葉は、アタシにとって許せないものだった。

確かに今の体型を維持するのは、モデルとしては正解だろう。

だけど、走ることは考えられていなかった。

でも、ここでキレてちや、必死こいてつかみ取れたものがなくなってしまう。

だから、怒りを収めて話の続きを促したんだ。

「……で、それで、速くなれるわけ。レースには勝てるわけ?」

でも……。

「あ、そういうこと? 大丈夫大丈夫、そこは俺が上手くやるよ。要は、勝てるレースだけ走ればいいんだから。そしたら、君の名声に傷はつかない! 誰よりも美しく走って勝つゴールドシチーに、みんな目を奪われる! 完璧なプランだろう?」

「……………」

この言葉で私は理解した。

結局のところ、こいつもアタシを見ていなかった。

アタシの外見だけを見て、それを伸ばそうとしてくれているんだってことが。

ぺらぺらと望んじやいないことを話し続けるトレーナーの言葉は、アタシの頭には入ってこない。

「大丈夫だって、全部俺に任せてくれよ! 君のイメージも、輝かせ方も、全部俺がきっちり考えてやるからさ。後は指示通りにやってくればばいい! それが君のためにもなる。トレーナーって、そういうものだろう?」

もう、我慢の限界が訪れようとしていた。そんな時に……

「ふざけんじゃねえ!! 何がトレーナーだあ!! そんなもん、ただのエゴイストだろおが!!」

コース全体に響く声が発せられた。

「は……? あ、アンタ……なんで……?」

そこにいたのは、アタシが喜んでいるときの独り言を盗み聞きした男——彼方翔さんだった。

「……おい、こんなところに世紀の有名人様が何の用だ? 部外者は勝手に口を挟まないでくれるか?」

「あ、あ、ん? 部外者じゃねえよ! 彼女は! 俺の! 話し友達だ!」

「……へえ……で、その話し友達が何をしに来た?」

「さっきまでの話を聞いてたらいてもたってもいられなくなった! それ以外は考えてない!」

バカとしか言いようがない発言をしながら、矢継ぎ早に言葉を告げていく彼方さん。

「俺達トレーナーは、願いを押し付ける立場にあるんじゃない! 彼女達の願いをかなえるためにいるんだ! それを言うに事欠いて、指示通りにしろだとお!! ふざけんじゃねえ!!」

「……」

この人は本気で怒っていた。

アタシのために、ここまで怒ってくれた人なんて初めてだった。

そして、この人がアタシの担当になってくれればって、心の底から思えた。

「あのさ、悪いんだけど、帰ってくれない? 俺は彼女と話をしてるんだからさ」

「できてるわけねえだろ!! 別視点から見たコミュ障かテメエ!!」

「あ、あ!!」

「お、お!!」

しばらくは呆然としていたけど、だんだんと理解が追い付いてきて、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまう。

そして、その場から逃げ出したんだ。

逃げだした先——河川敷で、一人黄昏るアタシ。

アタシはどうしてあんなにもショックを受けたんだろうか。

今まで自分のことをちゃんと見てくれる人がいなかったからか？

……違う。

今ならわかる。

今まで諦めかけていた願いを突き付けてくれたからだ。

それも真っ直ぐに。

アタシは走りたいと思っていた。

でも、それは誰かに強制されてするものではなくて、自分で決めたことだったはずだ。

でも、その気持ちすら忘れてしまっていたのかもしれない。

「……ふっ……」

自然と笑みがこぼれてくる。

アタシは馬鹿だなあ……。

あの時みたい夕焼けに染まった空を見上げていると、誰かが走ってくる音が聞こえる。

「ハア……ハア……み、見つけたあ……！」

「……またアンタなの？ あの子、いー加減うざいよ。こんなところまで、なにしに来たわけ？」

息も絶え絶えの彼方さんに、アタシはそっけなく聞いてみた。

「ハア……ハア……フウ……君の、話を聞きたいんだ……」

「……つまらないことを話すけど、それでもいいなら聞いて」

そう言つて、アタシは話し始めた。

アタシのルーツを。

アタシは見てくれだけの空っぽなお人形……そう自分のことを評した。

モデルの仕事をやり始めてしばらくは楽しかった。

求められる表情とか、仕草とか、上手くできたら褒められたし、誇らしかった。

だから、期待されている通りに、自分を作つて、演出して——。

けど、ある日街中で、自分がデカデカと出てる広告を見て、ふと思っ  
たんだ。

「あれ、誰だろー」って。

「ガツチガチのイメージで塗り固められて、おキレイにすましてる  
アイツ、誰だろー」って。

でも、すぐ気づいた。

あれが『ゴールドシチー』なんだって。

誰だか分かんないのは——突っ立って眺めてる、アタシの方だつて  
さ。

そしたら無性に怖くなって、叫びだしたくなって、とにかくじつと  
していられなくなって。

わけも分からず走って、走って、メチャクチャに走って——

そして、見たんだ。

今みたいな夕焼けを。

全然知らない場所まで来て、何度も転びまくったから足とかドロド  
ロだったし、お気に入りのワンピースはボロボロ。

でも空は、わけわかんないくらい綺麗で、その時、思ったんだ。

ああ、今、アタシは『アタシ』だって。

あしはくつつつそ痛かったし、肺はぶっ潰れそうなくらい苦しく  
て、でも——今アタシは、ちゃんと『アタシ』なんだって知ることが  
できた。

「——だからアタシは、トレセン学園に来た。走って走って『アタシ  
』になるために。『アタシ』の証をみんなの記憶に刻むために。け  
ど——」

そこまで話し終えたところで、車の音がした。

振り向くと、そこには一台の車が止まっていて、そこから降りてき  
たのはマネージャーだった。

その後は、仕事の時間になったってことを知らされてから、マネー  
ジャーの車に乗り込み、彼方さんに続きを話すことができなかつたん  
だ。

車に揺られてる間も、「自分にレースは向いていない」ということ

が、ずっと心の中で反響し続ける。

もう、諦めてしまおうかと思っていた。

でも……。

「ゴールドシチー!!」

「はっ!? え、あ、アンタ……なんで……!?」

突然の大声に驚き、そちらを見ると、彼方さんが立っていた。

さっきの河川敷からここまで大分距離があるはずなのに、私達が到着して10分と経たずに走ってきたのだろう。

先程以上に肩で息をしていて、足は震えていた。

「ハア……ハア……お、俺には……君が何を抱えてるのかわからない! でも……それでも!」

彼は叫ぶように言った。

「君はもつと……素直になっていいと思う!」

「なっ……!」

「俺は君の走りが好きだよ!! だから、そんな風に自分を卑下しないでくれ!」

「っッ!」

真っ直ぐな瞳がアタシを貫く。

今までこんな目で見られたことはなかった。

ホントの意味で、初めてアタシのことを見てくれた人がいた。

アタシのために怒ってくれていた。

それが、嬉しくて、思わず涙が出そうになる。

だからアタシはこう言った。

「なんなのそれ……意味わかんない……ほんつと、バカじゃないの?」  
泣き笑いのような表情を浮かべながら、アタシはそう返すことしかできなかった。

その後、結局押し切られて先に折れたアタシが彼方さんと契約を結んだことで今に繋がる。

~~~~~

あの時、トレーナーの一言がなかったらどうなっていただろうか。きつと今も、どこかで燻っていただろう。

だから、アタシにとって、あの人は恩人で、憧れで、そして――。

「ねえ、トレーナー」

「ん？ なに？」

「ありがとね」

「……」

そう言つて、アタシは笑つた。

その笑顔を見た彼の顔が真っ赤に染まっていく。

まったく、いつまで経つても慣れないんだから。

でもまあ、そこが可愛いんだけど。

でも、明日からはアタシ達はいつも通りの関係に戻っていく。

アタシは担当ウマ娘とモデルに。

トレーナーはアタシのトレーナーに。

でも、それだけじゃ代わり映えがしない。

だから今度はアタシの方から仕掛けることにした。

アタシは彼の耳元まで顔を近づける。

そして、そつと囁いた。

「実をいうと、アンタのこと嫌いじゃないからね？」

「え!?! ちょ、シチー!?! それ、どういうことだー!?!」

慌てる彼を横目にアタシは駆け出す。

そしてそのまま振り返らずに手だけ振つて、その場を後にした。

今は互いに忙しいかもしれない。

でも、いつかは伝えるよトレーナー。

その時まで、待つてね？



## 漆黒の摩天楼と蒼い流星

年も明け、そろそろ慌ただしくなってくる頃。

「うう〜……悪霊退散、悪霊退散……ナンマイダー、ナンマイダー……」

薄暗くなつた廊下を一人の男というか、俺——彼方翔が念仏を唱えながらビクビクとした様子で歩いていく。

何故こんなにも怯えているのかといえば、ここ最近、とある少女と関わり始めたことが原因なのか、よく心霊現象——霊障に悩まされているのだ。

そのとある少女というのが——

「トレーナーさん？」

「ほわあっ!？」

突然背後から声をかけられて思わず奇声を上げてしまう。

振り向くとそこには、長い黒髪をストレートにした少女が立っていた。

この子の名前は「マンハッタンカフェ」。

俺のようなヒトとは違う『ウマ娘』という種族の少女だ。

彼女はトレセン学園と呼ばれる場所で勉学やトレーニングに励んでいるのだが、俺は彼女が通っているトレセン学園にトレーナーとして籍を置いている。

そして今日の前にいる彼女の専属トレーナーでもあるわけだが……

「どうしたんですか？ 幽霊でも見たような顔してますけど……」

「い、いや別に何でもなし！ ただちよつと考え事をしていただけだ！」

「そうですか。それならいいのですが……」

「あ、ああ大丈夫だから心配しないでくれ」

「わかりました」

そう言つてマンハッタンカフェは静かに微笑む。

……うん、可愛い。

……って違う！

なんで夜中なのにカフェが出歩いてるんだ？

確か今日は寮長であるヒシアマゾン君の見回りがあったはずなんだが……。

「ところでカフェ、君はこんな時間に何やってたんだ？」

「私はいつも通り『お友達』に連れていかれただけです。そうしたら偶然トレーナーさんの後ろ姿が見えたもので、少し気になって追いかけてきてしまいました」

「そ、そうなのか」

「はい。それで何をされていたのですか？」

「えっと、実は……」

俺はさつきまでの出来事を話すことにした。

最近、自分の身に妙なことが起こっていること。

その原因を探るために、こうして夜に学園の見回りをしていたことを話すと、何故かカフェは笑みを浮かべていた。

「ふふつ、それはきつと私のせいですね」

「どういうことだ？」

「私がトレーナーさんのことを好ましく思っているからです。なので、『お友達』が『皆さん』と一緒にになって色々としてしまっているんだと思いますよ」

「そういうものなのか……？」

「はい。私も初めて会った時から、ずっとトレーナーさんのことは好きですよ」

「ちよ、いきなりそんなこと言うんじゃないやありません！」

慌てていると、何故だか背筋が寒くなって来る。

「あれ？ なんだか背筋がぞわぞわと……」

「寒いんですか？ じゃあこうすれば暖かいですよね」

「フアツ!？」

そう言うなり、マンハッタンカフェは自分の身体をびったりとくっつけてきた。

胸元を感じる柔らかい感触と温かさを感じながら、俺は必死に平静

を装いつつ口を開く。

「か、カフェエ！　こういうことをしたらダメだって何度も言っただろう!？」

「どうしてでしょうか？」

「どうしても何も……年頃の女の子がこんなことをしちやいけません！　もつと自分を大事にするべきだ！」

「確かに普通の人ならそうなんでしょうけど、今のトレーナーさんには有効みたいですわね」

「へっ？」

意味がわからず首を傾げると、マンハッタンカフェはさらに顔を近づけてくる。

そして耳元で囁いた。

「トレーナーさん……憑りつかれていますよ？　早くしないと大変なことになるます」

「!？」

その言葉を聞いて、すぐさま周囲に目をやる。

すると、廊下の向こう側に何か黒い影のようなものが見えた。た。

廊下の向こうだけじゃない。

そこかしこに明らかやばそうな気配を漂わせている影が見えた。

それを確認してから俺は急いで駆け出す。

「カフェ、君も一緒に来てくれー！」

「はい。どこまでもついて行きます」

こうして俺達は夜の校舎へと走り出したのである。

~~~~~

夜間の校舎をたった二人、手をつないで駆け抜けていく。

私——マンハッタンカフェの手を握っているトレーナーさんは、何

かに追い立てられるような必死の表情で先を行く。

「トレーナーさん、もう少しゆっくり走った方がいいですよ」

「わかってるんだけど、止まれないんだ!」

「どうやら、本当に危ない状態らしい。」

普段の彼からは想像できないぐらい余裕がない。

『お友達』が私を誘導してくれていなかったらどうなっていたか……

「もうすぐで部室です。あと少し頑張ってください」

「了解!」

走るスピードが上がる。

息を切らしながらも、何とかトレーナーさんは目的地である『部室』と書かれたプレートが付いた部屋に辿り着いた。

「はあ、はあ……ここだ」

「そうですね……」

「よし、開けるぞ」

「待ってください」

扉に手をかけようとする彼の手を止める。

「どうした?」

「この部屋の中に何かあるのかわかりません。慎重にいきましょう」

「……そうだな」

私の忠告を聞いたトレーナーさんは、ゆっくりとドアノブを回す。

そして——何故か勢いよく開いた。

「へ?」

「やっぱり……トレーナーさん、ここはダメです。出ましょ——」

言い終わる前に、トレーナーさんの足が部屋の中に入っていた。

それを見た瞬間、私は何故かトレーナーさんの背中を押して自分も入ってしまう。

その直後、バタンツと音を立てて背後の扉が閉まった。

「うおっ!」

「きゃっ!」

思わず悲鳴を上げる。

幸いにも、私はトレーナーさんの上に倒れ込むような形になり、怪我はしなかったが……

「いてえ……」

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ。それよりさつきのは一体……」

「わかりません。やはり、『皆さん』のせいでしょうか？」

「ああ……それしか考えられそうにないな。……つたく……異能力者引退したと思ったら、今度は幽霊に絡まれるのかよ！」

頭をガシガシと搔いているトレーナーさんは、立ち上がって扉を開けようとする。

しかし、ガチャガチャとドアノブをひねる音が何度も響いたが、一向に開く気配がない。

それを見たトレーナーさんは、ため息をつくと私に向かってこう言った。

「ドアも開かねえな……とりあえず、今夜はここに泊まるしかないか……。ごめんな、カフェ。こんなことに巻き込まれて」

「いえ、気にしないでください。それにしても、困りましたね」

「ああ。でも、一晩経てば元に戻れると思うし、今日はこの部屋の中で過ごそう。あー、せつかく明日休みなのに」

「仕方ありませんよ。『皆さん』は気まぐれですから」

苦笑しながらそう言うと、トレーナーさんも同じように笑ってくれた。

その後、私達はひとまずソファアに座って落ち着くことにした。

明かりのついた部屋でトレーナーさんの隣に座ると、彼は申し訳なさそうな顔をしながら私の方を見る。

「カフェ、すまん。カフェの方も明日は休みだろ？ 折角の休日だったのに」

「いいんですよ。それよりも今はこの状況をどうにかすることの方が大切ですから」

「ありがとう。……にしても、これからどうするかな？」

トレーナーさんがそう言った直後、不意に扉の向こう側から物音が

聞こえた。

ドンドンという叩くような音に続いて、「助けてくれ」というような声が聞こえる。

「……………カフエ」

「出てはいけませんよ？　今、トレーナーさんは危ない状態なので」

「わ、わかった…………」

不安そうな顔をしているトレーナーさんに笑顔を向ける。

すると、安心したように肩の力を抜いてくれた。

その姿を見ていると、胸の奥が温かくなるのを感じる。

(…………これはきつと、トレーナーさんを信頼してる証なんでしょうね) そんなことを考えながら、再び扉の向こう側へと意識を集中させる。

先ほどよりも強く叩かれているようだが、こちらの部屋までは届かないだろう。

「…………トレーナーさん」

「分かっている…………この平和な日本、それもトレセン学園で助けられて言うのは担当ウマ娘に引きずられているトレーナーしかいないからな。たとえ、今が卒業に近い時期だとしても、だ。こんな夜中にそんなトレーナーがいるのはおかしい…………とは言い難いのがなんともなあ…………」

「はい…………」

トレーナーさんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。

ウマ娘とは愛が重い種族として知られている。

それは、この世界の常識だ。

だからこそ、こういうことはよくあるらしいのだが…………

「とりあえず、扉の外にいる奴は放置しよう。俺たちはここで大人しく朝を待つべきだ」

「そうですね」

そう言って、私達はお互いの顔を見合わせて笑う。

いまだ扉の向こう側からは、誰かの助けを求める声が聞こえるのだが、それを聞かなかったことにするぐらいには慣れてしまった。

「カフェ、君がソファーを使いなさい。俺は寝袋を使うから」  
「……えっ、私が床で構いませんよ?」

「女の子に地べたで寝かせるわけないだろう。ほら、早く」  
そう言われてしまうと、何も言えない。

私は小さくお礼を言うと、トレーナーさんの言葉に甘えることにした。

私はトレーナーさんから渡された毛布にくるまってソファーの上に横になる。

トレーナーさんが部屋の隅に置いていたリュックサックの中から寝袋を取り出すと、そのままその中に入り込むと、静かな時間が流れる。

……先程から、『お友達』の気配もしませんし、今日はなんだかいつもと違う気がします。

「カフェ、大丈夫か?」

「はい……」

「なら良かった。じゃあ、電気消すぞ?」

「お願いします……」

パチツとスイッチを切る音が聞こえる。

そして、部屋の中が暗闇に包まれた。

「トレーナーさん、起きていますか?」

「ああ、起きている。眠れないか?」

「いえ……そういうわけではないのですが……少しだけ話をしてもいいですか?」

「もちろん。俺も眠くないしな」

私は寝返りを打って、トレーナーさんの方に体を向けた。

トレーナーさんも同じようで、こっちを向いてくれていた。

「あの……私、こうしてトレーナーさんと一緒に過ごすことになって嬉しいんです」

「そうなのか? こんな状況なのに」

「はい。だって、トレーナーさんと一緒だと楽しいですし、安心できるんです」

「そっか。……そう言ってくれてありがとう」

照れくさそうにしているトレーナーさんを見て、思わず笑みがこぼれる。

こんな時間がずっと続けばいいのにといいながら、私はトレーナーさんと契約した時のことを思い出す。

~~~~~

「ふー……はあ……」

今から一年と半年以上前。

まだ、私がトレーナーさんと契約していない頃の話です。

「こんばんは、カフェ君」

「……？ ……あ、彼方さん……どうも」

日も完全に沈んだ時間帯で、いつものように『お友達』を追いかけていた時、トレーナー……彼方さんは話しかけてきました。

彼方さんとは、それなりに話す程度の中ですが、とてもいい人だということとはよくわかっていました。

この人には裏表などなく、いつでも真っ直ぐなことも。

タキオンさんの怪しげな薬を二つ返事で飲んでしまうほど、抜け……真っ直ぐな人です。

そんな彼が私のことを気にかけてくれるのはとても嬉しかった。

『お友達』も、彼のことは何となく気に入っているようで、時々一緒に遊んでいる姿を見ることもあります。

……ですが、仲が良かったとしても、彼方さんは『お友達』の姿を見ることはできない。

……しかし、姿は見えていなくとも、見えているかのように接してくれている。

それが、どれだけ心強いのか……きつと、彼は知らないんでしょうね。



「今日は一人かい？」

「……いえ……さつきまで『お友達』もいたのですが、今はあそこに……」

「あそこかあ……やっぱ見えねえな。カフェ君の『お友達』」

「……仕方ありませんよ。……私にしか見えませんから……」

「まあ、そうだな……」

そう言っつて、彼方さんは苦笑いを浮かべる。

「ところで、こんな時間にこんな所で何をしているんだ？」

「……『お友達』を、追いかけていました」

「こんな夜遅くにか？」

「……はい……今ぐらいが、『お友達』もよく見えるので」

「そうなのか……」

彼方は何か考え事をするように顎に手を当てている。

その様子は、どこか普段とは違って見えた。

(……あれ?)

そこで、私はようやく気づく。

いつもなら私についてくるはずの『お友達』が、彼方さんの近くに立っていたのです。

「あの……」

「ん？」

「どうして、貴方の周りに『お友達』がいるんですか？」

「えっ?!」

そう言っつと、彼方さんは驚いたように目を見開く。

そして、自身の周りをキョロキョロと見回していた。

「え、マジ? 俺、憑りつかれてんの?」

「えっと……どうしたんですか？」

「いや、実は最近『お友達』がよく俺の周りに出てくるんからなのか、  
なんでか背筋が寒いんだよ。……あ、でも別に体調が悪いとかじゃな  
いから気にしないでくれ」

「……そうですか」

どうやら、彼方さん本人もよくわかっていないようですね。

「それにしても、カフェ君はすごいな。俺は全然わからないのに……」  
「……いえ、私は普通ですよ。他の人よりも少しだけ『お友達』が見えるだけですし……」

「……俺にはカフェ君の方が凄いと思えるけどな」  
「……ありがとうございます……」

褒められることに慣れていないせいかな、どうしても素直になれない。  
ただ、それでも嬉しく思う気持ちはあるので、自然と口角が上がる。

「あつ！ それだ！」  
すると、突然彼方が大声を出したので驚いてしまい、ビクツと体が

跳ねた。

「ど、どうかしましたか……？」

「いやあ、ね？ 女の子が笑ってる顔はやっぱりいいなあ……って、思ってたさ」

「……そうですか」

彼方の笑顔を見て、私は恥ずかしくなって顔を逸らす。

この人は本当にこういうことを平然と言ってきますから困りものです。  
「よしっ、決めた」

「？」

「俺、そろそろ本気出してトレーナーやってくわ」

「……急にどうしたんですか？」

「いや、なんか君を見てたらやる気が出てきたというか……あ、もちろん今までも本気でやってきたつもりだけどな？ ほら、俺って結構マ

イペースだし」

「……自覚があったんですね……」

「うぐっ……あ、あるよ。うん。だから、もっと頑張ろうと思ってさ」  
「……そうですか……応援していますよ」

私がそう言うと、彼方は嬉しそうに笑う。

「おう、ありがとな。にしても、タキオン君はあれでもトレーナー持ちなんだっけ？」

「……そうですね。一応契約はしてもらっているそうです」

「そうか……んじや、カフエ君は？」

「……いえ。……まだです」

「じゃあ、よかつたら俺と契約しないか？」

「……はい？」

唐突すぎる提案に思わず首を傾げてしまった。

「あー……いや、その……実は前から考えてはいたんだけどさ……」

「……」

「あ、嫌だったら無理には……」

「……いえ。ただ、少し驚いたものですから……大丈夫です。私と契約してくれるのであれば、是非お願いします」

「お、マジで!?! やったぜ!」

「……ふふっ、喜んで頂けて何よりです」

「ああ、これからよろしく頼むな!」

「……こちらこそ、よろしくお願い致します」

こうして、私と彼方さんは契約を結んだのでした。

~~~~~

「はあ……こんなことなら、タキオン君から『体が蛍光色に光る薬』をもらって、エレクトリカルパレードを流しながら、一人チンドン屋でもやっておけばよかつたなあ……」

「……貴方は何を言っているんですか……」

「いや、だつてさ、相手がこつちを驚かせようとしてくるなら、相手がドン引きするほど派手になつちまえばいいんじゃないかなあ……つて、思つてさ」

「……それは、ちよつと過激すぎませんかね？」

「ええ、そうかなあ」

「……はあ……」

こんな調子では先が思いやられます……。

「まあ、それは今度すればいいさ」

「……やりはするんですね」

「あたぼうよ。やられっ放しは性に合わないからな」

「……そうですか」

「そういうことだから、今日はやらない。……ふわあっ……くうっ

……さすがに夜遅いか……」

そう言つてトレーナーさんはあくびをする。

時計を見るともう日を跨いでいました。

「……確かに、そろそろ寝た方がいいかもしれないね……」

「だな。んじや、おやすみなさい……」

「はい。お休みなさい……」

そう言つてトレーナーさんは寢息を立て眠り始める。

……しかし、私は何故か眠気が来ませんでした。

「……はあ」

トレーナーさんは私がいる方とは反対を向いているので、彼の背中を見つめる形になる。

(……やっぱり大きいですね)

初めて会った時は、そこまで身長が高いとは思わなかった。

しかし、今では180センチほどある体が大きく見える。

「……」

そんなことを考えていると、無性に触れたくなくて手を伸ばす。

そして、そのまま優しく触れるとトレーナーさんの体温を感じる。

「……温かい」

人の温もりを感じて安心感を覚えると同時にドキドキしてしまう。

触れたいと思ったはずなのに、いざ触つてしまうと離れるのが名残

惜しくなる。

もっと触れていたい。

ずっとこうしていたい。

そんなことを思う。

「……トレーナーさん。起きて、いますか……？」

「スウ……フウ……」

返事はない。

本当に眠っているようです。

「……」

私は、自分の唇が震えていることに気付きました。

それを意識した瞬間、急に恥ずかしくなり慌てて手を離す。

「……これは、違うんです……」

自分に言い訳するように呟き、静かにベッドから抜け出して彼の側に近寄る。

そして、眠るトレーナーさんの隣に座り込む。

「……トレーナーさん。私は……貴女のこと……」

その時、私の背中を軽く押すような感じがしました。

「……あなたは……」

『……』

振り返ってみると、そこには『お友達』がいました。

『……』

彼女は何も言わず、ただ微笑んでくれていました。

それだけで、気持ちが悪く落ち着く。

「……ありがとうございます」

小さく頭を下げる。

すると、『お友達』は満足気に笑い、消えていきました。

それと同時に、私は眠っているトレーナーさんに向き合います。

「……トレーナーさん、あなたは素晴らしい人です」

聞こえていないのをわかっていても言ってしまう。

「……どうして、あんなことを言うんですか……」

あの時、あなたは私と『お友達』、それに『皆さん』を恐れずに接してくれました。

……私がこのトレセン学園を訪れる前……子供の時から、周りにはすでに『皆さん』がいた。

『皆さん』は、私だけにしか見えていないらしく、周りの人は誰もその存在に気付いていない。

だから、周りの人は私を気味悪がった。

『そんなものはいない』

『気味が悪い』

『ただの幻覚』

『妄想』

『思い込み』

たくさん言葉が……私の大切なものを傷つけているようで……悲しかった。

……だから、幼く小さかった私は、閉じこもったのだ。大切なものが傷つけられないように……。

もともと体が弱かったから、周りを納得させられる理由はありません。た。

……でも、ある日。

私によく似た後ろ姿の女の子が……走っていたんです。

顔は見えなかったけど、楽しさだけは伝わってきて……私は……とても……羨ましくなって……

……閉じこもっていた暗い部屋から、外に飛び出したんです。

……でも、私が変わったからといって、周りの対応が変わるわけではない。

周りは私を避けていく。

……そんな中、あなたは変わらずにいてくれた。

……私達を恐れずにいてくれた。

「……答えなんて決まっているじゃないですか……」  
トレーナーさんは、いつものように眠っています。

その姿を見ていると、自然と笑みが溢れてくる。

「……トレーナーさん」

名前を呼ぶだけで、心が満たされるような気がします。

「……トレーナーさん」

愛おしくて仕方がない。

「……トレーナーさん」

どうしようもないくらいに好きになってしまう。

「……トレーナーさん」

トレーナーさんの耳元に顔を近づけて囁くように言う。

「大好きです……」

そう言って私は、トレーナーさんの顔の横に手を置き覆い被さるようにして、ゆっくりと唇を重ねた。

番外編 蒼い流星と理事長秘書

これは、幼少期の彼方翔と、とあるウマ娘との思い出であり、これからの話でもあるものだ。

~~~~~

『なあ、』——』は、将来、どんな大人になりたいんだ？』

『んー……わかんない！』

そう言つて無邪気に笑う『——』に俺は苦笑する。

『そっか、わからないのか……じゃあ、これから見つけていけばいいか』

『……ねえ、そんなこと言う翔君はどんな大人になりたいの??』

『俺か？ そうだな……』

この時から彼はもう決めていたのかもしれない。

『俺は……』

そして、少年は夢を語っていく。

この話は、普通の人とはちよつと違う芸当ができた一人の男——  
「彼方翔」と、そんな男とは違う種族『ウマ娘』として生まれた少女——  
——』の二人の出会いから始まる物語である。

~~~~~

「……懐かしい夢見たな……」

目覚ましが鳴る前に目が覚めた俺はベッドの上で天井を見上げながら呟いた。

久しぶりに子供の頃の夢を見た気がする。



でも、なんであんな昔のことを急に思い出したのだろうか？

……まあ、それはさておき……。

「……やべえー！ 遅刻確定だこれ!？」

俺はベッドから起き上がると慌てて着替え始めた。

今日は大事な日なのに寝坊してしまったのだ。

俺は急いで身支度を整えると、軽めの朝食（バナナと牛乳）を摂り、家を出た。

今日は、トレーナーの入社式だ。

トレーナーとは簡単に言えばウマ娘のトレーニングを指導する人のことである。

昔と違って今はウマ娘の数もかなり増えているし、レースも開催されているため、その需要はかなり高い。

そのため、俺が所属することになったトレセン学園には数多くのトレーナーが在籍しているのだが…… 正直、その数はまったくもって間に合っていない。

基本的に、新人トレーナーは一人受け持つだけでも厳しいというのに、トレセン学園に所属するウマ娘達は、総数二千人ほど。

それに対し、トレーナーは百人にも満たない。

しかも、トレセン学園のトレーナーになるには狭き門を通り抜けないければならないのだ。

つまり、毎年何十人も人間がふるいにかけていくわけだが…… 当然、その厳しさに耐え切れず辞めてしまう人間も多い。

……いや、辞めていった人達の話によると、ほとんどの人は寿退社が多いらしい。

トレセン学園に通うウマ娘達の年齢は、中高生という多感な時期であることも災いし、男性観を破壊されたウマ娘達がトレーナーを拉致つて、実家に連れ去ってしまう事例が多発しているという。

中には、無理矢理トレーナーを連れ去った挙げ句、もしチームを組んでいた場合、担当していた多数のウマ娘から襲われるケースも少ないとか。

もちろん、これは又聞き程度に過ぎないが……

まあ、とにかく、トレーナーというのは非常に人気の高い職業でありながら、そこらの職業よりも凄まじい艱難辛苦が待ち受けている職業でもあるのだ。

実際、ここ数年間で多くの優秀なトレーナーを輩出している名門大学の中でも上位に位置する〇〇大学の卒業生で、主席でもあった天才がいたのだが、そんな人も担当ウマ娘に拉致られ、そこからの寿退社を決めている。

また、先程名前を挙げた〇〇大学は、トレーナー業界では知らぬ者がいないほどの超有名校であるため、そこに首席入学を果たしたというだけでかなりの注目の的だった。

しかし、そんな彼ですら、今では消息不明となっている。

きつと、どこかの田舎で美人な嫁さんと暮らしているのだろう。

ちなみに、なぜ俺がその話を知っているかというと、噂好きの友人から聞いたからだ。

そんなこんなで、この世はまさに世紀末といった感じなのだが……  
今現在、トレセン学園の正門前で俺は絶望していた。

理由は単純明快。

さつき言った通り、俺は寝坊したのだ。

そして目の前には、固く閉ざされた正門がそびえたっていた。

……どうしようか。

このままだと間違いなく遅刻する。

かといって、棒立ちしようものなら確実に遅刻してしまう。

最悪、初日から遅刻なんてことになったら目も当てられない。

そう思いながら俺は辺りを見渡す。

そうして、正門の横の塀に目がいった。

「……高さはおよそ、四メートル程度。……行けるな」

俺は少しだけ距離を置いた後、塀に向かって勢いよく走り出す。

普通なら、壁を越えられずにぶつかるところだが、あいにくのところ俺は違う。

なぜなら、普通の人間とは違い、俺は「異能力者」と呼ばれる存在だったからだ。

俺はそのまま壁に向かって跳躍する。

そうすると、俺は軽々と壁の上に立つことができた。

よし、成功。

すぐさま塀の上から飛び降り、地面に――

「ぐへっ!?!」

熱いキスをした。

着地した際、勢いを逃す方向を間違えたみたいだ。

そのまま、顔面を抑えて地面をのたうち回る。

当たり前だ。

普通、高さ四メートルのところから顔面で着地しようものなら、骨が砕けてもおかしくないが気痛がするだろう。

でも、俺は大丈夫だ。

なぜかって？

それは俺の「異能」のおかげだからだ。

異能とは、読んで字のごとく特別な力のこと。

といっても、その種類は様々であり、ある者は火を操る「炎使い」であつたり、ある者は肉体を獣の姿に変えることができる「半獣化」などがあつたりする。

他にも、自分の身体を透明化する「ステルス」や相手の心を読むこ

とのできる「読心眼」などの様々な種類がある。

ちなみに、俺の異能はそのどれにも属さない。

俺の異能の名は『蒼い流星』。

肉体強化と魔力放出に長けた単純かつ強い能力だ。

……まあ、今の俺はその能力を使えないんだけどな。

詳細は省く。

簡単に言えば、今から五年前に大怪我したってことだけだ。

それからというものの、俺はこの力を使えなくなったのだ。

おかげで、異能力者も辞めざるを得なかった。

それでも、燻っていた時にこのトレセン学園に所属する子達が活躍するトウインクルシリーズを見て再起できたんだけどな。

とりあえず、今はこの状況を切り抜けることが最優先だ。

幸い、鼻血が出ただけで済んだみたいである。

トレセン学園の構造上、塀のすぐ内側には木が植えられており、俺がいる場所は影になっているため、生徒には見つかっていない……はず。

すぐさま、スニーキングをしつつ目的のトレーナ室へ向かおうとした。

その時だった。

「ごらー！ 不法侵入はダメですよー！」

いきなり遠くから声をかけられたのだ。

よく見れば、こちらに近づいてくる影が見える。

もう見つかった!? 早すぎんだろ!?

それに驚いている間もなく、土煙を上げながらこちらへと向かってきていた影は急ブレーキをかけて、止まった。

思わず、顔を隠してしまった。

何故かって？ できるだけ顔を覚えられたくないんだよ。

もし、これからもトレーナーを続けていくとして「あ、あの人、遅刻して塀越えをした人だ」なんて言われてみる。

俺はエビ反りからの、のたうち回るといふコンボを披露することになつてしまう。

そんなことを知らない(おそらく)警備の人は俺に詰め寄つて来る。

「新年度早々不審者ですか！ 観念なさい！」

「ち、違います！ 俺は、ここの新人トレーナーとして来たんですが、門が締まっているから仕方なく塀越えをさせていただいたトレーナー歴0年の新米ですう！」

「それなら証拠を見せてください！ トレーナーというならバッジを持っていないはずでしょう！ それを確認させてもらいますよ！」

「わ、分かりました……」

俺はポケットからトレーナーであることを証明するバッジを取り出して、彼女に見せようとした

必然、顔を隠していた腕をどかすということ……

「へ？」

「あら？」

バツチリと目が合ってしまった。

「……」

「……」

お互いに見つめ合う。

そして、彼女は一言呟いた。

「し、翔君？」

目の前の彼女は明らかに俺の名前を言った。

緑色のエレベーターガールのような服装に身を包み、そして、緑色の瞳を持った女性だった。

そこだけなら、服装が奇抜だがこの関係者だと思われる。

だが、その特徴的な緑色の瞳をしていて、まるでここに通うウマ娘達のような速度で走れて、尚且つ、俺の名前を知っている者は限られてくる。

まさか——

「ミ、ミノ——むぐう!？」

名前を言おうとしたら、口を押えられてしまった。

「し、しーっ!……ここではその名前と呼ばないでください!……今の私は「駿川たづな」です!」

「あ、ああ、すまん……じゃなくてすみません」

「わかればいいんですよ」

どうやら、今の彼女の名前は「駿川たづな」という名前らしい。

なんで偽名を使ってるんだろうか……?」

……まあ、あんな成績残してたら、そりやそうだよな。

「それより、ここで何をしているんですか?……今日はトレーナー登録のための書類提出日ではありませんでしたよね?」

「そ、それはだな……」

俺は彼女に事情を説明した。

寝坊してしまったこと。

ようやく着いたと思えば、門が締まっていたこと。

しかし、急いでいたため、塀を乗り越えてきたことを。

すると、ミノ……たづなは溜息をついた。

「そういうことでしたら、事前に連絡してくれればよかつたのに」

「いや、俺、お前の連絡先知らねえし……」

「まったく……それなら、トレセン学園の方に連絡をすればいいでしょう?」

「うっ、ぐうの音もでねえ……」

確かにその通りである。

今度からはそうしよう。

「はあ、仕方ありませんね。私が案内しますからついてきてください」  
「あ、ありがとうございます」

「それと、その敬語もやめてください。私の方が先輩とはいえ、これからは同僚です。あと、私のことは『たづな』と呼んでください」

「……了解。よろしく頼むぜ、たづな」

「はい。では行きましょうか。皆さんも待っています」

そうして俺は、たづなの案内を受けてぎりぎり間に合ったのであった。

~~~~~

「……なあんてことがあったな」

「あつたなじやないですよ! こっちはすごい大変だったんですよ!?!」

「悪い悪い、あの時は色々と必死だったからさ。ほら、ラーメン奢るか  
らそれでチャラにしてくれ」

「ラーメン一杯程度でチャラにできるもんですか! あと三杯は食べ  
ますからね!」

「……そんなに食ったら太——イテツ!」

「何か言いましたか?」

「なんもありませくん」

あれから五年後。

俺はちゃんとトレーナーになれて、それなりに頑張れていると思う。

今は担当ウマ娘達とのトレーニング終わり。

具体的に言えば、放課後というべき時間帯だ。

俺は、この時間に彼女とトレセン学園近くのラーメン屋にて雑談をするというのが習慣になっている。

ちなみに、今日はどっちがラーメンを奢るかを決めるじゃんけんをして、俺が負けたから彼女に奢っているのだ。

「でも、あの時たづながいなかったら、俺は遅刻していたかもしれないんだよな……」

「もう過ぎたことですよ。それに、私は当然のことをしたままでですから」

「それでも感謝していることに変わりはないんだから、素直に感謝させてくれよ。本当に助かったんだからさ」

「ふふつ、それならお言葉に甘えさせていただきますね。でも、次からは気を付けてくださいよ?」

「ああ、分かってるって」

互いに言葉を交わした後、しばらくの沈黙が訪れる。

俺はもう食い終わっていて、あとはたづなが食べ終わるのを待つだけ。

その時、ふと思いついた言葉を彼女にかける。

「なあ、たづな」

「ふあい?」

「お前って、もう走れないんだよな?」

「……そうですね」

彼女は少し悲しそうな顔をする。

そして、自分の足をさすりながらこう続けた。

「私は走ることしか知らないウマ娘です。だから、走れなくなったら何も残らないですよ」

悲しげにそう言ったたづなを見た俺は、彼女にこう言った。

「そんなことはない。少なくとも、あるじゃないか」  
「え？」

「お前には立派なものがあるだろう？ 理事長を支えるっていう大切なことが」

「翔君……」

「まあ、俺の方が近いところで関わってるけどな？」

「む、それなら私の方が翔君よりも長くかかわってますよ。それと、走れないのは翔君も同じじゃないですか」

「ははは、違いねえ」

確かにたづなの言うとおりだ。

俺はトレーナーとしてまだ新人だし、たづなは引退したとはいえ、元は中央に所属していたウマ娘だ。

故郷と一緒に、幼馴染で、そしてどっちともかつてのようには走れない。

「でもまあ、走れないなりにもできることはあるはずだ。例えば、俺みたいに指導する側に回ったり、お前みたいに見守る立場に行ったり」「見守る……ですか？」

「そうだ。お前だって、本当は走りたい気持ちがあるんじゃないのか？ だから、お前は自分の夢を叶えるためにトレセン学園に入ったんだろう？ んで、走れなくなってもそのことが忘れられなくて、未だここにいる。『走れなくてもいい。近くで見れたらそれでいい』ってな？」

「……」

たづなは何も言わずに俯く。

その表情は暗く、何かを考えているようだった。

……もしかしたら凶星かもしれねえな。

でも、これだけは言っておかないと。

「……でもな、たとえ時代の遺物だと言われようとも、遺物は遺物なりにできることがあるんだよ。それこそ、リレーみたいに誰かに託していくことだな？ たづなの夢はなんだ？」

「私の夢……それは……」



たづなは顔を上げてこちらを見る。

その瞳は、決意に満ちていた。

「私の夢は、これからも走りたいことです。でも、私自身は走ることができない……だからこそ、託したいんです。この身をもってして得たものを、次世代に……」

そう語る彼女の目からは涙が出ていたが、それでも笑っていた。

「そうか……なら、お前の願いは叶うだろうな。きっと」

「はい……！」

「ラーメン、冷めるぞ」

「……もう、いい感じに決めたのに。翔君のバカ……」

「バカとは何だバカとは！ これでも成績は上位だったんだぞ！」

「私に勉強を教えてもらっていたのはどこの誰ですか？」

「ぐう……！」

たづながいつも通りの雰囲気に戻ったのを見て、俺はホツとする。

こうでなくっちゃ、こいつはたづならしくないからな。

「さ、帰りましょうか」

「おう。また明日な」

「はい、また明日です！」

こうして、俺達は帰路につくのであった。

## 青い空と蒼い星

トレーナーさんのことを目で追うようになったのは何時からだろう。

私はトレーナーさんのことが好きだったのだろうか？

いや、きつと好きではない。ただ単に気になるだけなんだと思う。でも、この気持ちを誰かに話すと皆口を揃えて「恋だ」と言うのだ。私がトレーナーさんに対して抱いている感情は果たして恋なのだろうか。

分からない。分からないからこそ聞いてみようと思った。

あの、命を燃やして宇宙<sup>ソラ</sup>を駆けるトレーナーさんに……。

~~~~~

「ふわあつ……。明日から連休……。ゴールデンウィークか……」

いつものように出勤し、パソコンのキーボードをたたいている俺はそんな独り言を漏らした。

今日も朝早くから夜遅くまで仕事に追われる日々。

しかし、俺にとってその毎日はとても充実しているものだった。

俺が教える生徒は、今を生きるイケイケのJC&JK。

仕事内容に関しては、ちつとばかり多いが処理できないほどではない。

給料もよく、職場環境もいい。そして何より可愛い女の子が多い。  
(大事なことなのでry……)。

こんな好条件の仕事があるなら誰だって飛びつくと思う。

……まあ、その代償として多少ブラック気味ではあるけどね。

それでも、俺はこの仕事をする上で後悔なんて一切ない。

むしろ感謝すらしているくらいだ。

だからと言って、無理して働きすぎないように気を付けているが

…。

「あたたたた…肩凝ってんなあ…最近はデスクワークばかりだったからか…?」

首を左右に動かしながら呟く。

最近になって急に寒くなったせいもあってか、肩こりが酷くなっている気がする。

明日は休日だし、久しぶりにマッサージ屋に行ってみるかな……。俺はそう思いつつ、キーボードを叩き続ける。

しばらくの間、カタカタと音を鳴らしていたが、コンコンと控えめにドアをノックする音によってそれは中断された。

「どうぞー」

「……し、失礼しますね〜」

「おろ? スカイじゃん。どつたの?」

「そ、それがですねえ……えつとお……」

部屋に入ってきたのは俺の担当ウマ娘である「セイウンスカイ」だった。

いつもは飄々としていて、まさしく「雲」のような彼女。

そんな彼女は何か言いづらそうな感じだったが、意を決したのか真剣な眼差しでこちらを見つめてきた。

「実はですね……。セイちゃん、明日暇なんですよ。それで…その…よければ一緒にどこかへ遊びに行きませんか!？」

「……What? どこに?」

「ほ、ほら! 私達ってお互い休みを取る機会が少ないじゃないですか。だから、たまには息抜きも兼ねて二人で出かけないかなって思っ  
て!」

「ああ……そういう事ね」

確かに彼女の言う通り、俺達はお互いに忙しい身であり、私用などで中々二人きりになれる時間が無い。

そこで、彼女なりに考えた結果、俺と一緒に出掛けようと思ったらしい。

「まあ、いいんじゃないかな。ちょうど明日は俺も予定無いし」

「ほんと!？」

「お、おお……そんな顔近づけるほどか？」

「あ、ごめんなさい……。つい嬉しくて……」

「ハハッ、気にすんな。俺も嬉しいぞ、つと。じゃあ、どこに行くか決めないとな」

俺は自分のスマホを取り出し、ネットを開いて調べ始めた。

スカイもそれを見て同じように検索を始める。

しばらく画面をスクロールしながら色々見ていくが、これといって良さげなものはない。

「うーむ……やっぱあんまり遠いところだと移動時間が勿体ないしなあ……。最悪、俺が担いでいけばいいけど」

「あはは……流石にそれは嫌ですよう……。それにしても困りましたね。せつかくの連休なのに行き先が見つからないとは……」

「そうだな。こうなったら近くの温泉とかでも行くしかないかもな。ほら、こことか」

俺はそう言って一つのサイトを開く。

そこには、「カップルで行きたい！ 近場にあるオススメデートスポット特集!!」という見出しがあった。

「ふえっ!?! こ、これはまた……大胆なところを選びますね……」

「そうか？ でも、費用は安いし、出かけるにはちょうどよさそうだ。周りの観光もできそうだし」

「そ、そうかもしれないけど……。と、とにかく行ってみましょうよ!」

「はいよ。んじゃあ、このページのコピー持って、理事長に相談してくれるわ」

俺はパソコンから出力された紙を持って部屋を出る。

すると、背後からは「ちよつと待ってください〜!」という声が聞こえてきたが無視して歩き続けた。

そして、理事長室に入ってから、理事長に担当と旅行に行ってもいいか確認したところ……。

「許可！ 存分に楽しむといいぞ！ ……ただ、あまり羽目を外しす

ぎないようにな。特に彼方トレーナー。スカイ君は未成年なんだから、くれぐれも手を出すのではないぞ?」

「分かっていますよ。それでは、行かせてもらいます」

「うむー。気を付けてな!」

そんなこんなで許可を取れた俺達は、早速その足で旅館へと向かった。

そして、当日。

俺は待ち合わせ場所で、トレセン学園近くの駅前へと来ていた。

時間は9時45分。スカイはまだ来ていないようだ。

(しかし、あいつ遅いなあ……。寝坊か?)

俺は腕時計を見ながら、スカイが来るのを待つ。

ぼーっと道を行き交う人々を眺めていると、ふとあることに気が付いた。

「……………これってデート……………なのか?」

俺は今の状況を確認する。

朝、俺は駅へ着いてスカイを待っている。

前日にはスカイの方からも連絡があり、今日は現地集合となったのだが……………スカイの姿は見当たらない。

スカイは普段からマイペースな性格なので、こういうことも珍しくないのだが、いかんせん、遅いと感じてしまう。

「流れる雲のように」それが彼女の言っていたことだ。

その言葉通り、彼女はつかみどころのない少女だった。

そんな彼女が、俺に遊びに行くことを提案してきたときには、正直驚いたものだ。

彼女は普段はサボりがちだが、いざレースとなると「トリックスター」ともいえる戦略を發揮し、見とれるようなレースを見せつけてくる。

俺は彼女の走りに魅了された。

今までも、スカイよりもすごいと言えそうな子は何十人といったのだが、スカイほどピンツとくる子はいなかった。

俺は彼女に惚れたのだ。

……まあ、一目惚れってやつなんだけどね。  
そんなわけで、俺はスカイのことが好きだ。

……………あれ？

「俺……スカイのこと好きなのか……？」

……………待て待て待て待て待て待て待て待て!!

え!? 俺、生徒（それもJC）のことが好きになってもうたの!?

いや、別にロリコンじゃないけど! でも、普通に考えておかしい  
だろ!? いくら何でも教え子に手を出しちゃダメだろうが!! 理事  
長の手を出すな発言ってこのこと!? ああああつ!! もう訳分から  
ん!! 落ち着け俺エ!! 深呼吸しろ、深呼吸ウ!!

「ト、トレーナーさん!!」

「ひよっ!」

「わひゃ!」

頭抱えて悶絶していた俺の前にスカイが現れる。

突然のことで思わず変な声が出してしまった。

スカイは俺の声を聞いて驚いている様子だったが、すぐに顔を真っ  
赤にして俯き始めた。

可愛い……ってそんなこと考えてる場合じゃなくて!

「すまん……少し考え事をしていて……」

「いや、セイちゃんこそごめんなさい……。驚かせちゃいましたね  
……。それより早く行きましようよ……。皆さんから注目され  
ちゃってます……」

「……そ、そうだな……」

俺はそう返事をして歩き始める。

俺は心の中で理事長（あとミノ……たづな）に謝った。

本当にすみません。俺、どうしようもないクズです。だから折檻は  
やめてくださいお願いします。

それからスカイと一緒に電車に乗り、目的の場所まで向かうことに  
した。

ちなみに、向かう先は「混浴有り」の温泉旅館だった。  
なんでやろうね？

疲れて注意散漫になってたからだわ。

うん、折檻ルートまつしぐらだ。

HAHAHAHAHAHAHA……。

ハア……。

~~~~~

カポーン！ そんな音が聞こえてきそうな温泉にて、私とトレーナーさんは背中合わせの状態で湯につかっていた。

お互いにタオルを巻いているとはいえ、肌と肌が触れ合うこの状況は心臓に悪い。

私は何とか平静を保ちながら、背後にいるトレーナーさんに声をかける。

「あのお……やっぱりセイちゃんが入るのって恥ずかしいですか……？」

「あ、当たり前だろ……。俺は男だし、お前は女の子なんだから……」  
そう言いながらも、肩越しに見えるトレーナーさんの耳は真っ赤になっっている。

温泉に入ってるからというのもあるけど、きっとそれだけじゃないはずだ。

だって、こんなにもドキドキしているのが伝わってくるんだから。

「……なら、いいですよ。それでも」

「は？… どういう意味だよ？」

「そのままの意味ですってば。さっきも言ったように、セイちゃんは気にしないんで。それに、セイちゃんにはセイちゃんの考えがあるんですよ」

「……分かった。それなら、こっち向くなよ？」

トレーナーさんの言葉を聞き、私は小さく笑うと、彼に背を向けたまま口を開く。

「それは無理ですね」

「……はい？」

「今のセイちゃん、トレーナーさんに後ろを向けたくないんですから」

「……？ 一体何を言ってる——」

トレーナーさんが振り向こうとした瞬間、私の体は勝手に動いた。気が付くと、彼の腕の中に収まっていたのだ。

「ちよ!? なにやってんのスカイ!？」

「ふっふっふ。セイちゃんの作戦勝ちですねえ」

「お、おい!! 離せって!!」

「嫌です。このままセイちゃんの話聞いてください。それとも……騒いで誰かに気づかれてもいいんですか?」

「うぐぬっ」

私がそういうと、トレーナーさんは何も言わなくなった。

私はゆっくりと話し始め……ようとした。

「……スカイ?」

「……あ、あははあ……なんて言おうとしたか忘れちゃいましたあ……」

「はあ……?」

「あ、あははあ……まあ、いいじゃないですか。とにかく、今日は楽しかったです。連れて行ってくれてありがとうございます。トレーナーさん」

「……ああ。俺の方こそありがとな。スカイのおかげで、俺の気分転換にもなったし、リフレッシュできた」

「……そうですか。ならよかったです」

「おう」

そこでまた会話が途切れてしまう。

お互いがお互いに意識してしまい、言葉が出てこないのだ。

(うう……。この雰囲気はヤバイ……。何か話さないと……)

焦れば焦るほど何も思い浮かばない。

すると、不意にトレーナーさんが話しかけてきた。



「スカイ」

「ひゃいっ！」

「変な声出すなよ……。あ、そうだ。一つだけ聞きたいことがあったんだけど」

「な、何でしょう？」

「……あく……変なこと言うけどいいか？」

「な、なんですか……？」

妙な雰囲気の中、彼は真剣な口調で私に問いかけた。

「その……俺のことどう思ってる？」

「ええ!？」

突然の質問に思わず声を上げてしまった。

いや、そりゃ驚きますって……。

「ど、どうしたんですか急に……？そんなこと聞いて……」

「いや、ただ純粹に知りたかっただけだ。俺はお前のことを信頼してるし、これからも一緒に頑張っていきたいとも思っている。でも、正直不安なんだ。俺は本当にスカイのトレーナーとして相応しいのかって」

「……………」

「スカイは才能のあるウマ娘だ。だから、俺なんかじゃなくてもっとすごいトレーナーがついていた方が良かったんじゃないかって思うこともあるんだよ……。それがどうしても頭から離れなくて……」

「トレーナーさん……。そんなことを考えてたんですね」

「ああ……。ごめんな、俺、走るくらいしか能がなくて……。こんな時ですら気の利いたセリフの一つも言えないんだ……。情けないよな」

私は無言で首を横に振ると、優しく言葉を紡いだ。

「そんなことはないですよ。だって、セイちゃんがこうしてトレーナーさんと温泉に来たのは、私の方にも負い目がありましたから」

「負い目……？」

「はい……」

そうして私は胸の内を吐き出していく。

「結構前に言われたんですよ。私がレースに負けてしまった時、ト

トレーナーさんのファンから『あの人のウマ娘にふさわしくない』って……」

「なっ!？」

「別にそれ自体はいいんですよ。だって、セイちゃんが負けたことは事実ですから。でも、私はその時からずっと気にしてたんですよ」

「……スカイが？」

「はい……。『私のせいで、トレーナーさんに泥を塗ったんじゃないか』って……」

私はそう言いながら、自分の愚かさを痛感していた。

きつと、トレーナーさんはもつと気にしているはずだ。

なのに、私は彼の気持ちを考えてあげられなかったのだ。

その言葉を皮切りに堰を切ったように感情があふれてくる。

「トレーナーさんは私にとって憧れの存在だったんです……。私がどんなにダメな子になっても見捨てずにいてくれて、最後まで一緒にいてくれた……。私はそんなトレーナーさんと一緒にいるだけで幸せだったんです……。それなのに、トレーナーさんの期待に応えられない私なんて——」

「スカイ!!」

「っ!!」

突然大声で名前を呼ばれ、ビクツとする。

恐る恐る顔を上げると、そこには優しい笑みを浮かべているトレーナーさんがいた。

「バカだなあスカイ。俺は期待してるけど失望なんざ欠片とてしてねえぞ? 第一、それは第三者からの意見であつて俺じゃない。スカイの実力は本物だし、これからも伸びていく。だから、気にする必要はないんだ」

「でも……」

「それにな、スカイ。俺が重賞——それも皐月賞と菊花賞トレーナーになれたのは誰のおかげだ?」

「え……?」

「俺は新人トレーナーで、実績もない。そんな俺がスカウトしても誰

も受けてくれなかった。そんな中、スカイだけが自分から俺をトレーナーにしてくれたんだぜ？ その時の理由が適当だったとはいえ、俺は嬉しかったし、ちゃんと夢に向かって駆けているスカイを見て、絶対に勝たせてやりたいと思っただ。たとえ相手が誰だろうとな」

「あつ……」

その言葉を聞いた瞬間、私はようやく理解した。

私がトレーナーさんに惹かれた理由。

彼が私を選んでくれた本当の意味。

「スカイ。俺を信じろ。俺はスカイの一番のファンであり続ける。約束しただろ？ 『君を応援したい。君のトレーナーだ』って」

「……はい」

「スカイ。君はもう一人じゃない。周りを見渡せば、頼れる仲間がいるし、なによりも、俺という最高のトレーナーがついているんだ。だから、自信を持って！ 大丈夫、スカイなら必ず勝てる！」

「……はい！」

その言葉を聞いて、心の中にあつた不安が消え去っていくのを感じた。

それと同時に、彼に抱いていた想いが溢れ出してくる。

「……好き」

「ん？ 何か言ったか？」

「いえ、何でもありません」

「そっか。ならいいんだけど」

「さて、そろそろ上がるか」

「そうですね〜」

（あー……危なかった……。危うく告白するところだったよ……。でも、これでもう怖くない）

私は笑顔を浮かべると、彼と共に湯舟から出ようとした。

「っ！」

「へ——むぐっ!？」

立ち上がろうとしたトレーナーさんがこちらを抱きすくめるようにして、露天風呂にあつた岩陰に隠れる。

「むぐつむぐつ！」

「シツ……静かにしろ……。誰かが来る……」

(え……?)

慌てて耳を澄ませると、確かに足音が聞こえてきた。

どうやら、私たち以外のお客さんが来たようだ。

「……どうやら長風呂しすぎたみたいだな。貸し切りの時間が過ぎて他の人たちが来ちゃったか」

「ぷはっ……そうなんですね……。でも、なんで隠れる必要があるんです?」

「そりや……まあ……」

彼はバツが悪そうに視線を逸らすと、小声で話し出した。

「スカイのことを見られたくないからな」

「え……」

「あく……あれだ。大切なものを他の人に見られたくない感じだな」  
「……………」

大、切……?」

……ああ、そういうことですか。

私は小さくため息をつくと、彼の手をぎゅつと握った。

「安心して下さい。セイちゃんはあるあなたのもですよ」

「っ！」

「だから、堂々としていてください。……まあ確かに、見られたくないという気持ちはありますけど、セイちゃんも少し恥ずかしいですから……」

「……なら、あの人たちが出るまで隠れてるか」

「了解です……」

それから私たちは、温泉に入っていた人が去るまでの間、ずっと岩陰に身を潜めていた。

「ふう……」

「疲れましたねえ……」

「まさか、あんなタイミングで入ってくるとは思わなかったな」

「本当ですよ……。おかげで変に意識しちやいました……。あ、ト

「トレーナーさん」

「ん？ どうした？」

私は自分の手と彼の手に目を向ける。

そこには、しっかりとお互いの手が繋がれており、離れないように強く握りしめられていた。

そのことに嬉しさを感じながら、私は大きく深呼吸をする。

そして、思い切って彼に――

「あの好きって言葉……嘘じゃないですからね？」

「……………へ？」

「……そ、それじゃあ、セイちゃんは部屋に戻ってますから……」

それだけ言うと、私は逃げるように脱衣所へと向かっていった。

「……………へえあつ!？」

トレーナーさんの奇声を背に、真っ赤になった顔を見せないよう廊下を走っていく。

「……………あはは、言っちゃった……………」

きつと今の私の顔を見たら、皆びつくりするだろう。

だって――

「幸せすぎて溶けそう……………!」

この思い、ずっと抱えていきますから。

これからも傍にいさせてくださいね、トレーナーさん？

## スーパーカーとスーパースター

ねえ、トレーナー君。あなたはいつでも前にいてくれたわね。  
日本ダービーの時も、有馬記念の時も……。

ああ……そうか、だから私は……。

あの日、トレーナー君と出会ってから私の走る理由は変わっていったんだ。

私の楽しくありたいから走ってきたはずなのに、いつの間にか私は自分の為ではなく、彼の為に走っていたもの……。

彼の喜ぶ顔が見たい、彼が喜んでくれるならどんなに苦しいレースでも勝ってみせようって思ったんだっけ？

……うん、やっぱり私にとっての走る意味は貴方だったのね、トレーナー君。

~~~~~

5月。

ゴールデンウィークと同じ時期に入り、学生や社会人を問わず、全員の気を緩ませる月。

だが、ここ中央トレセン学園ではそんなものは関係ない。

Eclipse first, the rest nowhere.  
唯一抜き出し、並ぶ者なし。  
を校訓とするくらいだ。そのレベルは地方と比べるまでもなく並外れている。

しかし、レースの世界は過酷だ。

最大18人が一度のレースで競い、勝者はたったの一人。

その前に選考される時点でさらに人数は絞られている。

三冠レースなんかはその比ではない。

数百、数千のウマ娘が夢を抱いて挑み、栄光を手にするのはたった

の一人。他の子の夢は儂くも打ち砕かれ、地へと沈む。

ハナ差だけでも勝者は決定するんだ。たった数センチで負けた者の喪失感なんて計り知れないものである。

そんな世界で勝ち続けるというのは並大抵のことじゃない。

だからこそ、勝利を手にした時の喜びはひとしおなのだ。

重賞を勝てるなら上々。オープン戦でも十分褒められること。

だって、世の中にはデビューすらできずにこのトレセン学園を去るウマ娘やトレーナーもいるからだ。

実際、俺自身も契約している子と出会わなければ中央から去っていったかもしれない。

そう考えると、俺は非常に幸運だと言えよう。

俺が担当している子は本当に凄い。

クラシック級に上がる前のジュニア級の時点で、G1である朝日杯フューチュリティステークスを勝利。

日本ダービーでは、彼女の得意な脚質である『逃げ（というか強すぎて逃げになってた）』には不利である大外枠でありながら、まさかの圧勝。

流石にあれを見たときには乾いた笑いが出てしまったほどだ。

そして、年末の一番『有マ記念』。

周りからは不得意な距離だと思われながらも、結果はこれまた圧勝1着。

確かに、有マを走れるようにとトレーニングを積んできたとはいえ、あれはすさまじかった。

とある組織を引退した俺が、思わず彼女の隣で走りたくなったほどだ。

……まあ、それは叶わなかったわけだけだ。

……ふう。ちよつと暗い気分になってしまった。

今は仕事なんだし、切り替えないとな……。

「ねえねえトレーナー君。これとかいいんじゃないかしら？」

「おお……似合ってるぜ。マルゼンって、俺より年下だけどなんていうか大人っぽいもんな。勝負服はかっこいいけど、こういう清楚っぽい

さもギャップがあつていいぞ。あとは……思いつかねえや。俺がバカなのもあるけど……」

「もう！ そんなに自分を下げないの！ トレーナー君はいつだってチヨベリグよ！」

「ありがとう……。でも、なんだろうな。やっぱり、俺はお前みたいなタイプの方が好きなのかもな」

「あら？ それってどういうことかしら？」

「うーん……。俺の好みの話かなあ……。見た目は美人さんだし、スタイルもいいし、なによりかわいい。マルゼンは文句なくいい女だよ」

「っ！ ……も、もう！ こんなところで口説いてくるなんて、トレーナー君は悪い人ね！」

「別にそういうつもりじゃなかったんだけどなあ……。それに、お前はいつもそんな感じじゃないか」

「むう〜!! 私がせっかくデートしてあげるといふのにい!!」

「はいはい、ごめんなさいねえ」

ぷくつと頬を膨らませて怒る彼女。

普段とのギャップがあつてとても可愛らしいが、今度からはもう少し言葉を選んで話さないとな。

彼女は昭和のバブル時代のような言動に反して繊細な、今を生きるイケイケな華の女子高生。

名前は「マルゼンスキー」。

俺の担当ウマ娘であり、俺の初めての担当バでもある。

正直、俺がここまでやってこられたのは彼女の力が大きい。

……というか、彼女には基本的に好きなように走らせたので、俺が彼女の力になれたとはほとんど思っていない。

それでも、彼女は俺を信じてくれていた。

だから、ここまで走って来れたのだ。

彼女の為にも、これからはもっと頑張らないとな。

「んで、マルゼン。今日やることは分かってるよな？」

「モチのロンよ！ バッチリ覚えてきたわ！」



「よし、偉いぞ。それでこそ俺の自慢のウマ娘だ。でも、あんまり無理はしないようにな」

「はいはい♪ わかってますよお。私だってそこまで子供じゃないんだから！」

そんなマルゼンは、俺の言葉に嬉しそうに笑う。

本当に大丈夫だろうか？ 少し心配だが、こう見えてもマルゼンは意外としっかりしている子なので、あまり気にしない方がいいだろう。

「んじや、どれにしようかな……」

「あ、それならこっちの方がトレーナー君にはイケてるわよ？ トレーナー君っていつもジャージで、テレビの取材の時もジャージだったでしょ？」

「まあ、そうだな。楽でいいんだよ。スーツだと肩凝っちゃうしさ」

「だめよ！ 女の子と出かけるときはちゃんとした格好で行かないと。そんなのモテないわよ？」

「……いや、まあ、うん……。気を付けるようにするよ」

今の俺達とはあるショッピングモールのブティックにて、服を買っている最中である。

なぜそんなことをする羽目になったのか？

それは……。

「今日は雑誌の取材なのよ？ とびつきりおめかししなくちゃね？」

そう、雑誌の取材なのだ。

~~~~~

『月刊トウインクル』の乙名史です。今回の新刊『スーパーカーの素顔に迫る……！』の取材、お受けしてください誠ありがとうございます。それでよろしくお願いしますね。彼方トレーナーとマルゼンスキーさん」

「よろしくお願ひします乙名史さん」

「よろしくね♪」

トレーナー君の隣に座り、テーブルを挟んだ向かい側にいる記者『乙名史悦子』ちゃんに挨拶をする。

ちなみにこの子は私のファンだと言ってくれていて、よくレースを見に来てくれる。

だから、こうして話す機会も多い。

「早速ですが、今回取材させて頂きたいのは二人の関係についてなんです。まず、お二人の出会いについてなのですが……」

最初に聞かれたのは、私とトレーナー君の出会い。

これは、もうかれこれ2年前くらいになる。

その時の私はトレーナー君のことを噂程度でしか知らず、彼はトレーナーになったは良いものの、担当が付いたことのない新人さんだという事ぐらいしか知らなかった。

でも、あの時のことは今でも鮮明に思い出せる。

過去に浸っていると、トレーナー君が話し始めた。

「彼女との出会いは……結構普通でした」

「普通……ですか？」

「ええ、普通でした」

「……えっと、運命の出会いをした、とかではなく？」

「ええ、普通でしたよ。彼女が他のベテラントレーナーにスカウトされてる横で、『ああ、俺には無理だな』と一歩踏み込まず傍観していたのが俺でした」

當時を思い出しながら語るトレーナー君。

……そういえば、トレーナー君はこういう感じの人だったなあ……。

あの頃のトレーナー君はあまり自分の意見を言わない人。

そのくせに周りに流されやすく、いつもどこか諦めているような雰囲気を纏っていた。

それが、トレーナー君の過去を知った時にはとても悲しくなって、どうして自分を頼ってくれないのかと怒ったこともあったっけ？

……でも、今は違う。

今の彼はとても生き生きと生きている、なんだか昔の彼とは別人みたい。

もちろん、今だってそう簡単には頼ってくれたりはしないけど、それでも前よりはずっとマシになったと思う。

そんな彼の変化に、ちよつとだけ嬉しくなる。

トレーナー君は話を続ける。

「乙名史さんは、約10年前に起きたあの事件を覚えていますか？」

「……ええ。あの事件はトゥインクルシリーズを専門としていた私たちでも衝撃を受けました」

「まあ、そうですね。なんだかんだ言って、その事件に関わっていた俺がいますし、その事件が起きたことで、国という単位で俺達が使っていた力——『異能』というものが知られてしまいましたから」

乙名史ちゃんは少し黙った後、静かに答えた。

……あの事件のこと、覚えてるんだなあ……。

……あの日の出来事は、今も忘れられない。

当時、子供だった私が気まぐれに見ていたテレビ。

そこに、当時のトレーナー君は映っていた。

『皆さんぐっ覧ください！ ○○の某所上空にて中継を行っていますが！ 町のあちこちから黒煙が昇っております——』

『らあっ!!』

『きゃあっ!?!?』

『アンタら引っ込んでろ！ 死にてえのか!?!』

突然の爆発音。

何が起きたのか分からなかった。

ただ、画面に映し出されていた光景を見て、言葉を失った。

燃え盛る町の中を、人々が逃げ惑う中、暴れ回る怪物。

そして、そんな怪物に立ち向かった一人の男性。

それが、当時のトレーナー君だった。

「あの事件で、世界は神秘の存在を知り、同時に、それを秘匿する重要性も知った。……いや、知ってしまった」

トレーナー君の言葉に、乙名史ちゃんは静かに答える。

彼女の瞳には、複雑な感情が渦巻いているように見えた。

トレーナー君は続ける。

その声には、少し悲しみが混ざっていた。

「まあ、もう過ぎてしまったことですから気にはしてませんよ。……

俺の足も含めて……」

「……すみません……辛いことを思い出させてしまいました」

乙名史ちゃんが申し訳なさそうな顔をする。

トレーナー君はそんな彼女に微笑みかけた。

まるで、気にしていないと言うかのように。

トレーナー君の笑顔を見た乙名史ちゃんは小さく頭を下げた後、話題を変えてきた。

「ま、それで俺は不貞腐れてたんですよ。走ることが生きがいとも言えたし、なんなら昔の俺も今の俺も、マルゼン以上に走るのが好きです」

「あら？ それは挑戦状かしら？ トレーナー君？」

「お？ 今度走るか？ 有馬の2500でも日本ダービーの2400

でも走ってやるぞ？」

「ふふん♪」

トレーナー君と私の会話に、乙名史ちゃんはクスツと笑う。

私達のやり取りが面白かったのかな？ そんな私達の様子を楽しげに見つめていた乙名史ちゃんは、再び真剣な表情になって話し始める。

「素晴らしい関係ですね。……さて、話を戻しますが、彼方トレーナーさんはなぜトレーナーになろうと思ったんですか？ 失礼ですが、彼方トレーナーさんはトウインクルシリーズのレースに興味があったようには見えませんでしたか……」

乙名史ちゃんの質問に、トレーナーさんは昔を思い出すように遠い目をして言葉を紡いだ。

その目は、あの時——夢を語ってくれた時の彼の目と同じで……安心ができた。

「俺が組織を引退した後、走れなくなっただけで、二、三年くらいは半ば茫然自失の状態でした。現実を見始めたのはその後ですね」

「……その後とは、もしかして彼方トレーナーがトレーナーを目指すきっかけとなった出来事でもあったのでしょうか？」

乙名史ちゃんの問いかけに、トレーナー君は少しだけ考える素振りを見せた後、ゆっくりと口を開いた。

彼は、優しい笑みを浮かべながら言った。

「俺も、トゥインクルシリーズを見たんです」

トレーナー君が語ったのは、彼が喪失時代に経験したある出来事についてだった。

私も、今駆け抜けているこのトゥインクルシリーズを、彼はその目で見ていたのだ。

彼は、懐かしむような口調で言う。

その顔は、どこか嬉しそうだった。

「夢に向かって駆け抜ける、当時の組織では最年少で特級に上がった俺よりも年下の少女たちを見たときの胸の熱さといったら、今までに経験したことがなかった」

彼は、本当に嬉しそうに語る。

……その話を聞いて、私は自然と頬を緩めていた。

だって、嬉しいから。

トレーナー君に熱を灯せたのは私ではないけども、それでも、彼の心に何かを残すことができたという事が、とても嬉しかった。

乙名史ちゃんは、静かに問う。

「その時、トレーナーになろうと思いましたが？」

「まさか。最初は見てるだけでしたよ。俺なんて走るしか能がないって」

その問いに、トレーナー君は首を横に振った。

その答えを聞いた乙名史ちゃんは、納得がいったという様子を見せる。

乙名史ちゃんは再び問いかける。

「ですが今は？」

「ええ。最初はファンでしたが、今はこの仕事になれてよかったです  
い、この仕事をこれからも続けていきたいと思っています」  
「……………す」

乙名史ちゃんが何かを言いかけ、そして爆発した。

「素晴らしいですっ!!!」

「うん。爆発するの早かったわ」

「これが乙名史ちゃんの良いところよね」

突然の大声。

それが乙名史ちゃんの癖だと分かって、苦笑いをした。

彼女は興奮気味に言う。

「もう走れなくなったのは変わりない事実であり重い物！ そんな苦しい状況でありながら新しい可能性に向けて駆けだしたのはまさしくトウインクルシリーズを駆け抜けるウマ娘達と同じ！ 抱いた思いを継承し！ また新たな星を輝かせる！ まさに感動!! これこそ私が求めていたものですよおー!!!」

乙名史ちゃんは立ち上がり、両腕を広げて叫んだ。

そして、勢いよく椅子に座りなおす。

彼女のテンションの高さに、思わず私達は苦笑いをする。

「そ、それで！ 話は戻るのですが！ マルゼンスキーさんと何故契約されたのでしょうか!?!」

「なぜ……………」

「あ、いえ！ 決して悪い意味ではなく！ 関係者方の取材では、マルゼンスキーさんはどんな方にスカウトされても受けなかったとのことなので…………」

乙名史ちゃんの言葉に、トレーナー君は少し考えた後、口を開く。

そして、少し照れくさそうな表情になった。

彼は言う。

その言葉は、確かに私に向けられたもの。

トレーナー君は少し恥ずかしげな声で言った。

「まあ、最初の方に言った通り、俺は彼女のスカウトに行こうとすらしてませんでしたよ。トレーナーになって数年は経っていたのに、誰一

人としてスカウトできていなかった状況を前にして、半ばあきらめていたんです」

「諦めていた？ マルゼンスキーさんの走りを見てもですか？」

乙名史ちゃんの疑問の声に、トレーナー君は大きくうなずいて答える。

トレーナー君の目に映っていたものは何なのか、私には分からない。

だけど、その瞳は、あの時——夢を語った時と同じ、強い輝きを放っているように見えた。

トレーナー君が乙名史ちゃんの質問に答えた。

「そんな時に、マルゼンスキーから俺に話しかけてきてくれたんですよ。『私をスカウトしない？』ってね。正直、驚きました。まさか彼女自ら俺に声をかけてくるとは思っていませんでしたから」

トレーナー君の答えに、乙名史ちゃんは小さくうなる。

乙名史ちゃんは顎に手を当てて考え込んだ後、私に視線を向けた。「マルゼンスキーさんはどういった意図で彼方トレーナーに声をかけたのでしょうか？」

「ん〜……そういわれると……なんでかしらね？ 私も今となってはよく覚えていないわ。……でも、何て声をかけたのかは覚えているわよ？」

あの時は、ただ、目の前にいるこの人に声を掛けたいと思った。

その気持ちは嘘じゃない。

でも、明確な理由があつたわけじゃなくて、気が付いたら彼に近づいて、声を掛けていたんだ。

——『ねえその君。私と付き合わない？』って。

あの時の事は今でも鮮明に思い出せる。

トレーナー君と出会った時の事だからかな。

乙名史ちゃんは私の言葉を聞いて、再び考える仕草を見せた。

しかし、すぐに考えるのをやめて、私の顔をまっすぐに見つめて聞いてきた。

「その判断に後悔は？」

「まさか？ トレーナー君との相性はバッチグーよ！」

私の言葉に、乙名史ちゃんは満足そうにうなづく。

そして、乙名史ちゃんは今度はトレーナー君に顔を向ける。

彼は、真剣な眼差しで私を見つめていた。

トレーナー君が口を開いた。

「俺と彼女はこれからも駆け抜けていきます。俺と彼女が出会ったことは決して無駄ではなかったと証明するために」

トレーナー君の力強い言葉に、私は嬉しさと頬を緩める。

トレーナー君も同じだったようで、二人で顔を合わせて微笑み合った。

乙名史ちゃんは二人の様子を交互に見比べた後、何かをこらえるように震えたかと思えば、また急に大声を上げた。

「素晴らしいですっ!!!」

その声の大きさに、私も、トレーナー君も驚いた。

乙名史ちゃんは興奮した様子で言う。

その目はキラキラしていた。

「お二人は互いに信頼し合い！ 共に歩むことを誓っている！ まさしくトウインクルシリーズを駆け抜けた歴代のウマ娘達と同じ！ 熱い！ 熱すぎるうー!! そしてそこに愛があるっ!!」

乙名史ちゃんが一人で盛り上がっている中、トレーナー君は困ったような笑みを浮かべながら乙名史ちゃんに言う。

その声音はとても優しかった。

トレーナー君は言う。

彼の言葉は、確かに私に向けられたもの。

彼は、優しくほほえみながら言った。

「俺のマルゼンは最強です。誰にだって負けませんよ」

「……うふふ♪ そういわれたら負けたくなくなっちゃうわね♪」

「うっひょー！ 良いですね！ そういうの大好きですよおー!!」

乙名史ちゃんが再び大声を上げる。

そして彼女は興奮気味に言った。

——さて！ それではここでスペシャルインタビューを終了しま



しょう！　ありがとうございます！

~~~~~

インタビューも終わり、この後も予定がある私たちは席を立とうとすると、乙名史ちゃんと一緒に来ていたもう一人の記者（乙名史ちゃんの圧が強すぎて忘れちゃってたわ）が、私たちを引き留める。

「何終わらせようとしてるんですか乙名史さん。まだ聞かなきゃいけないことがあるでしょうに」

「へ？　どういうことですか？」

「は！　そうでした！」

乙名史ちゃんはポンツと手を叩く。

そして、私の方を向いた。

乙名史ちゃんは満面の笑顔で言った。

「彼方トレーナーとマルゼンスキーさんは付き合っておられるのでしょうか!?!」

「ブフォツ!!?!」

「……あ、あらあら」

突然の質問に、トレーナー君が嘔き出す。

私は少し照れ臭かったけど、正直に答えた。

「私はねえ……トレーナー君のことが——」

すると、乙名史ちゃんはさらにテンションを上げて叫ぶ。

あまりのテンションの上がり具合に、部屋を飛び出してしまった。

「うおおおおおー!!　これはスクープだああー!!!」

「ちよつ!?!　ちよつと待つて乙名史さああああああああん!?!?!」

「アツハハハハ！　これは誰だつてスクープだな！」

トレーナー君も、もう一人の記者も飛び出し、一人となった部屋で

私は苦笑いするしかなかった。

でも……。

「悪い気分じゃないわね……フフツ♪」  
こうして、私とトレーナー君の熱々っぷりは学園中に広まったのであった。

## お祭り娘と時の有名人

トレーナーさんはあたしのことをどう思ってるのかな……？  
そう思いだしたのは何時だったっけ……？

最初はそんなこと、考えたこともなかった。

ただ、いつもあたしと一緒にいてくれて、一緒に笑ってくれて、楽しい気持ちにしてくれて……。

そんなことを繰り返しているうちに、いつの間にか気になる存在になつていたんだと思う。

トレセン学園に入って、皆を笑顔にしたいと思い頑張ってきたけど、それとは別に芽生えたこの思い。

でも、この感情がなんなのか分からなくて、ずっと考えないようになってしまう。

……だって、あたしは年下で彼は大人だから。

きつとこの感情は、いつか消えてしまっただろうから。

だから、その前に答えを見つけなきゃいけない。

この胸のあつたかさの正体を……。

~~~~~

ゴールドデンウィークも終盤に入り、そろそろ休み明けに向けて慌ただしくなってくる頃。

俺は相も変わらず仕事に追われていた。

理由としては、ウチの担当ウマ娘であるキタサン——『キタサンブルック』が、春の天皇賞を勝ち取ったからだ。

ただでさえ、キタサンは多くのウマ娘が目指す栄光——『三冠ウマ娘』であり、最初の方はそこまで人気がなかった（あくまで先輩たちと比較したらの話。十分すごい）のだが、天皇賞春で一気に人気が発した感じだった。

そして今や、三冠を含めてGIを6つも取った上に、春シニア三冠に王手をかけているのだ。

世間ではもうすでに、次のレースに期待する声が多くなっていった。そのため、俺も今まで以上に忙しくなっており、今日に至っては昼食を食べる時間さえ惜しいほどだ。

ちなみに今日の朝飯はカップラーメンとエナジードリンクでした。栄養バランス的には最悪だが、今は仕方ない。

あとでちゃんとした食事を摂ることにして、とりあえず目の前の仕事を片付けていく。

……しかし……。

「多いなあ……初担当の子でこれとか、まだ今年は半年も残ってるんだけどなあ……」

思わず独り言が出てしまうくらいには、デスクの上に積まれている書類の山が多い。

しかし、今やっている書類仕事を片付けたら今日の仕事はほぼ終わりなので、「もうひと踏ん張り頑張ろう！」と気合を入れなおす。

ふうーっと息を吐いてペンを走らせようとしたその時、コンコンツというノックの音とともにドアが開かれた。

「お疲れ様ですトレーナーさん！」

「お〜キタサン。お疲れ〜」

入ってきたのは我が愛バ「キタサンブラック」。

彼女は、春天での快挙によって一躍時の人となり、今ではすっかり有名人となっていた。

俺が担当しているとはいえ、その注目度は高く、こうして顔を合わせる機会が減ってきている。

……まあ、トレーニングの時には顔を合わせてるからいいんだけどな。

そんなことを考えながらキタサンを見ると、彼女が手に持っているものに気付いた。

それは、見覚えのある包み紙に包まれた弁当箱だった。

そしてその中身がなんなのか、俺は知っている。



「うう……それがよお……」

そうして俺は話し始めた。

最近の……職務状況について。

~~~~~

あの後、何とか落ち着いてくれたトレーナーさんと向かい合ってテーブルに座るあたしは、少し苦笑いを浮かべていた。

目の前……テーブルの向かい側にはトレーナーさんがいるのだが……テーブルに突っ伏しているせいで表情が見えない。

「あのお……ほんとに大丈夫ですかトレーナーさん？」

「誰か、俺を殺してくれ……。この年になって、仕事が多すぎて辛いからと教え子に泣きつく俺なんか、豆腐の角に当たって死ねばいい……。むしろ、今からでも理事長やキタヤマさんのところに行つて死んで詫びようかな……」

ようやく顔を上げたと思ったら、死んだ目でぶつくさ言い始めた。まるでお通夜みたいな雰囲気である。

とりあえず、元気づけるために声をかけることにした。  
「大丈夫ですって！ あたしは気にしてませんから！ むしろ、トレーナーさんのお悩みを少しでも晴らせたらいいかなあつて思ってますから！」

「いやでもなあ……。お前はいいかもしれないけど、俺の立場的にいろいろまずいんだよなあ……」

あゝ、なるほど。

確かに、あたしとトレーナーさんは契約関係にあるわけで、しかもトレーナーさんは超が付くほどの有名人。

そんな人に指導を受け、三冠を獲得し、今や春シニア三冠に王手をかけているあたし。

そんな人が自分の担当ウマ娘に甘えてたら、世間からの印象は良く

ならないだろう。

……ただでさえ、今年に入ってからメディアへの露出が増えてきたので、余計なイメージダウンになりかねない。

それもあって、トレーナーさんは自分の立場を心配しているようだ。

だけど、

「安心してくださいトレーナーさん！ 今回のことはあたしとトレーナーさんだけの秘密にしますから！」

「ええ……マジい？ 俺これからも腹に石板抱えながら生きていくのかあ……いやまあ、それが最善なんだろうけど……」

秘密にすると言われ、明らかに嫌そうな顔をするトレーナーさん。

……あれ？ ちよつとシヨックかも……。

まあ、そこは置いておいて。

あたしは気にせず話を続けることにした。

「なので、他の人たちには内緒にしときましょう！ ね？ お願いしますー！」

そう言って、手を合わせて頭を下げる。

すると、しばらく悩んでいた様子のトレーナーさんだったが、ひとしきり唸った後、ため息をついて口を開いた。

「了解。まあ、教え子に泣きついてくるくらいなら、スーパークリーク君のところのトレーナーが最大手だからな。今更とこっちや今更か。……いや待て。でちゅね遊びどころかゲーミングトレーナーなんかを認可しているこことレセン学園は割と無法地帯なのは……？」

「あはははは……気にしたら負けってやつですね」

そう言って、あたしは笑うしかなかった。

トレーナーさんも、なんだかんだ言って納得してくれたようで、それ以上は何も言わない。

さて、これで一安心だと思って、弁当箱を開ける。

そこには、いつも通り美味しそうな料理が入っていた。

ご飯の上には、トレーナーさん好みの紅生姜を、レタスともやしを座布団に、トレーナーさんのご両親から教わった甘辛いタレで絡めた

豚肉を乗せ、これまた教わった漬物を弁当箱の隅に入れる。

トレーナーさんが子供の頃から好きだという弁当がそこにあった。

「お、相も変わらさず旨そうだなあ……。さて、お味のほどは……」

いただきます、と呟いてから、トレーナーさんは箸を持って食べ始める。

一回、二回と咀嚼を繰り返して、飲み込むと一言。

満足げに笑みを浮かべた。

「うん、旨い。お袋に負けねえ旨さだ」

「本当ですか!？」

「おう！ めっちゃうめえぞ！」

その言葉を聞いて、あたしの顔は思わずほころぶ。

やったあ!! 今日もいい感じにできたみたい!!

そう思い、あたしも自分の分の弁当に手を付ける。

そして、お互いに黙々と弁当を食べ進めていった。

「ふう……。ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした！」

二人揃って、手を合わせる。

そうして、トレーナーさんは作業に戻ろうと立ち上がった時、

「っ！ あたたたたたた……。…」

「ト、トレーナーさん!?! 大丈夫ですか!?!」

トレーナーさんが体勢を崩して床に倒れ込んでしまった。

慌てて駆け寄り、助け起こす。

「どうしたんですかトレーナーさん！」

「痛たたたたた……。くっそお……。書類作業で腰痛めたか……。?」

そう言うトレーナーさんの腰をさすってみるけど、特に動けなくなるほどの痛みはなさそうである。

……。あ、でも結構筋肉質な体してる。

うわあ、すごい硬い……。

こんなにも硬かったら、そりやデスクワークで凝っっちゃうよね……。

……。そうだ!



「トレーナーさん！　ここは私に任せてもらっても良いですか!？」

「へ？　あ、うん、まあいいけど。一体何するんだ……?」

「マッサージです!」

「マッサージ……?　出来るのか……?」

「はい！　お母さんから教えてもらったとびきりのマッサージです!」

「なら、頼んだ……いちち……」

トレーナーさんの言葉を聞きながら、あたしは立ち上がる。

そして、ゆつくりと深呼吸して、気合を入れた。

まずは、軽くストレッチをして体を温めよう。

それから、少しだけ柔軟体操をする。

そして、最後にあたしの得意技であるマッサージをすることにした。

「ゆつくり力を抜いて下さいね〜」

「おお……これは効くなあ……」

あたしはトレーナーさんの後ろに回り込み、うつ伏せになった彼の背中を押す。

ぐいーつと押せば、気持ちよさそうな声が上がった。

……うう、いつもの男らしいところと違って、すつごくかわいく見える……!!

そんなことを考えながら、あたしは指圧を続ける。

その時、ふとトレーナーさんに尋ねてみた。

「そういえば、トレーナーさんってどうして私をスカウトしてくれたんですか?」

「?　どうした急に。スカウトの理由については、俺が君にスカウトさせてくれて言った時に話しただろ?　目つきと顔つきがよかつたって……」

「それは……そうなんですけどお……なんていうか、もつとなかったのかなって思ってた……」

そう私が言うと、トレーナーさんは考え込むように腕を組んだ。しばらくして、彼は口を開く。

そして、

「俺が君の走りに惚れたからだ」

まるで口説き文句のようなことを言った。

……あれれえ？　なんか想像していた答えと違うぞ……？

てつきり、何か他の理由があると思っただけだなあ……。

そう思いつつ、一応聞いてみることにする。

すると、トレーナーさんは、ふう、とため息をついて、こう続けた。

「そもそも、目標に向かって進むためにはやる気云々がなければ始まらない。それはキタサンも分かっているよな？」

「え、あ、はい」

突然話を振られたことに驚きつつも、私は答える。

確かに、レースを目指すにあたって、モチベーションの維持はとても重要だ。

それがなければ、どんなトレーニングも意味がない。

逆に言えば、モチベーションさえあれば勝てる……と言う訳でもない。

「体が前に行っても精神が追い付かなくや意味がない。逆に、精神が前に行っても体が追い付かなくや意味がない。……まあ、世の中には精神で無理矢理体を引っ張り上げた奴もいるけどな……」

「そうなんですか？」

「ああ。俺が元いたところは特にそうだった。何せ『異能』とかいう不思議パワーを行使して、常人離れた身体能力を振るうんだ。健全な肉体には健全な精神が宿るの逆バージョンだな」

そう言つて、トレーナーさんは自分の腕をぺちりと叩いた。

鍛え上げられた体は、とても魅力的に見える。

だけど、あたしはその体を見て、どこか悲しく感じてしまった。

それを感じ取ったのか、トレーナーさんは苦笑いを浮かべながら続ける。

「ま、キタサンには早かったか。気にすんなよ。もう終わった事なんだし」

「それでも……」

「だから、気にすんなって。この怪我はお前がやったわけじゃないんだし、今更どうしようもないんだよ。それに、俺は後悔してないぜ？」  
「そう言い切ったトレーナーさんの顔は、本当に晴れやかな顔をしている。」

……その言葉を聞いて、あたしは思った。

やっぱり、トレーナーさんは凄いなあって。

そして、同時に思う。

「どうして……後悔とかしてないんですか……？」

「後悔……してはいる。でも、もう終わってるんだ。その後、トレーナーになれた事には感謝しているんだぜ。むしろ、足が壊れたから。こうしてキタサンや皆に出会えたんだし」

「そうですか……？」

「ま、例えるなら乗り慣れたバスを乗り過ぎ、いつもの気に入った場所に行けなくなったことを後悔してたら、見たことない新しいバスが来て、それに乗ってみたら自分の知らない土地に行けた……っていう楽しさを知ったから、俺は今のままでもいいんだ」

そう言つて、トレーナーさんはあたしの方を見た。

あたしは、思わずドキツとする。……なんだろう。

今までよりもトレーナーさんのことがカツコよく見えてきたような気がする……。

ドキドキしながら、あたしは彼の話を聞く。

「後悔先に立たず。十年前の事件を知る前の俺が、事件が起こることを知ったら、少しでも自分の足が残せるように今まで以上に頑張っていたんだろうな。宝物を取られたくない子供みたいに……後悔したくないために……。でも、今の俺は足が壊れてもよかったと思ってる。なんでだろうな……？」

「なんででしょうかね……」

「ま、キタサンには難しい問題だ。いつか分かる日が来るかもな。……来てほしくはねえけど……。すまん、手が止まってるぞ」

「あ、ご、ごめんなさいー！」

「良いって。俺が話しかけて手を止めさせちまったし、こっちこそす

まない。続けてくれ」

そう言われ、あたしは再び指圧を再開する。すると、トレーナーさんがぼそりと呟いた。

「後悔先に立たず……これは誰の人生にだって当てはまるものだ。キタサンだって、ダイヤちゃんと自分を比較したとき、『もつとやれたんじゃないか?』って思ったことはあるだろ?」

「はい……」

「別にそれ自体は責めなくてもいい。俺の方が人生長いからお前よりも後悔が多いなんてことはない。塵も積もれば山となるってやつだ。どんなことも、それこそ後悔も積み重なっていく。でも、それを背負って俺達は生きていくんだ。人生百年時代。命短し恋せよ乙女。そんな言葉もある。前者はそれだけ時間があるということ、後者は後悔しないように恋をしろって意味だ。ま、これは俺なりの解釈だけだな」

そこまで言うと、控えめにあくびを漏らした。

「どうやら眠たくなってきたらしい。」

「くあ……っ、マッサージがいい感じで眠くなってきた……」

「それならそのまま寝ても大丈夫ですよ。まだお昼ですし、もし、たづなさんが来たとしても私が説明しておきますから」

そう言うと、トレーナーさんは安心したように目を閉じた。

……ほんと、無防備な顔だなあ。

そんなことを考えていると、トレーナーさんが口を開いた。

そして、一言。

まるで、独り言のようにこう言ったのだ。

「これからも、頑張ろうな。キタサン……」

「っー」

あたしはびつくりして、手を止めた。

そんな私を尻目に、トレーナーさんは寝息を立て始める。

あたしはしばらく呆然としていた。

やがて我に返り、再び指圧を始める。

……ずるいよ。こんなタイミングで名前を呼ぶなんてさ。

心の中で文句を言いつつ、私は指圧を続ける。

でも、だんだんと胸の温かさが全身に広がるような感覚になる。

ああ、これが幸せなんだなって思いながら指圧を続けるも、少し無防備なトレーナーさんの姿に悪戯したくなつたあたしは……。

「少しだけ、いいよね……」

そつと彼の頬に『——』をした。

~~~~~

それから数十分後、たづなさんがトレーナー室に来た。

彼女は、あたし達を見て驚いた様子だったが、トレーナーさんの状態を察して、すぐに笑顔になった。

どうやらたづなさんにはバレなかつたみたいだけど、今も心臓はドキドキしている。

それはそうだよ……。

だって、あんな事した後普通に接することなんてできないもん……。

たづなさんが部屋から出ていった後、眠るトレーナーさんの顔を覗き込む。

その表情は、とても穏やかだった。

きつと、夢の中でもトレーニングをしているに違いない。

あたしは、その姿を見て微笑む。

……うん、やっぱり好きだなあ。この人のことが。

だから、あたしは誓うんだ。

この人に勝利を届けることを。

これからも、2人で歩んでいけることを。

## 番外編 彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座 前編

チームを設立して数年。

色々なことが起こりすぎて感覚が鈍り始めてきた今日この頃。

「さて、そろそろこれを教えてもいい頃だな」

誰もいない深夜のトレーナー室にて、俺はそう呟いた。

目の前には、とある資料をまとめたパソコンの画面がある。

その画面のタイトルには……

——『ウマ娘がレース中に至るであろう精神的覚醒及び肉体のリミッター解除現象——【領域】<sup>ゾーン</sup>というものについて』  
と書かれていた。

~~~~~

「はい注目。今回の座学はちつとばかし特殊なことを学ぶぞ」

ある日、チームの皆を部室に集めたトレーナーさんの第一声がそれだった。

普段からトレーナーさんはあまり文字とか使わず言葉で説明するタイプだけど、この日のそれはいつも以上に真剣で、あたし——「キタサンブラック」達は思わず首を傾げてしまった。

……もしかしたら、何か大事な話なのかな？

そう思っていた時に、チームの代表である「シンボリルドルフ」さんが手を挙げた。

「唐突千万ですまないトレーナー君。今回の特殊なこととは……？」

「ああすまねえな。俺達のチーム——『シリウス』って、結構大所帯になってきただろ？ そんな状況でも俺は各自に指導とか行っていたんだが、今回ののは別に「絶対にこれをしろ！」っていう訳じゃなく、

まあ知っておいた方がいいかなあ……くらいのもものだからこうやって全員を集めたんだ」

「疑問。その「知っておいた方がいいもの」とは、何ですかマスター？」  
次はなんだかロボットみたいな雰囲気を受けるけど、実際はすごく優しい先輩でもある「ミホノブルボン」さんが質問した。

するとトレーナーさんはちよつと首をひねりながら言いづらそうに答えた。

「うむむ……。なんて言えばいいのか分からんけど、簡単に言えば、これを知り、使いこなせたなら今のレベルからさらに上に上がる技というものをお前たちに知ってもらおうと思ってるんだ」

「！！！！！！！！！！」

「ふむ……」

「？」

「む？」

「ほお……」

「へえ？」

「？」

その言葉を聞いて、チームメンバーのほとんどが勢い良く立ち上がった。

特に動揺していないのはルドルフさん、「サイレンススズカ」さん、「オグリキャップ」さん、「ナリタブライアン」さん、「マルゼンスキー」さんだけだった。

他のメンバーは皆目を見開いて驚いている。

……あれ、あたしだけついていけてなかったりする？

するとそこでルドルフさんが手を挙げてトレーナーさんに声をかけた。

どうやら彼女は今の会話の中で気になったことがあるみたいだ。

その証拠に、ルドルフさんは何か確信をもった目をしていた。

「トレーナー君。そのあることとはもしかして……」

「……ああ。よつほどのことがない限りは使わないようにしてきた

『アレ』の事だよ」

やっぱり。

あのトレーナーさんとルドルフさんのやり取りを見て、あたし以外の立ち上がったって全員が首を傾げていた。

えっ？ どういうこと？

そしてそんなことを思っていると、ルドルフさんはあたし達に向けて口を開いた。

ちなみにあたしは未だに置いてけぼりを食らっていた。

「トレーナー君が言っている『アレ』とは、このトウインクルシリーズを駆け抜けた者達でもほんのわずかな者しか知らない、レース中にウマ娘達が発揮する力——【領域<sup>ゾーン</sup>】というものだ」

……はい？

『領域』……？

なんですかそれ……？

「はいー！」

「はいテイオー」

「何のことか分からないよトレーナー！ もっとわかりやすく！」

するとそこに元気よく手を挙げる「トウカイテイオー」さんの姿があった。

相変わらず行動が早い人だなあ……。

するとトレーナーさんはその発言に少し苦笑いしながら説明を始めた。

……なんか最近こういう表情をよく見る気がするんだけど……？

まあいつか。

「【領域】ってのはな、精神的なアプローチから肉体のリミッターを外し、限界以上の力を引き出した状態のことだ」

………??

全然意味がわかんないんですけど……？

他の皆も似たような感じで首を傾げている。

そんな中でただ一人、ルドルフさんだけは理解しているようだった。

流石だなあ。



そう思いながら見ていると、チームの中でも高等部に所属する人たち  
ちが口を開いた。

「……要するに、トレーナーが言ってるのはあれでしょ？ 漫画とか  
でよく出てくる、火事場のバ鹿力を意図的に引き出すみたいなこと  
じゃないの？」

「正解だタイシン」

そう言ったのはチームに所属する高等部の中でもかなり小さいけ  
ど頼りになる先輩——「ナリタタイシン」さんだ。

この人は普段からあまり感情とかを表に出さないタイプだけど、実  
は誰よりも熱い心を持っているってことをあたし達は知っている。

トレーナーさんもそのことは分かっているらしく、彼女の言葉に笑  
顔で応えた。

そしてそれに続いたのは……

「えっと……もしかして、ライスが春の天皇賞でマツクイーンさんに  
勝った時みたいなすごい力を、意図的に出せるって事……？」

おずおずと手を挙げたこれまた高等部に所属しているけど中等部  
のあたしより身長の低い先輩——「ライスシャワー」さんだった。

ライスさんは普段は大人しい性格なんだけど、レースで勝つことに  
関しては誰にも負けたくないという気持ちを持っていて、一緒にト  
レーニングをした時には、すごい威圧感を放って追いかけてくるん  
だ。

あたしは何度か本気で逃げようとしたこともあるくらいだし。

そんなライスさんの様子を見て、安心させるようにライスさんの頭  
をなでたトレーナーさんは、大きく「領域について」と書かれたホワ  
イトボードに資料を貼っていく。

そこには、あたし達の顔写真と何らかの数字。そして、レース中の  
写真を何枚か貼られていた。

その内の一枚には、あたしとダイヤちゃんの競っている姿が映って  
いたり、ルドルフさんやマルゼンさんがトウインクルシリーズを駆け  
抜けていたであろう写真が張られていた。

それを指差しながらトレーナーさんは言う。

その声はとても真剣なものだった。  
まるであたし達に教え込むような言い方だ。  
そしてそれはきつと正しい。  
だって今から教える事は……。

——トレーナーさんの過去に触れることでもあったのだ。

~~~~~

「領域——ゾーンとは、分かりやすく言えば『火事場のバ鹿力』というべきもので、中には自身の体を自壊させながらもこれを使い続けることができる者もいる。特にスズカ。君が一番この領域に踏み込んでいたんだぞ」

「そうなんですか？」

「当たり前だろ。『先頭の景色』っていう、もはや視認できるレベルで自分の世界に入り込めるんだ。ルドルフやマルゼンですら好条件が重ならないと発動できないっていうのに、練習ですら発動していたんだから……。いつ体が壊れかねないのか、ひやひやしたんだぜ？」

「それは……その……ごめんなさい……」

「いい、いい。謝るな。お前に怪我が無かったただけで俺は満足なんだ」  
スズカさんは、トレーナーさんの言葉を聞いて少し顔を赤くしていた。

どうしたんだろうか……？

ちよつと顔が赤いけど……風邪かな？

トレーナーさんはスズカさんを落ち着かせると、今度はあたし達の方を向いてきた。

「んで、この領域を発動できるのは、ルドルフを筆頭に、マルゼン、ブライアン、オグリ、スズカ、ブルボン、ライスってところだ。ちなみに一番使いこなしているのはスズカで、一番このゾーンの危険性に近づいていたのもスズカだ」

「ほお……私もかトレーナー？」

「なんだかんだ言ってもお前も発動してたんだブライアン。お前の言ってた『飢え』とか特にな」

するとそこで、トレーナーさんはまた別の資料を貼り始めた。

そこには、さっきの写真とは違ってレース中に撮られたと思われる、ブライアンさんと、テイオーさんの同室である「マヤノトップガン」さんのラストスパートのシーンが映っていた。

「ブライアンが一番ゾーンを使えてたのはこのレースだな。それ以前までは『飢え』を満たそうと考えすぎて上手いことゾーンに入れてなかったんだよ。それがこのレースで『答え』に至り、最後の力になった……って感じだ」

「なるほど……あの感覚はそれか……」

「むしろ、領域不完全の状態で三冠取ったお前はやばかったがな……」  
苦笑いを浮かべてそう言ったトレーナーさんは、そのまま次の写真へと移った。

次は……オグリさんの有馬記念だった。

「こっちはタマモクロス君という強力なライバルがいたことで領域に至ったオグリだ。タマモ君もかなりの強敵で、正直、あの時の有馬は負けると思っていた。でも……」

「私は勝ったぞトレーナー……モグモグ……」

「おにぎり渡したのは俺だけど、食べながら話すんじゃないやありません」

そう言いながらトレーナーさんはまたもやホワイトボードに貼っていく。

そこには、ライスさんと、ダイヤちゃんが憧れる「メジロマツクイン」さんの勝負の場面が映っていた。

この時のライスさんの様子は……控えめに言ってもすごかった。

マツクインさんを終始マークし続けることで焦らせ、スタミナを削り、最後はマツクインさんが根を上げたところで差し切ってゴール……という感じだ。

……うん、よくわからない。

他の皆も同じなのか首を傾げている。

そんなあたし達を見たトレーナーさんは、またもやため息をつくと、今度はまた別の写真を取り出して説明を始めた。

「これがその時の春の天皇賞……までの数日間のライスの様子だ」

「……すごい。なんていうか、もう言葉にならない」

ライスさんを見て思わず眩くあたし。

ライスさんは確かにすごい。

すごいけど……これはあたしじゃ真似できない領域だった。

だって、ライスさんはマックイーンさんを常に意識し続けていたんだ。

それこそ、他の相手がどんな走りを見せようと、集中を切らさず、マークしていなかったら勝っていたであろうマックイーンさんをずっと追っていたんだ。

そしてその結果、ライスさんはマックイーンさんに勝利した。

「この時のライスは、領域を見ることすらしなかった。肉体的な領域には入れたんだろうけど、精神的にはすさまじい集中止まり。やっぱり、ライスの適正距離がもつと長いからかなあ……」

「ふえっ？ そうなの？」

「そうだとライス。俺の見立てではライスの適正距離に合いそうなレースは日本にはなさそうだ。多分……イギリスの『ゴールドカップ』が一番適性に合ってると思うぞ」

「「「「「「ゴールドカップ?!?!?!?!?!」」」」」」」

すごいすごいとは思ってたけどそこまでいくの!?!

ゴールドカップとは、トレーナーさんが教えてくれた海外のG1レースでも特に凄まじい距離を走るレースのことだ。

ゴールドカップの距離は19ハロン210ヤード。……確か、4000mの芝を走らなければいけない凄まじいものだったはず……。

それをライスさんは走り切れるの!?!

「あくまで見立てなただけだ。実際に走らせるかは後で決めるかボツにする。……まあ、ライスが勝ちそうなんだけどなあ……」

「ラ、ライス、そこまですごくくないよ!?! 菊花賞でもブルボンさんに負けちゃったし……」

「それは……そうかもだが、ライスなら大丈夫だ。絶対にな」

自信満々に言うトレーナーさんに、ライスさんは少しだけ照れくさそうに笑みを浮かべていた。

なんだかんだ言っつて、トレーナーさんに褒められると嬉しいらしい。

そして、トレーナーさんはそのまま次の写真へと移っていった。

今度は、マルゼンさんの写真だった。

「基本的に、マルゼンには縛りを設けていたわけではないから、領域の発動自体はスズカの次に多い。その結果が二着との合計着差61バ身とかいうやべー数字を叩き出したわけだ」

マルゼンさんの実力は、あたしも知っている。

あれだけの速度を出しても息切れ一つしないスタミナと、それに反比例するかのように短い距離で爆発させる脚。

まさしく、『怪物』。

その速さは、あたしが今まで見たウマ娘の中でも群を抜いている。だからこそ、そのタイムに納得した。

あたしがそう思っていると、トレーナーさんは更にホワイトボードへ写真を貼っていく。

そこには、ブルボンさんとライスさんが映っていた。

「これはブルボンが三冠取った時の菊花賞だ。もともとスプリンター向けの脚質をトレーニングで無理矢理引き上げたブルボンは、このレースで一気に覚醒してこのレコードを出した」

トレーナーさんの説明を聞きながらブルボンさんの走りを見る。

ブルボンさんの走る姿は……なんとというか、かつこいいい。

フォームも綺麗だし……なんかこう……オーラが違う。

まるで……風みたい。

「この時の俺は、ブルボンが勝つのは半ばあきらめていたんだが、ライズに抜かされそうになった瞬間、再加速したときは驚いたよ。今までのブルボンって、全部決まったペース配分と速度で走ってたんだけど、それは自分のスタミナを理解した上で行っていたこと。だから、一度抜かされたらそこで負けていた……はずだった。結果は、限界を

突破しての一着。あれはさすがにびつくりしたさ。……んで、その後の長期療養にはあきれながらも納得したけどな」

「それは……すいません……」

「別に謝る必要はないけどな。でも、ブルボンもライスも、これからもっと強くなる。ライスに関してはまだ伸びる余地もあるし、ブルボンはおそらく……まだまだ速くなる」

そう言ったトレーナーさんはまたもや別の資料を取り出す。

そこには、ここ数か月の日付が書かれた並走トレーニングのタイムだった。

「これを見たら少しずつだが早くはなっている。本番の緊張感とか諸々を含めたらちよつとは違うかもしれないが……本格化から更に伸びてるのはすげえことだ」

「えつとお……つまりどういうことですかあ……っ」

先程からおどおどとしていた「メイショウドトウ」さんの質問に、トレーナーさんはすぐに答えた。

その目は……真剣そのもので。

そして、あたし達は、その言葉を聞いて衝撃を受けた。

「要するに、本格化の後ってのは大抵落ちていくだけのはずが、なぜか伸びてるんだよ。それも本格化とまではいかないまでも並の成長率とは一線を画すレベルでな」

そう言い切ったトレーナーさんは、ホワイトボードに何かを貼り付けてると、そのまま説明を始めた。

「はつきり言って異常の一言に尽きるな。俺達ヒトの第一次成長期や第二次成長期とは違って、ウマ娘の本格化は一度きりとなっている。そのせいなのか知らんが、お前たちは本格化を過ぎても成長し続けている。それが、領域へと踏み込むための要因の一つなのかもしれないが……」

そこまで言うと、トレーナーさんは一呼吸おいてから話を続けた。

その内容は……あまりにも非現実的なものだった。

「これから話すのは、俺の全盛期の話に繋がるんだが……お前達、覚悟は良いか？」

「「「「「はい！（うん！）（分かりました！）（了承）（オッケー♪）（分かった……）」」」」」」

「了解。今から見せるのは、俺が体験した領域の更にその先——『覚醒』の映像。そして——」

そこでいったん区切ってから、トレーナーさんは宣言した。

「超高速戦闘だ。目え回すなよ？」

番外編 彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座  
中前編

『ハア……ハア……っ！』

『……………』

砂塵舞う、見渡す限りどこまでも続きそうな荒野。

そこに立つのは、2人の青年。

1人は蒼いオーラを纏った男の人。若いけれども、その姿にはトレーナーさんの面影がある。

すでに激しく動いていたのか肩で息をしており、その呼吸は荒い。対するもう1人はトレーナーさんとは違うものの、オーラを身にまとっており、しかしこちらは一切疲れていないように見える。

だけど、その表情はどこか険しい。

そんな2人が睨み合う中、最初に口を開いたのはトレーナーさんだった。

『デメエ……。大義だなんだと訳わかんねえこと言いやがって……。結局は何がしてえんだ！』

声を張り上げて叫ぶトレーナーさん。

それに対して、男は静かに答える。

『……お前はおかしいと思わないのか？ この世界は腐りきっている。選ばれたものが異端として蔑まされ、のうのうと生きる無価値な存在が支配する……。こんなにも醜い世界を、俺は否定しなければならぬ』

『ハッ！ 悪役恒例の正義気取りか……。それで？ 邪魔なやつらを消すってか？』

鼻で笑ったトレーナーさんの問いかけに、男は何も言わずにただ黙っていた。

それに苛立ったのか、トレーナーさんは更にまくしたてる。

その口調は、いつもの優しいものとは違い、どこか怒っているように感じられた。



『だんまりかよ……。邪魔なやつを消して、選ばれた存在だけの世界を作って人類をレベルアップさせるだけか？ ハッ！ くだらねー。どうせあれだろ？ 自分たちを神だとも思ってたんだろうが、勘違いも甚だしいぜ』

『……………』

『確かに、この世界じゃ俺たちみたいな超常の存在は異端かもしれないし、今を懸命に生きる者から奪おうとする外道だっているかもしれない。だがな、それはこっちも同じことだろうが』

『なに……………？』

男が怪しげな目を向けてきたのに対し、トレーナーさんはその視線を真っ向から受け止めて言い放つ。

それは、トレーナーさんが今まで言ってきた言葉の中で、最も強い意志が込められていた。

『お前の言う、この醜い世界にだって才能のある奴らはいる。そいつらがちゃんとした環境で育てられれば、間違いなく俺達と同じ土俵に立って、今を良くしてくれるかもな。……だが、そうじゃない。悪として生まれてきたわけでもないのに、まるで当然のように虐げられる……………』

『そうだ。だからこそ俺は——』

『けどなあっ!!』

突如トレーナーさんの声が響き渡る。

その叫びには、怒りの感情が含まれていた。

そして、その矛先は……目の前の男に向けられている。

トレーナーさんは、男に向かって怒鳴るように言葉をぶつけた。

その声は、悲痛なものでもあった。

何故なら、トレーナーさんの目には涙が浮かんでいたからだ。

その涙は、トレーナーさんの心からの叫びであるように思えた。

『お前らのやってることは所詮は私利私欲のための自己満足なんだよ!! それを正義なんて言葉で誤魔化してんじゃねえぞ!? そんなもん、何の意味もねえんだよ!』

『……………』

『なにが選ばれし者たちの世界だ！ 異能力者<sup>俺達</sup>にだって、守りたち人達がいる！ これから先も、共にいたいと思える奴らがいる！ これから先、俺達の世界を担っていくであろう子供たちもいる！ 俺達は、それらを守るために戦っているだけだ！』

『……それが、俺の邪魔をする理由になると？』

男の問いかけに対し、トレーナーさんは迷いなく言い放った。

『なるさ。少なくとも、俺にとってはな。だから——』

そこで、トレーナーさんは一呼吸おいてから言った。

『ここでぶつ潰す！』

トレーナーさんがそう宣言した瞬間、目にもとまらぬ速さでトレーナーさんは男に接近していく。

それと同時にトレーナーさんの周囲に蒼いオーラが集まり始めた。まさしく渾身の一撃になるであろうその技は、当たればただでは済まないことを物語っている。

『ハアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『……その力……今消すには惜しいほどのものだ。……だが……』

凄まじいエネルギーを纏い、接近していくトレーナーさんを前にして、男は目を閉じると何かを呟いた。

次の瞬間、男の身体を中心に黒いオーラが放たれる。

『立ちほだかるといふなら、消さなければならぬ』

『ツ！ アアアアアアアアアアアアアアアア!!』

そのオーラの中に飛び込みながらも、トレーナーさんは怯まずに接近する。

瞬間、映像がスローとなり、周囲の時の流れは遅くなった。

その中で、トレーナーさんと男の姿だけが鮮明に見える。

そして……

『絶命——彼岸花』

トレーナーさんの胸に男の拳が突き刺さり、

トレーナーさんの背中が弾け、紅い花が咲いた。

~~~~~

「え……」

思わず見入っていた。

あたし達の知らないトレーナーさんの姿が見れると思つて浮かれていた。

だけど、現実是非情だった。

あの人は、負けた。

それも、圧倒的すぎるほどの力で。

男は、トレーナーさんの攻撃をかわしながらカウンターで攻撃を当てたのだ。

胸に拳が突き刺さったトレーナーさんは、吹き飛ばすことなく、男の腕で力なく持ち上げられている。

そして、その口から血が零れ落ちていた。

背中が風船が割れたように皮膚が裂けて肉が露出している。

そこから溢れ出る血液を見て、頭が真っ白になった。

あれだけ強かった人が、こんなあっさり負けるはずがない。

あんな風に、一方的にやられるはずない。

だって、トレーナーさんは……あたしの好きな人は………。

——ヒーローなんだから。

……でも、それは幻想に過ぎなかったのかもしれない。

現に、目の前にいるトレーナーさんはボロ雑巾のように地面に倒れ伏していて、もうぴくりとも動かなかった。

そんな光景を見てもなお、男は平然としている。

それどころか、少しだけ残念そうな顔をしていた。

それはまるで、自分の邪魔をした存在を消せてよかったというような表情ではなく、もしかしたら友人になれていたかもしれない相手を殺してしまったかのような顔つきに見えた。

『ゴボツ……！ グアツ……！』

『喋るな。死ぬまでの時間が短くなるだけだ』

男は冷たく言い放つ。

それに、トレーナーさんは何も言わずに黙っていた。

その姿からは、最早威厳など感じられない。

むしろ、死にかけている人特有の雰囲気醸し出している。

『……さよならだ、素晴らしい者よ。お前の意志は俺が継ぐ。お前の理想は、俺の理想郷で作る』

……そして、男はそう言って去っていく。

その時の男の目はどこか悲しげに見えて……それが、余計に怖かった。

自分で殺しておいて、心の底から惜しいと思っている。

そんな目をしていたから。

『……うっ……あゝあゝあゝあゝあゝっ！』

そして、最後にトレーナーさんが声を上げた。

その声は苦痛に満ちていて、今にも消えてしまいそうな程弱々しいものだったけど、それでも必死に生きようとしているように思えた。

でも、背中が弾けるほどの攻撃を受けたことで大量に出血してしまい、やがて静かになった。

「トレー、ナー、さん……」

もう、動くことはない。

あたしの声は届くことがない。

もう二度と、笑顔を見ることもできない。

あの人の優しさに触れることも、温もりを感じることも、一緒に歩くこともできなくなってしまった。

「そんな……嘘、だよ……ねえ、起きて……?」

自分の口から出た言葉なのか分からないほどか細い声で、あたしは呼びかけた。

当然、返事はない。

だって、トレーナーさんは死んでしまったのだから。

もう動かない。

もう喋らない。

もう、会えない。

そんなことは分かってるのに……。

どうしてだろう？ 涙が止まらなかった。

「なんで……！」

どうしてこうなってしまったのか。

何故、トレーナーさんは殺されなければならなかったのか。

何がいけなかったのか。

何が――

「落ち着けキタサン」

「っ！」

ふと声をかけられた。

その方向に振り向くと、そこには死んだはずのトレーナーさんがいた。

「戻ってこい。俺は死んでねえぞ」

「あ……」

いつの間にか映像は止まっていて、目の前には死んだはずのトレーナーさんよりも大人になったトレーナーさんがいる。

……ああ、そうだ。

トレーナーさんは生きている。

今まで見ていたのはただの記録映像だというのに、すっかり取り乱してしまった。

「……すまん、皆も驚かせたみたいだな」

「いえ……大丈夫です。それより、今は……」

「……見ての通りだ。あの男は世界を変えるためにやって来た敵。そして、あの時の俺では勝てないほどの強敵だ。だから、俺は一度だけ死んでいる。……でも、この後起こったことで、俺は今も生きている。お前達、見る覚悟はあるか……？」

「それは……」

正直に言えば、見たくない。

あんな恐ろしいものを見るなんて、嫌だ。

だけど、ここで逃げちゃダメだと、心の奥底から何かが叫んでいる気がした。

それに、あたしは決めたはずだ。

どんな時でもトレーナーさんを信じると。

だから――。

「見、ます。見させて、ください。トレーナーさんの、こと……」

震えながらも、はつきりと口に出ることが出来た。

すると、トレーナーさんが嬉しそうに微笑む。

その笑みを見て、あたしの心にあつた恐怖は薄れていった。

「ふう……まさか、キタサンが先に落ち着くとは……。私もまだまだ

未熟だな」

「お前もカルドルフ……。そんなにショックが強かったのか？」

「当たり前だトレーナー君。親しい人が突然致命傷を負う光景を見たのだ。平然としていられる方がどうかしている」

確かに、ルドルフ会長の言う通りかもしれない。

トレーナーさんは、あたし達の知らないところであんな経験をしてきていたんだ。

そして、それを乗り越えてきたからこそその強さがある。

だからこそ、トレーナーさんはあんなに強い。

「ト、トレーナー……だ、大丈夫……？」

「お、お兄さま!!? い、生きてるよね!!?」

「生きてるって。あんまり心配すんなよ」

「あ、あははあ……トレーナーさんが、死んじゃったあ……」

「ト、トレーナー!!? ほんとに生きてるよな!!? 幽霊じゃないよな!!?」

「スカイは戻ってこい。オグリは落ち着け。生きてるから」

「……っ! あ、ありがとうございます。『あなた』のおかげで落ち着けました……」

「は、早く病院に!!?」

「シチーも落ち着けて。この時の怪我は治ってるから」

「トレーナー!!? 大丈夫よね!!?」

「安心しロツテリアってスカーレット」

落ち着いて周りを見れるようになると、場は混沌と化していた。

皆が皆トレーナーさんが生きているかの確認を取り、そして安堵し

ている。

そんな中、トレーナーさんだけは冷静だった。

「さて……とりあえず、話を続ける前に状況を整理しよう。まず、お前達が見たのは俺が覚醒する直前の出来事。つまり、俺が死んだ瞬間の映像だ。そして、ここからが本番になるんだが……休憩入れるか？」

「「「「「「お願いします」」」」」」

「了解……あと20分程度したら再開するから、休憩とか入れて来いよ」

20分かあ……結構長い時間だね。

まあ、それだけ集中して見ないといけない内容ということなんだろうけど。

あたし達は立ち上がり、それぞれ思い思いに休憩を入れた。

~~~~~

「ねえキタちゃん……」

「どうしましたかテイオーさん？」

少し離れたところで、あたしとテイオーさんは2人きりでした。

2人で並んで座り、先程まで見ていた映像を思い出す。

あれは夢なんかじゃなくて、実際にあったことなんだ。

そして、あの優しいトレーナーさんが経験してきた世界の話……。とても信じられるようなものではなかったけど、それでもトレーナーさんは嘘をつかない。

なら、きつと本当のことなんだと思う。

でも、それでもまだ心のどこかで信じ切れていない自分もいる。そんなあたしの気持ちを感じ取ったのか、テイオーさんはそつと手を握ってくれた。

「テイオーさん……」

「ボク達がいとも通りに過ぐしているときに、トレーナーはあんなこ

とをしてたんだね……」

「……そうですね……」

あたし達と一緒にいる時は、あんな怖い顔をする事なんてなかったのに。

あたし達に見えないところで、あんなに苦しい思いをしていたなんて知らなかった。

「……あたし、強くなりたいです」

「……うん、ボクも。絶対に強くなって、トレーナーに誇れるようなウマ娘になるんだ」「はい！」

「そのためにも、今は休んでおかないとだね。また見ることになるだろうし」

「え？ あ……」

そういえばそうだ。

トレーナーさんの死を見てショックを受けたのは確かだけど、あたしはまだ続きを見る覚悟を決めていなかった。

……よし。

「ふんっ！ いっつうく……よし！ 気合だ！」

頬を思いつきり叩いて立ち上がる。

そして、そのまま走ってみんなるところに向かった。

「……キタちゃんって、意外に負けず嫌いなのかな？」



番外編 彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座  
中後編

「よし。全員戻ってきたな。んじや続き……と、言いたいところだが、まずは私的な話をさせてくれ」

休憩後、戻ってきた担当達にトレーナー——『彼方翔』おちかたしょうはそう告げる。

「さて……何から話すかな……」

彼は困ったように頭を搔く。

そして、最初に話したのは彼の経歴についてだった。

「俺は某県某所の田舎に住む一般的な夫婦——『彼方姫奈』ひなと『彼方空助』くうすけの間に生まれた元一般人だ。その辺は前にも説明したな」

その言葉に全員がうなづく。

そもそも、翔は一般的なヒトの男性であり、ウマ娘ではない。

そんな彼が、何故ウマ娘ですら実現しえない身体能力を發揮できているのか？

それは、ある理由があった。

「俺は小学生の頃、とある存在に襲われた。そいつらは今まで見てきた動物のなによりも怖くて、そして強いやつらだった」

「まさか……それが『怪異』ですか？」

「ああ。俺が襲ってきた『化け物』のことを理解できたのは、その時が初めてだったよ。後に先輩になる人たちがその時いてくれてなかったら、俺はポツクリ逝ってたかも……」

怪物に襲われ、死にかけて、しかし何とか生き延びた。

そこで目にしたものが、彼にとっては衝撃的過ぎたのだ。

「あいつらが『怪異』と呼ばれるものだっていうことは分かった。そして、そいつらは秘密裏に処理されていることも分かった。だから、俺は思ったんだ。俺が奴らに対抗できる力を手に入れるためにはどうすればいいかを」

「それが、『怪異』と戦うための『異能力者』という職業を選んだきつ

かけ……ということか」

「ああ。俺が人生で初めて社会の流れに参加したのが、『異能力者』だったんだ」

「だがしかし、どうしてトレセン学園に？」

「まあ、色々とあつてさ。それは後に回すぞ」

「むっ……。では、次の質問に行こう」

ルドルフは一瞬不満そうな表情を浮かべたが、すぐに切り替えて別の話題に移る。

「それで、トレーナー君はどうやって『怪異』と渡り合えるほどの強さを手に入れたんだ？ 君は、元一般人だというのに……」

「そうそこだ。これから説明するのは、俺が『異能力者』になれた要因であり、領域のその先——『覚醒』に至った理由でもあるんだ」

そう言つて、彼は話し始める。

自分が辿りついた境地。

そして、手に入れた力を。

「まず前提として……『異能力者』は、神秘的な力を使う者たちのことを言う。要するに神話でよく登場する『魔法』とかだな。日本だと『妖術』とか。それらをひつくるめて『異能』って呼んでるな」

「ふむ……。確かに『異』なる『能』力を使う者ならば、『妖怪』や『陰陽師』、『魔術師』などはそれに含まれるだろうね」

「まあ、そういった存在がこの世界にはいるんだけど……なんで、今まで隠されてたか分かるか？」

翔の問いかけに、誰もが首を傾げる。

「それは勿論、人知を超えた力を持つからですよ？」

「ああ。けど、それもあるけど、一番は世間的に認知されちゃいけないからだ」

「………どういふことだ？」

『異能力者』は、基本的に拳銃などとは違い、よほどの物じゃない限り金属探知機に引っかかったりしないし、『異能』界限に精通している者じゃないと、見分けられない。つまり、普通なら絶対に見つからないんだよ」

「ええつと……それは……」

テイオーが困ったような声を上げる。

それに答えたのは、翔ではなくマルゼンスキーだった。

『異能力者』はね、基本的には普通の人間と同じなのよ。怪我をすれば痛いし血も出ちゃうし、病気にもかかっちゃったりする。ただ、身体能力だけは普通の人よりも遥かに高いだけ。あと、何かしら特殊な能力を使えるようになるくらいかしら」

「流石マルゼン。大体その認識であってるぞ。そして、そんな人間が突然現れたら、当然騒ぎになる。しかも、もし仮にその『異能力者』の誰かが犯罪を起こし、捕らえようとしても、捕まえられる可能性は低い。そんなリスクを背負ってまで、『異能力者』の存在を公にする必要は無いってことだよ。だから、今までは『異能力者』の存在を知る人間は限られていた」

「……なるほど。だが、君の場合はそうじゃなかった。そうだろう？」

「そうだ。俺は……いや、俺達『特級』は『異能力者』の中でも特殊だった」

「特殊……ですか？」

スズカの言葉に、翔は頷く。

「まず第一に、俺は生まれつき特別な『才能』を持っていた。『神秘』を引き出し、どれだけ自分の力に出来るかという『適正』の才能だ」

『神秘』……『異能力』とはまた違うものなのか？」

「ああ。俺が言うのもなんだが、『異能力』というのは『神秘』をエネルギーに動く機械だと思っがいい。そして、俺はその『神秘』を引き出すことができる『適性』が高かったんだ」

「つまり、トレーナーさんは最初から『異能力者』になれるだけの素質があつたと……？ でも……」

「スカイが言いたいことは分かる。俺だって、最初は信じたくなくなつたよ」

彼は苦笑して続ける。

「なんでも、俺のご先祖様がそういうのに関わっていたんだとさ。……でも、それも数代前。俺は特殊も特殊な『先祖返り』つてところ

らしい」

「それで、君は『神秘』を扱えるようになったというわけか」

「ああ。だけど、俺がこの力を手にしたのは小学生の時。その時はまだ、『怪異』のことも知らなかったし、戦う術なんて持ってなかったけど、ある日を境に俺の人生は大きく変わったんだ」

「それが、トレーナーが子供の時の事件なのね……」

「そう、俺が一人で山に出かけて、そこで出会った『怪異』。そして、そこから生還した時、俺は手に入れた……いや、『手に入れてしまった』んだ。埒外の力を……」

それは、彼が初めて目にした『怪異』。

怪物のような外見をした『怪異』に襲われ、死にかけて時に見た『奇跡』。

『異能力』、それは神秘の力。その力は強大で、俺を死の淵から救ってくれた。心の『どこか』で思っていた願い『誰よりも速く走りたい』つても叶えてくれた。……だが、同時に代償もあった。それが——」

『覚醒』……『領域』に足を踏み入れたということか

ルドルフの呟きに、翔は首肯する。

「そうだ。『異能者』という存在を知った時から、漠然と考えていたことがある。それは、『異能力つてのは、バトル漫画みたいに、ワンランク上があるんじゃないか?』と。あの時の俺はガキンチョもガキンチョで、そういうものにあこがれてもいたんだ。……今思えば子供じみてて恥ずかしくなってくるが、それは現実が起こったんだ」

「それが……『覚醒』……?」

「ああ。その『覚醒』に至ったきっかけが、さつきから見てる映像での戦いの時だ」

そう言って、彼はテレビ画面に視線を向ける。

そこでは、ちょうど翔と男による戦いの決着がついたところだった。

男は立ち去ろうとしており、翔は背中を爆散させられ、命の象徴である血を大量に流しながら息絶えている。

そんな無残な姿の彼を、翔は悲しげな目で見つめていた。

「俺は、死んだ。殺されたんだ。だけど、その前に一瞬だけ意識を取り戻した時があった。その時に聞こえてきた言葉……あれは、多分、何らかの意思。後で聞いた話じゃ『上位存在』からの言葉らしい。そして、その声の主こそが……」

そこでいったん区切ると、彼は真剣な顔つきになって告げる。

「俺達を立ててるこの『星』だ」

「「「「「「ツ!?!」「」「」「」」」」」」

その単語に、全員が驚愕を露わにする。

「『星』は意思を伝えてきた。『個体名、彼方翔、称号、先導者、死亡、確認、否、生存を許可、実行……失敗、否、再試行』。……この言葉の意味が分かるか？」

「……君を死なせたくないということか？」

「そうだ。俺は『異能力者』として生まれ変わったことで、人間を超えた身体能力を手に入れたし、傷の回復速度や再生能力も桁違いに上がっていた。それが何なのかはよくわかつちやいねえんだが、俺より先に『星』と接触したうちの総司令——『柊木』さんが言っていた言葉にはこうあった」

一呼吸を入れ、翔は続きを口にする。

「『『異能力者』の源流は、『星』に繋がる』」

「それは……つまり……」

「昔の神話に登場する人のように、『神秘』を扱える者達は、元々、『星』と繋がっていた。だが、『異能力者』は違う。俺達は、『星』が作り出し、現在は数少ない『神秘』を埋め込み、疑似的に使えるようになってだけの人間。だからこそ、神秘が衰退した今では、普通の人間は『神秘』を扱うことができないし、『異能力者』になっても『領域』に足を踏み入れることはできない」

「……」

翔の説明に、誰もが口を閉ざす。

「『神秘』とは、人の心の奥底にある力。それを引き出し、扱うことができるのが『神秘適性』を持つ『異能力者』だ。そして、『異能力者』は『星』から与えられた恩恵によって超人的な力を得る。だが、それはあ

くまで副産物に過ぎない。俺達の本質は……」

『星』そのもの……。そう言いたいのか？」

「ああ。だから、俺の『異能力』は特別なんだ。『神秘』の中でもトップクラスに入る力。それは……」

「……『蒼い流星』」

翔が口にした言葉を引き継ぐように、ルドルフが呟く。

それに、翔は満足げに首肯すると、自分の手を見下ろしながら言った。

「俺の能力は『超高速移動』と『加速』、『魔力放出』。そして、もう一つある。それが……」

『流星』……か」

「そうだ。俺は『覚醒』した時、既に持っていた。そして、それは今も変わらず持っている。……俺は『異能力者』になってから、この記録の時まで一度も『覚醒』をしていない。『領域』に足を踏み入れてもない。だけど、それでも、凄まじい力を振るっていたのは、偏に適正でゴリ押ししてただけだったんだ。トレーナーっていう、才能の無い子でも才能を引き出して強くさせる側なのに、結局俺は才能頼りなのは皮肉だがな……」

自嘲気味に言う翔。

その言葉を聞きながら、ルドルフは口を開く。

「ならば、君はなぜ、今になって『覚醒』をした？ 『異能力者』となった時も、記録として残っているこの件で『覚醒』をする前は、一度もしなかったのだろうか？」

「……それは……」

ルドルフの言葉に、翔は俯き、黙り込む。

そんな彼の様子を見て、ブライアンは何かを察したかのように、小さく笑みを浮かべると、その問いに対する答えを告げた。

「なるほどな……。『星』がトレーナーを試していたということか」

「……ああ。多分な。『異能力者』になった後も今までも、俺が『覚醒』したのは、あの時が最初で最後だ。だけど、その時にはもう、『星』は気付いていたんだろうよ。俺がただの人間じゃなくて、『星』に選ばれ

た存在だつてことを」

「うくん……規模が大きすぎて話についていけないよ……」

スケールの大きな話を聞かされることになり、テイオーは苦笑いをこぼしながらそう零す。

そんな彼女に、翔は苦笑を返すと、「まあ、普通はそうなるわな」と言った。

「さっきの話が本当なら、『星』はトレーナー君の力が必要だからこそ、一瞬でも死んでしまったトレーナー君を生かした。そして、その力が発揮できる舞台として『領域』の『覚醒』に押し上げた。だが、今のトレーナー君は力を使うどころか満足にすら走れていない。トレーナー君ほどの者を、『星』という巨大な存在は失いたくないはず……ならば、どうするか？」

「……！」

ルドルフの話を聞いているうちに、テイオーは何が起きているのか理解する。

そして、彼女はハツとした表情になると、翔に問いかけた。

「もしかして、ボク達とトレーナーが出会ったのって……」

「……マジかよ……『星』はこれすら勘定に入れてるのかよ……」

翔は自身の足を見下ろしたかと思えば、テイオーの考えを肯定するように、頭をガシガシと搔く。

そして、彼は深々とため息をつくとき、ルドルフ達の方へ視線を向けた。

「……俺が『星』に選ばれてるなんて思いたくなかったけど、ここまでされてたら認めざるを得ないわな。……『星』が俺を死なせたくない理由が分かった以上、何かしらの考えは作つとかないとな……」

「トレーナー君……」

「まあ、俺が『星』に認められてるかどうかは置いていてだ。……ルドルフ達はどうする？」

「えっ……」

「俺が『覚醒』して、無茶のし過ぎで引退した。それは変わんねえし、どうしようもねえ。そんでその話を聞いて、この『出来レース』じみ

た状況だ。もしかしたら、これから先も決定されているかもしれないし、『異能』なんかに関わっていた俺なんだ。これから先どうなるんだろうな……。ルドルフ達が俺から距離を取るには十分すぎるくらい理由は揃ってる。だから、俺はお前らの選択を尊重する」

「……」

翔の問いかけに、ルドルフは目を閉じて沈黙を保つ。

「……やがて、彼女がゆつくりと目を開けると、そこには強い意志の光が宿っていた。」

「私は離れないぞ、トレーナー君」

「ルドルフ……」

『星』がなんと言おうとも、私は最後まで君と共にある。そう誓ったはずだ。そして、それはこれからも変わらない。たとえ、私以外の皆が離れていっても、私は絶対に君の傍を離れはしない」

「……そうか」

「それに、仮に『星』が君を殺そうとしても、私がそれを阻止する。だから、安心してくれ」

「ははは……そりゃ頼もしいな」

「当たり前だ。私の愛バは無敵なのだからな」

ルドルフはそう言って、不敵な笑みを浮かべる。

そんな彼女の様子に、翔は呆れたような顔を見ると、小さく笑った。そんな彼女を始めとして、その場にいる者達が次々に決意を言葉にする。

「わ、私もですトレーナーさん！ どんなことがあるうとも、私は貴方から離れるつもりはありません！」

「スズカ……」

「ボクもだよトレーナー！」

「テイオー……」

「……アタシのトレーナーはアンタだけ。これからもそう」

「タイシン……」

「……お兄さまから離れないよ。ずっと一緒にいるから……」

「ライス……」



「肯定。マスターは私たちのトレーナーであることに変わりありません。これからもずっと……」

「ブルボン……」

「ううむ……よくは分からないがトレーナーはトレーナーだぞ？ 私  
の大切なトレーナーだ」

「オグリ……」

「なに言ってるのよアンタは？ アンタは私たちを導いてくれるト  
レーナーなのよ？ これから先も変わらないわ！」

「スカーレット……」

「わ、私もですう！ トレーナーさんは大切ですよ！」

「ドトウ……」

「つたく、アタシはアンタみたいなやつじゃないと着いて行かないっ  
つうの」

「シチー……」

「アンタは私のトレーナーだ。あの時に約束しただろう？ 『私のト  
レーナーになれ』と」

「ブライアン……」

「私も、です。私と『お友達』の存在を認めてくれるあなただけが……」  
「カフェ……」

「にやはは……こんなことになるとは思いませんでしたけど……  
と、トレーナーさんのことはなんだかんだ言っただけでセイチちゃんは好きで  
すからね」

「スカイ……」

「うくん、トレーナー君の話は正直ついていけないことが多いんだけど、  
それでも君と一緒にいるわ。もし困ったら、お姉さんに頼ってね  
？」

「マルゼン……」

「じゃ、若輩者なれど！ 皆さんと同じく、トレーナーさんのことは大  
切です！ どこまでお助けできるか分かりませんが、あたしにできる  
ことがあればドゥンと任せてください！」

「キタサン……」

担当達からの言葉を受け、翔は胸の奥が熱くなるのを感じた。

そして、彼は静かに頭を下げる。

「ありがとう……本当に、感謝する」

「ふっ、気にすることではないさ。これは私達のわがままでもある。君と共にいたいと思う、我々のな……」

「あはは……なら、そんなお前らに恥じないトレーナーになるよ。これからもよろしく頼むぜ?」

「当然だ。君の期待に応えるのが我々だ。だから、君は存分に私達に甘えてくれればいい」

ルドルフはそう言うと、穏やかな表情で微笑んだ。

こうして、彼らは互いの絆を再確認すると同時に、これから先の未来に向けて歩き出すのであった……。

「あ、ビデオのこと忘れてた」

番外編 彼方トレーナーによる領域（ゾーン）講座  
後編

「ごほんっ！ え〜……話は長くなつたが、今度こそ続きを見るぞ〜」  
翔の合図に返事をした担当達は、真剣な面持ちで再びテレビ画面へと視線を向ける。

『星』の思惑をおぼろげながら知ることができたものの、その目的までは知ることができなかった。

だが、それでいいと翔は思っている。

なぜなら、この先どうなるのかなど、今の彼には想像すらできないからだ。

『未来』におびえるよりも、自分が歩んでいる『今』を大切にしたいと……。

だからこそ、『星』の目的を知る必要はないのだ。

ただ、彼の『願い』のために、これからも走り続けるだけである……。

『星』の想いを知り、改めて決意を固めたルドルフたちであったが、それでもやはり不安はある。

特に、ルドルフの心中には暗い影が差していた。

（流石に、このままではまずいな……）

『星』の目的は分かった。

しかし、ルドルフたちの目的を果たすためには、まだまだ課題が多い。

『覚醒』した翔の実力は本物であり、ルドルフたちもまた、以前よりも強くなっている。

それでも、まだ足りない。

『星』というものはそれだけ『格』の違う存在だからだ。

走り方、レースの勝ち方を知っている彼女達でも、戦いの仕方は知らない。

（それでも……少しでもいいから力になれば……！）

ルドルフは心の中でそう呟くと、祈るように手を組んだ。

すると、そんな彼女の耳に、聞き覚えのある声が届く。

「あら？ 随分と辛気臭い顔をしているのね」

「……ッ!？」

彼女に声をかけてきたのは、チームメンバーの中でも『一番最初に翔と契約した』マルゼンスキーだった。

「マ、マルゼン……」

「ちよつと失礼するわよ」

マルゼンスキーは驚くルドルフの背後に回り、そして、優しく頭を撫で始めた。

「な、何を……」

「別に？ トレーナー君が『お星さま』の考えてることに巻き込まれるかもしれないから、自分も力になりたいとか考えてたんではしょ？」

「……ああ、そうさ」

「バカねえ。あなたはもっと自信を持ちなさいってば。トレーナー君は一人なんかじゃないわ。私たちだけじゃなくて、他にもたくさん人がいるでしょ？ それなら私たちが信じてあげなくちゃ。特に、チームのリーダーであるあなたが信じてあげなくちゃダメじゃない」

「……そうだな。ありがとう、少し気が楽になった」

「ふふん♪ こういう時にはお姉さんに任せなさい♪」

マルゼンはいつものように胸を張ると、ルドルフの隣に腰を下ろした。

「さて、トレーナー君の『本当の走り』は、流石の私でも見たことないわ。カッコいいのはこの時も変わらないけど♪」

「ああ、彼は本当にすごい男だよ。私達が惚れ込むだけのことはある」

「ま、それもこれも全部『お星さま』が決めちゃったことなのがちよつと残念。トレーナー君とは運命の赤い糸で繋がれていると思っただけだな」

「ふふっ……確かに、私達には荷が重すぎる相手かもしれない。だが、それでも私たちにもできることはあるはずだ。だから……」

「これからも、トレーナー君を支えていかなきゃね♪」

そう言って二人はテレビに向き直った。

画面では、息絶えたと思われていた翔がゆらりと立ち上がった光景が映し出されている。

その姿は全身の傷も相まって、ゾンビのようであった。

翔と敵対していた男は、その姿を見て驚愕を露わにする。

『何故……何故生きている!? あの一撃を受けて無事でいられるはずがない!』

『……………エラー発生。肉体の損傷：7割。血液量：4割。魔力残量：10%未満を記録。生命維持に支障あり。戦闘続行不可と判断』

『な、に……!?』

目の前の現実を認めたくないと呼ぶ男であったが、翔の口から発せられた無機質な単語の羅列にさらに混乱する。

まるで人が変わったかのような状態を見て、衣服を包帯のような細長い布に変換して攻撃した。

ただの布ではない。魔力を纏ったことで金属すら切断できる『刃』だ。

翔の周りを覆うほどの布の波。それを前にして、翔……否、『ナニカ』は即座に選択した。

即座に後退し、襲い掛かって来る布を回避。

だが、そこで攻撃は終わらず、布は再度追いかけてくる。

しかし、後退したことで一方向からの攻撃になった布を弾き、だんだんと距離を開けていく。

その間にも、『ナニカ』の口は絶え間なく動き言葉を紡いでいった。『生命維持の権限を个体名『彼方翔』から『星』に移行。権限を移行させるため『星』への接続を開始……成功。『自動戦闘』状態へ移行。肉体の損傷を供給魔力で修復。修復の際、器官『翼』の増設を申請……過半数の賛成により、『翼』の増設を許可。追加申請、対象の肉体を強化する案を検討し——許可。高速戦闘に耐えられる肉体への強化を開始。戦闘終了の際、対象の安全確保のため个体名『柊木真』の支援を要請……許可。推定到達時間は——』

『何を言っている!? 一体お前は誰なんだ! ……くそっ! 逃がすものか!!』

男の叫びを無視し、『ナニカ』は距離を開けるために後方へと逃げていく。

それを追いかける男は、布を地面に突き刺し、体を引き寄せることで距離を詰めていった。

だが、ここで予想外の出来事が起きる。

逃げていた『ナニカ』が、突然男に急接近し、その顎を蹴り上げたのだ。

『グアツ!?!』

『敵対存在への攻撃命中を確認。顎部への蹴撃命中による対象の行動力低下を確認。追撃を開始——』

『ガツ!?!』

顎を蹴られたことで動きが鈍った男を無機質に見据え、その体を的確に『壊して』いく。

鎖骨を破壊されたことで腕が上がらなくなるも、即座に腕に布を巻きつけて動かしていく男。

布が筋肉の役割も果たしているようで、大量に布を巻き付けた拳による一撃は、ただでさえ瀕死な翔の体を容易く打ち砕くだろう。

しかし、それすらも読んでいたかのように『ナニカ』は男の懐に潜り込み、その鳩尾に膝を叩き込んだ。

『ガハツ!!?!』

『敵対存在へ対する攻撃命中を確認。行動力の低下を確認。……計画の全行程、完了。これより、対象の抹殺を開始する』

『あ、ああああああ!!!』

無慈悲に告げられた言葉の後に放たれる攻撃の数々が、先程までの行動がすべて『時間稼ぎ』だということを物語っていた。

そして、『ナニカ』は確実に男の命を削っていく。

圧倒的な身体能力の差の前に、男が為す術もなく倒れ伏していくのは当然の結果だった。

『っ!!!』

だが、それでも男は抵抗を止めなかった。

矢鱈めつたらに攻撃を繰り返し『ナニカ』を寄せ付けないようにす

る。

それでも、時には避けられ時には受け流され、無防備になったところを攻撃が割って入る。

男の攻撃も苛烈なもので、逸らされた布が地面を削り、周りは荒野どころの話ではなくなってきた。

『グッ！　ゴホッ！　ガフッ！』

『右腕の破壊を確認。戦闘手段の一つを削ぐことに成功。続けて攻撃を開始』

『こ、ここで、負けて、たまるかああああああ!!』

ひたすら無機質な攻撃と機械のような精密さで男の体を破壊していく『ナニカ』。

それに対し、映像の最初の方とは打って変わって感情をむき出しにして猛攻を続ける男。

先程とは逆の立場へと変わっていた。

「ト、トレーナー……」

「これが『星』の力ってやつか……」

映像を見ている者たちの中で、テイオーが呟く。

その声色には確かな『恐れ』が乗っており、映像を見ている者たちの総意であった。

確かに、先程までの状況から一転して有利すぎる状況になつてるのは良いだろう。信頼できる人が傷ついて喜ぶ者など、狂人の中でもごく一部しかないからだ。

しかし、やっていることが惨<sup>むじ</sup>すぎた。

反撃すら許さず、ただ一方的に攻撃を受け続ける男。

映像の中で語っていた『異能力者による世界』という理想に至るまで、彼はどれほどの経験をしたのだろう。

そんな考えが、皆の頭に浮かんでくる。

しかし、この場でそれを口に出す者はいなかった。

それは、口に出したところで何も変わらないからであり、彼が世間一般で言うところの『悪』に属するもの故に、同情はできても賛同はできないからだ。

「……『星』は、なんでこんなことができるんでしょうか……」

「倒すだけならあの男がトレーナーにやっただけに一撃で倒せばいいのに……!」

「トレーナーさんがあ……トレーナーさんじゃなくなってしまいそうです……!」

スズカとタイシン、ドトウの口からも『恐れ』のこもった言葉が呟かれる。

それほどまでに、『星』というものは絶対的で無慈悲な存在だった。ただ邪魔なものを排除するため、堅実に……そして確実に手段をぶつけていく。

『ぐうああっ!?!』

『右脚の破壊を確認。バランス維持及び機動力の低下を確認。続いて――』

「こんな、のって……!」

基本的に感情をあらわにしないカフェが、泣きたそうな、怒りたいような複雑な表情で画面を睨みつけていた。

カフェは、他の人よりも少しだけ特殊なものが『見える』少女だ。

それ故に、幼少期は周りに疎まれていた。

それでも、周りに怒りを向けることなどなく、自分で納得し、感情の矛先を収めたのである。

言うなれば、『それはそうだ』として『逃げれた』のだ。

それに対し男は幼少期から様々なことを経験してきたのであろう。

カフェと違うのは、おそらく『逃げれた』もしくは『逃げた』のではなく、『逃げようとせず』に『立ち向かった』のだろう。

その類稀なる力を使って人を助けられたかもしれないが、『異端』として排除されそうになった。

自分は悪くはないのに……葛藤があったのだろう。

だから、『異端』を『普通』にしようとして、『普通』を排除しようとした。

そして、行動に移したのだ。

だが、その『普通』を守る翔が立ちはだかった。



翔には、『普通』の中に守るべき人がいた。

自分が『異端』でも、同じ『異端』の仲間がいた。

だからこそ、自分の居場所を、大切な人を、家族を守るために戦えたのだろう。

それが男との違いだと、誰もが理解した。

それ故に、信念のぶつかり合いに横槍を入れた『星』の無慈悲さに『恐れ』を抱いた。

『おおおお!!』

『敵対存在の反撃を確認。対象の損傷率9割を突破。最終段階へ移行』

そんなことを考えていても、終わりは無慈悲に訪れる。

体を無理やり動かすために全身に布を纏った男を蹴り飛ばし、距離を稼いだ『ナニカ』は背中から蒼いエネルギーで出来た帯——『翼』を展開して、すさまじい速さで空へ跳び上がった。

雲を突き破り、『翼』から放たれる蒼のエネルギーが描き出す軌跡を残しながら、『ナニカ』は空の向こう側——『宇宙』へと到達した。

『発射台を設置。アンカーを投下。射出距離を確保。加速路を構築。点火』

『ナニカ』の言葉とともに、『翼』からまるでロケットのように噴射される膨大な量の蒼色の光。

それは、どんどんと勢いを増していき、ついには地上からすら見える『星』になった。

『ゴフツ！ ガアアアツ!!』

そんな状況下においても、まだ抵抗する気概があるのか、ボロボロになりながらも立ち上がり、全身をおびただしい量の布で覆っている、遂には一体の『怪物』となった。

しかし、それでも結局のところは無駄でしかない。

無感情に見つめていた『ナニカ』は、断罪の一撃を繰り出した。

『流星』

瞬間、地上へ向かって一筋の光が落ちた。

~~~~~

音が聞こえない。

記録できる許容量を超えたからだ。

画面は真っ白になって何も聞こえない。

音が戻って来るのに、1分はかかった。

それでも、聞こえる音は吹き荒れる風の音だけ。

それも、すぐに止んだ。

静寂の中、映像が戻ったことで見えてきた光景に、全員が絶句していた。

「……終わった……？」

「ああ……」

「うそ……」

「これが……」

そこには、巨大すぎるクレーターと、その真ん中に立つ『ナニカ』の姿だけだった。

『対象の消滅を確認。権限を『星』から『彼方翔』へ』

『ナニカ』がそう呟くと、『ナニカ』の体がふらついた。

『——っ！ はあっ、はあっ……！』

『ナニカ』——否、翔が戻ってきた。

そのことに歓喜の声を上げる者はだれ一人としていない。

それほどまでに、先程の光景は衝撃が強すぎたのだ。

だが、時間が経てば現実が追い付いてくる。

「消滅……まさか……!?!」

「消えちゃったの……?」

『ナニカ』が呟いた言葉——『対象の消滅を確認』。

言葉通りなら、あの男は『死』を通り越して、肉体すら残らない『消滅』に至ってしまったのだ。

「……なに、それ……」

誰かの口から漏れた言葉。

それは全員の心からの叫びだった。

『……これで、いい……。これで終わつたんだ……。これで、いい、はずなのに……。！』

映像の中の翔が言葉を発するも、そこには勝利への喜びなどなく、ただ悲しみがあつた。

翔は、生まれながらにして優しい男である。

友人も多く、家族にも恵まれた。

それ故に、他者の苦しみが分からない時期もあつたが、それは誰しもが通る道。

様々な経験を通してきたことで、どんな人物であろうと心の底にある『優しさ』に気付けたのだ。

だからこそ、この結末に納得できなかつた。

自分が傷つくことは仕方ないと割り切ることができたとしても、他人の命を奪うことだけは忌避感があつた。

甘い考えでもいい。敵であつたとしても分かり合えるはず……。

辛いなら俺が受け止めるから……。

当時の翔にあつた『甘さ』でもあり、美徳でもあつた。

だが、その願いさえも『神』には届かない。

『神』は人の心が分からない。

人間が犬や猫の言葉を分からないように、『星』は人の心など考えていない。

だから……。

『あ……ああ……！ つ！ うあああああああああああああああ  
あ!!』

翔は、泣くことしか出来なかつた。

「これが……『覚醒』……」

「『星』に全てを委ねる禁断の技……」

「怖い……」

各々が感想を言ってみるも、全て肯定的ではなかつた。  
なにせ、『次元』が違いすぎた。

「生物としての力が『領域』だとするなら、超常存在の力が『覚醒』。今回見せたのは、あくまで例としてだ。これを目指せて訳じやないし、俺自身、ここまでひどいとは思ってなかった。……すまねえ……シヨツキングなものを見せた……」

こうして、翔が開いた『領域講座』は幕を閉じた。  
みんなの心に、大きな傷を残して……。

~~~~~

(あれが……『覚醒』……)

(怖かったなあ……)

(でも、トレーナーさんが強くなるためには必要なことだった……)

(トレーナーさん……)

(心配だなあ……)

(力に、なりたいなあ……)